

ガーリー・エアフォース Sisiter's Vaportrail

liris

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——2015年6月。文字としてはたった七文字。しかしそれは、人類に苦しい戦いを強いる『ザイ』と遭遇した歴史の始まりだった。

ソラを押さえようとする『ザイ』に対抗するため、人類は二つの存在へ望みを託す。

一つは専用のチューニングを施した『ドーター』とそれを駆る『アニマ』と呼ばれる少女の姿を持つ操縦機構。

そしてもう一つは『ザイ』の機動と能力への対策を施した『AZC』にそれを扱える『エース』達。

そして南洋の地、オーストラリアで『アニマ』と組む女性パイロット、ミュベール・スタークスもまた『エース』の一人だった。

彼女達は戦う。ソラを取り戻すために——

《Warning!!》

不定期+亀更新の可能性大です。

また機体や兵器にエースコンバットの影響が大いに出ています。

目次

情報マトリクス

1

Extra Order1 アクイラの長姉

9

Order1 南洋のある姉妹

19

Order2 アクイラ、着任

25

Order3 風が荒れる前

34

Order4 かみ合わない発足

42

Order5 向日葵の華

56

Order6 Frist Order

64

Order7 海鳥島制圧戦

71

Order8 星の照らす道

80

Order9 星天の地、鉄火の空

98

Order10 Ocean vacation

115

Order11 Moon Light

122

Order12 イヌワシへの贈りもの

136

Order13 Order Maid

151

Order14 トレーニング×スクランブル

171

Order15 姉妹達の出撃なしな一日

183

Order16 シャンデリア

200

Order17 Diverく霧の記憶く

214

Order18 引かれた手、差し出される手

226

Order19 Tear Drop

238

Order20 白い鳥

251

Order21 秘密の話、していた話

268

Order22 思惑

286

O r d e r 2 4	海の上の間奏曲	311
O r d e r 2 3	三軍集結	298

情報マトリクス

『死ぬ事を怖いと思うのは生き残る為に必要なものよ。だからそれは大事にしなさい』

ミュベール・スタークス キャライメージ：ブラックキャットのセフィリア・アークス

E・F社の航空隊、アキラ隊長。コールサインはAQUILA OIでTACネームはアステル。

南洋エリアでの対ザイにおける撃墜数^{レコードホルダー}トップ保持者で腕利き揃いのE・F社の中でもトップクラスの技量の持ち主。その実績からAZCC(AZCCについては後述)のパイロットに選出され、E・F社とオーストラリア空軍の正規パイロットの混合で編成された第6航空団のメンバーでもある。(なお第6航空団のパイロットはオーストラリア国防空軍の戦技教導隊^{アグレッサ}でもある)

元々はオーストラリア国防空軍の所属、正確には航空隊とは別部門だった国防宇宙軍でアークバードのクルーメンバーとして軍に所属していた。宇宙軍時代もミュベールは優秀な記録を出し、特に耐G訓練では12・6Gに耐えた記録がある。アークバードの一番機<レイシア>にも搭乗し二番機以降のクルーに選出される事が確実視されていた。しかし宇宙開発の縮小に伴いアークバードの運用計画も三機から一機に縮小されたのを機に退役。ミュベール自身は残留するクルーに選ばれていたが『自分は今もう宇宙に行かせてもらったから』と言って席を譲る。

その後、ミュベールの記録に目をつけたE・F社にスカウトされ入社。たちまち頭角を現しE・F社の中でもトップクラスのエースとなる。

コブラやクルビットを起点としたマニューバを得意としており、ロールしながらの水平方向へのクルビットやエンジンの推力を片方カットして独楽のようなターン、ロールしながらのクルビットである『スレイマニ・クラークン』といった変態機動を平然と行う。そのため彼女と親しいパイロット達からは『あたまおかしい』や人間辞めてる

と言われている。

二番機であるゲイザーとは仲の良い姉妹のような関係で、はつきり言っていてかなり甘い。と、いうより年下の女の子全般に甘い。

元々正規軍にいた事もあり実戦組の中では珍しくデスクワークが得意。本社の事務関係のスタッフからも『期日に余裕のある提出』や『きちんとした構成』と好評。加えて同性ならではの気遣いも出来る事から彼女自身の評判も良く、容姿・スタイルともにモデルにスカウトされるほど整っているのでミュベールをお姉様と慕うスタッフもかなり多い。(ミュベールのせいで“そっち”の道に入った女性スタッフもいるあたりそういった意味でもエースといえる)

普段は髪をセミロング程度の長さにしてはいるが、休日はウィッグをつけて腰まで届くロングヘアにしている。

アクイラ隊のエンブレムは赤の六角形を背景に鳥を模した金のヘルム。

S-32 アララ
 opla

E・F社がロシアから購入した第五世代試作機、Su-47の更に前身となる機体。Su-47との外見的な違いは内傾した垂直尾翼、箱型の垂直可動式推力偏向パドル、翼端の電子戦ユニットの有無、カナード翼の形状と意外と多い。現在はミュベール専用機としてAZCCへの改修(という名の魔改造)がされており、特に一部電子系はドーターと同レベル、ECMに関しては上回る程の改修がされている。

カタログスペック上でS-32はSu-47を凌駕する格闘戦能力を有していたが、試験機として機動性を追及した結果、機体全体のバランスが著しく悪く、特に独特の失速特性による不安定さからロシアとE・F社双方で墜落事故を起こした曰く付きの機体。反面、熟練パイロットの操るS-32は恐るべき格闘戦性能を発揮し、最新鋭機を遥かに凌駕する機動性を証明した。

なお、現状で残っているのはミュベールの使用している一機のみと

なっている。

ウエポンベイをリボルバーラック（映画ステルスに登場した）式に変更しており、ラックごと交換する事で従来のパイロン式より早い装備の補充・換装が可能となっている。また、ラックごと交換する事で武装の生産国を選ばない運用が可能となっている。

なお、^{アララ}opplaは〈薄墨色の鷲〉を意味する。

『ヒトのカタチをしているから人間だ、っていうのは間違いだからね？』

E/F117G—ANM ゲイザー キャライメージ：FGOのぐ
だ子

アクイラ隊の2番機でコールサインはAQUILA02。世界的にも珍しい電子戦機がベースのアニマ。

社交的で明るい性格……のだが年下や同年代の子で遊ぶという少々困った趣味を持っているため、小松でファントムと一緒に慧達で遊ぶのを楽しんでいたりする。

E・F社の社員からは娘や孫のように可愛がられており、アニメと
言う事はほとんど気にされていない。

所属はE・F社ではあるのだが、ベースとなったE/F117Gが
元々オーストラリア空軍機のためミュベール同様両者への所属と
なっている。

ベース元のE/F117Gのスペックが高くないためか、純粋な空
戦能力はグリペン達には少々劣る。

本領はミサイルベッドとなる部隊を率いての発射後^Lロックオン^A戦
術。

発射されたミサイルの推進・操舵系を掌握し、完全なマニュアル操
作で標的を攻撃という独特の戦術が本来の戦い方。なので厳密には
ロックオンはしていない。

通常のLOALと違うのはロックオンしないため、ミサイルが接近してもザイに回避行動を採られにくいという点にある。

が、この戦法はあくまで通常の航空戦力でザイを相手取るものなのでアニメと共同で出撃する機会の多い小松ではあまり使われない。

というのも戦法上ミサイルベッドとなる部隊の随伴が必要になるのと、元々アニメ・ドーターは誘導性が高いのでゲイザーが操作する必要性が薄い。

そのため小隊規模での運用ではなく大規模に戦力を投入する作戦でその真価を發揮する。

基本コンセプトの時点でザイとの戦力比をこれまでの『ザイ一機に対して戦闘機一機』ではなく、『ザイ一機に対しミサイル一発』という日本やロシアとは全く異なるアプローチの下に誕生したアニメ。

注目すべき装備は展開式の大形EML、〈アークライト〉。ただしアークライトはかなり大型の兵装なのでアークライトを装備した場合はミサイルを積む事が出来ない。

本来EMLは対空装備として使うには難があるのだが、ミサイルをマニュアル操作で当てるゲイザーにとっては発射して着弾までの間がほとんどないEMLは（本人曰く）扱い易い……らしい。

なお、インターネットから学ばなくていい事まで学んでいる、とはグリペンのパートナーである少年の談である。

『私は……ここについていいんですか？』

Su-47-ANM ベルクト

アキラ隊の3番機でコールサインはAQUILA03。ロシアの試作第五世代機Su-47のアニメ。

優しく献身的な性格だが天然なところがあるので、ミュベールとゲイザーにからかわれる事が度々ある。とはいえベルクト自身もそれを嫌がっておらず満更ではなさそうである。が、自分を卑下したり誰かを助ける為に身を削る危ういところがあるのでそこをミュベールに危惧されている。

アキラ隊に属してはいるが少々複雑な経歴で元々はロシア生まれのアニマ。しかし生まれた理由が〈誘蛾灯〉というザイを引き寄せろロシア軍内でもその存在を秘匿されていた。本来は役目が来るその時まで研究施設の地下で待たただけだったのだが、一人の科学者が彼女と想いを通わせた事から彼女の運命は大きく変わる。そして彼が自ら命を賭してベルクトを日本に送り出し、そこでアキラの二人と出会った事で外の世界を知る。

日本に来てからはアキラの二人が主に面倒を見ており、姉妹のように日々を送っていた。

現在は軌道上でスリープモードによる仮死状態で眠りにについている。

飛び方もミューベルが教えたという事が大きく、彼女の飛び方がベルクトにとって見本であり目標となっている。

A Z C C

正

式

名

称

は

A n t i _対 Z a i _ザ C o m b a t _戦 C o m p a t i b l e _対 a i r _応 c r a f t _機。

ザイとの戦闘の為に既存の戦闘機をベースにして電子装備や機体性能の向上させる改修を施した戦闘機。通常の戦闘機を大きく上回る性能となっており、特にザイの鋭角的な機動に渡り合う為に格闘戦に重点を置いた改修となっている。

優れた性能を持つAZCCだがコストが非常に高く、機体によっては改修費用が機体価格を上回るケースもままある。また機体の限界が高過ぎる為、性能を引き出せるパイロットも限られる。コストがかかる上にパイロットまで選ぶので開発国であるオーストラリア以外では全体の1〜2割程度（オーストラリアは4割前後）の改修に留まっている。

しかしアニマ・ドーターではない有人機でザイと対抗出来るメリットは大きく、更に副次的なメリットとして電子能力が優れている為AZCCが中継する事で電子支援の効果範囲を拡げられるメリットも

ある。

アークバード

元々は三号機まで造られてる予定だったが二号機は外装の完成後、軍の航空博物館での展示。三号機は建造計画そのものが凍結される。現在は一号機である「レイシア」のみが稼働している。

本来は宇宙開発の為に造られたフネという事もあり、軌道変更に大気摩擦を利用するので衛星兵器としては脆弱な面が見られる。

基本的に軌道上を周回しており、軌道変更で大気圏内まで降りてくる事はあっても地上に降りる事はない。その為補給はマストライバーから打ち上げられる単段シャトルで行い、燃料だけならば大気圏内での空中給油で行う場合もある。

機体の下腹部に戦略レーザーを装備しており、照準制度も航空機どころかミサイルを補足出来る程の高さを誇る。

船体が白く、航空機としても優美なデザインから『白い鳥』とも呼ばれている。

F-15S/MTD、F/A-15S/MTD

オーストラリア正規軍の主力戦闘機。ペットネームはイーグルグループ。

オーストラリア独自となるF-15の派生機。空軍型のF-15S/MTDと海軍型のF/A-15S/MTDがあり、F/A-15S/MTDの方は艦載機となっている。

元々はF-15は空軍型のみで、空母の艦載用にF-15をオーストラリアの国営企業であるオーストラリア・グラウンダー・インダストリー社（以下、O.G.I社と表記）が改修したのが始まり。そのため機体としてはF/A-15S/MTDの方が先にロールアウトした。

通常のF-15よりも短距離での着陸が可能本来F-15シリーズ

ズは着陸に約980m必要だがF-15S/MTDシリーズは460m近くまで短くなっているになった事から空軍からもオフアールが入り、空軍機として不要な改修がオミットされたモノがF-15S/MTDとして空軍に配備された。

ステルス性こそYF-23やアメリカのF-22やF-35に劣るが、装備の搭載量や多様さで勝る。

外観こそF-15にカナード翼の追加と推力偏向パドルの変更程度だが、その中身は魔改造といえるレベルでの改修により文字通り別物の機体となっている。

XC-70

オーストリア国防空軍、並びにE・F社で運用されている高速輸送機。ペットネームはオリジナルであるヴァルキリーにちなんでシグルドリーヴァ（勝利を促す者）と名付けられた。

元々は超音速戦略核爆撃機として開発されたXB-70だったが、大陸間弾道ミサイル^Iの^C開発等^Bで存在意義を失っていた。しかしその速度に目を付けたE・F社の技術陣が輸送機としての運用計画を立ち上げ、アメリカから機体と設計図や関連データを引き取って再開発した。元々E・F社とオーストラリア空軍ではC-17が運用されていたが、PMCであるE・F社では迅速な作戦行動に合わせた輸送機が必要とされたという背景がある。

輸送機としてリファインされたXC-70は高速輸送機の名に恥じぬスペックを持っており、最大積載重量はC-17の半分程度だが速度面では巡航速度マッハ1.9。最高速度に至ってはマッハ2.7という輸送機にあるまじき足の速さを誇るので緊急性の高い輸送任務で重宝されている。

対ザイとの戦いが始まってからは多目的炸裂ミサイル^Mのミサイル^Pの^Bミサイル^Mとしての運用もされている。

オーストラリア&エルジア・フアーバンティ社

当作品で最も作者の趣味によって技術進歩という名の改変を受けた国（笑）。

アークバードや空母の保有（！）と原作とは（恐らく）かけ離れた軍事力と技術力を持っている。

E・F社はSu-47やYF-23といった試作機や正規軍のコペテイションに負けた機体の設計図を買い上げ、自社製品として配備している。

それを可能にしている背景に世界的に優れた技術力を誇るオーストラリア・グラウンダー・インダストリー（O・G・Iと略称）社の存在がある。その一端としてアメリカから購入したF-15を分解・研究してF-15S/MTDという独自の発展機を生産している。

同社はアークバードの設計・開発にも大きく関わっている。

Extra Order! アクイラの長姉

真夏ほどじゃないが十分暑い初夏のある日、基地に来たら八代通さんが待っているとわれグリペンに会うよりも先に執務室に入る。執務室の中は廊下より冷房を強くしてあるのか扉を開けた途端涼しい風が流れてきた。

「よく来てくれたな。君に渡すものがある」

「なんですか？ これ」

机の上に二つの封筒。厚みはほとんどなく、大きさも普通の郵便用とあまり変わらないから入ってるのはそんなに大きいものじゃないらしい。

「君はここにはアルバイトだと言って来てるんだろう？ バイト代が出ていないと以前一緒に来た娘も変に思うだろう。そういうわけで、この購買でバイトをしたら貰えるであろうバイト代を振り込んだ口座だ。好きに使うといい」

「あ、ありがとうございます」

そう言って八代通は慧に銀行の通帳とカードを渡す。

中身を見てそれなりの金額が入っているのを見た慧は、色々と約束をすつぽかしたりしまっている明華になにか奢ろうと決める。

「それとこっちは俺とミュベールからだ」

そう言って八代通が取り出したのはさっきのものとは別の銀行の通帳とカード。何気なく中を見てみるとそこに記載されていた金額は0が一、二、三、四……え、なんだこの金額っ!?

「あ、あの八代通さん。なんかこっちの通帳ものすごい金額が書いてあるんですけど」

渡された通帳の口座にはゼロが六つという文字通りの大金が預けられていた。

「悪いがそっちの内容については中尉に直接聞け。俺も用意したとはいえ発案したのと中身もほとんど中尉だからな」

「……わかりました。直接聞きにいきます」

「ファントム。ミュベールさん達がどこにいるか知らないか？」

「今の時間ならシユミレータを使ってベルクトの訓練をしていると思いますよ」

ミュベールさん達を探しているとたまたまファントムと会ったからダメ元で訊いてみる。幸いファントムは知っていたようであつさりと教えてくれた。

「それで慧さん。ミュベールさんにどのような用事が？」

「いや、ちよつと訊きたいことがあるんだよ。お前こそいいのか？」

慧がそう思うのはもつともだ。なにせファントムは慧について来た道に戻っている。シユミレータのある部屋は慧も知っているから案内というわけではないだろう。

「いえ、ちよつと手が空いているものですから暇つぶしにどんな話をするのか聞かせていただけようかと。聞かれない話なら無理にとは言いませんが」

「暇つぶしかよ」

別に聞かれて困る話じゃないけど暇つぶしになるんだろうか、こういうの。

……というかミュベールさんがいくつなのか知らないけど、こんな大金をポンと出せるぐらい稼いでるんだろうか、あの人。

「そういえばミュベールさんっていくつなんだろうな」

「……慧さん。女性の年齢を訊くのは失礼だと思いませんか？」

……訊き方がマズかった。ジト目で見てくるファントムの目には『なにを言ってるんですか』という呆れがありありと浮かんでいる。

「まあ慧さんにデリカシーを求めるのは難しそうなのでこれぐらいにしておきましょう」

「……」

ファントムの失礼な言い方に反論しようとする慧だが、これまでファントムにの物言いに反論してロクな目にあつてこなかったのを思い出して言うのをやめる。

「とはいっても私も彼女の経歴は気になるところです。人間であそこまでの機動を出来るようになるには素質はもちろんそれに見合った

訓練も必要ですから」

「ファントムから見てもやっぱりミュベールさんってすごいのか？」
「すごいというよりは異常です。資質もあったとは思いますが、ミュベールさんの年齢であれほどの技量に至るには早い段階で相応の訓練をしていなければいけませんから」

なるほど。ファントムの予想だとミュベールさんはかなり早くから訓練をしていたことになるらしい。

……ん？ 今何か気になる事を言っただけじゃなかったか？

「……ファントム。お前ミュベールさんの年齢とか知ってるのか？」

「お父様の保管しているデータを少し見ただけです。それにも年齢や傭兵としての実績はあってもそれ以前の記録は載っていませんでしたが」

「お前……さっき俺に年齢を訊くのはマナー違反って言っただけじゃなかったか？」

「あら。私はミュベールさんの年齢が気になって調べたわけではありません。ミュベールさんの資料を見てたまたま知っただけですから」
軽く訊いただけなのにこの言いよう。正直訊くんじゃなかったと後悔する。そんな俺とは対照的にファントムは楽しげなミュベールさんのいう「イイ笑顔」を浮かべて満足げだ。

……教えてくれたのは助かったけど、プラスかマイナスかと言われるとマイナスだったかもしれない……。

途中でグリペンに連絡するとグリペンも興味を持ったのかこつちに来ると言ってきた。グリペンも加わって目的の部屋に入るとちようど休憩していたのか、ミュベールさん達アキラの面子は椅子やシュミレーター自体に腰かけて談笑していた。

「あの、ミュベールさん。今いいですか？」

「大丈夫よ。どうしたの？」

「このことなんですけど……」

そう言っただけでミュベールさんが主に用意した口座のカードと通帳を

見せると、それだけで俺がここに来た理由をミュベールさんは察したようだった。

「ソレがどうかしたの?」

「どうかしたの……って、これ金額間違えてませんか? 明らかに学生に渡す金額じゃないと思うんですけど」

「間違いじゃないわ。鳴谷君は私達と同じように命を懸けて戦ってるんだから相応の報酬は受け取るべきよ」

「けど……」

気持ち嬉しいけど正直気が引ける。

……その、百万単位のお金をこうなんでもないかのように渡されると金銭感覚が狂いそうだ。

「鳴谷君はまだ学生でしょう? ならこれからの進路を考える上で進学だって視野に入れるべきだし、それぐらいはあっても困らないわ。鳴谷君と明華ちゃんが金銭面で進学を躊躇ってるなら私が出してあげてもいいぐらいだし」

「……………」

俺だけでなく明華が進学するお金まで出そうとするミュベールさんに言葉が出ない。冗談を言っているようには見えないから本気でそう言ってるんだろう。

「以前から気になっていたのですがミュベールさんはどのような経歴なのですか? これほどの金額を渡せる経済力もですが、ミュベールさんの年齢でそれほどの技量を持つにはかなり特殊だと思うのですが」

ファントムの言葉に腕を組んで思案顔になるミュベールさん。……というかファントム、勝手に中身見るなよ。

「そうね……せっかくだから少し昔の話をしましょうか。考えてみたら話した事なかったしね」

そう言ってミュベールさんは自分の過去を語りだした。

「私は元々オーストラリア国防空軍……正規軍にいたの。とは言っ

もいたのは航空部隊じゃなかったし、正確には空軍の管轄下にある国防宇宙軍の所属だったの。そこで私は〈アークバード〉のクルーとしての訓練を受けていたのよ。……この中でアークバードを知らない人、いる?」

アークバード?

判らなかつたから手を挙げたけど挙げたのは俺だけだった。マジかよ。

「それじゃ軽く説明するけわね。アークバードはオーストラリアの宇宙開発のための宇宙機で、カテゴリーとしては一応人工衛星の部類なんだけど……正式には『大気機動宇宙機』というまったく新しい部類の宇宙開発機なのよ」

「大気機動宇宙機?」

「ええ。アークバードは大気摩擦を利用して軌道を変更出来るから運用の自由度が既存の衛星と比べて高いの。これにはオーストラリアの宇宙開発と関係があるけどね」

「そうなんですか?」

宇宙開発って聞くとロケットやスペースシャトルを使うイメージがあるけど違うんだろうか。

「オーストラリアの宇宙開発はスペースシャトルやロケットの打ち上げじゃなくて独自の単段^Sシャトル^Tをマストライバーで打ち上げる方式。だから受け取り側も軌道を自由に変更出来るプラットホームである必要があつたの。あ、ちなみにマストライバーっていうのは簡単にいうと強力なカタパルトみたいなものね」

マドライバーがなんなのか教えてくれたのは間違いなく俺のためなんだろう。実際マストライバーって言われてもわからなかつたし。

「で、私はそのアークバードのクルーとして訓練を受けていたの。衛星とはいってもアークバードは大気圏内の飛行も可能だから航空機としての操縦訓練も必要だったのよ」

「衛星なのに大気圏内も飛べるんですか?」

「あまり知られてないけどね。大気圏内で飛行するためのエンジンも積んでるから出来るわよ。アークバードはSSTOだけじゃなく空

中給油でも燃料を補給出来るから」

説明を聞けば聞くほどアークバードは特殊な機体なのがある。人工衛星だけど普通の航空機と同じように飛べるって無茶苦茶便利じゃないか。

……ん？　ならなんであまり使われてないんだ？

「話を聞いているとアークバードのような大気機動宇宙機はロケットやスペースシャトルよりよさそうですね……どうしてオーストラリアしか使っていないんですか？」

「それはミュベールさんがメリットしか話していないからでしょう。オーストラリアでしか運用されていないのはそれ相応のデメリットがあるのでしょうか」

「ファントムの言う通りよ。一番大きいのはコストね。だから元々アークバード級は三機造られる予定だったけど……二号機は機体のみの完成でエンジンを含めた中身は入れられずに博物館行き。三号機に至っては建造自体されなかったのよ。ただでさえ宇宙開発はお金がかかるしね」

宇宙開発って聞くと夢があるけどやっぱり先立つものは金なのか。ミュベールさんとゲイザーがあれだけのお金をくれたのはそういう事なんだろう。

「結局アークバードは一号機のみが運用されて余剰になったクルーは計画から外されたの。外されたクルーはそのまま空軍で戦闘機や輸送機のパイロットとして残った人もいるけど、私のように空軍を辞めてE・F社や民間の航空会社に入ったのもそれなりにいるわ。E・F社に入ってからには傭兵として色んな所に行ったり実力を認められて軍の戦技教導隊（アグレッサ）に選ばれたり……そんなところね」

ミュベールさんの話を聞いてどうしてミュベールさんがあんな動きができるのかわかった気がする。素人の俺でも戦闘機どころか宇宙に行くための訓練を受けてたんだったらそりゃあ激しいGにも耐えられるだろう。

「あの、ミュベールさん。ミュベールさんはどんなきつかけでゲイザーさんと出会ったんですか？」

ベルクトがおずおずと小さく手を挙げる。さつきまでの話だとミュベールさんがE・F社に入る前のことがメインだったから気になるんだろう。

……実は俺もミュベールさんとゲイザーがどう出会ったのか興味あるし。

「あー、出会いのきっかけ自体はそんないいものじゃなかったわよ？

私はゲイザーに万が一……この娘が人類側の敵に回った時に処断する事が出来るパイロットだからゲイザーのパートナーに選ばれたのよ」

「処断って……」

「始末する。って事よ」

ミュベールさんの言葉にグリペンとベルクトは露骨に顔を顰める。

……当の本人であるゲイザーは全く気にしてなさそうなのがすごいが。

「……どうしてミュベールが選ばれたの？」

グリペンの疑問はこの場にいる全員の疑問だ。もちろんミュベールさんが強い、ってこともあるんだろうけど選ばれた理由はそれだけじゃない気がする。

「……ゲイザーと組むパイロットはジャミングの影響を受けにくい機関砲やレールガンを使いこなせる事が必須だった。みんなも知っている通りゲイザーは味方のミサイルをコントロール出来る。だからいざそうなった時はミサイルは役に立たない。だからロックオンに頼らない無誘導の兵装を使いこなせる事が必須だったの」

実際ゲイザー海鳥島の時に多数のミサイルをコントロールしていた。それなら味方だった相手からのミサイルを狂わすなんて簡単だろう。

「で、何人かいた候補の中でも私はHiMATに耐えられる身体を持っていて、しかも傭兵だから正規軍の人達にはさせられない仕事をさせる事が出来る。それが決定打となって選ばれたわ。ゲイザーを処断する時だけじゃなく純粹にザイと渡り合う事も必要だったからね」

私が女でソロだったのも大きいんだろうけどね、と付け加えるミュベールさんだけどそれも実力があってこそだろう。訓練でファントムとイーグルにも勝てるぐらいだし。

「ゲイザー。私もゲイザーに訊きたいことがある」

「わたし？ 別にいいけどなにを訊きたいの？」

「ゲイザーは……周りに何も言われなかったの？」

「グリペン……」

グリペンの言葉は重い。口調こそ変わらないけどそこにどんな想いが込められているのかすぐにわかった。

「私も元々は正規軍にいたんだけど……その時はまあ色々と言われたよ。ザイから作られた人形とかね。けどミュベールは『私は傭兵で昨日の味方が今日の敵になる事だつてあるしその逆もある。だから貴女がザイから生まれたとしても私にはそんな大した問題じゃないわ』つて。それを会って開口一番そう言ってくれたんだ」

……すごい。何がすごいってミュベールさんもザイと戦っていたなら撃墜された仲間だつていたはずだ。なのに初対面でアニマの生まれを知つたうえで言い切れる器の大きさがすごい。

「あ、それにこんな事もいつてたよね。『ザイから生まれたからつて必ず人間の敵、つて訳じゃないでしょう。それとも貴方達は殺人者の子は必ず殺人者になるから殺せ、つて言う気？』つて」

「確かにそんな事も言つたわね。けど別段変な事を言つたつもりはなかったわよ」

はい、そうですかつて受け入れられないのも人間だけど、とそれを何でもないかのように言うミュベールさんはやっぱり器が大きいと思う。

……俺もそのことを知つた時はグリペンを拒絶したし。

「その後に『ただ私が貴女というのは貴女が裏切つた時に始末する為だからそれを忘れないように』つて言われた時はこの人、どっちの味方なんだろうつて思つたけど」

「『ミュベール（さん）……』」

当の二人以外から呆れたような視線がミュベールに向けられる。

上げた後に落とす、というかそれは言わなくてもよかつたんじゃないだろうか？

「貴女だって薄々は気付いてたでしょ。自分に付けられるのが監視役も兼ねてるって事ぐらい。それなら変に隠してお互い気を遣うより始めから言っておいた方がいいと思っただのよ」

「ま、それも少しの間だけだったけどね。今じゃ正規軍の人達も普通に……っていか娘の友達とかそんな感じで接してくれるし」

ちなみに言っておくとオーストラリア軍……特にパイロット組が気さくなのは傭兵であるE・F社のパイロットの影響が大きい。

一般に傭兵と聞くと金の為に戦う兵士というイメージが強いが、同時に彼等は生き残る事の重要性をよく知っている。ザイが現れる前の正規軍ではそうそうになかったが、傭兵である彼等は『戻って来れなかった』同僚を見てきたし、『残された』側の悲しみも何度も見てきた。だからたとえ仮の部下であっても彼等は育てる事に手を抜いたりはしない。その結果、教えられた側も信頼を寄せて段々とまあ似た者同士になつていく事が割とあるのである。

「でも一番わたしに色々してくれたのはやっぱりミュベールだよ。訓練だけじゃなくて休日には基地の外に連れ出してくれたりしたし。上の人達を説得して私をE・F社に異動させてくれたのもミュベールだしね」

「待った。なんでその事をゲイザーが知ってるのよ。……私、教えた覚えないんだけど」

「前に社長が教えてくれたよ？ ミュベールは変なところで照れ屋だから自分からは絶対言わないだろうって」

「あの人は……」

たぶんミュベールさんはゲイザーに秘密にしているつもりだったんだろう。顔を背けてるけど微妙に顔が赤くなってるのが俺でもわかる。なんとというかミュベールさんのそういうところを見るのはものすごくレアだった。

「ま、まあそういう訳だからベルクトもオーストラリアに行つてからの事は心配しないでいいわ」

これで話はおしまい、と言ってミュベールさんが立ち上がる。つられて時計を見ればそれなりの時間が経っていてもう検査の時間だった。

「……ヤバい。グリペンもう検査の時間だ。早く行かないと怒られるぞ!?!」

「ん。知ってた」

「気付いてたなら言えよっ!?!」

「検査は多少遅れても平気。けどミュベールの話はなかなか聞けないからこちらを優先した」

「気持ちわかるけどそれならそうと言ってくれよ!?! 連絡とか出来たんだし」

「すいません。コイツを連れていくんでこれで失礼しますっ!?!」

返事を聞くのを待たずにグリペンを連れて出た……のだがやつぱり間に合わず、検査を行うスタッフの人に怒られはしなかったものの連絡ぐらいいは入れるよう注意された。

待っている間携帯を見るといつの間に来ていたのか、ミュベールさんからメッセージが届いていた。

『お金の返却は不可。どうしても受け取れないというならこの戦いが終わって学校を無事卒業してから返しなさい』

というシンプルだけどこれからも頑張って生き残りなさいというメッセージ。

それを見た俺はミュベールさんとゲイザーの厚意を受け取り、最後まで生き残る事を改めて決意した。

Orderl 南洋のある姉妹

——南太平洋。

突き抜けるような蒼い空と、そこから降り注ぐ光によって彩りを変
える海。その空に似つかわしくない鋼の鳥が舞っていた。

《こちらAQUILA01。空域に異常なし。これより帰投しま
す》

《了解AQUILA01。帰投を許可する》

コールサイン、アクイラ01と呼ばれたパイロットは哨戒空域にザ
イがない事を確認して帰投する。

——ザイ。二年前、中国のタクラマカン砂漠に現れた
正体不明の飛行体。中国語で『災厄』を意味する名を付けられたソレ
は、僅かな期間で中国大陸の空と大地、——そして多くの命
を蹂躪した。

ザイはHiMATという人間の乗る戦闘機では不可能なレベルの
超機動と、電子システムはおろか人の感覚すら妨害するジャミング能
力——EPCMを持っているため通常の戦闘機・パイロット
では瞬く間に墜とされてしまう。

そのため現状ザイに対抗する手段は二つ。一つは既存の戦闘機を
改修し、HiMATならびに対EPCM能力を付与した機体である
『ドーター』に『アニマ』という自動操縦機構を搭載した一種の無人機
によるもの。もう一つはドーターと同じく、既存の戦闘機を改修した
AZCC（対ザイ戦闘対応機）をアニマではなく技量が突出している
エースパイロットが運用するというものだ。

（アクイラーは後者にあたる）

——もつとも、南太平洋にザイはほとんどいない。防衛ラ
インになっている東南アジアには正規軍やPMCの航空隊が多数配
置されていて、ザイといえども簡単には突破出来ないからだ。なので
実質的にパイロットや機体のテスト飛行になっている。（稀に遭遇す
る時もあるので対空装備はキッチリ積んでいるが）

何事もなく基地に戻り、ヘルメットを脱いで機体から降りると顔にあたる風が心地いい。この開放感だけは空の上では味わえないものだった。

(空の上もいいけどあそこじゃ風を肌で感じれないものね。……ベイルアウトするなら別だけど)

その時は風を感じる余裕なんてないだろう。……世界には出撃Ⅱベイルアウト、なんてパイロットもいるみたいだけど。

「お疲れさん、スタークス。今回もザイはここいらにはいなかったみたいだな」

風にあたっていたら整備スタッフの主任からさっきの哨戒の様子を当てられる。消耗らしい消耗をしてないから当然と言えば当然なんだけど。

「ええ。やはり東南アジアを越えてくるザイはほとんどいませんね。……全くないわけじゃないのが面倒なところですが」

「確かに。ゼロならわざわざ武装して飛ばなくてもいいものな。ああ、それとさっきお嬢がこつちに来たぞ。『ミュベールはまだ戻ってない?』って」

「ゲイザーが?」

お嬢ことゲイザーはエルジア^E・ファアーバン^Fテイ社の保有しているアニメで私の僚機だ。今日はドーターのチェックで待機だったけど。

「戻ったら社長室に来るように、ってさ。またなにかやったのか?」

「またって……人が飛ぶ度に何かするような言い方はやめてくれませんか?」

ここ最近は何もしていない。……シユミレーターでやった機動を実際に試してオーバーGしかけたけど。

「ま、負担はかけても壊れるような真似をしない限りは大目に見てくれるさ。それじゃあな」

そう言いながら主任はハンガーの方へ向かって行く。主任は私達アクイラ隊の整備責任者でもあるから私の機体のチェックに入られるんだろう。

……私も社長室に行かないとね。

「失礼します」

「あ、ようやく来た」

社長室に入ると既にアニメであるゲイザーが社長と一緒に待っていた。

「申し訳ありません。少し遅れました」

「構わんぞ、スタークス。……さて、お前達アキラを呼んだのは他でもない。名指しで任務が入ってな。アキラの両名には日本の小松基地へ行ってもらおう」

「日本に？」

「ああ。数日前サイが戦力を整えて日本へ仕掛けたのは知っているな？ 日本はこれまでアニメを分散して配置していたが、今回の一件で小松にアニメを集中させ運用性と即応力を上げる方針にしたようだ」
……その一件なら知っている。サイは散発的に現れる事が多いが、それを逆手に取られたカタチになる大規模の襲来だったためかなり危うかったと聞いている。

「と、同時にPMCで唯一アニメとドーターを保有している我が社にオフアーが来た。オーストラリアと正規空軍^軍とも協議した結果、両者からの了承も得た。対サイ戦の最前線でその技量と身体能力を發揮してこい」

視線だけゲイザーに向けると口に手を当ててクスツと笑っている。
……自分でも対G能力がアレな自覚はあるけど少しは隠してほしいわね。

「行くのは私達アキラだけですか？」

「ああ。東南アジアの防衛を考えると他の連中には残ってもらう必要がある。何より実戦アレルギーとも言える日本だ。大規模で派遣してもいい顔はしないだろう」

私とゲイザーのアクイラだけ派遣するのはそういうわけね。……しかし日本は対ザイの最前線になってる自覚があるのかしら？ 非戦を謳うのは悪い事ではないけど、戦うべき時と相手にはそうすべきだと思う。でないとなんか本心に護るべきものを喪う事になるのだから。「ミュベールの機やわたしのメンテナンスやサポートはどうなるの？」

ゲイザーがサポートの事を訊くけどアニマである彼女にとって重要な事だ。いくら雇い主とはいえ公開出来るモノとそうでないモノがある。とりわけゲイザーの事は基本的に後者だ。アニマである彼女とそのドーターは機密の塊だし。

「それに関してはアクイラの整備班と機材を輸送機で同行させる。無論、日本に着くまではお前達以外の護衛もつける。予定としてはベトナムで補給を行い、その後沖縄まで護衛させる」

社の護衛部隊はそこまでだ、と言外に語る社長。……本当は小松までほしかったけど仕方ないわね。沖縄にPMCの航空隊が入れるだけマシと考えるしかないか。

……と、肝心な事をまだ聞いてなかったわね。

「報酬と向こうでの待遇はどうなってますか？」

「報酬の方は相場の4割増しといったところだ。当初向こうの提示額は相場と大して変わらなかったんだ。うちのトップとアニマを最前線で働かせるのにそれは安過ぎるという事で交渉人エージェントが釣り上げた」
交渉人エージェントが報酬を増額させた、という事はそれだけ私達の実力を評価しているという事でもある。

……ゲイザーの分も請求してたのには驚きだけど。

「待遇は中尉相当で場合によっては現場での指揮を執ってもらおう。あまりない事だが」

「……いいんですか？ 傭兵が正規軍の指揮を執って」

「通常の航空隊ならともかく、アニマで構成される部隊だ。並みの指揮官ではアニマを持って余す。お前ならゲイザーでアニマの現場指揮に慣れているだろう」

それ、全然『場合によっては』じゃないわ。結構な確率で指揮官決

定じゃないっ！

「ミュベール」

「なに？ ゲイザー」

「わたしはミュベールが指揮を採ってくれた方が安心できる。だから……諦めて♪」

笑顔でそんな事を言ってくれるゲイザー。最後の一言はどこで覚えてきたのかしら……。

「可愛い妹分からのオーダーだ。……やってくれるな？」

……社長までそう言いますか。

仕方ない、覚悟を決めますか。

「わかりました。アクイラ隊、小松での任務を受諾いたします」

「ではアクイラの両名は日本の小松に赴き、同地で対ザイの作戦にあたれ。以上だ」

「はいっ！」

「なら、ゲイザーは下がっていい。ミュベール、お前にはもう少し話がある」

はい、と言つて部屋から出て行ったゲイザー。……あとで持つていく私物をまとめさせないとね。

「……それで私への話とは？」

「ゲイザーに関する話だ。今回の仕事でゲイザーは他国のアニメと初めて会う事になるわけだが……お前から見てどうだ？ 問題なくやっていけると思うか？」

あー、そう言う事ね。早い話社長は――

「心配なんですね。ゲイザーを外に出すのが」

「……子供のいない私にとってゲイザーは娘のようなものだからな。……私に限った話ではないが」

それは確かに。ゲイザーはウチの社員……特に子供のいない人達からは男女問わず可愛がられてるし。

……私も人の事は言えないけど。

「それなら大丈夫でしょう。あの子は社交的……というより誰とでも仲良くなりますから。それに空戦能力も最初は危なっかしいところ

がありました。今では単騎でもある程度は対処出来るようになりま
したし実力的にも大丈夫でしょう」

それにあの子には空戦における切り札がある。先制攻撃なら確実にザイを墜とせるし、味方のフォローもあの子の演算能力があれば私達より上手く使える。

「それを聞いて安心したよ。ではミュベール、ゲイザーの事を頼むぞ」
「ええ、大事な妹分ですから言われなくてもそのつもりです。……と
いうより彼女が墜とされたら私、みんなからリンチされかねません
し」

「そうだな。そうになったら私も止めるかどうか怪しいがな」

私も社長もお互いの言葉に思わず笑ってしまう。それだけゲイ
ザーはみんなから好かれているから何かあったら一大事だ。(戦力的
にも私の身の安全的にも)

——だから、あの子は決して墜とさせない。彼女のパート
ナーとして、そして何よりあの子の姉代わりとして。

Order 2 アクイラ、着任

——小松基地。

日本の航空自衛隊の基地の一つであり、ザイに抗う日本の最前線。その滑走路を一人の男性と少年が眺めていた。

「オーストラリアから増援が来るって言ってましたけど……どんな人が来るんですか？」

そう尋ねたのは鳴谷 慧。上海近海でグリペンと出会い、ザイから非難した日本の小松で再会した少年。グリペン曰く『自分に欠けていた』存在。そしてグリペンを通して空への憧れが再燃した『空へ焦がれる者生まれる前の卵』でもある。

「正確には一人と一機だな。来るのは傭兵とアニマだ」

答えたのは八代通 遥。日本のドーターとアニマに関する技術の第一人者。……技官とはいえ肥満体で、お世辞にも整っているとは言えない顔立ちのせいが一見ただけでは自衛隊の関係者には見えな
いが。

「戦力としてアニマだけじゃなくパイロットの方も優秀な実績がある。ベトナムを中心とした東南アジア方面でザイの撃墜数がトップのパイロットだ。あそこは南洋の守りで正規軍や多くの傭兵が常駐している激戦区だ。その中のトップというのは生半可な実力じゃない」

「撃墜数トップ……」

その言葉に慧は思わず言葉を呑む。グリペンと一緒に飛んだからこそ、その言葉の重さがわかる。自分はザイを墜とすどころか意識を保つだけで精一杯だった。けど今から来る人はザイを何機も墜としているという。内心、どんな人なのか興味津々だった。

「そのせいで向こうには高い金を取られたよ。幸いにも報酬は上からの支払いだからアニマに関する予算を削られずに戦力を増やせて助かったがな」

露骨に顔をしかめる八代通だがそれは仕方がないだろう。慧は知らないが相場より四割増しの報酬なのだ。元々予算が多いとは言え

ないだけに削れるなら日本側としてはもう少し削っておきたかった、というのが本音だ。

「と、来たな」

八代通の言う通りジェットエンジン独特の音を響かせ、二機の戦闘機がアプローチしてくる。が、その機体に慧は驚いた。

一機はまるで鋳をそのまま戦闘機にしたような機体。全体的にのっぺりとした直線的な面の多い機体で、グリペンやイーグルに見慣れたせいか異様な雰囲気を感じているように見える。

その特徴的な機体に慧は見覚えがあった。グリペンのことを調べている時に見つけた機体。あれは確か――

「F―117?」

「似てるが少し違うな。E/F―117G、あれがE・F社のアニメだ」

八代通の言う通り機体のカラーリングが通常ではありえない赤褐色。同じ赤でもグリペンのそれとはまったく違う。例えるならグリペンは煌めきのある紅だが、あのアニメの赤は濁いた血のよう赤色だった。そのアニメは前にいるもう一機に追従するように降りてくる。

そしてアニメを先導するように降りてきた方もアニメに劣らない異様さを持つ機体だった。黒を基調に白と黄色の混じった迷彩色。F―15を上回る機体サイズにアメリカ系の機体とは異なる流麗なデザイン。加えて主翼が機体の前に向かっていて独特の形状に箱型のエンジンノズル。少なくとも慧はそんな機体を見たことがなかった。

「八代通さん。なんなんです、あの機体?」

「おそらくS―32だろう。俺も実物を見るのは初めてだ」

「S―32?」

聞いたことのない機体だ。どこの国の機体なんだろうか?

「ついでだ。乗ってるパイロットとアニメが降りるまで簡単に説明してやる。まずアニメのE/F―117Gだがあれは君の言ったF―117をベースに作られた電子戦機だ」

「電子戦機？」

「一般にはあまり馴染みがないだろうな。通常の戦闘機と違って相手のレーダー妨害や味方のミサイル誘導をサポートするのが主な役割だ」

その分機体自体の攻撃能力はそう高くないがな、とつけ加える八代通。

「話を戻すがE/F-117Gは元にしたF-117に比べてステルス性は落ちていますが代わりに電子妨害でそれをカバーしている。電子妨害で相手の目をくらませ、本人はレーダーに映りにくいから見つからない、なんてふざけた機体だよ」

八代通の説明は少々違うところもあるが、電子戦機という概念を初めて知った慧がどんな機体かを知るには充分だった。

「それじゃあもう一機のS-32っていうのはどんな機体なんですかな？」

「そっちの方は俺もあまり知らん。知ってるのはアレがロシアの試作機の更にプロトタイプということぐらいだな。E・F社にはその手の機体が多く存在している、と聞いたことがあるが本当だったとはな」

八代通の言うその手の機体、というのは元が実験機や試作機だったリコンペティションで競合機に敗れて正式採用されなかった機体の事だ。

この手の機体は総合能力では正式採用された機に劣るが、特定分野では上回っている事が多い。

例えば機動性を重視した機体でも試作機の段階で挙動がピーキー過ぎた場合、量産型ではある程度マイルドな挙動にされる。これは量産して多くのパイロットが扱う以上避けられない。――い

だが逆に言えば、本来の設計スペックを持っているため量産機では踏み込めない領域にも行けるといいう事でもある。その領域に踏み込めるのは素質に恵まれ、その機体に巡り合えた運を持つわずかな者達だけだろう。しかしそのわずかな者達だけが、設計上望まれた本来の

機体性能を引き出せるのだ――。

そうこう話しているうちに二機は着陸し、誘導路からエプロンへと入ってくる。機体はスクランブルにも対応出来るよう、アラートハンガー近くの格納庫になるそうだ。

「さて、それじゃE・F社のエースとご対面といこうか。グリペン達も定期検査が終わる頃だから先に連中の使う格納庫に行ってるはずだ」

そうやってE・F社の人達が使う格納庫に八代通はさっさと歩いていき、それに続くカタチで慧も走っていく。

……その途中検査が終わっていたハズのグリペンとイーグルの睨み合いに、慧と八代通は頭を抱えたくなった。

着陸したミュベールとゲイザーは機体が格納庫に納められるまでの間、降りる用意をしながら同行する予定だったもう一機の人達について話していた。

《ねえミュベール。整備班の人達、大丈夫かな?》

《大丈夫よ。あの人達はその道のプロだもの。》

そう、本来ミュベール達は整備班の人達と機材を積んだ輸送機と共に来る予定だったのだが、油圧系のトラブルで輸送機は沖縄から出発出来なかったのだ。そのためひとまず先にミュベール達は小松に入る事になった。輸送機の修理が完了するまでの間にザイが襲ってこない、という保証がない以上戦力であるミュベール達だけでも先行しなければならなかった。

《だから、私達は私達の仕事をしっかりしないといけないわ。彼らの事が気になって任務に集中出来ませんでした、なんて彼らが聞いたら間違いなく怒るわよ?》

《……そうだよね。わたし達は、わたし達の役目を果たさないと》

そうして二人は話を終えてそれぞれの機体に向けられたタラップを使い、小松の地を踏む。

降りた側には白衣を着た（おそらく）技術者であろう人と、私服の少年少女が私達を興味深そうな視線で見ている。

「E・F社所属、アクイラ隊長を務めていますミューベル・スタークスです。TACネームはアステル。階級は中尉でザイとの戦闘では主に遊撃任務に就いていました。傭兵の身ではありませんが正規軍との作戦経験もありますのである程度正規軍の“流儀”はわかっています。これからよろしくお願いします」

「同じくE・F社所属、アクイラ隊の二番機E/F-117G-AN Mゲイザーです。電子支援を主にしています。隊長共々よろしくお願いしますっ！」

PMCとはいえ正規軍に属する際はきちんとした挨拶をしなければならぬ。私達は社の代表として派遣されているから雇い主は私達を通してE・F社を見る。だからラフな挨拶は基本的に許されない。

「あー、俺は八代通。防衛省の技術研究本部で特別技術研究室の室長だ。一応そつちも含めて作戦を行う際は指揮を執ることになっている。そしてこつちが自衛隊ウチのアニメ、グリペンとイーグルだ」

「……よろしく」

「あ、ミューベルだ。やつほー、久しぶりっ！」

パールピンクの髪の娘がグリペンでイーグルは……相変わらずね。

「なんだイーグル、スタークス中尉と会ったことがあるのか？」

「わたしもそれ知りたいなー。いつ知り合ったの？」

八代通室長とゲイザーからイーグルといつ会ったのかを訊かれるけど……八代通室長はともかく、ゲイザーは予想がつきそうなものなだけで。

「半年前にね。ほら、ちょうどゲイザーは機体のC整備5〜10日間運航を中止して行われる整備で、各系統の配管と配線、エンジン、ラジエーター等の入念な検査。機体構造の検査や各部の給油や装備品の時間交換等が行われるをした時よ。その時の雇い主は沖繩

のアメリカ軍だったから日本側に私がいる事は知られていなかったのね」

「そうそう、米軍の人達を異機種間空戦訓練^{D A C T}でこてんぱんにしてたよねっ！ イーグルとやろうとした時はザイのスクランブルでできなかったけどイーグルに負けないぐらいすごかったよっ！」

あの時は二個小隊程度だったから確か数分で片付けたわね。……大変だったのは戻ってからだったんだけど。

(戻ってからというものイーグルやアメリカ軍の人達に絡まれて那覇の街を飲み歩くハメになったし)

「そういうわけで、私はイーグルと面識があるんです。なので初対面なのはグリペンのアニメと……その彼ね」

アニメである彼女はともかく、彼は訓練生としても若過ぎるし服装も私服。年齢はともかく規律にうるさい正規軍の人間が格納庫^{ハンガー}を私服でうろつかせるとは思えなかった。

「ああ、彼はまあ……民間協力者というやつでね。詳しくは後で説明する」

民間協力者、ね……。自衛隊がそんな事を許すなんてよほど重要な役目があるみたいね、彼は。ま、きちんと説明があるならいいでしょう。

「それじゃ、私は細かい話をしてくるからゲイザーは好きにしていわよ。——ああ、それと彼からも話を聞きたいのですが？」

「……わかった。それじゃ二人とも執務室まで頼む。ここじゃ落ち着いて話ができるかな」

「わかりました。それでは案内をお願いします」

さて、一体なにが出てくるのかしら——？

「——というわけで彼はグリペンが安定して飛ぶために必要だ。だから民間協力者としてこの基地に出入り出来るようにしている」

八代通室長から彼がここにいる理由を聞かされたけど呆れと驚きしか出てこない。全く訓練を受けていない一般人をドーターに同乗させ出撃させたなんて……両者揃って墜とされても不思議じゃない。

ただ——

(その気骨は嫌いじゃないけどね……。グリペンが彼と一緒にじゃないと安定しない、というのは大きな問題なんだけど)

ゲイザーも最初は不安定だったけど、それはあくまで飛行や戦闘機動といった動きの話。グリペンのように起きている事自体が安定しない、というのは致命的だ。

だからグリペンの調子を左右する彼の存在は重要なんでしょうね。……だからと言って一般人を戦場に出すのは個人的には反対だけど

「鳴谷君……だったわね？ 一つ訊いてもいいかしら？」

「は、はい。なんですか？」

「どうしてあなたは危険を冒してグリペンに乗るのかしら？ 訓練を受けていない身で戦闘機——それもドーターに乗るのがどれだけ危険なのかは知っているわよね？」

そう、それが彼自身の意志というなら止めはしない。強制で戦場に上がる人は必ず地に墜ちる。傭兵としてソレは何度も何度も見てきた。

だから私は強制でソラに上げる事を容認しない。その時は生き残れてもいずれば墜ちる。あの場所は理由のない人間がいつまで飛べるほど寛容じゃないからだ。

「……スタークスさんが納得できる理由なのかはわかりません。ただ……俺はグリペンと一緒に飛んでいたい、です……」

「アニマが撃墜したザイを使って生まれているとしても？」

「…………ッ!!」

我ながら意地の悪い質問だと思う。それでも、彼がグリペンと一緒に

に飛ぶと言うなら訊いておかないといけなかった。

「……知っています。けどあいつはザイじゃないです」

そう言う彼の瞳に迷いはない。……どうやら本気のようなね。

「その一言で充分よ。……意地の悪い事を訊いて悪かったわね。謝らせてちょうだい」

そう言うて私は頭を下げて彼に謝罪の意を示す。さすがにあんな事を言つて謝りもしないなんて真似は私には出来ないし。

「い、いえ大丈夫ですからっ！ その……そんな風に謝られるとこつちが申し訳ないですっ！」

「ありがとう。それと私の事はミュベールでいいわ。改めてこれからよろしくね?」

「は、はいっ!」

そう言いながら出した私の握手に彼は戸惑いながらも応じてくれた。

……なら仕事の話に入りましょうか。

「それで八代通室長? 今回私とゲイザーはザイに対する戦力として雇われたわけですが……契約内容に変更はなしでいいんですか?」

具体的にはプラスで彼の訓練等も請け負いますが?」

「こちらとしては助かるが……いいのか?」

「ええ。もちろん別料金はいただきますし、スクランブル待機中はお断りですけどね。彼さえ良ければ請け負いますよ?」

「……ふむ、個人的にはお願いしたいところだが報酬を出すのは上の連中だからな。考えさせてくれ」

……仕方ないわね。彼の上役に期待というところかしら。

「あの、ミュベールさん。俺からもお願いします。足手まといになるのは嫌なんです」

「そうね、ならお金のかからない程度の座学とかシミュレーター程度なら付き合つてあげるわ。それが私が個人として出来る協力よ」

薄情に思われるかもしれないけど、誰かを指導するという事はその人がどう育つか責任を持つという事。報酬を取るのは指導した人を必ず成長させるといふ契約。だから私は無償で鍛える事はしない。

鍛える以上は責任を持つべきだと私は考えているからだ。

「それでもいいです、よろしく願いますっ！」

「決まりね。それじゃ八代通室長、期待していますね？」

「わかったわかった。なんとか頼んでみるさ。その代わり、結果は出してもらおうぞ？」

「当然です」

やる事が増えるかもしれないけどやらずにいるより遥かにいい。……ゲイザーがなにか言ってくるかもしれないけど理由を説明すればわかってくれるでしょ、あの子なら。

——多少違うところはあるけど、私達アクイラも彼とグリップンの関係に似ているのだから。

おまけ

格納庫に残されたアニメ達かというと——

「改めてE/F-117G ゲイザーです。日本に来るのは初めてだから色々教えてくれると嬉しいな」

「いいよー。イーグルがいろいろ教えてあげるねー」

「その子からだと喋ってばかりで説明にならない。私の方がここには詳しいから私が適任」

たちどころに冷えていく格納庫内の温度にゲイザーは

(え?もしかしてこの子達って仲悪いの?ど、どうしようっ!?)

おろおろしながらも二人を宥めるのが小松に来て最初の役目になるのだった。

Order 3 風が荒れる前

小松に到着して数日。沖縄で足止めをされていた整備班の人達も合流し、私達アクイラ隊もスクランブル待機のローテーションに組み込まれるようになった。

とは言っても私達はスクランブル待機でも通常より高い金額を取っているので頻度は少ない。なので基地内ではトレーニングをしたりと割と自由にやっている。

そして今日はグリペン・鳴谷君のペアとイーグルがシュミレータでしている模擬戦をゲイザーと一緒にモニター（鳴谷君にお願いされた）しているところだった。

「うーん、なんていうかグリペンの動き、ちよつとたどたどしいね」「それは仕方ないわ。イーグルと違ってグリペンは鳴谷君が搭乗するからシュミレータにもそれが反映されてるのよ」

実機で彼が搭乗するのに、シュミレータにそれが反映されていなかったら実際に飛んだ時に彼が死にかねない。だからグリペンのシュミレータには9G以上の機動をすると警告が出るようになってるそうだ。

「グリペンも大変だね。慧くんもミュベールぐらい耐えられる身体ならよかったのに」

「……ゲイザー？ 言っておくけど彼が普通で、私みたいなAZCC適応者がおかしいだけだからね？」

自分で言っただけ悲しくなるけど事実なのよね……パイロットとしては恵まれているんでしょうけど初見の人達からは奇異の目で見られるし。

「失礼します。スタークス中尉はおられますか？」

「ええ、自分になにか？」

「八代通室長が呼んでおられます。執務室に来てほしいとのことですよ」

「……？ なにかしら、今日は特に予定はなかったと筈なんですけど。」

「わかりました、すぐに向かいます。……そういうわけでゲイザー、私

は八代通室長のところに行ってくるからグリペンと鳴谷君にアドバイスをしておいてくれる？ 気付いたポイントはたぶん一緒だと思うから」

「いいよー。大事な話ならあとで教えてね？」

数日の間に歩き回って覚えた基地内の中でも特に足を運んだ執務室に入ると、前置きなしで八代通室長は本題を切り出してきた

「明日の夕方、三沢にいたアニメが到着する。機種はRF-4EJファントムIIだ」

「増援のアニメ、ですか」

私達が小松に来る前、社長から『アニメを小松に集中させ、運用性と即応力を上げる』と聞いていた話がいよいよ現実になるのね。

ただ――

「なんだ、なにか言いたそうだな？」

「……ええ、新しいアニメが来て戦力が増えるのは歓迎すべき事です。私達が雇われたのもそのためですから。ただ……私が気になるのは新しく着任するアニメ――ファントムの性格です」

正直、今でさえグリペンとイーグルは色々と張り合う事が多いので私とゲイザー、それに鳴谷君で取り持っている。だからファントムのアニメがどんな娘なのかは結構重要な事だったりする。

「それについてなんだが……この資料を読んでもらえれば分かる」

八代通室長の出した資料を読み込んでいくが、その内容はあまりにも問題だった。

「……これ、本当ですか？」

「俺も忙しくてね。騙すためにわざわざこんなものを作る暇はない」
「なら余計問題です。ただでさえグリペンとイーグルはそりが合っていないのに下手をすれば余計面倒な事になりますよ……？」

私が八代通室長にこうも食ってかかる理由。それは三沢基地でファントムが行なっていた事が原因だった。

資料によれば三沢基地ではアニメが原因のトラブルは起きていない、とある。が、それはあくまでファントムが直接関わっていないだけ。三沢基地でファントムは職員の人間関係や情報を公私問わず収

集し、ソレを『活用』した。具体的には誰に伝わり、どう受け取られるかを計算し尽くして集めた情報を流した。その結果、三沢では職員間で表向きにならない対立がいくつも出来てアニマを問題視する余裕がなくなつた。

……正直、その手腕は見事と言うしかない。自身に矛先が向かないよう他に注意を逸らす、というのは古くから使われて来た手段だから別にいい。問題なのはそれを（同僚としてはともかく戦力としては）味方に行つた事でしょうね。

ファントムの所屬がこれから小松になるとしても、対立関係が出来上がってしまった三沢で人間関係が良くなるのは時間がかかるでしょうし。

「それに関しては俺も懸念している。正直ファントムとイーグルが上手くやるのは期待できん。良くも悪くもイーグルはあの性格だからな。彼とグリペン、それに君とゲイザーに期待するしかない」

「……私達、日本のアニマ達の機嫌をとるために来たわけじゃないのですが」

「そんなことは俺も分かつてる。が、今回の部隊編成でかなりの無茶を押し通してな。結果が出なければ最悪、アニマの運用が出来なくなるレベルの予算削減になりかねん」

「……それはマズいですね……」

そんな事になったら間違いなく日本は陥ちる。そうなればザイが南洋へ進出してくるルートが増え、東南アジアの防衛ラインが破られかねない。

日本政府はコトの大きさが本当にわかっているのかしら？ ……『ザイの主張を理解し、対話の姿勢を示す事が重要』なんて内容のニュースが堂々と、それも最前線ともいえる国で流されている時点で察するべきなのかもしれないけど。（私とゲイザーも初めて聞いた時は驚きすぎて開いた口が塞がらなかつた）

「はあ……前途多難ですね」

私の溜息混じりの言葉にまったくだ、と同意する八代通室長。

……何も起きなければいいんだけど……こういう時に限って嫌な

予感って当たるのよね……。

ミュベールと八代通が揃って溜息をついている頃、ゲイザーはシユミレータで模擬戦をしていた三人のうちグリペンと慧の二人にミュベールの代わりをるところだった。

(ちなみにイーグルはゲイザーが褒めちぎったのでグリペンと特に揉めることなく上機嫌で離れた)

「さて……二人ともお疲れ様。ミュベールは八代通室長に呼ばれたから代わりにわたしと一緒に模擬戦の反省をしていこっか」

「あ、ああ。頼む」

「……………」

慧くんはいいけどグリペンは……やっぱり不機嫌になっちゃたか。目の前でイーグルを褒めちぎったから仕方ないと言えば仕方ないんだけど。

「ほらグリペン、機嫌直してよ。グリペンだってあのままイーグルといたらケンカになるってわかってたでしょ？」

「む」

「そうだったら彼も苦勞するよ？ 主にメンタル的な意味で」

そう言うとき少しはわかってくれたのか仏頂面が心なしに柔らかくなった……気がする。

できれば仲良くしてほしいなあ、わたしとしては。……きっかけがあればいいライバル関係になると思うんだけど。

「……なんとかならないかなあ」

「ゲイザー、なにか言ったか？」

「ううん、なんでもない」

いけないいけない。今はミュベールの代わりをきちんとやらないと。

「話がズレちゃったけど、始めてもいい？」

そう言うのと緩めだった空気が引き締まる。わたしも気を引き締め
ていけないと。

「それじゃ、始めるね。……大前提としてグリペンじゃイーグルみた
いな推力のある相手に速度や急上昇を組み込んだ機動^{マニユバ}を仕掛けても
効果は薄い。なぜかはわかる？」

「イーグルの方がパワーがあるからか？」

「正解。それを踏まえてさっきの模擬戦でイーグルにやられた時、グ
リペンはイーグルにどう仕掛けた？」

「……急上昇のからのループ軌道で上を取ろうとした」

「それが今回の敗因だね。イーグルは反応こそ遅れたけど速度をグリ
ペンほど失ってなかった。逆にグリペンはあの時直角に近い角度で
のハイレートクライムとループ軌道で速度を失った。そこでイー
グルは推力にモノをいわせたバレルロールで上からグリペンの後ろ
を取った、っていうのがイーグルが仕掛けた機動かな」

だからその前のパワーダイブで高度を失ったのが痛かったかな、
と付け加える。たぶんミュベールも近いことを言うと思う。(一応あ
とで確認してもらおうけど)

空戦は物理……もつと言うなら運動エネルギーと位置エネルギー
の使い方が肝要。グリペンのように機動に制限があるわけじゃな
いけど、わたしのドーターはミュベールのS-32どころかオースト
リア空軍のF-15S/MTDと比べても性能的には劣る。だか
らわたしも色々試してきたし、グリペンと慧くんが色々試す気持
ちが少しではあるけどわかる。

だからその上で重要なのは――

「二人してみれば不本意かもしれないけど模擬戦ではいくらやられ
てもいいのよ。少なくともわたしやミュベールはそう考えてるし」

「えっ!?!」

ま、『いくらやられてもいい』なんて言われたらそういう反応になる
よね。

「納得できない。きちんと説明して」

わたしの言葉にグリペンは問い詰めてくるけど当然か。肝心なことを言っていないわけだし。

「ゴメンゴメン、言葉が足りなかったわね。わたしやミュベールにとって模擬戦は『対応力』を育てるためのもの、って考えなの。シュミレータでも、実際に飛ぶにしろね」

「……対応力を育てる、ってどういうことなんだ？」

んー、ミュベールみたいに上手く説明できればいいんだけど。

「わたしのは受け売りみたいなものなんだけど……わたし達にとって模擬戦での勝ち負けはあまり重要じゃないの。もちろんわたしだつて勝てたら嬉しいし負けたら悔しいよ？ でも模擬戦ってなんのためによろしく思う？」

「自分の実力を知って技量を高めるため」

「それならわざわざ相手と一緒に飛ぶ必要はないでしょ？ それだけならシュミレータの難易度をいじったりすればいいんだし」

グリペンの意見も間違っているだけだ。E・F社の考えは少し違うのよね。

「いい？ 模擬戦を行う一番の目的は実戦で墜とされないよう経験を積むことだとわたしは思う。空で戦うものにとって負ける、っていうのはそのまま死に繋がりがねないからね。だから模擬戦でわたし達は自分の『負け』を経験するの。実戦で死なないためにね」

実際、模擬戦で得られるものっていうのは勝った時より負けた時の方が多し。そういう意味ではミュベールやイーグルと戦るのは二人にとって悪いことじゃないかな。

「……それでも負けるのは悔しい」

「うん、強くなるためにその気持ちは大事だよ。その気持ちがなくなったら強くなれないからね」

結構負けず嫌いなんだ、グリペンって。

ちよつと意外。

「なあゲイザー。それなら俺達が強くなるにはどうしたらいいんだ？」

慧くんの疑問はもつともなんだけど……うーん、私わたし達とは前

提が違うからわたしじゃ答えは出ない。ホント、二人にはどんな方法がいいのかな？

「……これだけ言っておいてなんなんだけど……わたしじゃありきたりなことしか言っておいてあげられないかな。二人は慧くんの身体のことがあるからわたし達のやり方はあまり使えそうにないし……」

「それでもいい。俺達だけだとわからないことの方が多いいんだ」

「なら……まずは実機・シミュレータに関わらず模擬戦をしたら今回みたいにしつかり『なにがダメだったのか』っていうのをしつかり見直すことかな」

これは基本。自分の失敗や相手がどんな動きをしたかを見返さないと自分達の課題も見えてこないし。……二人の場合はそれ以前に採れる方法に制限もあるんだけど。

「それと見直す時に自分達だけじゃなく別の人の意見を聞くのもいいと思うよ？ 自分達だけじゃ見えないものがわかるかもしれないからね。わたしはともかくミュベールならいいアドバイスをくれるかもしれないし」

「……？ ゲイザー、どうしてミュベールの方がいいアドバイスをくれるの？」

「え？ だってわたしよりミュベールの方が強いからだよ？」

「はあっ!？」

驚いてる驚いてる。ちなみにグリペンの方は静かだと思っただらシヨックで固まってる。……驚きの度合いはこっちの方が上みたい。

「ありえない。アニメより空戦で強いなんて——」

「グリペン？ 言つとくけどわたしは電子戦機で支援が本領なんだよ？ ある程度は空戦はできるけど本職には敵わないし」

そもそも空戦では機体の性能的にもミュベールの方が上だしね。ドーター化して少しはマシンにはなってるけど元のE/F-117Gは鈍足・低機動の低スペック機だし。

「ま、ミュベールの強さは一緒に飛んだらよくわかるよ。南洋エリアでザイの最多撃墜者^{レコードホルダー}っていうのがどれほどのことなのかね」

一緒に出撃するか自衛隊^{雇い主}が追加報酬を出さない限り指導で飛ぶこ

とはないと思うけどね、と付け加えたけどこの時のわたしはまだ知らなかった。

この翌日。アニメとミュービー達によるバトルロワイアルが行われるなんて――

Order 4 かみ合わない発足

雲は少なく、厄介そうな気流もないコンディションは良好な空。けどその空にいる私の気分は良くないを通り越して降下中だった。

「……憂鬱だわ」

ミュベールは傭兵なので雇い主クライアントの命令とあらば飛ぶが何も思わないわけではない。気が乗らない内容であれば思うところはある。

「……なんだってこんな事になったのかしらね」

ミュベールが文句を言いながらも飛ぶ理由。それは一時間前に第三格納庫サンカクで起きていた事が原因だった。

一時間前、小松基地・第三格納庫。

私とゲイザーがサンカクに来るともう見慣れた鳴谷君とグリペンとイーグル、そして八代通室長とその傍らにいるエメラルドグリーンエメラルドグリーンの髪の少女がいた。

間違いなく彼女が三沢から来たアニメ、ファントムでしょうね。ゲイザーも彼女をみて「アニメ……」と私にだけ聞こえるような大ききさで呟いてるし。

「よし、全員揃ったな。突然の発表になるが本日をもっておまえ達、小松基地所属のアニメとアクイラ隊は空自の指揮系統から独立することになった」

八代通室長の発表に私とゲイザー、そしてファントム以外のメンバーは頭に？マークを浮かべていた。

「言っておくが所属そのものは変わらず日本国自衛隊だ。ただ技本や統幕と同じく防衛大臣の直轄になる。正式には独立混成飛行実験隊、略称『独飛』。要はアニメ・ドーターを中心とした集中運用部隊だ」

「これから私達は一つの部隊として戦う、って事よ。これまで日本の

アニメは個別に動いていたでしょう？ それを一つに纏めてザイヘ対処しやすくするの。同じ迎撃でもバラバラに指示を出すのと一度に纏めてするのとじゃ上がるのにかかる時間が違うでしょう？」

私の説明で判ってくれたのか納得してくれたようだった。そして私の説明をフアントムが補足する。

「更に補足するなら私達は特殊なメンテナンスを必要としますから保守・整備の観点からも一つにまとまっていた方が運用しやすいわけです」

「運用、しやすい……？」

「自衛隊でドクターの維持管理ができる部局は現在、お父様の特別技術研究室しかありません。今までは技術者が各地に分散してアニメを見ていましたが、これでは保守部材も冗長ですし技術者同士のノウハウの共有も困難です。なにより私達と通常の航空隊では性能が違いすぎて共同ミッションが行えません。一部隊に集約することでそのあたりも解決できるというわけです」

私のS-32もだけど既存の機体がベースとはいえドクターは別の機体といえるほど中身が異なる。彼女の言う通り、一つに纏めた方が色んな意味で効率的になる。

と、いうよりこれまで分散配置していた方がおかしいんだけど。

「ん？ それじゃあなんで今までそうしなかったんですか？ 話を聞いている限りじゃ分散させてた意味ってあまりないじゃないですか」

「理由は二つ。一つはアニメの素体となった機体が各基地所属の機体だったことだ」

苦虫を噛み潰したような顔で説明する八代通室長。

——— ってちよつと待った。

「……まさかとは思いますが……ベースの機体って各飛行隊から所属を変えずにそのまま使ったんですか？」

「……ああ、そうだ。技術^{こつち}としても一度所属を移しておきたかったんだがそれをする手続きだけでかなりの時間がかかる。仕方ないから機体のアニメ・ドクター化を先に進めたんだ」

役所はとにかく動くのが遅いからな、とぼやく八代通室長。政治の

割りを現場が背負うのはどこの国でも変わらないらしい。

「そしてもう一つは一つ目が原因でもあるんだが、各飛行隊が対ザイの切り札として手放さなかったんだ。防空の要としてな」

あー、それは仕方ないでしょうね。ザイを相手取るとなると通常戦力だけだとキツイものがあるもの。

「が、先の小松空襲でアニメが分散していることのみならず、上もようやく自覚した。だから今回の集結とアクイラの招聘が通ったんだ」

賢者は歴史から学び愚者は経験から学ぶって言うけど、それで言うなら自衛隊は間違いなく後者ね。いつか手遅れにならないかればいいんだけど。

「はい、八代通室長。質問ですっ!」

「なんだ、ゲイザー?」

「指揮系統はどうなるんですか? 独立といっても好き勝手に飛ぶわけじゃないですよ?」

……訊こうと思ってたけどゲイザーに越されたわね。私が訊くかゲイザーが訊くかの違いだから別にいいんだけど。

「部隊全体の指揮は俺が執り、現場での指揮官は基本的にはミュベールだ。が、場合によっては分散して動いてもらうこともあるからな。その時はアクイラとバービーで分かれてもらうことになる」

アクイラと彼女達を分隊で分けての運用。分け方そのものは妥当なんだけど……大丈夫かしら? 戦力としてじゃなく連携出来るか、という点でだけ。

——ミュベールの懸念は戦力としてではなく、アニメ達の性格にあり、そしてそれは正しかった。

「……ねえお父様。その子、誰?」

イーグルにしては珍しく硬く、棘のある声と視線。……どうやらフロントムが八代通室長の傍に居るのが気に喰わないらしい。

「あら、これは失礼いたしました。三沢基地より参りましたRF-4EJ-ANM フロントムIIです。この独立混成飛行実験隊のメンバーとして、これからあなた方のチームメイトになります」

「F-4う?」

フロントムの自己紹介に鼻を鳴らすイーグル。

……気のせいかもしれないが嫌な予感がするんだけど。

「もう全部退役したと思ってたけどまだ飛んでたんだ？ しかも偵察機改修型？ そんな時代遅れの利用品がイーグルのチームメイト？」

「……………」

イーグルの言葉に傍にいるゲイザーの表情が険しくなる。

……世代的に言えばF-15よりF-117の方が新しいんだけど、ゲイザーの素体になったE/F-117Gも実戦から離れたF-117を改修したものだからイーグルの言い方に思うところがあるんでしょね。

「機体年齢二十歳そこそこのお子様が大口を叩くものですね。相手の実力を満足に測れないから先の防衛線で大恥をかいたのでは？」

「どつちもおぼさ……むぐ」

余計な事を言おうとして即座に口を塞がれるグリペン。

……お願いだから空気を読んでちょうだい。

「少なくとも私が防空戦に出ていればもう少し味方の被害を抑えられたと思いますけど」

「……………」

あからさまな挑発と宣戦布告にイーグルは自身の激情を抑える事無く――

「それじゃあ勝負しよう。実際に飛んでどちらが強いのかはつきりさせる」

――フロントムに挑戦状を叩きつけた。

「あらあら、どうしましょっ…」

困ったように笑うフロントムだけど目は笑っていない。

――アレ、どう見ても戦^ヤる気目だ。

「いいだろう。フロントムの試験飛行と交流を兼ねて異機種間空戦訓練^{D A C T}といくか」

「あの、すみません。ダクトってなんですか？」

……まあ、民間協力者の鳴谷君は知らないわよね。

「D A C Tっていうのは異機種間空戦訓練……簡単に言うと違う機種

同士で行う模擬戦の事よ。これから頻繁に聞くとと思うからこういう用語も覚えていった方がいいわ。空を目指すならね」

「はい……」

民間の航空系を目指すならD A C Tや機動の名前まで覚える必要はないんだけど。

「ああ、それとD A C Tにはグリペンとミュベールにも参加してもらうぞ」

「はい？」

待った。今の流れでなんで私とグリペンまでD A C Tに？

「お前とゲイザーはスクランブル待機には入ってもらってるがザイ相手に出撃したことはまだないだろう。俺もだがそれ以上に上がお前の実力を知りたがっているんだ。高い報酬を払って雇っているからな」

……それを言われると私としては断れない。私の現状は戦いもせずに報酬を受け取っている、という状態なので実力を見せろと言われると断れない。

「それに言っただろう。交流を兼ねて、と」

「……わかりました。そういう事なら仕方ないですね」

「よし、一時間に始めるから各自準備を進めておくように」

——以上がミュベールのテンションが低い理由。早い話、いろんな意味で『割りに合わない』からだった。

ちなみにゲイザーはD A C Tには参加していない。電子戦機にD A C Tをさせる意味は正直薄いので訓練空域の武装哨戒飛行にあってはいる。

(ま、やるからには負けるつもりはないんだけど)

気が乗らない模擬戦だろうが始まればスイッチが入ったように気

持ちが切り替わるミュベール。こういった切り替えの早さは流石だった。

《AQUILA01、ならびにBARBIE隊各機、訓練状況を開始する。タイム・アット・ワンエイト》

開始三分前が告げられ、上がる前のブリーフィングで伝えられた内容を改めて確認する。

——集合ポイントに四方向から向かい、そこから軌道を交錯させてから交戦開始。使用出来る兵装は実戦同様各種空対空ミサイル^Aと機関砲^M。判定は装備に連動しているセンサーによって命中・ダメージ判定が行われる、だったわね。

会敵ポイントに接近すると、ファントムから午後の紅茶を勧めるような上品な口調で通信が入る。

《自信がなければ三対一でも構いませんよ。その方が早く整備に戻れますから》

《キーーツ！ ホンツとにムカつくロートルっ!! いいよ、そんなに言うんだつたら望み通りあなたから墜としてあげるっ!》

そう言うなりイーグルは速度を上げて一直線にファントムに向かって行く。私とグリペンの事は完全に頭から抜けているようだった。

(あれだけ挑発されたからイーグルはファントムと先にやり合うつもりみたいね。グリペンは……イーグルと一緒にファントムを先に相手取るようね。)

グリペンとイーグルは何度も模擬戦をしているから互いの実力をよく知ってる。だから未知数のファントムか私を先に狙う、という考えは悪くない。

……イーグルは挑発されて気に入らないから、とかのストレーブル^シな考えで動いてるんでしようけど。

(彼女達には悪いけどファントムがどれほどなのか測らせてもらいましようか)

そうしてミュベールはファントムを観察するために高度を上げて三機から距離を置く。

ミュベールが高度を上げると同時に《FOX2——!》というイーグルの声が入り、戦術マップにイーグルからファントムへ向けて放たれたミサイルの輝点が現れる。それらは全てファントムへ向かうも、戦術マップに変化はナシ。どうやら全て躲きたらしい。

《甘い、甘いっ!》

嬉々とした声にマップを見るとイーグルのが完全にファントムの後ろを取っていた。先ほどよりも距離が近く、アニマの火器管制能力なら間違いなく必中距離。

なのだが――

《これで! おしまい!》

《BARBIE02、ロスト》

イーグルのフィニッシュ宣言と同時に聞こえる八代通室長の撃墜判定に耳を疑う。マップ上でもイーグルのマークは消え、ファントムは残っている。

が、次の瞬間ファントムのマークはあつという間にグリペンの背後に現れる。いくらアニマでもおかし過ぎる。

《FOX2》

(ECM? いえ、イーグルとグリペンの反応は正常だったから違う。ECMならこの二機の反応にも影響があるはず……っ、まさかつ!)

《BARBIE01、ロスト》

ある事例を思い出したミュベールは一つだけ立ち上げていなかったディスプレイに自衛隊のものとは異なるデータ・リンクを起動させる。グリペンの撃墜判定が出た以上余裕はない。

結果は――

(ピンゴッ! まさかとは思ったけど本当にデータ・リンクに細工しているとはね)

DACTでここまでやる?と思いつつもミュベールはそれを頭から追い出し、ファントムの相手に集中する。

――その前に、

《ファントム。生憎だけど私に『ソレ』は通じないわ。貴女の位置

――私には『見えてる』わよ?》

一応イーグルとグリペンには聞こえないよう個別チャンネルで通告し、ループを描きながらファントムの上を取りに行く。

自衛隊側のデータ・リンクでは私とファントムの位置は離れているからマップで見えるならあまり意味のない機動。が、今私が見ているデータ・リンクではファントムは私の背後につきつつある。それを判っているからこそファントムの上を取りに行く機動。これでファントムに私の言う事がブラフじゃない事が伝わったはず。

(さあ、お手並み拝見といこうじゃない)

そう言うミュベールはマスクの下で獰猛な笑みを浮かべていた――

繰り広げられるミュベールとファントムの空戦。お互いの翼が白い尾を引くドッグファイト。レベルの高い空戦に慧は言葉がなかった。

「すげえ……」

自分達がなにも出来ずにいたファントム相手にミュベールは互角に渡り合っている。

……あれが南洋エリアで最高レベルと言われるパイロット。『エース』と呼ばれる人達の技量なのか。

ふと、何気なくグリペンを見ると頭に？マークを浮かべていた。

「ミュベールの機動。あれ、おかしい」

「おかしい……ってなにがなんだ？」

いや、アニメと互角に戦えるっていう時点でおかしいと言えばおかしいんだが。

「9Gを超える機動を何度もしてる。アニメじゃない人間があんな機動をしたら普通失神するのにおかしい、変態」

「変態って……」

「私と同じことをしたら間違いなく慧は失神する。それを当たり前にやるミュベールは変態」

……一瞬納得してしまった。っていうかそれだけの機動をしてる

のになんでミュベールさんは平気なんだ？

「それにミュベールはフロントムの動きを捉えてる。私とイーグルはフロントムを捉えられなかったのに」

「俺達より経験があるからじゃないのか？」

「そうかもしれない。けどなにか、変」

変、か。俺にはなんなのかさっぱりだがグリペンは何にか感じるものがあつたのかもしれない。

——理解できない動きをしたフロントムとそのフロントムを捉えるミュベール。

疑問を抱きながらも少しでも自分達の糧にする為、慧は二人を見続ける——

一方、ミュベールとフロントムはお互い有利なポジションを取れずにいた。

（流石にやるわね。このままだと決着がつかないか。なら——
——）

仕掛ける事にしたミュベールはフロントムが上方に見えた瞬間、コブラで強引に機体をフロントムに向ける。ミュベールが仕掛けに来た事を察知したフロントムは加速してミュベールが機首を向けきる前にスピリットSでミュベールの背後をとる。

（なら、これで——っ！）

機体をそのままクルビットさせ、フロントムの背後後ろを取る。

《FOX2ツ！》

AA Mを放つもフロントムはチャフとフレアを撒きながら高度を上げ、AA Mを躲す。ミュベールもアフターバーナー全開でフロントムに喰らいつく。

が、突如としてフロントムの姿が視界から消える。

（消えたっ!?!）

——次の瞬間、ロックオンアラートが鳴り響き、ミュベールは咄嗟に機体を右方向へバレルロールさせるもフロントムはしつ

かりとついてくる。幸い、今のでアラートは止んだがファントムが後ろに居るのは変わらない。

ファントムが行ったのはアンロード加速と呼ばれるもので、旋回中に操縦桿を緩めて0G状態にし、そこから一気に機体をフル加速させてオーバースピートさせた機体に喰いつくものだ。

(イチかバチかだけど……上手くいって、ちようだいね……っ！)

右エンジンカット、左エンジンON、強烈な横方向のGに視界と意識が振り回されるも意識は手放さない。感覚に頼って両エンジン最大出力、ヘッドオンに持ち込み――

《FOX3!》

Gに翻弄された身体がギンギシと悲鳴を挙げるけどそれに耐えながら機体を加速させて機関砲を撃つ。水平版のクルビットと言うべきか、独楽のような水平方向での反転という荒業だったが目論見通りにはいかなかった。

ファントムの機体中央を狙った攻撃は右の主翼へに逸れ、ダメージ判定はあるものの撃墜判定には至らなかったからだ。

――時間にしてあとコンマ数秒。その僅かな時間を耐えていれば、撃墜判定までもっていけただろう。

両者の距離は大きく開き、仕切り直しとなったのでミューベルはマスキの下で乱れた呼吸を整える。本来ならここからまたやり合うのだが――

《AQUILA01ならびにBARBIE03、状況終了だ、AQUILA02も含めて全機戻ってこい》

――唐突に八代通室長から訓練終了の命が入ってきた。

《……まだ決着はついていませんが?》

《ならこう言うてやる。――やり過ぎだ、アステル。確かに実力を見せろとは言ったが訓練であんな機動をするやつがいるか。降りたら即刻検査を受ける。訓練でやり過ぎて本番で使い物にならんなんて認めんぞ》

……確かに、今のはどう考えても訓練でやるようなモノじゃなかつ

たわね。

《……判りました。AQUILA01、RTB。AQUILA02、哨戒はもういいわ。戻りましょう》

《AQUILA02、了解。……アステル、室長の言う通り無茶し過ぎだよ？ 見ているこっちが冷や冷やしたよ。あれだけやる気がなかったのにいざ始めるとコレだもん》

心配半分、呆れ半分といったゲイザーに返す言葉がない。

……自業自得ではあるんだけど。

基地に戻った私は即刻医務室に連行された。どうやら八代通室長の『検査を受けろ』は強制だったらしい。

一通りの検査を受け、問題ナシと判断されると私はすぐに八代通室長の元に向かった。ファントムの採ったやり方について一言言う必要があったからだ。

「失礼します」

「なんなんですか、あのアニマは」

私が八代通室長のいる喫煙室に入ると、鳴谷君がファントムの事で問い詰めていた。

「鳴谷君？ あなたもファントムの事で話があったの？」

「そうです。ミュベールさんも？」

「ええ。実戦で敵相手ならともかく、訓練であんな仕掛けをするなんて度が過ぎていますから」

「ミュベールさんはあいつがなにをしたのか分かってたんですか?!？」

「データ・リンクに細工をされた、っていう程度ね。具体的に何をされたかまでは判らないわ」

「それなんですけど……」

私が医務室に連行されている間、彼らは彼らで一悶着あつたらしい。その時、グリペンがフロントムがした『仕掛け』を見破った。フロントムの行った仕掛け——それはデータ・リンクに虚偽の位置情報を流し、誤認している内に有利なポジションをとつていた、というものだった。

私達は相手を常に視認出来るわけじゃないから、ただ相手に勝つという面で見るとこの上なく効果的な方法。

いえ、そもそも——

「あの方針を実戦に持ち込むなら私達アキラは背中を預けられませんが。下手をすれば囿として切り捨てられます」

戦力として問題なくても信用出来るかは別問題。それでいうならフロントムは問題アリとしか言えない。

「では訊くが、君達はいいつのことを悪人だと思うか？」

「……難しいですね。利用される側から見れば彼女は許せませんが……それで多くの敵を墜とせるなら大局的には正しいですから」

この判断は難しい。個人レベルと部隊・組織規模では見解が違ってくるものね。

「ミューベールの考えは少し近いな。……あいつの価値観・行動理念は人類の救済だ。『人間』ではなく『人類』を、というところが厄介なところだな」

「……少数を切り捨てて多数を生かすという事ですか……」

「でもそれと今回の行動がどう繋がるんですか？」

「人類を護るためにはまず自分が生き残らなければならぬ。だから自分が戦いやすい環境を作る。……妨げになるものは排除し、反抗的な味方はねじ伏せてな」

……あまりの価値観に頭が痛くなった。確かにその考えは間違いとは言いい切れない。

だけどそれは——

「……それ、戦えるのが『彼女』だけ、という前提ですよね？」

「……そうだな。あいつは自衛隊にとって最初のアニマで俺にとってのも処女作だったからな。周囲の期待も大きかったから一人で全て

背負おうとしたんだろう」

「だから彼女は今日のような事をしたんでしようね……」

戦力上の味方はいても背中を託せる『仲間』がいない……。一人で背負おうとしたが故にああなったんだとしたら——

「……なんというか、寂しいですね」

鳴谷君の言葉に私達の間には沈黙が降りる。二人も思うところがあ
るようだった。

「そんなわけで俺としてはなんとかしてやりたいたんだが……どうだ？

俺相手だとあいつは猫を被っているから駄目なんだ」

珍しく疲れを含んだ投げやりの口調。普段の自信さが感じられな
い声だった。

「……すみません。俺とグリペンはもう決裂済みです」

「そうか……そっちはどうだ？」

「私達はまだ直接話していないのでなんとも言えないですね」

「なら頼む。ファントムのことでもなにか気づいたら俺に上げてくれ。

グリペンとゲイザーにもそう言っておいてくれ」

そう言って八代通室長は部屋から出て、私と鳴谷君も執務棟から出
る。

——空は変わらず青いままだけど、私達の胸の内に立ち上
がった暗雲は消えてくれるか判らなかつた。

おまけ 執務棟から出てお互いのパートナーと合流した小話

「そういうえばミュベールさんってなんであれだけの動きが出来るんで
すか？ グリペンは9G以上の機動を何度もしてる、って言ってまし
たけど」

「私は訓練で瞬間的にだけど12・6Gまで耐えた事があるからね。

11Gまでなら耐えられるから機体のGリミットも11なの。流石にそれ以上は危険域だけど」

「やっぱり変態」

「おいっ!？」

「……グリペン？ 少しOHANASHIしましょうか？」

「あーあ。まあ死ぬことはないから大丈夫かな？」

その後、グリペンはミユベールを見るとビクつくようになったとかならなかったとか。

Order 5 向日葵の華

D A C Tを行った数日後、わたしはミュベールと一緒に小松にあるショッピングセンターに来ていた。

わたしとミュベールはセットでスクランブルのシフトに組まれているからも基本的に休みは同じ。といってもこれまでの休みはグリペンと慧くんにつき合っていたから待機みたいなもので、今日は二人も外れているから日本に来て初めての休みらしい休みだ。

そんなわけで今日はミュベールと一緒に基地内にあてがわれた私室で使うものを買いに来た。間借りしてるカタチだからからあまり持ち込む気はないけど、少しは落ち着ける場所にしたいのだ。

(ちなみに会計は全て妹分が大甘なミュベールである)

「結構いろんなものがあつたね。いいものも買えだし、来てよかったー」

「そうね。日本で買い物をするのは久しぶりだけどやっぱり品揃えが豊富だわ」

ミュベールの言う通り、日本のショッピングモールはオーストラリアよりも品揃えがいい。始めは2、3店回るつもりだったけど必要なものがここだけで買えたから午後からは興味が沸いた店を見て回ろうかな。

「あら」

「どうかした？ ミュベール」

「あそこで女の子と一緒にいるの……鳴谷君じゃないかしら？」
「え？」

ミュベールの言う方を見ると、確かに慧くんがポニーテールの活発そうな女の子と一緒にいた。

「あ、ほんとだ。やつほー、慧くーんっ！」

「ゲイザー？ それにミュベールさん……でいいんですよね？」

「ええ、私で合ってるわ。休日で基地外に出る時はこうしてるのよ」

あ、そういえば慧くんはミュベールのロングヘアは初めて見るんだっけ。

ミュベールは基地にいる時はセミロングだけど、今日みたいに外に出る時は付け髪ウイックでグリペンやイーグルみたいに腰まであるロングヘアだからちよつとした変装だ。

「……慧。この人達、誰？」

「あー、基地の売店でバイトしていると何度か見るんだよ。……その、客として」

「……バイト？」

慧くんの言葉に首をかしげているとミュベールが耳打ちしてきた。

(彼がグリペンと飛んでる事は伏せておきなさい)

(わかった)

「初めまして。自衛隊に雇われているミュベール・スタークスです。それでこっちは従姉妹の——」

「ゲイザー・ラッセルです。気軽にゲイザーって呼んでくれると嬉しいな」

「……宋 明華ソンミンホアです。あたしも明華でいいですよ。二人とも慧みたいに基地の中で働いてるんですか？」

「……？ なんだろ、なーんかわたし達を見る目が厳しいような。日本人じゃないのに自衛隊にいるからなのかな。」

「いいえ、私は対ザイの戦力としてよ。ゲイザーは私付きの秘書みたいなものね」

外向けに私の身分カバはミュベール付きの事務見習いということになってる。

ミュベールはともかくわたしは関係者以外に『戦闘機乗り』と言っても(当たり前だけど)無理があるし。

「対ザイ……？ もしかして、ザイと戦ってるんですかっ!？」

「来てまだ日が浅いから日本ではまだだけどね。私はオーストリアにあるE・F社所属の傭兵で、主にベトナムを中心とした東南アジアで戦ってたの。日本にはその実績を買われたカタチね」

「ミュベールはすごいよー。E・F社でも上から数えた方が早いくらいの腕前なんだから」

「そうなんですかっ!?! ……あ、その、最初見た時にモデルの人かと

思ったので」

ミュベールは女性として背が高いし、スタイルもいいからミュベールを初めてみる人はだいたい「モデルさん？」って言う人が多い。

……実際、ミュベールは何度かスカウトされたこともあるからそう思われるのはおかしくなかったりする。

「ところで……二人はデート？」

「ち、違いますっ！ ただの買い物に來ただけですっ！」

「そ、そうですっ！ 食品とかで重かったりかさばるものを買いに來ただけで慧はただの荷物持ちですっ！」

ミュベールのデート発言に慌てる二人。

初々しいなあ。E・F社の人達は色々経験してるからこういう反応を見るのってちよつと新鮮。

「そ、そういう二人はなんでここに？」

「わたし達はデートだよ。だからこうしているのは別におかしくないでしょ？」

そう言つてミュベールの腕に抱きつく。

二人が驚いたような表情だけどキニシナイキニシナイ。

「……ところで明華ちゃん、私達になにか用事？ なにか言いたそうに見えるけど」

「い、いえ。その……なんでもありませんっ！」

うーん、そういうことを言う人ってたいいなにか言いたいことがあるような気がするんだけど。

ミュベールはなにかに気付いたのか、少し悪い笑顔なのが気になるけど。

「明華ちゃん。ちよつとこっちに来てくれる？」

「は、はい」

そう言つて明華ちゃんを手招きして耳元でなにか言うミュベール。それを聞いた明華ちゃんは途端に真っ赤になった。

「なあゲイザー。ミュベールさん、明華になにを言ってるんだ？」

「さあ？ ミュベールのことだから彼女をナンパしてるんじゃない？」

「……？ それどういうことなんだ？」

「言つてなかったつけ？ わたしもだけどミュベールもそういう趣味だから手を出すのは女の子だよ？」

「はあっ!？」

……余談だが、この時ミュベールは『安心して。私は男の子より女の子の方が好きだから鳴谷君よりあなたの方が好みよ?』と言っている。それでゲイザーの言っている事はだいたい合っている。

というかゲイザー自身もそういう趣味だとカミングアウトしてるが、慧が驚いて聞き逃す事を計算して言うあたり実にちゃっかりしている。

「ところで二人はこれからどうするの？ わたしとミュベールはこれからお昼にするんだけど……一緒に食べない？」

「あー、……それは嬉しいんだけど……」

「すみません。私達まだちよつと買い物が残つてて……」

うーん残念。無理強いは出来ないし仕方ないか。

「それじゃあまた基地でね。明華ちゃんも機会があつたら今度は一緒に買い物したいな」

「え、えーと、その……」

「安心して、明華ちゃん。さっきのは冗談だから気にしないでいいわ」
ホントにナンパみたいなことを言つてたんだ。

……わたしがいるのに。

二人と別れてわたし達は昼食にしていたけど、そこでミュベールに電話がかかってきた。

「……八代通室長からね。……嫌な予感がするけど」

八代通室長からかあ。ザイになにか新しい動きがあつたのかな？

「ゲイザー、休みは打ち切り。急いで基地に戻るわ。まだここにいる

と思うから鳴谷君を呼んで店の入り口に。私は車を出してくるわ」
「わかった」

鳴谷くんが合流し、わたし達は急いで小松基地に戻る。

けど、車中の空気は緊迫とは別の意味で重かった。ミュベールは鳴谷くんの事情を察したんだろうし、慧くんも後ろめたいのか押し黙っている。

「……ミュベールさん、さつきはありがとうございました」

「鳴谷君、さつきは訊かなかったけど……彼女に自分がしている事を隠しているの？」

「はい……」

……なんていうか、試験の結果が悪かった生徒とその教師みたい。

「そう……。鳴谷君には鳴谷君なりの考えがあるんでしようけどいつまでも隠し通せることじゃないし、しない方がいいわ」

「……わかってます。けど心配をかけたくないんです」

……それは違う。心配をかけたくないから黙っているのは違うと思う。

「……ねえ慧くん。私はアニメで人じゃないからあまり偉そうなことは言えないけど……それは間違ってると思う」

「ゲイザー？」

「私も日本に来る前は会社の人や一緒に戦った人達を何度も見送ってきた。わたし達みたいに戦闘機空で戦うもの乗りは場合によっては遺体どころか身に着けていた遺品一つ残らないことがあるんだよ？……慧くんは自分がそうならない、って言いきれる？」

「それは……」

言い淀む慧くんだけどそれでいいと思う。ならない、って言い切ったら手を出すつもりだったし。

「わたしはあの娘に本当のことを言っておくべきだと思う。わたしやミュベールもむぎむぎ死なす気はないし死ぬ気もないけど、理不尽が通るのが『戦場』だから」

あの場所がどれだけ理不尽なのかは一度でも経験したらわかる。文字通り何が起こるかわからないし、容赦なく命が散るからあそこは

理不尽な場所なんだし。

「言うようになったわね、ゲイザー。少し前まであなたもそう言われる側だったのに」

「教えてくれた人がよかったからだよ。それにミュベールも言ってたよね、『伝えたい事があるなら伝えれる時に伝えなさいって。出来なくなつてからじゃ後悔する』って」

最初は言われてもよく意味がわからなかった。けどザイ相手の実戦に出るようになってその意味を文字通り痛感した。

出撃前に話していた人達が帰ってこない。その中にはわたしによくしてくれた人もいて、お礼を言うことが出来なかった人もいる。

——それが、すごく悲しかった。

「ミュベールほどじゃないけど、わたしだってあそこの理不尽さは知ってる。だから慧くんには明華ちゃんに言うのかどうかをもう一度考えてほしいかな」

待っている人がいるなら尚更伝えるべきなんじゃないか、ってわたしは思うけど……

「それに、もう一つ本音を言うと……ミュベールもだけどわたしも慧くんみたいな子どもが戦うのってイヤなんだよね」

「子どもって……俺はそんな子どもって歳じゃない。それを言うならゲイザーだって——」

「わたしはアニメで、戦うために生まれた存在だよ？ ……イヤな言い方になるけどヒトのカタチをしているから人間だ、っていうのは間違いだからね？」

「なっ……!?!」

うーん我ながらひどい言い方だとは思うけど実際そうなのよね。

「……ミュベールさんは、ミュベールさんもゲイザーやグリペン達のことをそう見てるんですか?!」

「……それに関して私はノーコメント。……ああ、誤解しないでほしいのはいいたくないわけじゃないの。コレに関して私は言える筋合いがないだけだから」

あー、なんとなくだけどミュベールの言うことが想像ついたかも。

「私は傭兵で、戦う事を生業としている者よ。戦うために生まれたア
ニマと、戦いの中で生きる事を選んだ傭兵。戦う理由や過程は違うけ
ど結果的に私達は同じ道を進んでる。言える筋合いがない、っていう
のはそういう事よ」

やっぱりそう言うよね、ミュベールは。思うところがあっても自分
が戦いの中で生きることを選んで、人のことを言えないから言わない
んだろうなー。

「だからといってゲイザー達アニマを道具扱いする気なんてさらさら
ないんだけど……と、話がだいたい逸れたわね。鳴谷君、私もゲイザー
もあなた達の事は気に入ってるの。口うるさい、って思うかもしれない
けどここは先達からの忠告と思っでちようだい。鳴谷君だつて明
華ちゃんを泣かせたくはないでしょ？」

「それは……そうですね。……ミュベールさん、明華に言う時がきた
ら相談してもいいですか？」

「もちろんよ。鳴谷君がその気になったらいつでも乗ってあげるわ。
……その時私が生きていれば、だけど」

「ミュベール、それ冗談にしちや重すぎない？」

ミュベールの冗談はあまり冗談に聞こえないから困る。ほら、慧く
んもどう返せばいいのか戸惑ってるし。そういう冗談はE、F社の
人達じゃないと通じない気がする。

知らない人達からしたら不穏極まりない冗談だけど。

「ただ慧くん？ あんまりぼやぼやしていると明華ちゃんミュベールに
取られちゃうよー？」

「ゲイザー？ 変な事言わないでちようだい。別に取ったりはしない
わよ。……味見ぐらいはするかもしれないけど」

「……あの、気のせいか今すぐく不安になったんですけど」

うん、慧くんのそれは間違つてない……っていうか正しいと思う。
明華ちゃんを気に入っただのはいいけどそれは色々アウトだし。

……ただ……うん、空気が少しだけ軽くなった気はする。慧くんも
合流した時よりは肩の力が少し抜けたみたいだし。

あとは仕事の内容次第かな。今回が独飛としては初の任務。雇わ

れた以上は結果を出さないとね。

出来れば、この任務が日本のアニメの娘達にとっていいきっかけになつてくれればいいんだけど。

Order 6 Frist Order

「本日〇六三〇、東シナ海南西部の防空識別圏にザイが侵入した。侵入してきたザイは那覇基地の自衛隊機と嘉手納の米軍機がスクランブルしたが双方の被害が大きく撃墜はされていない。……問題はこゝのあとでな。観測機の報告によると近隣の無人島に落下したらしい」

「……落下？ ザイがですか？」

鳴谷君が信じられない、という反応をするけどそれは私も同意見。あの連中が自滅してくれるとはどうにも思えない。

「本当にそうならよかったんだがな……。これ、なんだと思う？」

「これは……」

プロジェクターによって映し出されたのは山がちな小島の空撮写真。山に生い茂る木々の中にその「異物」はあった。

——水晶のような輝きを持つ正六角形の柱。それらが立ち並び、柱同士も光の線で結ばれて幾何学的な紋様を織りなす姿は幻想的ですからある。

……これが自然のものならよかつたんだけど。

「……自然のものじゃない。というかどう見てもザイのものですよね、コレ」

「落下したっていうザイの破片ですか？」

ゲイザーの言う通りあれは間違いなくザイによるもの。そしてこのサイズで破片と言うのは考えづらい。——なら、どう考えてもロクなものじゃないでしょうね。

「そうであつてくれればよかつたんだがな。諸々の分析結果から判断すると山頂のものはレーダーサイト、地形を利用したシエルター、そして柱を結んでいるライン。間違いなくこいつは連中のFOBだ」

「なっ!？」

FOBっ!? だとしたら最悪だわ。スライドを見る限りまだ構築途中みたいだけど完成したら厄介な事になるのは目に見えてる。

「……あの、すいません。FOBってなんですか？」

「FOBはForward Operating Baseの略で……簡単に言うと前線基地の事よ」

「前線基地っ!? あいつらそんなことができるんですかっ!?」

鳴谷君が驚くのも無理はないわね。私——というよりE・F社でもザイが何らかの基地などを設営している事は予想していたけど実物を見るとやっぱり驚きを隠せない。

「……意外だな。E・F社にいるおまえ達なら見た事ぐらいはあると思っっていたが」

「南洋エリア——というか東南アジア方面はわたし達みたいな傭兵だけじゃなくてオーストラリアを中心に正規軍も結構な数が常駐していたのは八代通室長も室長は知ってますよね？ だから現れたザイは全部撃破してこれたのでわたし達もザイのFOB構築を見るのは初めてです」

とは言っても私達もベトナムから先に進めていないから、そこから中国へ向かっていけばおそらく見つかるでしょうね。

ザイが初めて観測されてから約二年。その間無補給で動き続けた、っていうのはちよつと考えにくいし。

「画像を見る限り建築、というより予め構築されていたものを展開しているみたいですね。やり方としては人間が月や火星に無人探査機を送り込むのと似た方法みたいですが」

「なるほど。墜落したと思われていたザイは意図的に降下・突入したものだ。通常の制空型に混じっていた輸送型が地上に到達後、自動的に搭載物を展開して基地設備を構築中。そういうことですね？」

「そういうことだ」

私とゲイザー、そして八代通室長とファントムで話を進める。

……一般人の鳴谷君はともかくグリペンとイーグルはこういった事は苦手みたいね。頭の上？マークが見えるし。

「なら、上空にいるのは多分護衛ね。結構な数があるからまともに相手をするのは骨が折れそうね」

「構築が完了するまで我々を寄せ付けないつもりかと」

「うわあ、少しは手を抜いてくれたっていいのに」

ゲイザーの言葉には同意なんだけどそれをしてくれるなら人間側
はこんな苦勞はしてないわね。

「構築が終わるのどうなるの?」

「いいか悪いかで言えば、まあ最悪だな」

そういつて八代通室長は画面を切り替え、東アジアの地図が映し出される。地図には等高線を思わせる複数のラインが重ねられてそのうちの一つ——沖縄・台湾・フィリピンを結ぶラインがハイライトされた。

……おそらくこれが日本の防衛ラインでしょうね。

「これが第一列島線。極東における対ザイの防衛ラインだ。ここを維持できているから太平洋側の航路と空路が今のところ守られている。少しばかり広いが『我らの海』マレ・ノストゥルムというやつだ。西からザイが圧迫してきても東からの支援で持ちこたえられる。陣地の縦深性が確保されてるわけだ。だがこのラインが破られると——」

大陸からのザイを表す矢印が本土を挟み込む。それ以上の説明はこの場にいる面子には不要だった。

「そして今回連中がFOBに定めた場所はここだ。台湾と沖縄の間、まさにこの第一列島線の直上だ。ここを継続的に押さえられると太平洋の防衛ラインが崩されると同じだ。どう控えめに見ても破滅的だな」

「更に付け加えるところを押さえられて困るのは日本だけじゃないわ。ザイが太平洋に出ると南洋エリアも大陸方面だけじゃなくて太平洋側も警戒しないといけなくなる。そうすると最悪ザイ相手に戦力を割いて展開しないといけなくなるわ」

「……それ、マズいよね。南洋エリアは戦力を大陸方面に向けてるか、アニメやAZCCが少なくとも撃退できてた。けどそれを分散すると……持たないよね?」

実際のところ、オーストラリアを本拠とする私達にとってはそっちの方が重大だ。一度や二度の両面侵攻で陥ちるとは思えないけど何度もされると流石に厳しい。E・F社の人間としてもここにFOBが構築されるのは阻止しないと。

「それってかなりマズくないですかっ!？」

「ああ。だから完成する前に潰す。こつちとしても部隊設立のために無茶をしたからな。戦果を挙げて実力を示す意味でもちようどいい。連中に感謝したいぐらいだ」

……八代通室長、それは問題発言だと思うのですが。ほら、ゲイザーと鳴谷君は思いっきり引いてるし。

「ならお父様。イーグル達が行って蹴散らせばいいんだよね?」

なんて突撃思考。たぶんイーグルからしたら敵、見つけた、潰す、つて感じなんでしょうね。

……そこがイーグルのいいところであり、悪いところでもあるんだけど。

「そう単純な問題ではありませんよ。私達は爆撃機ではありませんから精一杯爆装したところで地上に投射できる火力は知れています。島全体を無力化するほどの火力は積めません。加えて島の上空には多数の直掩機がいますから対空装備なしで向かうのは自殺行為です」

「ああ、だから基地攻撃そのものは自衛隊と米軍で行う」

「対地攻撃用の部隊を随伴させてわたし達は護衛にあたるんですか?」

確かに対地攻撃に特化した部隊が基地を攻撃し、私達はその護衛に就く方が基地を無力化出来る。

ただ――

「いくらアニメマを中心とした部隊でもそれは無理だろう。攻撃隊が多ければそれだけ護衛対象も多くなる」

そう、八代通室長の言う通り攻撃隊が多ければ多いほど護衛対象も増える。そうなると最悪、攻撃隊の人達には片道切符を覚悟してもらう事になるけど……自衛隊の性質上それは難しいでしょうね。

「そうなるとかえって動きがとりにくくなるからな。第七艦隊の残存艦によるトマホーク巡航ミサイルと石垣島の陸自の一二式誘導弾改。この二つを百発単位で島に撃ち込む飽和攻撃で基地を破壊する。一日標に平均五発、計五十トンの炸薬が九十秒以内に降り注いで目標を破壊する」

——ミサイルによるアウトレンジ攻撃。手遅れになる前に最大火力で敵を殲滅する、か。自衛隊としてはずいぶん思い切った手段に出たわね。これだけの火力ならおそらく島の原形は残らない。傭兵として何度か目にしてきたけどなりふり構わず敵を駆逐する時のヒトの獰猛さは他の獣の比じゃないわ。

「が、ここで一つ問題がある。目標周辺には強力なEPCMが確認されていて通常の誘導システムはあてにならない。よって中間誘導からドーターがナビゲーションを行い誘導する。誘導役は処理能力に余裕のあるファントムとゲイザーが担当、他のメンバーはその直掩だ。ただし、ゲイザー。米軍からの要請でお前には別任務も兼ねてもらう」

「別任務、ですか？」

別任務、ねえ……。米軍からの要請、となるとロクな案件じゃない気がするわね……。

「ゲイザーには第七艦隊残存艦の護衛をしてもらう。壊滅させられたのがよほど堪えたのか、米軍に協力してもらおう代わりにアニメ・ドーターの護衛をつけることを条件に出されてな。こちらとしてもあまり戦力は削れないからゲイザーを出さざるを得なかったんだ」

……そういう事。電子戦機ならジャミングで艦隊そのものを電子的に隠せるから単騎の派遣でも説得力を持たせられる。……私個人としてはあまりいい気はしないけど。

「お父様、一つよろしいでしょうか？」

「なんだ」

「話を聞く限り私は前線でミサイルを誘導するということですがザイへの対処はどうするのでしょうか。ゲイザーも管制にあたるとはいえ第七艦隊の護衛に就くのでしたら最終誘導を行うのは私でしょう。ですが空戦しながらそれだけのミサイルをさばくのは不可能です。警戒そのものも疎かになりますし」

……判りたくないけどファントムの言いたい事が読めてきた。外れてほしいけど困った事にこういう「当たってほしくない事」に限って当たるのよね……。

「はつきり言え。なにが言いたい」

「——お断りします。彼女達の護衛では命がいくつあっても足りないのです。」

——可憐な笑顔そう言い切ってくれたのだった。

「……ねえ、ミュベール。今回の作戦……上手いく？」

ブリーフィングが終わった私達はハンガーで出撃のための準備を進めている。

整備班の人達によって機体のチェックが進められる中、不安そうにゲイザーは訊いてきた。

「珍しいわね。そんな事を訊いてくるなんて」

「だってあの空気でもともな連携ができるとは思えないよ。……今だってあそこでイーグルがふくれてるし」

ゲイザーが視線を向けた先を見ると、ファントムの物言いが癪に障ったイーグルが文句を言いながら準備をしている。

……エンジン音が響くこの喧騒の中で聞こえてくるからかなりの剣幕ね。

「単純な戦力じゃなくて味方の状態からも作戦の成否が判るようになるとは成長したわね」

「茶化さないでよ……でも、そう言うことはミュベールもこの作戦は失敗すると思ってるの?」

「残念ながらね」

皆には悪いけど私は今回の作戦が上手くいかないと感じてる。——不安要素が多過ぎるからだ。

味方内の不和、それに加えて事前情報がアテにならない基地攻撃。……マズい。冷静に考えれば考える程マイナス要素しか浮かばない。

「ま、勝ち目がない作戦でもその中のベストは尽くさないとね」

「……ミューベル。それ、問題発言だと思っただけ……」

ゲイザーの言う通り、部隊長を任せられる立場にあるまじき発言だった。

……出撃準備の喧騒でゲイザー以外に聞こえていないから言ったのかもしれないが。

《——スタークス中尉、聞こえているか?》

《聞こえています……なんですか?》

《作戦海域を偵察中の偵察機から連絡だ。……連中が追加のコンテナを投下した。構築速度が上がり直掩機も増えだしたそうだ》

「《判りました》……ゲイザー、聞こえたわね? 出ましよう」

「わかったっ!」

準備を終えた私達は誘導員マインジャラーの指示に従い、バービー隊に先立ち離陸用意に入る。

《AQUILA01、02。クリアード・フォー・テイク・オフ》

《ラジャー。AQUILA01、クリアード・フォー・テイク・オフ》

スロットル・オン。大柄な機体が地を離れ、空へ昇っていく。そこに続いて離陸したAQUILA02が合流してロツテを組むとバービー隊の三機も追いついてきた。

……編隊エレメントを組んではいるけど、ぎこちないから不安が大きくなる一方なんだけど。

《アクイラ、ならびにバービー各機へ。予定通り室戸岬沖の海上で空中給油機とランデブー。その後、作戦空域へ向かってもらうがゲイザーは第七艦隊の護衛へ。作戦空域到着後はファントム以外の三機で敵航空戦力の撃破し、ファントムは島の上空でデータ・リンクの用意ができ次第陸自・米軍に攻撃指示だ。いいな》

《《ラジャー(了解)》》》

噛み合わないまま想いのまま、彼女達は戦いへ向かう。

……致命的となりかねない不和を抱えたまま。

Order 7 海鳥島制圧戦

——室戸岬沖。

ここでの空中給油を終えれば間もなく敵地と化しつつある海鳥島。
……ミューベルが作戦前にファントムと話せる機会はここしかなかった。

《ファントム、少しいいかしら?》

《……あなたも暗号化通信でなにかご用でしょうか?》

……貴女も?

《私以外に貴女に話しかけたのがいるのかしら?》

《ええ。彼から》

……ああ、なるほど。考えてみればこの中で一番不安を感じているのは鳴谷君だものね。八代通室長から聞くに彼が実戦を経験したのはまだ一度。そして二度目がブリーフィングの時点でアレなら不安を感じるのは無理ないわ。

《あなたも私に『きちんと協力してザイの基地を攻撃しよう』といったことを言うつもりですか?》

……鳴谷君が何を言ったか想像がついたわ。この様子だと逆に言い負かされたと思うけど。

《違うわ。私が言っておきたいのは指揮官への意見具申のようなものよ》

《……聞きましょう》

今回の作戦でファントムは私じゃなく自分が指揮を執る事を条件に首を縦に振った。だから意見具申、というカタチなら聞く気を持つてくれるみたいね。

《判っていると思うけどファントム、貴女はこの作戦の指揮官よ。作戦の成否はもとより部隊の命運そのものも貴女が持っているといってもいいわ》

《その通りですがなにか?》

《……作戦が失敗するとしても誰かが墜ちる、なんて事は避けてちようだい》

……余談だが、ミュベールはゲイザー以外に今回の作戦が失敗するという予想は話していない。話せば余計な不安要素が出かねないと判断したからである。

《『失敗するとしても』、ですか。傭兵にしてはずいぶんと弱気なんですね、あなたは》

《慎重、と言つてほしいわね。戦場で生き残るにはそれぐらいが丁度いいのよ》

挑発的なファントムの言葉だけど生憎とその手の事は言われ慣れている。そんな言葉で激昂する事はないのよね、私は。

《貴女が私達をどう思っているかなんて私には判らない。私は私であつて貴女じゃないからね。——ただ、ザイを倒す。その

一点において私達は同じところを見ているハズよ。違う?》

《……そうですね。それについては同意しましょう。それがなにか?》

《無駄な戦力消費は避るべきよ。貴女だつて使える『駒』はあるに越した事はないでしょ?》

味方を駒扱いするのは正直気は進まない。が、それで彼女が味方を切り捨てる可能性を少しでも減らせるなら安いもの。

彼女の行動原理が『生き残る』事なら多分乗つてくれるハズ——

《確かに一理ありますね。ではお聞きしますが私になにをしてほしいのですか?》

《(よし、乗つてくれたっ!) 指揮官は貴女だけど私にも指揮権を寄越してもらうわ。少なくとも私は貴女よりはイーグルとグリペンの事を知っているし、必要なら撤退命令だつて出すわ。現状戦力での遂行が不可能なら『次』に繋げるために出来るだけ戦力を温存するのは必要でしょう?》

通信先のファントムは思案しているのか押し黙る。けどそれもわずかなもので、ファントムは即座に答えを出してきた。

《いいでしょう。あなたの考えに乗ってあげます。私としても扱にくい味方の指揮をするのは気が進みませんから》

フロントムの答えは私が望んだものだった。これで取り敢えず私の判断でも作戦を行える。

(これで一つ、懸念が片付いたわね。)

《AQUILA02から01、ならびにBARBIE各機へ。第七艦隊の護衛に向かいます。ご武運を》

そうこうしている内にゲイザーが編隊から離れるポイントに到着し、第七艦隊へ向かって行く。

——戦いの時はすぐそこまで近づいていた。

ゲイザーが編隊から離れ、しばらくすると攻撃目標の海鳥島が視界に入ってきた。

かつては海鳥ぐらいしか訪れることのなかった島だけど今は異質な煌めきを持つザイの基地へと変貌しつつあった。

——EPCMレベル上昇、ガスト28、29、30。EPCM起動。

機体のシステム音声とともにEPCMに対するカウンター・システムが起動し、同時にFCSのロックを解除する。

《AQUILA01、エンジンゲージ。FOX1!》

宣言とともにMR中距離空対空ミサイル—AAMであるK—77Mを撃ち放つ。35Gの機動が可能なK—77Mは躲そうとしたザイに容赦なく喰らいつき、空に残骸が尾を引く火花を咲かせる。

それに触発されたのか、イーグルがザイへ呐喊していく。

《負つけないよーっ!》

呐喊したイーグルはそのまま手近にいたザイをすれ違いざまに機関砲で撃墜する。……やるのはいいけど私達の仕事がフロントムの護衛なの忘れてないでしょうね、あの突撃娘。

《AQUILA01からBARBIE01へ。イーグルの後ろに

ついでフォローに回りなさい。すり抜けたのは私が対処するから」
《《いいの？》》

《《ええ。護衛任務より純粋な制空戦の方がやりやすいでしょ？
貴女がイーグルのフォローに入るように私がフォローするわ》》

《《わかった》》

そう言つてグリペンも前に出て、イーグルの要撃をすり抜けようとしたザイを撃墜する。

するとファントムから通信が入る。

《《グリペンも前に行かせてあなた一人で対処できるのですか？》》

《《ええ、下手に三機が固まって貴女に近い位置にしていると不意をついて貴女に仕掛けるのが出てくるわ。それなら始めから防衛ラインを三層にして各ラインで迎撃する方がいいわ。それに私の手持ちもイーグルの位置まで届くから私からもフォローは出来るわ》》

——ミュベールの算段はこうだ。

突撃思考のイーグルと、慧が搭乗して機動に制限のあるグリペンは直掩機として動くのに正直難がある。だから二機には先行してもらい、通常の制空戦闘に近い感覚で戦わせる。ファントムの直掩と両者へのフォローをミュベールが行った方がいいと判断したのだ。

ただ懸念もある。今はまだ向こうも増援が上がってないけどいざ上がってきた時にそれがどれほどの数なのか。そこが問題だった。

《《——っ！ AQUILA！ 二機そっちに抜けた！》》

イーグル・グリペンによる防衛ラインを抜けて二機ザイがこちらに向かつてくる。

《《大丈夫よ。だからこっちにくるのは追わずに迎撃に集中して》》

——さて、こっちもさっさと済ませるとしましょうか。

正面から向かつて来るザイの内、片方に狙いを定めて機体を加速させる。

《《FOX2》》

短距離空対空ミサイル

こちらのAAMの射程に入った瞬間、ミサイルを放つ。狙われたザイは回避機動を取るも放ったAAMはザイへの対策がされたも

の。HiMATとEPCMに惑わされる事無く空を駆け、先ほど同様に狙ったザイを花へと変える。

ザイを撃墜してもミュベールは速度を緩めず、残る一機を見定める。残る一機はミュベールの頭上から仕掛けようとするも、容易くやられるミュベールではない。見失っていたならともかく、目を離さなかつた相手が頭上を取つても脅威を感じるどころかむしろ『狩場』にやってきた獲物に等しい。

(もらったっ！)

エンジン出力は落とさず速度を維持し、エアブレーキを稼働させて速度の低下を最小限に抑えたコブラで急激なピッチアップというS-32の機体特性とミュベールだから出来る機動で先に動いていたザイの後の先を取る。

《FOX3ッ!》

S-32から放たれた機銃弾は重力に反して空を昇り、ザイに無数の穴を穿つ。やられたザイも最後のあがきで機銃弾を放つも、ミュベールは機体を更にピッチアップさせながら機体を加速させてザイが発砲するよりも早く射線から逃れる。

《まるでサーカスですね。そんな機動で最後まで保もつんですか？

》

二機を片付け、ファントムの右翼側に並ぶと呆れたような口調で言ってくるファントムだが無理もない。真つ当な機体とパイロットなら今のような無茶な機動をすればどちらかに異常が出るだろう。

《問題ないわ。この程度の機動マニユークならS-32この子の機動試験で何度か試して慣れてるから》

———が、AZCCへの改修がされたS-32も、そしてミュベールもまともな機体とパイロットではない。両者ともに10Gを超える機動に耐える機体とパイロット。DACTで見せたスピインターンに比べればミュベールにとってそうキツイものではない。(イーグルとグリペンは……大丈夫そうね)

レーダーから見る限り両者ともに順調そうに見えるけど……なに
か引つ掛かる。

(ザイにとってここは太平洋に出るために必要な要衝のハズ。それなのに増援の直掩機を上げてこないなんて妙ね)

——その時レーダー上に、海鳥島からイーグルとグリペンに向け飛来する「なにか」が映った。

《——ツ！ イーグル、グリペンツ!! 島からミサイル！逃げなさいツ!!》

——瞬間、空が白く染まった。

飛来したミサイルは通常のモノとは異なり、「点」の爆発ではなくイーグルとグリペンの周りにいたザイをも巻き込む「面」の爆発だった。

《な、なにっ!? 今のっ!!》
《——ツ!》

イーグルからの通信には無数の警告音が混じり、それが完全に避けきれなかった事を示していた。

——離れた位置から見ていたから判る。飛来したミサイルは敵味方関係なく、「空域」そのものを攻撃した。……あんなモノは私も見た事がない。

《イーグル、グリペンっ! 無事っ!?!》
《うー、いったー》

《BARBIE01からAQUILAO1へ。私も慧も無事》
接近すると二機とも主翼から煙が尾を引いている。ノーダメージ、というわけにはいかなかったけど無事だった事にほっとする。

が、内心では自身の失敗に歯噛みしていた。
(——しくじった)

両者の気性と状態を考えてイーグルとグリペンを前に出したミュベールだが、それが完全に裏目に出てしまいイーグルとグリペンだけが狙われる結果となったからだ。

《ミュベールさん。グリペンは今のを対空型のクラスター型って言ってしまったけどなんとかできないんですか?》

《方法がないわけじゃないけど、今回私達は対空用のミサイルしか積んでない。やるとなると発射母機に接近する必要が《上にご注意を》——っ!》

割り込んできたファントムの声に促されて上を見ると太陽を背に黒い点が近付いてくるのが見えた。

——島の直掩だったザイがさっきの爆発に紛れてこちらに忍び寄ってきていたのだ。

《各機、ブレイクツ!》

降下してきたザイは奇襲のためミサイルではなく機銃で仕掛けてきたため、際どくはあったが三機とも回避が間に合った。

《攻撃してきたのになんでレーダーアラートがなかったんだっ!》

《敵が電波封止していれば警告は出ませんよ。レーダーは真上には届きませんし、太陽を背にされたら目視すら困難になる。死角から攻めるのは空戦の王道ですよ》

余裕に満ちたファントムの指摘。それと同時に再びこちらの上を押さえようとするザイが視界に入る。

あのコース——狙いはイーグルとグリペンツ!?

《FOX2!》

《あー、もうっ!》

私を上を押さえようとするザイを撃つと同時に、正面から仕掛けてくるザイにイーグルがミサイルを放って空に都合五つの焰の花が咲く。

(ファントムは……?)

ファントムの位置はさっきまで私達がいた位置より遥かに後方——

戦域からの離脱がすぐに出来る位置へ退がっていた。

《ちよ、何してんのっ!? 早くこっちに来てっば! こっちのミサイルがなくなっちゃっ!》

《身を守るのに精一杯に見えますが? そんな状態で私の護衛ができるんですか?》

《できるかどうかじゃなくてやってるんだから! そっちも作戦

通りに——《イーグルッ！ 高度を上げなさいっ!!》

ファントムに意識が向いたイーグルの隙を突くようにザイからミサイルが放たれる。

(間に合えっ！)

機体を加速させてミサイルの射線の割り込み、チャフとフレアをリリース。

幸いミサイルはそれに喰いついてイーグルに当たる事無く明後日の方向に逸れる。

《FOX3》

そしてそのミサイルを撃ってくれたザイに突撃したグリペンが蜂の巣へ変える。

——が、視界に入ったものを見て私は背筋が凍るのを感じた。

(……マズい)

——ミュベール達の視界に移るのは、昼だと言うのに夜空を思わせるほどの星の海^{シラ}。レーダーも敵性機^{ホスタイル}の反応で赤く染まり、島の上空は水晶の煌きで埋め尽くされていた。

(……これは今の戦力。いいえ、万全の状態でも独飛だけでやるのは無理だわ。これだけの数を相手取るとなるとゲイザーに本来の戦術で出てもらわないとダメね)

——故に、ミュベールは決断した。

《AQUILAO1から全機へ。現場指揮官として命じるわ——

——全機撤退。この戦域から離脱しなさい》

《冗談でしょっ!? ここまでできたのにつ!!》

《ミュベールの判断は正しい。残弾を撃ち尽くしたら逃げられなくなつて手遅れになる》

《うーっ!!》

イーグルはごねたけどグリペンも同じ結論に達したようで二機とも反転し、離脱コースに入る。

《殿は私がするわ。撤退コース上の敵機を墜とすからそこから最大戦速で離れなさい》

(私の采配ミスでダメージを負ったんだからその責任は取らないと)

檻のようにこちらを包囲しようとするザイの比較的層の薄い箇所
に狙いを絞り、残りのX M A Aを放って脱出口を作る。

そこからイーグル・グリペンが包囲網から抜けたのを確認し、ミュー
ベールも離脱する。

——海鳥島制圧作戦は、ミューベールが予見したように失敗
に終わったのだった。

Order 8 星の照らす道

制圧作戦に失敗した私達は小松基地ではなくここ、沖縄の那覇基地へ帰還していた。

那覇基地は空自の拠点としては一番海鳥島に近い。再出撃の事を考えると距離のある小松よりも那覇基地で補給や機体の整備を行うのは自然だった。

(沖縄に来るのは半年ぶりね。前来たのは米軍の嘉手納基地だったけど)

前回沖縄に来た時は米軍の航空隊に対ザイの戦技指導という事で来たけど……ザイ自体が来襲してイーグルと迎撃に出てそれどころかじゃなくなっただけ。

「なんでお父様の言う通りにしないのっ!?!」

「私は作戦活動の指揮権を頂いていましたので、状況で作戦を変更するのは当然のことです。それで怒鳴られるのはお門違いです」

「でも、ミッション失敗したじゃん!」

「それはあなた達の実力不足だっただけの話です。きちんと制空権を取って頂ければ私も仕事しましたよ? まあ、上からの奇襲に気付いていなかったので無理だったのでしょうか」

作戦が失敗したのは自分ではなく護衛の私達のせい、ね。

……言ってくれるわね。

「じゃあどうするのっ! このままじゃいつまでたってもあの基地壊せないじゃん!」

「戦力が整わない以上無理をするのは自殺行為です。最悪あの海域を放棄することになるでしょうが——」

「そこまでよ、二人とも。そもそも今回の失敗の責任は指示をした私にあるわ」

これ以上二人を放っておくと收拾がつかなくなりそうだから止めに入る。……まあ、イーグルの立ち位置に私が入るだけなんだけど。

「イーグル。何も言わず先に退がったファントムに言いたい事があるのは判るわ。ただ、同じ立場なら私も撤退を選んでいたわ。……」

あれだけの数がいる以上、独飛の戦力だけじゃ対処しきれないもの」「むー、ミュベールはファントムの味方をするの?」

「同じ判断をする、ってだけよ。別に味方をするわけじゃないわ」

そもそも私は失敗する可能性の方が高いと見てたからある意味ではファントムよりもタチが悪い。

ただし――

「ファントム、貴女もよ。しくじった私が言える事じゃないけど貴女も作戦の指揮官だった。ロクに指揮を執らずに味方をなじるのはどうかと思うわ」

――言うべき事は言わせてもらおうけど。

「本当に言えることではないですね。采配を間違えた方に私のことをどうこう言う権利があるとは思えません」

「そうね。ただ指揮権をもらっておきながら何もしなかった誰かさんも大して変わらないと思うけど?」

ミュベールとファントムの視線は互いを見据え、逸らさない。表情はお互い涼しげに笑っているがそれはそう見えるだけ。二人の間に流れる空気を察したのか、イーグルは既に離れて慧とグリペンも遠巻きに見ている。

――一触即発。この様子を見ていた慧は後にこう語る。

『あんな怖い笑顔は二度と見たくない』と。

「面白い事をおっしゃいますね。この私が『間違い』をしたあなたと同じだと?」

「結果的には変わらないでしょう? 私も貴女も今回の作戦に限って言えば同じ『戦犯』よ」

その一言が決定的となったのか、ファントムからは表情が消え、瞳は金属のような無機質さへ変わっていた。

「……いいでしょう。そもそもあなたとはD A C Tでの決着もついていませんでした。いい機会ですから上下関係をはっきりさせましょうか」

「そうね。指揮官相当が二人いて方針がバラバラじゃ纏まるものも纏まらないもの。ここらで白黒はつきりさせましょうか」

止める間もなく勝負をする事を決める二人。その二人のやり取りを戻ってきたゲイザーは『仕方ないなあ』と言いたげに見るだけで止めに入る事はしなかった。

「———そういうわけでフロントムと一戦交える事になりました」

事の顛末を通信で八代通室長に伝えるとやはりというか頭を抱えていた。

「が、仕方ないか、と言って私がフロントムと戦う事を了承してくれました。」

「フアントムは言葉で説得しようとしても聞かんだろう。実力勝負、というのは悪くない案だ。肝心の方法はどうするんだ？」

「那覇基地のシユミレータを貸してもらえました。再出撃にの為に機体は整備しないといけませんし」

「それについてだがな。こっちの判断で船戸とE・F社の整備班を向かわせた。もう出発したからそんなにかからないだろう」

元々那覇基地にはイーグルがいたからアニマに関する設備は一通り揃ってる。加えて彼らも来てくれるなら機体の方は万全に仕上げるわね。

「それで、勝ち目はあるのか？」

「ええ、正面から堂々と。……八代通室長にはその間やっていただきたい事が」

「正面からやって勝てる理由も聞きたいところだが……俺にやってほしいことってのはなんだ」

「海鳥島に向ける戦力の事です。あれだけのザイに加えて地对空の新型もいますから私達だけじゃ手が足りません」

「それについてだが地对空型のやつにはこっちにアテがある。問題は

島の上空にいる連中だが」

あの新型を潰せるアテがあるならこっちの案の成功率も上がる。アレがいると迂闊に飛び込めないし。

「それについてですが……空自の方で出来るだけ部隊を集めてもらえますか？ 出来れば中・長距離空対空ミサイルをフル装備した部隊をお願いしたいのですが」

「……どんな狙いか説明してくれ。理由もなしによその基地から応援を引っ張るのは無理だ」

「ゲイザーに本来の戦術で動いてもらいます。あの娘本来の戦術は――」

八代通室長に説明すると先ほどとは別の意味で頭を抱えていた。

……ま、聞いたらそうなるわよね。ゲイザーの運用思想は既存のアニマとだいぶ違うし。

「……確かにそれなら数さえ揃えられれば何とかかなるな。いいだろう、上も今回の一件は重く見始めたことだし考えなしに数を投入するよりはよっぽどマシだ」

制空の目処はこれでついた。

あとは――

「なら、あとはファントムを何とかするだけですね。いつそ調教しましょうか？」

「……お前が言うのと冗談に聞こえんな。多少手荒に躡ける程度なら許す。……あのじゃじゃ馬娘をまっとうに更生させてくれ」

「ええ、了解しました」

そう言うミューベルのどこかファントムに似た、しかし決定的に異なる笑みを浮かべていた。

「それでフナさんとわたしがシユミレータの準備を？」

「ええ、再出撃は明朝〇六二〇。休息を取る事を考えるとあまり時間がないからね」

八代通室長との連絡の後、ゲイザーと那覇基地に到着した船戸さんにシユミレータの準備をお願いしていた。船戸さんは元々小松でグリペンの整備やシユミレータの調整をしていたためこういった作業はお手の物。今回ファントムと勝負するにあたり、シユミレータに手を加えて対戦できるようにする必要があったのだ。

それにファントムと勝負をするのは私だけじゃない。あの後鳴谷君もグリペンと一緒にファントムに挑戦状を叩きつけたみたいで彼ら用の調整もあったからだ。

「よし、こんなもんか。突貫作業で見かけは不格好だが問題なく動くぞ。ゲイザー、機体データの方はどうだ？」

「バッチリです。クルビットだろうが片肺のスピントーンだろうが再現できますよっ！」

当然の事ながら那覇基地……というよりE・F社以外にS-32のデータはない（開発元のロシアも中途半端な飛行データしかない）から機体データをインストールする必要があった。

そしてもう一つ、ゲイザーにはファントムのクラッキングに対抗するために協力してもらわないといけなかった。

「それにしてもミュベール。ホントにこれでいいの？ 確かにこのやり方ならファントムがクラックしてもなんとかなると思うけど確実に勝てる、ってわけじゃないよ？」

「判ってるわ。けど今回はただ勝つだけじゃダメなのよ」

今回の勝負は勝ち負け以上にファントムの考えを変えさせる必要がある。だからただ勝てばいいってものじゃない。その為に多少のリスクを負う事になるけど実際のところ、私はそのリスクを問題だとは思っていない。

なぜなら――

「リスクは承知の上よ。それに、私のやり口を一番判ってるのは貴女よ。――他に誰もいないわ」

「ミュベール……。わかった、任せて。絶対に外さないから」

これで私達の準備は整った。あとはファントムの出方だけ……
こればかりは出たとこ勝負になりそうね。

——そうして、いよいよその時がやってきた。

シユミレーターが設置された訓練室には私とゲイザーを始めとした
独飛のメンバーが揃い踏みだ。

「はい、それじゃ今回の勝負について改めて確認するよー」

マイクを持ってノリノリで司会をするゲイザー。その姿にファン
トムだけじゃなく慧とグリペンも呆気に取られている。

(ちなみにミュベールはゲイザーのそういうところには慣れているの
で突っ込まない)

「まずミュベールとファントムはこの勝負の結果で隊の指揮官を決め
る。……二人とも異存はないね？」

「ないわ」

「ええ、ありません」

「次に慧くんとグリペンのペアとファントムの勝負。慧くんとグリペ
ンのペアが勝ったら次の作戦に参加する。ファントムが勝ったら慧
くんがファントムのパートナーになる。間違いはない？」

「ああ、それでいい」

「間違いありませんよ」

お互いの勝負の結果で賭けるものを確認する。

「で、肝心のルールだけどお互いに実機の稼働データをインストール
した機体データを用いてのD A C T。設定は……空戦エリアは那覇
基地から150 kmの海上。天候は曇りで雲量が7/8。風は11
0度から5ノット。僚機はお互いなしの一対一。オーケー？」

全員了承の意を返し、私とファントムが先にシユミレーターに入る。
システムを立ち上げ、異常がないかを確認する。

(全システム異常なし。機体データのフィードバックも問題なさそうね)

《少しよろしいですか？ 戦闘前に確認しておきたいことが》
なにかしら？ 今更確認する事なんてないと思うけど。

《私のシユミレータに仕込んであった遅延プログラム。無力化はしましたがアレはあなたの仕業ですか？》

《……ちよつと、それどういう事？》

遅延プログラムですって……？ 私はそんなもの仕込んでもないしゲイザーも仕込むはずがない。いいえ、仕込む必要がない。

《……その様子だとあなたではないようですね、失礼しました。ああ、一応言っておきますと私からはあなたの機材への細工はしていません。まあ、勝負が始まったあとまでは保証しかねますが》

それ、始まつたらクラッキングをしてくる、って事よね。

それにしてもファントム側の機材への細工か……。ゲイザーが断でしかも報告なしですとは思えないから船戸さん……もつと言えば鳴谷君達の仕業かしら？ 『ファントムとは一対一^{サツ}でやる』って言っておいたのに余計な事をしてくれたわね。

《……細工をした人と指示した人に心当たりはあるから後で私の方から言っておくわ》

《構いませんよ、あの程度の細工なら簡単に見つけられましたから。では御機嫌よう》

ファントムとの通信が切れ、ファントムがこちらとは反対方向に旋回して離れていく。お互いに速度と高度を揃え、その後のヘッドオンですれ違つてからがスタートになる。

5
意識を切り替える。

4
息を吐きだし呼吸を整える。

3
機体を操る四肢に力を入れる。

2

されど思考はクールに。

1

接近してくるエメラルドグリーン¹の輝きを捉える。

互いの機体が交差し、ミュベールのS-32は一気に機体を左旋回させ、フロントムのRF-4EJは雲の中へ飛び込んでいく。ミュベールもその跡を追って雲に飛び込む。

——雲によってレーダーが乱れ、それを利用しフロントムの機影がレーダーから見えなくなる。

(……くるわね)

雲から抜けレーダーを確認すると10時方向に反応がある。

——がミュベールはその反応を信じなかった。

(仕掛けてくるなら4時方向——！)

自身の読みを信じ、反応とは真逆の方向へ機体を向ける。

(いたっ！)

そしてそこには読み通り彼女がいた。

——ミュベールの読みにはきちんとした裏付けがあった。空戦において相手の後方は優位な位置。だからこそフロントムなら確実にやる^{キル}する為、こっちがフェイクにかかったらそこから後方に来ると踏んでいた。

《FOX2!》

ミュベールの方がロックするのは早く、先手を打つも射程距離ギリギリだったためフロントムはミサイルを難なく躲して再び雲の中に潜る。躲されると思っていたとはいえ、その通りになった事にミュベールは思わず舌打ちする。

レーダー上にフロントムの反応は3時方向にあるが逆方向へ目を抜けるとそこにいる。機体を旋回させて機首を向けるともうそこにフロントムの姿はなかった。

(消えたっ!?)

そしてその動揺を揺さぶるようにミサイルアラートが響く。チャフトフレアを撒きながらバレルロールをしてミサイルを躲すも今の

不自然さに疑問を抱いていた。

(今のはレーダーの方が正しかった？ いえ、違う。さっきのミサイルは真後ろから来た。……レーダーだけじゃなくディスプレイもクラックされたっ!?)

——それはシュミレータだからこそされた方法だった。実機ならレーダーがやられてもまだ有視界で対応出来た。が、ファントムはシュミレータにクラッキングしてレーダーだけじゃなくディスプレイの偽の表示を出していた。

(ならやり方を変える！)

ミュベールの機動が変わる。相手を墜とす為の動きから相手からの攻撃を躲す事を重視した動きへと。

(確かに一対一で相手の位置が掴めないのは脅威だけど……これなら！)

ミュベールの採ったやり方。それは一対一の考えは捨てて一対多数……それもステルス部隊を相手としたもの。相手の位置が判らないならどこにいてもおかしくない、という想定だ。

実際、E・F社でもミュベールレベルのパイロットは社内やオーストラリア空軍とのD A C Tで一体多数のプログラムを組まれる事はそれなりにある。その経験があるからミュベールは攻撃よりも回避に重点を置いて動いていた。

(とはいってもこのままじゃやられるのは目に見えてる。……どこで仕掛けるか、それが勝負の分かれ目ね)

以前のD A C T同様複雑な尾を引くドッグファイト。しかし前回と異なり、互角ではなくミュベールが一方的に追い立てられている。

鳴っては止むロックオンとミサイルのアラート。そんな中でもミュベールは焦りに囚われず平静を保とうとする。焦ってミスをしたら本命が来るのは目に見えてるからだ。

……勿論、この方法では撃墜される可能性は低くなるが同時に勝てないとミュベールは承知している。ファントムに勝つ為の策はあるが何も変化がないという事はまだその時じゃないからだ。

(考えなさい。どんなに反応があっても実際に仕掛けるのは本物だ

け。ならどうやってその本物の位置を特定する!?)

ミューベルが思考を巡らす間もアラートは止まらない。スロットルを開けてインメルマンターンで後方から喰らいつかんとするミサイルを避けようとし——砂粒程の閃きを得てそのままフルスロットルでパワーダイブ。高度と引き換えに速度を秒単位で上げていく。

(急降下している相手には後方から仕掛けるしかないからファントムの位置をある程度限定出来る。後は仕掛けるタイミング次第——)

——っ!)

ディスプレイのミラー越しに映るファントムのRF-4EJ。これがフェイクならこっちの手札を全て見せかねない。そうなれば勝つ為の目はほぼ消える。

だが戦闘機乗りとしての直感か、それとも裏付けされた経験か。——おそらく両者だろうがミューベルには今後ろにいるファントムがフェイクでない確信があつた。

S-32とRF-4EJの出力差。その差が現れ二機と距離は徐々に離れていく。ロックオンアラートが鳴り始め、それを黙らせるためにチャフとフレアをリリース。

それによつてファントムのサークルが一時的に乱れる。

《そんな一時凌ぎが通じるとでも? これでは——っ!?!》
終わりです、と言おうとしたファントムの言葉は続かない。——

——“異変”を感じたからだ。

いきなり指先の感覚が断絶されたかのような感覚。ミューベルのシミュレータに行っていたクラッキング。行っていた接続全てが切断されたからだ。

(よしっ! 最高のタイミングっ!!)

そしてミューベルは最高のタイミングでチャンスが来た事に獰猛な笑みを浮かべる。

ディスプレイだけでなくレーダーにもファントムの姿がはつきりと映る。

瞬間、そのタイミングを逃さず機体をクルビットしながらローリン

グ。180度の位置でクルビットを止め、天地の戻った機体を加速させる。

『スレイマニ・クラーケンスレイマニ・クラーケン』

通称『クラーケン』と呼ばれるミロシユ・スレイマニ大尉が編み出したクルビットの派生となる機動。通常のクルビットと異なる点は機体を一回転させるのではなく180度で止める事。そして機体をローリングさせながら行う点にある。

通常のクルビットを180度の位置で止めると機体が背面状態になるので武装の使用に一部制限がでる上、相手が上昇した場合に即応しにくい。スレイマニ・クラーケンはそれを克服した機動で反転した時点で機体は水平に近くなっているため、反転後の機動と攻撃の自由度が高い。

が、この機動は前提として機体がクルビットが行える能力を有している事。そしてクルビットしながらのローリングにパイロットが耐えられなければならない。

『ツ！』

スラストベクター
推力偏向ノズルが装備された機体特有の変態機動。

クラッキングの切断。そして目の前で見せられた変態機動を前にしてもなお、ファントムは最適解を誤らない。

《ですが私にその機動は通じません。——FOX2》

ファントムはこれまでのミューールの動きからクルビットやコブラに属する機動を得意としていると読んでいた。これらの機動は行えば速度が大きく低下するし、それはクラーケンとて例外ではない。現にクラーケンをしたミューールは速度がかなり落ち、ファントムはそこを狙い必勝を期して残りのミサイルを全て発射。

——が、必中を確認していたミサイルは全て命中する直前に大きく逸れ、当たる事はなかった。

《なっ!?!》

《生憎ね、ファントム。私が得意としてるコブラやクルビット系の弱点をそのままにしていると？ FOX3ツ！》

今度こそ動揺したファントムの隙を突き、加速して距離を詰める

ミュベールはすれ違いざまに機銃の引き金を引く。

電子の世界でS-32とRF-4EJが交差し、片方は天へ昇り、もう片方は地へ墜ちる。

《スフラッシュ
撃墜》

——一瞬の交差。放たれた機銃弾はファントムの機体を正面から打ち抜き、八代通にした宣言通りミュベールは正面から堂々とファントムを打ち破った。

《……やられました。クルビットで反転した瞬間ECMでこちらのミサイルとFCSを妨害し、その間に私をキルしたんですね？》

《ご名答。私のS-32にはECMが装備されてる。貴女も気付いている通り、クルビット系の機動は行えば速度を大きく落とす。——

——なら、その為の護りをするのは当然でしょう？》

それは通常の機体に比べ電子能力を強化しているAZCCだからこそ可能になった防御法。通常の戦闘機だったらファントムの撃つたミサイルは間違いなく全弾命中していた。

《しかしわかりません。どうやってあなたは私のクラッキングから逃れたのですか？》

ファントムの疑問はもつともだ。現にミュベールは回避機動に手一杯でそんな余裕はなかったし、そもそもミュベールにそんな技術はない。

ではなぜファントムのクラッキングを無力化出来たか。それは——

《シユミレータのシステムは今回全てゲイザーが動かしていた。だから貴女が細工していないままさらなシステムに切り替えたのよ》

《ありえませんが。シユミレータのシステムには何度もテストシグナルを流して異常がないことを——》

《それがそもそも間違いよ。ゲイザーは細工をしてたわけじゃない。システムそのものを動かしていたのよ》

例えるなら水の流れのどこかに異常があるんじゃないかと水流そのものが異常。今回の勝負でシユミレータの全システムはゲイザーが動

かしていた。だからいくらテストシグナルを流しても異常なんて見
つからない。

——システム内での異常は何一つなかったのだから。

《まさか……彼女はシュミレータを起動している間ずっと、私が干
渉していないシステムを維持し続けていたのですか?!》

《ご名答。それも切り替えても誤差がないようにフィードバック
しながらね》

ゲイザーの演算能力は今まで比べる相手が私の S^A—3^Z2^Cしか
なかったからどれほどなのかピンとこなかったけど……アニメにとっ
てもゲイザーの演算能力は突出してるみたいね。

《しかしあなたからもゲイザーからも合図のようなものはなにも

——

《当然よ。私達は合図なんて送ってないもの》

《……は?》

《だから合図なんてしてないのよ。私がゲイザーに言っていたの
は『クラークを仕掛けられる位置関係になったらシステムを切り替
えて』だけだったんだもの。——私はゲイザーならタイミン

グを間違えないと飛んでいた。それだけの話よ》

互いに対する強い信頼。それはファントムにとってあまりに予想
外のものだった。

勝敗を分けるタイミングを自分以外の相手に託す。それはこれま
で全てを一人で背負ってきたファントムには衝撃的だった。

《では、パワーダイブで急降下したのも》

《ええ、ああなれば貴女は後ろから仕掛けるしかないでしょう?
位置が掴めないなら掴める位置に誘導する。相手が見えないなら炙
り出す、てやつよ》

半分賭けだったけどね、と言うミュベールだがその言葉はファント
ムの耳には入ってこない。ファントムにとってミュベールの言う事
は自身の価値観とはあまりに異なっていたからだ。

《……もう一つ、教えてください。……なぜ、始めからシステムを
切り替えなかったのですか? あなたの技量ならそんなリスクを負

わずとも勝てたでしょう。なのになぜ……?」

《一つは早い段階で仕掛けて貴女が対応するのを防ぐ為だけど……こっちはオマケ。一番の理由は貴女に信頼する事を教えたかったから》

《私に?》

《ええ。勉強になったでしょう?》

不思議とファントムには楽しそうな笑顔で言うミュベールの顔が浮かぶ。それはこれまでにない事だった。

《……私の完敗です。戦術で上をいかれ、私にその事を教えるために不利な条件で戦い、勝利した。ええ、これ以上ないぐらいの負けですとも》

ファントムにとってこの結果は勿論悔しさもある。だがそれ以上に得たものがあり、だからこそその敗北宣言だった。

《……言葉の割には嬉しそうね、貴女》

《そうですね。久しぶりに上を目指す楽しみを思い出しましたから》

そう言うファントムから変化を感じたミュベールは自分達のやり方が間違っただけでなかった事にホッとすする。

《私はこのまま残ります。まだ彼ら二人との勝負があるので》

《そうだったわね。それじゃあファントム、後で付き合ってくれない? 貴女とやりたい事があるのよ》

《なんででしょうか?》

《私達の勝負に余計な事をしてくれた子への『お仕置き』よ》

《……それは楽しそうですね。ええ、ご一緒いたします》

そうファントムと一緒に仕置きする事を決めたミュベールをゲイザーが迎える。

「お疲れ様、ミュベール。上手くいったみたいで安心したよ」

「ええ、貴女もね。最高のタイミングだったわ」

ハイタッチしながらお互いを労うミュベールとゲイザー。

そうして次にファントムと勝負する慧とグリペンの頭をこずいてバトンタッチする。

「二人とも頑張って意地を見せてみなさい？」

そう言うのとやる気十分でシユミレータに入る二人。肩の荷が下り、幾分気が楽になったミュベールはゲイザーと一緒に三人の勝負を守るのだった。

——結果から言えば、勝ったのはファントムだった。

鳴谷君とグリペンがファントムとやり合う上で鳴谷君が機体の操縦、グリペンがリーダーと火器管制と役割を分担して挑んだ。その発想自体はよく、いいところまでいったのだが打つ手を誤った。

ファントムの速度が乗ったところでコブラで急減速。ファントムをオーバーシュートさせようとするも失敗し逆に撃墜された。

ファントム曰く『狙いは悪くありませんでしたがあなたとの勝負で見慣れましたから』という事だ。……それに関しては少し二人に悪い気がしないでもない。

(特にグリペンは負けたら鳴谷君とパートナーを解消する事をファントムに言われたせいとか、見ていて心配になるぐらい落ち込んでいた)「さて……私が勝ったので慧さんには私とパートナーになってもらう約束でしたかね？」

ファントムの言葉にグリペンがビクつと震え、言われた慧も拳を震わせながら俯いていた。

「……しかし気が変わりました。次の作戦に私は参加しますし、あなたたちもそのまま結構です」

ファントムの言葉に顔を上げる二人。さつきまでのファントムなら有り得ない言葉に目を白黒させている。

「ただし、次の作戦では慧さん。あなたが機体を操縦してください」

え、つと驚く鳴谷君だけど私もそれには賛成だ。そもそも彼が乗っている時点でH i M A Tは出来ない。それなら今回みたいに役割を

分担した方が機動性以外はアニメ本来の能力スベックを發揮出来る。

「いい案だと思うわ」

「わたしも。……あ、逆はしちやダメだよ？　慧くんがリーダーや火器管制をしてもメリツトはないから」

とんとん拍子に進める三人にフアントムの言葉から回復した鳴谷君が異を唱える。

「ちよ、ちよつと待つてくれっ！　俺が操縦したらザイのHiMATにはどう対抗するんだっ!？」

「え、される前に殺やればいいだけじゃない？」

「は?」

ゲイザーのドストレートな言葉に苦笑する。私だけじゃなくフアントムも同じような反応だった。

「ゲイザーの言うのももつともですが、そもそもグリペンには操縦とリーダー・火器管制を両立する余裕がはつきり言っておりません。それはそこで目を逸らしている彼女が一番分かっていると思います」

そう言われたグリペンは気まずそうに目を逸らしている。やつぱり自覚はあったんでしょね。

「そもそも空戦において重要なのは高度と速度・運動エネルギーを最小限の動きで転換し、最適な位置に遷移することです。無暗やたらとマニューバを行うのはただのサーカスです。……彼女のようにそれを『強さ』に結び付けられるなら別ですが」

「褒められてるのか貶おとされてるのか微妙な評価ね、ソレ」

人の飛び方を例えるのにサーカスはないでしょう、サーカスは。

「安心して下さい。私だけでなくミュベールさんもサポートしてくれると思いますから」

「……わかった。やつてみる」

少し考えて鳴谷君は納得してくれた。

ならあとは――

「さて、鳴谷君？　少し私達とOHANASHIをしましょうか」

――先にやる事をやつておかないとね。

「え？ な、なんでですかっ!？」

「シユミレータに余計な事をしてくれたでしょう?」

「そ、それは……」

そもそも私は「対一」でやるって言うておいたのに細工をしてくださいだからペナルティの一つや二つは受けてもらわないと。

「あー。頑張つてね、慧くん」

「なに言ってるのよゲイザー。貴女も一緒に決まってるでしょへ?」

「システムを動かしてた貴女ならアレに気付いてたでしょ? それを黙ってたんだから貴女も一緒に決まってるじゃない」

「……………」

顔を見合わせるゲイザーと鳴谷君。お互いに頷き合つて逃げようとするが――

「逃げられると思ったのかしら?」

私がゲイザーの、そしてファントムが鳴谷君の襟首を掴んで阻止した。

「お二人とも覚悟はよろしいですか?」

「グリペン、助けてくれ（ちようだい）っー!」

グリペンに助けを求める二人。私とファントムはそのままの笑顔でグリペンに顔を向け――

「……二人とも、頑張つて」

「グリペンツ!」

――二人はあっさりで見送られる。ゲイザーはともかく慧を見送つたのはファントムやミューベルの迫力ある笑顔に押されたり、一言も相談なくファントムと戦う事になったのを根に持っているわけではないだろう。……たぶん。

「さて二人とも絞られる覚悟はいいかしら?」

「簡単には離さないなのでそのおつもりで」

抵抗する二人をズルズルと引きずって訓練室から出ていく二人。

そうしているミューベルだけでなくファントムもどこことなく喜びで、彼女の中で変化があつたのは明白だった。

——海鳥島への再攻撃まで、残り11時間20分。

——午前零時。

既に深夜と言っているいい時間帯。にも関わらずミュベールは基地内を歩き回っていた。

出撃が明朝なので早めに仮眠を取り、出撃時にコンデイションのピークが迎えられるよう調整しているからである。

このまま軽く運動して身体の方もきちんと起こそうとした矢先、自分と同じ様に眠っていない彼を見つけた。

「鳴谷君？ そろそろ寝ておかないと明朝の出撃に障るわよ？」

「あ、ミュベールさん……」

自分と同じように外に出ていた慧に話しかけたミュベールだったが、話しかけた慧には日中にはなかった陰りがあった。

「随分と浮かない顔ね。何か気になる事があるの？」

「……その、なんていうか緊張して眠れないですよ」

緊張、ね。本当にそうなのかしら？ 私には別の事が気になってるように見えるけど。

「……それは明朝の作戦？ それともグリペンのドーターを自分が操縦する事？」

「っ!？」

カマをかけてみたけど当たりみたいね。判りやすいというかなんというか。

「な、なんでわかったんですかっ!？」

「目は口程に物を言うってやつよ。私達が提案した時もかなり渋ってたしね」

これまで鳴谷君はグリペンと一緒に飛んでいたけどそれはあくまでグリペンが主であり、今回のように自分が操縦する事はなかったでしょうし。

「……ミュベールさんはなんでもお見通しなんですネ。そうですね。そうですよ、俺は怖いですよ。情けないんですけど自分が戦うってなったら怖くて震えが止まらないんです。ミスしたらどうしようとか、そもそも

俺なんかにできるのかって感じで……」

「——誰だつてそうよ。だからそう思うのは悪い事じゃないわ」

「えっ?」

「……? 私、何か変な事をいったかしら? 鳴谷君が意外そうな表情かおをしてるんだけど。」

「どうしたの?」

「えっと……てつきり怒られると思ってたので。戦うのが怖いとか覚悟が足りないって言われると思ってたんですよ」

「そんな事言ったりしないわよ。私だつて死ぬ事は怖いもの」

「そうなんですか? ミュベールさんは俺なんかよりずっとこういうことに慣れてるんでしょう?」

まあ慣れてると言えば慣れてるけど鳴谷君は少し勘違いをしてるわね。

「慣れてるからって怖くない、っていうのは間違いよ。戦う事……もつと言えば死ぬ事を怖いって思うのは生き残る為に必要なモノよ。だからそれは大事にしなさい」

「生き残る為に必要……」

「ええ。死を怖いと感じるからこそ危険を感じ、生き残れる。恐れに慣れる事と向き合う事は違うわ」

私にとって恐れに慣れる事は危険に鈍感になる事と同じだ。慣れてしまえば思ってもいないところで油断が出る。だから私は鳴谷君が『怖い』と思つてる事を恥とは思わない。

——ファイター戦闘機乗りに敗者復活戦はないのだから。

「だからソレを引け目に感じる事はないわ。それに私達だつて出来る限りのフォローはするわ。一緒に戦場に立つのは貴方達だけじゃないしね」

「……ありがとうございます。おかげで少しは気が楽になりました」
「ならよかったわ。私はこれからあの娘達と機体の様子を見に行くけど……一緒に来る?」

「はいっ!」

うん。完全じゃないだろうけど少しはプレッシャーが解けたみたいね。私程度の言葉でも助けになれたようだなによりだわ。

アラートハンガーを通り過ぎ、ハンガーに来るとそこでは明朝の攻撃の備えて機体のメンテナンスが突貫作業で行われていた。私達アキラとバービーは使っているハンガーが違うから鳴谷君とはそこで別れる。

中では船戸さんと一緒に来た整備班の人達が出撃に向け最後の点検を行っていて、そんな中で私を見つけたゲイザーはドーターから離れて一目散に私の元にやってきた。

「ミューベル。部屋で仮眠を取ってたんじゃないの?」

「少し前に起きたところよ。それで様子を見にね。アキラ^{ウチ}の2機は……問題なさそうね」

後方にいたゲイザーは勿論、私のS-32も大きなダメージはない。整備班の人達に任せておけば機体の方は十分間に合う。

だからこれから私達がする事は出撃に備えてコンディションを整えておくぐらいかしら?」

「それじゃミューベル。みんなの様子を見に行かない? 私もドーターの調整が終わって暇になったんだよね」

気負いどころか緊張感ZEROのゲイザー。作戦が始まればキツチリ仕事をするからあまり問題ではないんだけど。

(余談だが南洋エリアにいた時は他のパイロット達から『ゲイザーと話してるといい感じで肩の力が抜ける』と割と好評だった)

「それじゃ、お隣さんに行ってみましようか。さつき鳴谷君と会ったから彼もいると思うわ」

——で、私とゲイザーはバービー隊が使っているハンガーに来たわけなんだけど……

「あ、ミューベルさんっ! 助けてくれませんか?!」

——そこで見たのは鳴谷君がアニマの三人娘に絡まれているところだった。

……うん、さっきの相談料として少しぐらいは遊ばせてもらってもいいわよね。

「あら両手に余る程の花なんだから満更じゃないんじゃないの?」

「そうそう。ウラヤマシイなー。あ、写真に撮って明華ちゃんに送ったらおもしろそうだよね」

「やめてくれっ!?!」

……慧からすれば助けを求めた先もトラップだったというまさかの事態。しかも片割れのミュベールとはさつきまで真面目な話をしていただけに尚更だ。

「あはは、安心して? それしたら慧くんが後で大変そうだからやめとくよ。……今のところは」

小声で慧にとって不吉な事を言うゲイザー。が、肝心の慧は安心してせい今の一語を聞き逃し、後に明華への説明でたいへんな目に遭うのは余談である。

深夜にも関わらずアキラの二人が加わった事で騒がしさが増した独飛のメンバーだが、明朝には出撃と言う状況で放っておくほど整備班の人達も飛ぶ側の事を気にしていないわけがなかった。

「お前達! 騒ぐ余裕があるなら休め! 特にパイロット組は身体の調子そのまま戦闘に直結するんだ。時間も時間なんだから明朝の出撃の事を考えろ!」

ここの人達が呼びに行ったのか、アキラの整備主任であるヘンガー主任から注意されてゲイザー以外のアニマはハンガーに戻り、鳴谷君も宿舎に寝に戻っていった。

私は一度仮眠を取っているしゲイザーも多分だけこのまま眠らずに出撃を迎える。だから私達はそのまま基地の滑走路脇のランオフエリアに寝っ転がって夜空を見上げて過ごす事にした。

「うわあ、オーストラリアの星空とはやっぱり違う」

星空を見上げてそう言うゲイザー。確かに日本コッチに来てこんな時間帯に夜空を見る機会はあまりなかったから新鮮だ。

「見慣れた星座もちやんとあるわよ？ ほら狼や蠍、それにケンタウルスなんかは日本からでも見えるわ」

「ホントだ。……南十字サザンクロスは……ないね、やつぱり」

「アレは北半球じゃあまり見れないわ。沖繩沖縄なら時期によっては見えるけど……今はその時期じゃないからね」

——見上げた先にある満天の星空。それはオーストラリアのものとは違えど人を惹きつけるのは変わらない。星の光は世界が揺れようとも遙かな昔から変わらない輝きを今なお放っている。

元々澄み切った蒼天よりも星々の煌く星天に惹かれていたミューベルだ。それもあつてかオーストラリアだけでなく派遣先の国で見る事の出来る星座を調べ、時間に余裕があればこうして星空を眺める事がミューベルにとつての楽しみだったりする。

「……こうして滑走路脇に寝っ転がって星を見てると明朝に出撃っていうのを忘れそうになるよね。いつものことだけど」

「いつだったか星を見てるって言ってそのまま外で寝てブリーフィングに寝坊しかけたわね」

「あれは反省してます……」

あれはアクイラ隊として動き始めてしばらくしてからだったかしら。

私と同じように星空を見始めたゲイザーは派遣先の基地のランオフエリアで星を見ててそのまま熟睡。朝起きると隣にいなかったから慌てて見に行ったら案の定そこにいたのよね。

ランオフエリアで寝てたから髪はぼさぼさで服は土と草だらけ。ブリーフィングまでの時間もなかったから最低限の支度だけさせたけど気付く人は気付いたし。

……それでアニマがザイの中身コアを使っているが故の不信感が拭えたのは喜ぶべきかうっかり具合を叱るべきか悩んだわね。

「ま、ゲイザーは地上にいる時は少しうっかりしてるぐらいがちやうどいいかもね」

「ヒドくないっ!?!」

あつさり言い切るミューベルに噛み付くゲイザーだが、否定しない

あたり自覚はあるようである。

「そ、そもそも外でうっかり寝るのはいつもじゃなくてたまにだしっ
！」

「弁明になってないわよ、それ」

——星の光が照らす下でされる本当の姉妹のようなやり取り。それは人とアニメであっても共に在るといふ慧とグリペンとはまた違う一つのカタチだった。

空が明るくなり始め、太陽と星が同時に天にある明け方。鋼の鳥達が空へ飛び立つために次々と咆哮をあげ、離陸の準備を整えていく。飛び立つ用意をしているのは独飛だけでなく那覇基地常駐の空自の部隊、更に嘉手納の米空軍も出撃する事になっている。

今回の作戦は独飛だけでなく沖縄に常駐している日米の航空戦力、そして台湾空軍も動員する大規模作戦。

最初に日米と台湾の航空隊が陽動として先行。海鳥島からザイを引き離し、その間にアクイラ・バービー両隊が海鳥島へ接近。その際に対空型のザイを那覇基地所属のアニメ、バイパーゼロが爆撃で殲滅。その後、ゲイザーとファントムが巡航ミサイル群を誘導し海鳥島のFOBを今度こそ叩き潰す。それが今回の作戦の大まかな流れ。当然この二人を狙ってザイも湧いてくるだろうから二人を護るのが私達の仕事になる。

《それじゃミュベール。先に上がらせてもらおうね？》

《ええ、すぐに追いつくわ》

ゲイザーが一足先に離陸し、それに続くカタチでグリペン、イーグル、ファントムと続き私が上がる。

《全システム、オールグリーン。AQUILA01、クリアード・フォー・テイクオフ！》

ゲイザーとバービー隊に追いつき、そこでアキラとバービーでそれぞれ編隊を組んで進路を海鳥島へ向ける。出発前は見えた星も今は完全に見えなくなり、代わりに太陽の光が空を照らす。眼下の海も空を映し、合わせ鏡のようだった。

《戻ったら海水浴に行ってみるか?》

《え?》

《せっかく夏の沖縄にいるんだ。それぐらいしても怒られはしないだろう?》

無線がオンになっているに気付いていないのか鳴谷君とグリペンの会話が入ってくる。

そうなるやと当然混ざる娘がいるわけで――

《いくいく! イーグルも海水浴行くー!》

《えっ?!》

会話に飛び込んできたイーグルに驚いてる鳴谷君だけ……オープンで話してたらまあ、こうなるわよね。

《あはは、離陸で無線をオープンにしてたんだからきちん確認しておかないとダメだよ? ……それはそれとして、海水浴は確かにしたいよね。ミュベール、戻ったらわたし達もしない?》

《別にいいけど水着はどうするの。持ってきてないわよ、そんなの》

《戻ってから買いにいこうよ。沖縄ならそういう店たくさんあるんでしょ?》

もちろんミュベールの奢りで、なんて気軽に言ってくれるゲイザー。……まあ、使うより貯まるペースの方が早いから別にいいんだけど

《わかったわ。他に行く人、いる? ついでだから水着買う子は買ってあげるわ》

《はーい! イーグルもいくーっ!》

《……私も一緒に行きたい》

真っ先に返事をするイーグルと少し悩んで訊いてくるグリペン。この二人は何となく予想してたからいいとして。

《フロントムは？ せっかくだから一緒に行く気はない？》

《…そうですね。お言葉に甘えさせてもらいます》

以前のフロントムなら間違いなく断っていただろう。即答ではなかったとはいえフロントムの内面には確実に変化が起こっていた。

《こちらAWACS空中管制機、スキップパー・ヘッド。楽しそうな話をしているところ悪いが先行した陽動隊からいい知らせと悪い知らせが同時に入った。いい知らせの方は陽動隊の方にザイが喰いつきて海鳥島のザイはだいぶ少なくなったそうだ》

《…悪い知らせは？》

《予想より多くのザイが陽動側へ向かった。…長くは持たないそうだ》

…確かに、これはいい知らせと悪い知らせね。海鳥島の守りが薄くなるのは歓迎だけどその代わりに陽動隊の方は間違いなく壊走、もしかすると全滅もあり得るかもしれない。ベイルアウト出来ずに機体もろとも沈む人達も少なからずいるだろう。

一瞬だけ目を瞑り、陽動を行っている彼らの武運を祈る。

《AQUILAO1から各機へ。聞いていたわね？ 陽動隊の人は文字通り命を賭して道を拓いてくれたわ。…彼らの戦いを無駄にしないためにも連中が戻らないうちにケリをつけるわよ》

《そしてこつちにも連中が現れたぞ。ボギー7、真正面からだ》
スキップパー・ヘッドの言う通り、こちらのレーダーにもザイが映る。

《AQUILAO1からBARBIEO1、O2へ。私達三機で片付けるわよ。私は中央の三機をやるからBARBIEO1は右翼側の二機を。O2は左翼をお願い》

《BARBIEO1、了解》

《りようかい！》

編隊を崩して私とグリペン、そしてイーグルでトライアングルを組んで前が出る。

私の機体は大柄な分ミサイルの搭載量も多い。グリペンが六発、イーグルが八発に対してS-32は十四発積める。加えて今回は短AAMも全て高機動型を積んできたから打ち損じも抑えられる。

《AQUILA01、エンゲージ》

宣言と共に機体を加速させ正面のザイとの距離を詰める。両翼のザイを討つために左右に散開したグリペンとイーグルを狙いザイの方もこちらと同じような動きを見せる。

(数は違うけど向こうもこっちと同じ狙いか……好都合ね)

戦力比は1:3だがその程度で怖気づくミューベルではない。

シーカーが起動し中央のザイをロック。ミサイルを撃つと同時にシーカーを切り替え右翼側にいるザイにもミサイルを放つ。

《FOX2!》

通常より高い機動性を誇る^{高機動型}QAAAMはザイの鋭角的な回避機動にも容易く追従し、ロックした二機を爆散させる。

そして残る一機だが――

《FOX3!》

ザイの機銃弾を機体をバンクさせて射線をズラし、機体が交錯した直後に機体をクルビットで反転。そのまま至近からの機銃掃射で残った一機を撃墜する。

――一発目のミサイルを撃ってから三十秒もかけずにザイを三機撃墜。QAAAMを使用したとはいえ鮮やかな手並みだった。

《やりますね。相変わらずのサーカス機動ですが》

《前も言ってたけど褒めてるのか貶してるのか判りにくいんだけど》

今のファントムは前者の意味で言ってくれてると思いたいけど。

《戻ったよー!》

《こっちの方も終わった》

グリペンとイーグルも相対したザイを片付け終わりレーダーが一時的にクリアになる。けどそれは本当に一時的なもの。海鳥島に近づけばザイも手厚い歓迎をしてくる。

――島の上空で心置きなく空戦をするにはあの対空型が邪魔になる。だからあれらを潰すために一仕事する必要があった。

《AQUILA01から全機へ。これから島上空の強攻偵察をしてあの対空型を引きずり出してくるわ。ゲイザー、少しの間ファント

ムの護衛お願いね》

《《《《《えっ?!》》》》》》

機体を加速させ海鳥島へ単騎で向かうミュベール。

《ちよ、ちよつとミュベール! 引きずり出す必要が本気!?!》》

《ええ、アレを潰すにはまず引きずり出す必要があるわ。作戦の要になるゲイザーとファントムにさせるわけにはいかないし、イーグルとグリペン達じゃ不慮の事態に対応しきれるか怪しいでしょ?》

消去法ではあるが確かにこの中ではミュベールが行うのが適任となる。……理屈はともかくゲイザー達が納得するかは別問題だが。

《でも……》

《いいからそっちは準備を始めてなさい。もうすぐ仕事をしてもらうんだから》

そう言いながら高速で島へ接近していくミュベール。迎撃にザイがミュベールのS-32を撃ち落とさんと迫るが、ミュベールは先程のアクロバティックな機動とは異なり風に舞う木の葉のようにザイの猛攻を躲し、進んでいく。

——そしてとうとう海鳥島まで数キロというところで迫ると例の対空型が姿を現し、単騎で飛び込んできたミュベールを包囲しているザイ諸共撃墜せんとその顎アゴを開く。

《《《ミュベール(さん) ツ!?!》》》》

クラスター弾がミュベールに向けて発射されようとし——

——それより早く島から火柱が立ち昇る。火柱はミュベールに狙いをつけていたザイだけでなく、構築されていた基地施設をも飲み込んでいった。

《MISSION任 COMPLETE了 / GOOD幸 LUCK運》

通信メッセージでBARBIE04……バイパーゼロからアクイラ・バービーの各機にメッセージが送られる。先の火柱はバイパーゼロの爆撃によるもので対空型だけでなくザイのFOBにも大きなダメージを与える事になった。

——那覇から海鳥島まで超低空で飛来しての爆撃。那覇からここまで超低空飛行をしてきた技量もだが、最も驚くべきはミュ

ボールの強攻偵察がアドリブだったにも合わせ切ったその対応力だろう。

《AQUILA01からBARBIE04へ。見事な仕事だったわ》

《THANK YOU》

役目を果たしてくれたバイパーゼロに礼を言うと言いつつ通信メッサージが送られると同時に翼を振って帰還していった。陽動隊が当初より多くのザイを引き付けたとはいえ島にはまだ多くのザイがいる。あれだけの爆装をしていたからここから更に空戦をするのはいくらアニマでも厳しいだろう。

《AQUILA02から01へ。ヒヤヒヤさせないでよ。……心臓が止まるかと思ったんだから》

《いや、貴女心臓はないでしょ》

勿論ゲイザーの言葉はものの例えでミュベールもそれは判っている。お互い、軽口のようなものである。

《さて……仕事の時間よ、ゲイザー。始めなさい》

《オーケー、任せて！……こちらAQUILA02、『槍』を放ってください》

そう言つてゲイザーが高度を上げて編隊から離れると同時に、レーダー上に多くの輝点が後方から現れた。

——時を数分ほど遡りバイパーゼロが海鳥島の地対空型のザイを潰した頃、海鳥島で交戦している独飛から後方100km地点。那覇基地から出撃した部隊と九州の各基地から出撃し空中給油をした隊が接近していた。

《こちらRAVEN01。全機用意はいいか？》

《こちらPIGEON02。用意はできてますが本当にあんな芸当ができるんですかね？》

彼らは説明をされているとはいえその内容について未だ半信半疑だ。それだけこれから行われる事はこれまでの空戦の常識を覆しか

ねないからだ。

《こちらAQUILA02、『槍』を放ってください》

《……合図だ。全機攻撃開始。腕前を拝見だ》

F-15Jから中距離空対空ミサイルが2発ずつ無誘導で発射され、排気煙の軌跡を残しながら空を駆けていった。

「慧。後ろにいた部隊が攻撃を開始した。当たらないとは思うけど一応高度を上げて」

「一応って……なんでだ？ コースにいない限り当たるなんてないだろう？」

「発射されたミサイルは全部ロックオンされてない。航続距離ギリギリの位置で発射されてる」

「……それってまず当たらないよな？」

慧の言葉に頷くグリペン。

発射後ロックオンをするにしてもロックできる位置まで出てくる必要がある。が、撃った部隊は依然として後方のまま動きはない。

この動きには慧とグリペンだけでなくファントムも疑問を感じていた。

——例外は、真意を知るアクイラ隊だけである。

交戦している独飛とザイを通過し、ミサイルは更に飛翔する。ミサイルの向かう先は後詰めとなるザイの後衛。しかし高度が合っており、ミサイルは全てザイの下方を通過するコース。

——しかし、次の瞬間独飛のメンバーは驚きの光景を目にする。

すれ違うだけだったはずのミサイルは、ザイを通過する一秒前に急にコースを変え、付近にいたザイに全て命中した。

《《《《《なっ（えっ）!?!?》》》》》

一体なにが起きたんだっ!? ミサイルがいきなり軌道を変えたっ!?

「どう？ これがわたし本来のやり方。発射されたミサイルの操舵・

推進系を掌握して完全な手動管制で命中させる。わたしはミュベールみたいにザイを直接戦闘で墜とすんじゃないやなくて、通常の航空戦力をザイとの戦闘で通用させるのがわたし本来のやり方なんだ」

驚愕する慧達だがソレをした張本人が誇るように言う。

——その戦術はグリペンやイーグル、そしてファントムとも異なる戦い方だった。

ゲイザーの戦い方とはアニマ・ドーターやAZCCではない通常の航空戦力がザイと渡り合えるようにする為のもの。

——つまり、ゲイザーはザイ相手に『数で押す』事を可能にするアニマ——

「敵の増援の主力はこちらで対処します。皆さんはこちらの撃ち漏らしをつー！」

「AQUILAOIから全機へ。聞いたわね？ 私達は目の前の相手を殲滅するわよつー！」

ザイの増援を気にせずに動けるようになった独飛のメンバーは前回同様グリペンとイーグルはやりやすいように動き、ミュベールがファントムの直掩という動きに出る。

海鳥島からの対空攻撃が沈黙し、増援の航空戦力もゲイザーが管制するミサイル群が抑えているので各個撃破が可能となったからである。

そうなる不安要素が大きいのが慧とグリペンだが、ファントムが指示を出している上に本当に危ういところではゲイザーが支援を行う事でカバーしていた。

少しずつ、しかし確実に戦況は有利になり、その分慧とグリペンには周囲を見る程度の余裕が出来ていた。

「……やっぱりイーグルもだけどミュベールさんはもつとすごいよな」

慧の視線の先にあるのはまるで踊るようにザイを相手取るS-32^{ミュベール機}。独特の機動でザイを翻弄し、護衛しているファントムに寄せ付けない姿は有人機の一つの到達点のようだった。

「……俺もあんな風に飛べるようになるのか？ 全然追いつける気が

しないんだけど」

「あれはミュベールの飛び方。慧は慧の飛び方をこれから探していけばいい」

そもそも飛び始めて一か月程度の慧と、傭兵として飛び続けてきたミュベールでは経験の量も質も違う。ましてやミュベールは12.6Gにも耐え、規格外に片足を踏み込んでいるパイロット。言い方は悪いが慧とは「モノ」が違うと言ってもいい。

——今はまだ。

「……そうだよな。これから教わったりして進んでいけばいいんだよな」

「そもそもミュベールの飛び方は人間離れしてる。だから変態」

「だから言い方ってもんがあるだろう。それで前ミュベールさんに怒られたのもう忘れたのかよ」

「うっ」

——正直、この時俺達は油断していた。ゲイザーが相手の本隊の数を片っ端から減らし、その撃ち漏らしをミュベールさん達が次々と墜としていたからもう大丈夫だと思っていた。

……だからだろう。海鳥島からの反応に気付くのが遅れたのは。

「っ！ 慧っ!! あの対空型のザイがもう一体いるっ！」

海鳥島から敵性反応。——バイパーゼロが潰したはずの対空型のザイである。

「嘘だろっ!?!」

「ファントムとミュベールを狙ってるっ！」

ミュベールさんとファントムを狙っているが、ミュベールさんはザイと噛み合っていて動けない。俺たちより前にいるイーグルも同様だ。

「こっちでやれないのかっ!?!」

「ダメっ！ 距離が遠くて間に合わないっ！」

くそっ！ あと少ししてとところなのにつ！

《大丈夫。ソレはわたしが仕留めるから》

——瞬間、^{ヒカリ}星が落ちた。

天空から落ちたナニカはミューベルとフロントムを狙っていたザイを文字通り、粉碎した。

「グリペンっ！　今のなんなんだっ!？」

「わからない。私も今のは捕捉できなかった」

アニメでも捕捉できない攻撃?!?　一体なんなんだ!?

こっちが驚いている間に赤褐色のEF-117G-ANMが寄り添うようにS-32の隣につく。

《まったく。わたしがいるからって油断し過ぎだよ、ミューベル?》

》

《油断はしてないわ。こういうのを警戒してたから貴女にEMLを装備してきてもらったんじゃない》

聞こえてくる二人の会話からはお互いに対する信頼があった。

グリペンとミューベルさん達の話の話を聞くに今のはゲイザーがよかったらしい。

《ゲイザー、今の……お前がやったのか?》

《そうだよ?　ミューベルがさっきの奴を確実に潰すためにEMLを持ってきなさいって》

《EML……?》

《んー、レールガンって知ってる?　それなんだけど》

《レールガン……?》

正直言われてもどんなものなのかわからない。『ガン』っていうかにはミサイルとは違うのはわかるが。

《レールガンは電磁投射砲っていつて、電流を通す電気伝導体を弾体として電磁加速で撃ち出すんだけど……詳しく話すと長くなるから簡単に言うと音速^{マッハ}20以上の砲撃かな》

さらっととんでもないことを言うゲイザー。ちなみに撃ちだした弾体も外殻を貫通し、内部で炸裂する徹甲榴弾^{APE}という念の入れっぶりである。

《ではそろそろ始めます。ゲイザー、あなたも対空ミサイルの誘導を切り上げてこちらに加わってください》

《大丈夫。最終誘導程度なら並行していけるから》

そうしてRF-4EJとEF-117Gの二機が管制ポッドを展開し、作戦の総仕上げにかかる。

《背中は何任せますよ?》

《ええ、無粋な客は追い払ってあげるから見応えのある“人形劇”

を見せてちょうだい?》

《ふふ、“人形劇”ですか。言い得て妙ですね》

ファントムとゲイザーの機体に吊られた管制ポッドからアンテナが伸び、戦端に光が灯る。それと同時に緑色と赤褐色の機体が発行する。

《BARBIE03よりドールハウス、レディ・フォー・コントロール。作戦開始を要請する》

《ドールハウス、了解。作戦を開始する》

《さあていよいよ大詰めよ。へばってなんかないでしょうね、三人とも》

《もつちろん! 全然疲れてなんかないし!》

ミュベールさんの軽口混じりの言葉に即答するイーグル。

いけるよな? と後ろの相棒に訊くと「問題ない」という心強い答え。

《こつちもいけます。大丈夫です》

《それじゃ、私達も最後の仕事を終わらせるわよ》

飛行が単調になったファントムとゲイザーを三機で護衛する。当然ながらザイも変わらず襲い掛かってくるが、巡航ミサイルが群れを成して接近すると急旋回してそちらに向かう。ドッグファイトで見た鋭角的な機動はせず、一直線に飛ぶ相手は狙いやすい的だった。

《FOX2!》

リリースされたミサイルは一直線にザイへ向かい、ザイも気付いたのか避けようとするが間に合わずあっけなく撃墜。

そして島の方を見ると轟音とともに紅蓮の嵐が島を覆い、焼き尽くしていく。バイパーゼロの爆撃とは比べ物にならない破壊という蹂躪だった。

「EPCM低下。残存ザイも撤退」

《《AQUILAOIから全機へ。作戦終了……私達の勝利よ!!》》
グリペンの状況報告とミュベールさんの宣言を聞いて一気に身体から力が抜ける。

作戦の成功もだが自分の操縦で生き残れたことが嬉しかった。その喜びを噛みしめっているとミュベールさんから通信が入ってきた。

《《お疲れ様、鳴谷君。どう？ 自分の操縦で生き残った感想は》》

《《うまく言えないんですけど……嬉しいです。それと……》》

《《それと？》》

《《————自分の操縦で飛ぶ空ってこんなに広がったんだな、って》》

作戦中は無我夢中だったけどこうしていると母親につれられて初めて空を飛んだ時のことを思い出した。あの時感じた高揚感と、どこまでも続く空と地平を見た時の感動。

——それは今でも自分の中にあっただのと。

「うみ だーっ!!」

海鳥島攻略戦を終えた私達は那覇基地の人達が薦めてくれた人の少ない穴場のビーチに来ていた。

……海鳥島から帰還してのデブリーフィングでは色々であった。主にゲイザーについて色々。

ゲイザーは元が電子戦機だから電子能力に関してはさほど訊かれなかった。けどEMLは違う。EMLの方はザイのEPCMの干渉を受けずにザイを撃墜出来る数少ない兵装。自衛隊としては対ザイの装備として魅力的に映ったんでしようね。

ただEMLは運用の難しい装備(整備の難しさとロックオン不可という点で)。そもそもEML……というよりレールガンに関する技術はオーストラリアにとって機密事項。よほどの事がない限りその技術を他国に渡す事はしないでしょう。

そんな色々あった作戦の翌日、私達は作戦前に鳴谷君の提案した海水浴で作戦後の息抜きをする事にした。……とはいっても穴場とはいえそれはあくまで有名なビーチと比べての話。今の時期は沖縄への観光客が元々多いから穴場のビーチにもそれなりの人がいるんだけど。

ちなみに水着は那覇基地の人達が貸してくれた車で全員で買いに行き、会計後に店の更衣室を借りて服の下に着込んでいたから着いたら服を脱ぐだけ、という状態だったので着いてすぐにゲイザーとイーグルが揃って飛び出していったのだ。

余談だが、水着を買う時にもそれはもう色々あった。ゲイザーとファントムが慧に水着を選ばせようとしてからかったり、グリペンがゲイザーとファントムの口車に乗せられて際どい水着を選ぼうとして慧がそれを止めたりである。

……慧が色々と苦労しているがこの部隊にいる限り彼はそういう役回りなのかもしれない。

「それにしても可愛い娘が多いから注目集めるわね」

「……ミュベールさん。はつきり言っておきますが一番視線を集めているのはあなたですからね？」

ミュベールの言葉に呆れたように言うファントム。淡い緑色を花と葉が彩るワンピースタイプの水着で（パツと見は）清楚に見える彼女によく似合ってる。

確かにアニメ組も注目を集めているが一番注目されているのはミュベールだ。なにせミュベールの水着は黒を基調に朱色で縁取ったかなり目立つビキニタイプの水着（腰から下はパレオで隠れている）。加えてミュベール自身、かなりの美人なので男女問わず注目を集めていた。

「あらファントム。ゲイザーとイーグルと一緒にいたんじゃないの？」

「あの二人ならあそこで競争をしていますよ」

ファントムが指をさした先を見るとゲイザーとイーグルの二人が割と本気になって競争している。

ゲイザーの選んだ水着はオレンジと白のボーダー柄のチューブトップビキニに胸元のリングから首紐を通したデザインで、自分の髪色とスタイルに合わせてる。イーグルの方は白地に赤いハイビスカスが左胸に描かれた胸元で結ぶタイプのビキニに裾が股下まであるジーンズのようなデザインで活動的なイーグルによく似合ってる。

……二人揃って泳ぐのに向いてない水着（トップスがズレやすい……というか脱げやすいという意味で）だけど選ぶときはそんな事考えてなかったんでしょね。

「それに慧さんとグリペンのところに行くのは遠慮したいですし」

「あー。それには同意するわ」

ちらりと二人の方に視線を向けると水をかけ合っただけじゃ合う二人。……どっからどう見てもデートしてるようにしか見えないわね、あの二人は。

ちなみに水着を選ぶのに一番時間がかかったのがこの二人で原因は主にゲイザーとファントムだ。そんな二人の水着はグリペンがリ

ボンのあしらわれたトップスにフリルのパティオを合わせたオレンジ色のセパレート。鳴谷君はグリペンのドーターに似た赤色のトランクスタイルだ。

「それで、一体どうしたの？ 暇になったから私のところに来たわけじゃないんでしょう？」

「わかりましたか」

「わかるというか無駄話を楽しむってタイプじゃないでしょ、貴女は」
例外というか誰かで遊ぶ時は手間を惜しまないようだけど。

「ええ、そうです。少しお話したいことがあります」

……なにかしら。わざわざ一人の時に来るなんて他のアニメ達に聞かれたくないのかしら？

「正直に言いますと今回の作戦、私は誰か失うと思っていました。が、最善の結果となってなによりです。……こう見えて少しは喜んでるんですよ？ 私は。ただお父様から私の価値観は聞いているとおり私は人類という種を守るためなら問題無く日本を見捨てられると
言うだけです」

「……自衛隊所属のアニメとは思えない発言ね。下手したら査問会にかけられかねないわよ？」

「あなた方には異様とも言える考え方なんでしょうね。私には至極当然の理論なのですが」

淡々と言うフアントム。それ故に彼女の言葉には真実しかなかった。

「さておき、本題に入りましょう。慧さんが操縦を行い、レーダーと火器管制はグリペンが行うというのは悪くない組み合わせだったと思います」

「そうね。極端な話アニメなら射程内であれば当てられる。HiMATを使えない事を引いても補って余りまるアドバンテージなもの」

こればかりはAZCCでもまだ真似が出来ない。AZCCはあくまでも既存の戦闘機の延長線。根本から異なるアニメはモノが違うと言ってもいい。

「人間が操縦でアニメがサポートする。こう言う運用もありなのか、

発想の転換だなと普通は思うのでしょね。普通は」

「……貴女は違うの？」

「ええ、私などは捻くれ者ですから少しうがった見方をしてしまうですよ——簡単な事です。何故、他のアニマはそうになっていないのかと」

私みたいな例外を除いて人の身体はカテゴリー的には無人機となるアニマの機動に耐えられない。もちろん私達だって耐えられる限度はある。けどその逆——人が操縦し、アニマがレーダーと火器管制を行うのは問題がない。むしろ『有人機』として見るなら能力は飛躍的に向上する。

「私達アニマはザイの部品を流用して作られた兵器です。コアの技術はブラックボックスでいっどんなエラーが出るのかわかりません。そんな物を自律機動で飛ばすなど危険すぎると思いませんか？」

「……………」

フアントムの言葉にミュベールは押し黙る。——確かにそれはミュベールに限らず関係者がアニマに対して抱いている危惧だからだ。

「本来はアニマはサポートコンピューターとしての役割に徹し、人間が主としてあるべきでしょう。しかし、アニマの制御は自律制御でしか成功しなかった。技術進歩のスタート地点は神のみぞ知ることですがスタートがそうであり、他に成功例がない以上それが当然の形なのだと思っていました。……慧さんとグリペンに会うまでは」

「それは……あの二人があなたの言うアニマと人間、その本来のあり方だからかしら？」

「その通りです。人類が操る兵器としてあの二人の形は理想的なんです。なのになぜ他のアニマがそうならないのかと疑問に思いませんか？」

——フアントムの疑問はそのまま私の疑問でもある。

形の上だけで言うなら私達有人機のパイロットとゲイザーもあの二人と似た関係になる。ただゲイザーと私達は『隊』としてならそうあるのであってあの二人のように『個』としてそうなってるわけ

じゃない。

私も数回だけならゲイザーのドーターに乗り、私が操縦しゲイザーがリーダーと火器管制という役割分担を試した事がある。けどそれは上手くはいかなかった。……正確にはメリットがなかったのだ。

アニマの機動に耐えられるパイロットなら同乗するよりも別機で出撃させた方がいいし、一般のパイロットだと今度はエラーが出てまともに飛べなかった。……これは私見だけどアニマとパイロットが同調出来ないとエラーが出るんでしょね。

(余談だがミュベールはゲイザーのドーターに同乗する試験飛行中にザイと遭遇。そのまま撃墜して基地に帰還している)

「そこで一つ提案なのですがRF-4EJ-ANM私に乗ってみる気はありませんか？ あなたほどのパイロットが私に乗ればお互いこれまで以上の戦果を挙げられるかと」

……ファントムの提案はそう悪くない。アニマ側がパイロットを受け入れるならエラーも低くなる可能性は高い。彼女の言う通り戦果も上がるんだろうけど――

「魅力的な提案だけど答えはノーよ。私はS-32から降りる気はないし、私は複座……はつきり言っ自分の飛ばす機に誰かを乗せる気はないわ」

テスト飛行等での不意の遭遇戦ならともかく、戦場を飛ぶ時は誰かを乗せる事はしない。

それは私が少なからず抱いている望みに起因している。

「……私達航空傭兵は死ぬために戦ってるわけじゃない。ただそれでもどうせ死ぬなら空でという想いがある。死に場所を見つけた時、同乗者を道連れにするわけにはいかないでしょう？ ……貴女には理解出来ない考えかもしれないけど」

「そうですね。確かに私には理解できない考えです」

こつちから訊いたとはいえ即答したファントムの言葉に思わず苦笑する。

ま、このあたりはパイロット同業の中でも考えが分かるところなんだけど。

「そもそも私が貴女に乗ったら個としてはともかく隊全体で見たらむしろマイナスでしょう。私の撃墜スコアがなくなるんだから」

「おや、やはり気づきましたか」

「気づきましたかって貴女ね……」

「そもそも隠す気なかつたでしょう、貴女。」

「……というかゲイザー^あの^娘を差し置いてファントムに乗るなんて言ったら間違いなくへそを曲げられるし。」

「話をしにきたのは私からですが興味深い話を聞かせていただいたお礼です。もう一つお話をしましょう。……私達アニマには一般的に生前の記憶が無いと言われています」

「貴女達の生前……ザイの時の事？」

「ええ、そうです。私達は生まれた時には既にアニマであり、細かい知識は全て機械学習によつて詰め込まれます。生まれた当初、意識はまるで深海のような暗い密閉空間でたゆたっていました。もともと、すぐに機械学習が始まって自身の存在意義を思い起こされたのですが。その前から私には微かにある衝動があつたんです。空っぽから始まるはずだつた私に唯一存在していた想い。機械学習の影響ではない感情・情動が」

「……それは？」

「『この星を守らなければ』という想いです」
「……………」

「ファントムが抱いていた衝動が戦いに関するモノだつたならまだ私は納得していた。けど、ソレは私にとつて予想外の言葉だつた。」

「不思議だと思いませんか？ もしこれがザイであつた頃の記憶だとするなら……私は一体何からこの星を守ろうとしていたのでしょうか？」

「『この星を守らなければ』、ね……。それがザイの行動する根底にあるのなら厄介な事になるかもしれない。」

「……確証のない推論だけど……心当たりは少しあるわ」

「聞かせていただいてもよろしいですか？」

「あくまで私見よ？ その衝動の元にザイが活動していると仮定する

ならザイは――」

ミュベールの推論を聞いたファントムは驚きを感じながらもどこかで納得出来るモノがあった。――というよりミュベールの推論は矛盾が少なくむしろ核心を突いているのではと思うほどだった。

「……中々興味深い考えです。私としては説得力のあるように思えますが」

「何度も言うようだけどこれはあくまで私見だから正しいかは判らないわよ?」

私のコレは確証のないモノだし、そもそも当たってほしくないんだけど。

「ミュベールー！ ファントムー！ こっちに来て一緒に楽しもうよー！ せっかく海に来てるんだからー!!」

私とファントムが話し込んでいる間に他の面子は一緒になっていたらしく

「一緒に呼ばれている事だし、行きましようか」

「……そうですね。変に断ってむくれられても面倒ですし」

ファントムの言葉に素直じゃないと思いつつもヤブヘビになりそうなので口には出さない。

――だって、今ファントムの浮かべている笑顔はいつも見せるどこか張り付けたようなモノじゃなく、自然な可愛らしい笑顔なんだから。

Order 11 Moon Light

「アニマの前世……ザイだった時の記憶か。」

「正確には衝動……本能みたいなものですけどね。ザイがガイア、もしくはアラヤの尖兵だとは思いたくありませんが」

——沖繩から戻って数日後、俺と八代通さんは海水浴に行った時、ミュベールさんがファントムと話していた事を聞いていた。

……正直、ミュベールさんの言うアラヤとガイア？は聞いたことがないからサツパリだ。

「ゲイザーにも訊いてみたんですけどあの娘は覚えてないと言っていましたから、微かながら覚えているファントムがレアケースなんでしょう」

「だろうな。あいつは空自……というより俺の処女作だからな。コアへの干渉は最低限にしてシミュレーションを何度も受けさせての配備だったからな。そういったことを覚えていたとしても不思議じゃない」

「グリペンとイーグルは違うんですか？」

グリペンはわかるけどイーグルもなにかあったんだろうか？

「ああ。グリペンは君も知つての通り色々と問題があったからな。こっちとしてもやれることはやる必要があった。イーグルの方は瞬間的な処理能力を上げるためにキャッシュユをクリア……君にわかりやすく言うなら空戦に不要な情報を頻繁にリセットしているからな。ザイだったころの記憶や衝動は残ってないだろう」

空戦にいらぬ情報をリセットって……もしかしてイーグルがやたら幼児的なのってそのせいなのか？

「……話が逸れたな。中尉、君の言うガイアとアラヤとはなんなんだ？」

「私としてはイーグルの事を詳しく訊きたいんですが……元々それが本題でしたからイーグルの事は後で訊く事にしましょう。……ガイアとアラヤというのは簡単に説明するとガイアは星の意志。アラヤ

は霊長……ここは判りやすく人類としますがその無意識化で世界の存続を願う意志なのがアラヤです。この二つは世界の危機に対して動くと言われていますが大きな違いがあります」

「……どんな違いだ？」

「簡単に言うと人類を滅ぼしてでも星の存続を優先するのがガイア。逆に星を滅ぼしてでも人類の存続を優先するのがアラヤです。とはいつても今の地球で人間社会が滅ぶという事はそのまま星の死に直結しかねません。なので今の世界において両者は同一視されていますね」

なんか難しそうな話になってきたけど俺がここにいる意味ってあるんだろうか？ 正直内容を理解するだけでいっぱいいいっぱいだ。

「そしてここからが本題なのですが、ザイが人類を滅ぼそうとするのはコレによるものだと思います？」

「……中尉。まさかとは思いますがザイはそのガイアの具現とも言うべき存在で、ザイが人類を滅ぼそうとしているのは星の意志とでも言いたいのか？」

ザイが星の意思っ?! ザイが人類を攻撃するのは地球の意志だっ
てことなのかっ!?

「その可能性はあると思います。もしかしたらアラヤによる人類の無意識化での壮大な自傷行為なのかもしれません」

冗談めかしているミュベールさんだけど話の内容が内容だからまったく笑えない。

どちらかが本当なんだとしても怖ろしすぎる。

「けどそれなら俺達はザイに勝てるんですか？ ミュベールさんの話が本当ならザイが人類を攻撃するのは星の意思なんですよ。そんなの——」

勝てるんですか、と言おうとして言葉が出なかった。

一瞬だけど『勝てるはずがない』と思ったからだ。

「勝てるか、じゃなくて勝たないといけない。そもそも鳴谷君は死ぬと言われたら死ぬの？」

「それは……」

できるわけがない、と言おうとして俺の言いたいことがわかったのかミュベールさんは満足そうな笑みを浮かべて言葉を続ける。

「それと同じよ。たとえ星が人類を見限るのだとしてもそれを受け入れるかはまた別の話よ。……少なくとも私達は全力で抗う為にここにいる。違う?」

……ミュベールさんの言う通りだ。俺達は諦められないからここにいる。

「そもそも私のコレは確証のない推論よ? あまり本気になられるとこつちが困るわ」

「……聞いていて気になったんだが。中尉はなぜそんな事を知っている? 少なくとも傭兵が知っている知識じゃないだろう」

八代通さんの言う通りミュベールさんはどこでこういうことを知ったんだろう?」

「学生時代にこういうオカルト的な事には興味があったので趣味の範囲で調べた事があるんですよ。……ガイアとアラヤの概念を知ったのはその時ですね」

……当たり前だけどミュベールさんも学生だった時があるんだよな。少し想像できないけど。

「ちよつと鳴谷君? なにかすごく失礼な事を考えてない?」

「そ、そんなことないですよ!!」

考えていたことを当てられて思わず声の上擦った。

……明華もだけど女の人ってどうしてこつちの考えてることがわかるんだ?」

「……と、そろそろ時間ですね。哨戒に出てきます」

失礼します、と言ってミュベールさんは定時の哨戒に出ていく。

俺もミュベールさんに呼ばれただけだったから出て行ってもいいんだろうけど――

「ガイアとアラヤ、か。興味深い話だったな」

そう言う八代通さんの言葉に止められた。

「興味深いって……八代通さんはそうかもしれないですけど……。俺に理解できたのはガイが人類を攻撃するのは星の意志かもしれない

いってことぐらいですよ?」

「要点としてそれが分かっていたら十分だ。ま、中尉自身確証を持っていないようだったからな。今はそういった考えがある、ということだけ覚えていればいい」

そう軽く言う八代通だが慧の頭の中ではザイがなぜ現れたのか。それを考えるのが必要に思えてならなかった。

——同日・20時47分、小松基地。

奥尻島のレーダーサイトが領空侵犯機を補足し、スクランブル待機をしていた私達アキラに出撃命令が下った。

機体の最終チェックを実施し、全システムに異常がない事を確認して離陸用意に入る。

《タワー、AQUILA01、レディー・フォー・デイパーチャー》

《AQUILA01、タワー、ランウェイ24、クリアード・フォー・テイクオフ》

S-32のエンジンが鋼鉄の身体を空に上げるべく夜の小松基地で咆哮をあげる。雲が厚く、不安定な気流が機体を揺らすもそれをものともせずが上がっていく。

高度5千まで上がると天蓋のようだった雲を抜け、月光が照らす夜空が広がっていた。

《それにしてもどういうことなんだろうね? 北からEPCMの反応なんて。ロシアが抜かれたなんて聞いてないけど》

次いで離陸したゲイザーが追い付き、そんな当然と言える事を訊いてくる。

……ゲイザーの言う通りロシアが突破された、なんて大事が起きれば本社経由で判る。だからその可能性は正直低い。それに——

(侵入してくるにしてもわざわざ北から回り込んでくる、っていうのもおかしいのよね。日本海側の防空圏を抜けるにしても警戒がより厳重なロシア領から回り込むメリットがないし)

そう。領空侵犯機はEPCM反応が出ているので間違いなくザイなんだろうけどその行動が不可解過ぎた。

《コマツ・コントロールからAQUILA隊へ。先行したスクランブル機はEPCMの影響によりアプローチに失敗。現状はもう貴隊しか間に合わない。任せたぞ》

《AQUILA01、ラジャー》

そう返答はしたものの、内心ではあまりに行動パターンの読めない相手に困惑していた。

《ゲイザー。仮に相手がEPCM反応を消せるステルス性を持っていたとして、ロシア領内で姿を消していたのに日本に接近して反応を出すメリットがあると思う?》

《わたしはないと思う。奇襲をするなら最後まで隠れているし、陽動だとしてもわざわざロシアを回らなくてもいいし》

ゲイザーの言う通り、陽動なら日本海側から直接仕掛ければいい。撃墜されるリスクを冒してまでロシアを経由してくる必要はない。

……いけない。考えれば考えるほど判らなくなってくるわ。一旦この事は置いて今は任務を果たしましょう。

スクランブルして数分、EPCM反応を目指して北上する最中、その「異変」は現れた。

(——EPCM反応が……消えた?)

真つ先に疑ったのは機体のトラブル。けどシステムに異常は見られない。

……どういう事かしら?

《AQUILA02から01へ。EPCM反応が消えたんだけど……そっちは?》

《こつちもよ。二機揃ってという事は機体側のトラブルじやなさそうね。取り敢えずレーダーにはまだ反応があるから直接確認に行きましよう。接近すればハッキリするでしょうし》

《わかった》

唐突に消えたEPCM反応。不可解過ぎるアンノウンの行動を探る為、私達はレーダーに映っている輝点を目指して北上する。

《AQUILA02から01へ。目標を見つけた。方位036》

ゲイザーの言う方角を見ると確かに月の下に星のような光が見える。

(気のせいかしら? 月明かりが反射してるにしても明度がおかしい気がするんだけど)

他にも気になる点がある。レーダーに映る輝点は三つなのに視認出来る光は一つだけという事。これが通常の航空機だった場合ザイと同じ方角から攻撃を受けずに来た事になる。

《ミュベール、どうする?》

《まずは警告よ。民間機じゃないのは明らかだけど、それでもいきなり撃つわけにはいかないわ。ひとまず通常の領空侵犯対応でいきましよう》

アンノウンとの距離を詰めていくと徐々に視認出来る光が大きくなり、月光に照らされるカタチで後続の機影も見え始める。

こちらを向こうも捉えたのか、先頭の機体が速度を上げてこちらへ向かって来る。

(……ニアミスする気?)

先頭機はまっすぐ私の方へ向かって来る。そして機体のシルエツトがはつきり見えるところまで近づかれ、ようやく私はその“光”の正体によく気付いた。

———すれ違いざまに見えたその機体は雪のように淡く発光し、翼の先端にはハニカム模様が浮かんでいる。

《うそっ!? ドーター!?》

驚きに満ちたゲイザーの声だけど私はそのドーターの機種にも驚いていた。

《Su……47?》

——そのドーターが私のS—32と縁のあるSu—47だったからだ。

Su—47は元々ロシアの第5世代機として開発されたけど、第5世代機はステルス性が必須なのと予算不足が原因でロシアは開発を放棄した。が、第4世代機として見て装備可能な兵装の多彩さと量に目を付けたE・F社が開発を引き継いで完成させた機体。

Su—47に関するデータは全部本社に移っているハズだからロシアがこの機体を持つてるのはおかしいんだけど……

(そういえばロシアには実験用の機体が残ってたわね。S—32は私の機体、
曰く付き”だったから機体ごと売り払われたけど)

実際のところS—32もロシアは手放す気はなかったのだが、データ収集ならSu—47が手元になれば十分と判断され売却されたのが実情だったりする。

(後ろにいるのはSu—35が二機みただけど……様子がおかしい?)

Su—47が先導しているというより後ろのSu—35から逃れようとしているような機動。通常の編隊飛行じゃないのは明らかだった。

《…命…ま……》

ノイズが混じった音声が入ってくる。が、ノイズが酷く上手く聞き取れない。

《……を…望し…す》

(……日本語?)

おかしい。航空関係の共通用語は英語。ロシア語ならともかくわざわざ日本語で言葉を発してくるなんて——

《……亡命を……希望します》

亡命っ!! アニマがっ!!

一瞬、これが何らかの罠の可能性が浮かぶけどそれならこの三機の動きの可笑しさに説明がつく。

繰り返される言葉と機動の必死さから私自身は嘘ではないと感じ

てる。

《ミューベル、どうするの!?!》

《受け入れるのかは私達の独断で判断出来るレベルじゃないわ。急いで基地に連絡を——》

《AQUILA隊へ聞こえてるな? あのドーターからの通信はこつちでも確認した。亡命を受け入れるから小松までエスコートしろ》

こつちから連絡するよりも早く、小松の八代通室長から亡命を受け入れる旨の通信が入る。

亡命希望のドーターは余程の出力で発信していたのか、私達だけでなく小松にまで通信を届かせていたらしい。

《……やけに早いですね。まさか独断ですか?》

《状況が状況だ。上に報告して判断を待っていたら時間がかかり過ぎる》

現場の私達からすれば助かるけどこつちも独断で動く現場だと上層部はいい気分じゃないんでしょうね。

《了解しました。追手はどうしますか?》

《門前払いだ。お帰り願え》

暗に撃墜はするなというお達しだけど手段についてはこつちの判断でやらせてもらいましようか。

《ゲイザー、おそらく彼らは威嚇射撃程度じゃ帰ってくれないわ。無駄だと思うけど一応警告してそれでも帰らないようなら少し痛い目にあってもらいましよう》

《……いいの?》

《警告した上でなお仕掛けてくる問題ナシよ。》

空自で使われているF-15やF-2ならともかく、S-32とE/F-117Gと交戦して正規軍と思わなかった、なんて言い訳は通用しない。

私達は空自への所属となつてはいるけどあくまで所属しているだけ。雇われ先で他国の空軍と接触した場合、基本的にその“流儀”に従う。けど交戦となると話は違ってくる。戦闘となれば私達には

自己判断での行動許可が下りて（正確には契約書に明記されている）
《接近中のロシア軍機へ。これより先は日本の領空です。我々は
“彼女”を受け入れません。直ちに追撃をやめ、引き返さない。聞き
入れない場合撃墜します》

警告を英語とロシア語で発し、私とゲイザーは機体を白いSu—4
7と二機のSu—35の間に割り込ませる。

私達の警告に対してロシア軍機の採った行動は——バレル
ルールでの強引な突破だった。

《はあ……。ゲイザー、私が右翼側の機をやる。もう一機の方をお
願い》

《まかせて！》

こつちの警告を無視した以上、遠慮してやる必要はない。——

——火器管制ロック解除。警告を無視したロシア機をシーカーが追
い、ロックする。

向こうもロックされている事に気付いているはずだけどSu—47
の撃墜を優先してるのか、それともこちらが空自の所属だから撃つて
こないとタカを括っているのか。緩慢な動きばかりで本気で回避し
ようとする気はないように見える。

（舐められたものね。向こうもこつちの尾翼後ろに描かれてるE・F社の
エンブレムを見ていればこんな真似はしなかったんでしょうけど）

《FOX3》

月夜を切り裂くようにS—32から機銃弾が放たれ、Su—35の
右翼側の垂直尾翼と水平尾翼を切り刻む。

尾翼を失ったSu—35は機体のバランスが崩れ挙動が不安定に
なる。ゲイザーが相手取った方も同じように尾翼を刻まれ、同じよう
な状態に陥っている。

——E・F社のパイロットではミューベルレベルのエー
ス、そしてオーストラリア国防空軍でも戦技教導隊ならば水平・垂直
尾翼、もしくはカナードのみを機銃で吹き飛ばす（命中ではなく千切
らなければならぬ）のは必須技能エースの嗜みである。

機動性の高いSu—35といえど緩慢な動きしかないのなら

ミューベルとゲイザーにとっては造作もない事だった。

《……最後通告よ。直ちに引き返しなさい。なおも続けるといふなら今度は機体本体を撃ち抜きます》

威嚇射撃じゃなく当てにいったから向こうもこれが脅しじゃないと判ったでしょう。

これでもなお戦うやるとなるとこつちとしても容赦をする気はない。
い。

《ブリヤーチ！》

悪態についてSu-35は二機とも機体をバンクさせ、反転して飛び去って行く。

流石に尾翼を失った状態で戦^やり合うほど無謀じゃなかったようね。

《ВЫ пожалете об этом》

(……え?)

去り際にSu-35のパイロットが小さく、そして早口のロシア語で一言だけ呟く。今の言葉、私の聞き間違いじゃなければ確か――

《AQUILA 02から01へ。ロシア軍機の離脱を確認。……

終わったんだよね?》

ゲイザーからの通信に意識を目前のSu-47へと戻す。

……今は、本来の仕事をしないと。

《Su-47へ。こちらは航空自衛隊所属、TACネームアステル。受け入れ許可の降りた基地へエスコートします。先導するのでついてきてください。了解したら機体をバンクさせてもらえますか?》

こつちの指示に従ってバンクしたのを確認し、機体を加速させてSu-47の前に出る。

《ゲイザー、私が先導するから後ろについて。おかしな真似をしたら容赦なく処断して。……ま、心配はないと思うけど一応ね》

《わかった》

私とゲイザーでSu-47を挟むカタチで小松基地へエスコートする。

エスコートする最中、私はS u—35のパイロットが残した言葉が気になっていた。

(『後悔するぞ』って意味だったわね)

まるで忠告のように言われたその言葉が何を意味するのか。この時の私達は判らず、ずっと後になって知る事になる――。

小松まで戻ってくるとそこは出撃前とは違う意味で騒然としていた。

離着陸を中断させられた民間機があちこちいるし、管制塔からの無線は緊急事態を告げるアナウンスと怒声が飛び交っている。

《VVS、クリアー・トゥー・ランド。ランウェイ24レフト》

エスコートしてきた白いS u—47を先に着陸させるため、念のためロシア語で先に降りるよう伝えると減速して高度も徐々に落としていく。

《VVS、コンテニュー・アプローチ》

問題なく着陸した事を確認すると私とゲイザーも着陸する。

急いで機体を降りて手近にいたE・F社のスタッフに状況を訊くとどうにもおかしな状況になっていた。

「話が噛み合わない?」

「ああ。亡命してきた理由とか日本に向けて飛んできた理由が自分でもわからないって言ってるらしいんだ」

「……は?」

予想してなかった言葉に思わず間抜けな声が出るけどそれは許してほしい。

危険な目にあってまで亡命したのにその理由が自分じゃ判らないってどういう事?」

「……それで問題の彼女は?」

「まだ機体から降りてないぞ。……まああの様子じゃ下手に出れんというのが正しいだろうが」

彼が向けた指先を見ると着陸したS U—47は武装した自衛隊員に取り囲まれている。

……確かにアレじゃ下手に動けないわね。

「機体の方をお願いしていい？ 話をつけてくるわ」

「大丈夫なのか？」

「見ず知らずの人間より通信越しとはいえコンタクトした人間の方がマシでしょ」

機体の降機チェックを任せ、取り囲んだ隊員たちをかき分けてS U—47へ近づいていく。

「銃口を下げてもう少し距離を置いてください！ これじゃパイロットも出てきません」

隊員の壁を抜けて包囲を緩めるよう命令する。越権行為も甚だしいけどこうでもしないと下がってくれそうになるので仕方ないと割り切る。

「彼女の言う通りだ。その物騒な得物を下ろして機体からもう少し下がれ」

私同様取り囲んでいる隊員を押しつけながら八代通室長がやってきて、包囲している隊員達もそれであろうやく銃を下げ機体から距離を置いてくれた。

「中尉、ご苦労だったな。後の事は俺がやるから下がっていいぞ」

「それなんですけどね。私が行かせてもらいます」

「なに？」

「ここまでエスコートしたのは私達ですから向こうの警戒心を和らげる意味でもその方がいいでしょう？」

私の言葉に八代通室長は数秒思索し、「いいだろう」と言っ私に任せてくれた。

「一応聞いておきますけど相手の身の安全なんかは保証してくれるんですよね？」

「当たり前だ。でなけりやそもそも受け入れたりするわけないだろ

う」

「それを聞いて安心しました」

コクピットの近くまで近づき、ノック代わりに装甲キャノピーの下を軽く叩いて呼びかける。

「聞こえてるかしら？ 私は貴女をここまでエスコートしたアステル。貴女の身の安全等は保障してくれるそうよ。機体を取り囲んでいた人達は下がらせたからコクピットから出てきてもらえないかしら？」

私の呼びかけに固唾を飲んで待つ一同。重い沈黙が流れ、視線がコクピットへ集中する。

実際には数秒なんだろうけど体感としてはもっと長く感じる静寂の中、装甲キャノピーから蒸気の漏れ出す音とともにコクピットが開いていく。

「ふう……」

無事出てきてくれて思わず息をつく。

けどそれもそこまで。搭乗していたパイロットが立ちあがると思わず呼吸をする事を忘れてしまった。

彼女の第一印象は一言で言うなら『白』だった。

腰まで届くほどの長く白い髪が風で舞い、ダークグリーンのパイロットスーツを着ているにもかかわらずその色を全く感じさせないほどだ。

……否、白いのはその長い髪だけではない。その肌や爪といった身体のあらゆるところが白一色で染まっている。

彫りの深く？ けた頬ほに花の茎のような細い首。色彩の溢れるこの世界で彼女だけが取り残されているようだった。

—— 神々しさと禍々しさが共にあり、満月を背にどこか儂さを感じるその姿は雪の妖精をイメージさせた。

満月を背にしたまま、ゆつくりと彼女の唯一色がつく事を許されたような赫い瞳が私を捉える。

「私は」

風の音だけが聞こえる静寂の中、満月の夜に彼女の透き通った声が響く。

「ベルクト」

感情が読めない表情のまま、神秘的な空気を纏った純白のアニマは己の名前を静かに告げた――

Order 12 イヌワシへの贈りもの

———ベルクトが亡命した翌日。私と八代通室長は彼女の検査結果を見ながら今後の扱いについて頭を悩ませていた。

ベルクトを受け入れたとはいえそれはこちらの独断に近く、面倒事を避けたがる政府上層部^{うえ}としてはロシアと問題が大きくならないよう構えていたらしいんだけど———

「ロシア側からのアクションがないんですか？」

「ああ、まったくと言っていいほどな。……実は外務省の方でも非公式に問い合わせをしてもらったんだがなんて返ってきたと思う。『そもそもロシア連邦軍にSu-47のドーターは存在しない。存在しないものがどうやって亡命するというのか』だと」

「……それ、本当ですか？」

存在しない、ですって……？ 対ザイにおける切り札とも言えるアニマ・ドーターを？

「加えてどの基地にも昨晚出撃した部隊はないとまで言ってきた。おかしいだろう？ こっちは追ってきた連中の機体を損傷させてるのにそれすらなかったこと扱いだ。妙だと思わんか？」

「それは……確かに」

ただ追いついただけならともかく、私達は撃墜しかねない方法で追い払った。なにもに出撃した部隊すら存在しないとまで言うロシアの主張は亡命というよりSu-47^{彼女}の存在の否定の方に重点を置いているように感じる。

そもそもSu-47という機体自体ロシアは開発をやめ、データのほとんどをE・F社に売却している。そしてE・F社はそのデータを元にSu-47を製造し、社の主力機として使っているので各国の空軍関係者からは『ロシアの開発機だがロシア機ではない』とさえ思われている。そんな中でSu-47のアニマ・ドーターが現れればそれはロシアではなくオーストラリアのアニマ・ドーターだと各国の関係者は考えるだろう。ロシアもそれが判っていない筈はないのだが

「……そういえば追撃していたロシア機のパイロットが気になる事を言っていました。小さく、それも早口のロシア語でしたけど『後悔するぞ』、と」

「なんだそれは。ただの捨て台詞じゃないのか？」

「私もそう思いたいんですけどね……。ただ捨て台詞なら小声の早口なんてこつちが聞き取れないような言い方をする必要がないんです。そこが少し引っ掛かるといえば引っ掛かりますが」

言葉通りの意味なら彼女を受け入れた事を、という意味なんでしょうけど……。

「加えて、ベルクト自身も記憶がないときた。連中の言った事が何を指すのかこれから調べていくしかないだろう」

そう。彼女には記憶がない。小松に降りた時に彼女自身が言っていたが亡命した理由が判らない、という事だったけど彼女にはそもそも自分の“これまで”の記憶がなかった。——より正確に言うならあらゆる記憶領域にプロテクトが掛けられていたみたいで八代通室長とヘンガー主任は夜通し解析に当たっていたけどダメだったようだ。

……これに関しては私じゃどうにもならないから八代通室長やヘンガー主任の腕に賭けるしかないんだけど。

「そういえばベルクトは空自の所属になるんですか？」

「それなんだが上の連中は受け入れこそしたが正式に自衛隊の所属にするかはまだ決まっていない。大方ロシアと後になって問題が起きるのを避けたいんだろう」

「それなら彼女をE・F社の所属として私達アクイラ隊への編入とするのはどうでしょう？ 本社を通してオーストラリア政府へも話を通しますし、Su-47に必要な装備等もこちらで手配します」

私の案は受け入れ先を日本ではなくオーストラリアにするというもの。日本から離れたオーストラリアならロシアも手を出す事は難しいでしょう。

……ロシア製のアニマ・ドーターに興味がある、というのものもあるけど。

「こつちとしては助かるな。ただでさえ予算が厳しい上に俺としても機能解析だけじゃなく機体の調整までする時間はとれん。加えてバービーのアニメは問題児揃いだから、ベルクトの面倒をそつちで見てくださいならこつちも助かるな」

問題児って……確かに否定出来ないけど室長がそれを言っているのかしら。三人の生みの親は貴方でしょうに。

「……取り敢えず本社の方に手配して彼女の受け入れとS u | 4 7の機体に必要なパーツを一式手配しておきます。今小松基地こまつにあるのはS | 3 2のモノなのでS u | 4 7とは合わないモノもありますし」
S | 3 2とS u | 4 7は姉妹機のようなモノだけど同じ機体、というわけじゃないから流用が難しい（もしくは出来ない）部品は運んできてもらう必要がある。

ある程度改修する事になるからその辺りも後でヘンガー主任にも頼まないと。

「それじゃ、その辺りの事は中尉に任せる。何か判ったら呼び出すから取り敢えず下がっていいぞ」

「判りました。……ベルクトは今どこに？」

「空いている士官室だ。処遇が決まってない状態で基地内をうろつかせるわけにはいかんからな」

それでは失礼します、と言つて八代通室長の執務室から出る。

ベルクトのいる部屋に行く前に自室で本社の社長へコール。オーストラリアと日本の時差は二時間前後（日本の方が遅い）なので数コールで繋がる。

《スタークスか。ベルクトの件か？》

《ええ。先ほど自衛隊の方との話がついたのでその報告を》

今回ベルクトが亡命してから私はすぐに今回の事を本社に知らせていた。なので社長もベルクトの亡命の事は知っているし、そもそも私がベルクトをオーストラリアで受け入れるという提案を出せたのも社長がオーストラリア政府に話を通すから引き入れると言われていたからだ。

《ベルクトの受け入れ先ですが、日本側はオーストラリアが受け入

れる事に異を唱える事はなさそうです。むしろロシアとの軋轢を避ける為に扱いに困っていたようですね」

《こつちも政府筋に話を通して受け入れ許可を取った。オーストラリアは正式にベルクトを受け入れる。本来はオーストラリアに来てもらうんだが彼女はアクイラ隊に編入させ、お前達とともに日本での作戦行動に入ってもらおう》

《了解しました。それとS u r 47の予備パーツ一式と彼女が自由に動ける身分の手配をお願いしたいのですが》

《それなら既に手配している。パーツの方は輸送機を護衛する部隊が編制出来次第送る。身分の方はゲイザー同様、お前付きの事務見習いで作っているところだ》

流石は社長。申請するよりも先にやってくれたとは相変わらず動きが早い。

……昨日の今日でここまでの用意をしてくれたという事は関係各所の人達を叩き起こしていたんでしようけど。

《ありがとうございます。……彼女の新しい名前はなんと?》

《ああ。それは――》

社長との電話を終えた私はそのままベルクトを訪ねる。

ここに来てからベルクトは待遇が決まるまで実質的な軟禁状態だったから私としては早く外に出してあげたいという気持ちがあった。

「ベルクト? 入ってもいいかしら?」

聞こえるのははい、と不安が混じったような声。

……無理もないわね。亡命を受け入れたとはいえ部屋から出れなかつたら不安にもなるわよね。

「貴女の亡命だけ……正式に受け入れられたわ」

「本当、ですか？」

「ええ。ただし、受け入れたのは日本じゃなくオーストラリアよ。日本側としてはアニメ・ドクターが増えて戦力の増加を見込めても整備に回せる人員を割くのが難しいそうよ。……私達オーストラリアがロシア機の運用実績があるというのもあるけどね」

実際には日本がロシアとの面倒事を避けたかった面が大きいんだけどこれは彼女に言う必要はない。

……亡命したとはいえ母国が悪いように言われるのは彼女としてもあまり気分のいいものじゃないでしょうし。

「それじゃあ……私はこれからオーストラリアに行かなければいけないんですか？」

「本来ならね。ただ貴女のオーストラリアでの所属はE・F社になるし、そこでの配属先は私のアクイラ隊になるからこのまま日本にいてもらう事になるわ。……ま、一度は行く必要があるんだけど」

南洋の防衛ラインの面から考えるとベルクトを日本に留めるメリットははつきり言っただけとんどない。けどオーストラリアで研究はともかくドクターの整備出来るのはヘンガー主任達だけだから今は日本でないと整備が出来ないというのが実情なんだけど。

「……貴女の事に関しては以上……ともう一つあったわ。――

――貴女の名前よ」

「名前、ですか？」

私に言葉に不思議そうに首を傾げるベルクト。

……うん、どう考えても言葉が足りなかったわね。

「あー、説明を飛ばしてたわ。貴女はオーストラリア……もつと言えばE・F社で私付きの事務処理をする見習い扱いなの。E・F社としては貴女を私達と同じように社員として扱うからファミリーネームがないとおかしいでしょう？」

――ゲイザーに対してはもだけどE・F社がアニメを私達と同じように人間扱いする事を色々と言ってくる人は確かにいるし、E・F社の中にもそういう人達はある。

けど私はせっかく人の身体を持ったのなら人間らしい生き方をし

て、『人』の感性を持つてほしいと思ってる。

「『ベルクト・クロードイア』。これが私達が貴女に贈る名前よ」

「ベルクト・クロードイア……」

私達の送った名前を噛みしめるように呟くベルクト。

……記憶がない彼女がどんな想いで受け取ったのか私には判らない。それでも、贈った側としては彼女にとってプラスであってほしいと思う。

「……気に入ってくれたかしら？」

「は、はい。ありがとうございます！」

さつきまでの不安そうな表情かおから一転して花のような笑顔を浮かべるベルクト。

……うん。昨晚の超然とした雰囲気より今みたいな笑顔の方が似合ってるわね、この娘。

「それじゃ、改めて自己紹介をさせてもらおうわね。私はE・F社のアクイラ隊長のミュベール・スタークス。……TACネーム、アステルの方が貴女にはいいかしら？」

「え、えっと……」

どっちで呼ぶのか本気で悩みだすベルクト。

——ちなみに。本人たちは気付いていないし、それを指摘するものもないが傍から見ればミュベールが年下の娘を困らせているようにしか見えないというアレな光景だったりする。

「えっと……。それじゃあ、ミュベールさん、と呼んでもいいですか……？」

「ええ、いいわよ。それとさつきも言ったけど貴女は私のアクイラ隊の所属になるわ。隊での貴女は三番機、コールサインはAQUILA 03よ。……二番機は私と一緒に貴女をここまでエスコートしたEF-117Gのアニマ、ゲイザーだけど覚えてる？」

「あ、はい。あの紅いEF-117G-ANMですよ？ まだ会えていないんですけど……」

でしようね。

ここに着いてからベルクトはずっとこの部屋にいたし、ゲイザーに

はベルクトの扱いが決まるまでは接触しないよう言いつけていたし。
……ま、それもここまでなんだけど。

「それじゃ、顔合わせを兼ねて三人で少し出かけましょうか。貴女の服とか色々と買わないといけないしね」

「私の、ですか……?」

「ええ。いつまでもパイロットスーツでいさせるわけにはいかないもの。普段着とか色々必要でしょ?」

「え、でも私お金を——」

「その心配はいらないわ。お金なら私——というか会社に経費として請求するから気にしないでいいわ」

仮に経費として落とせなかつたら私が払えばいいだけなんだし。

ベルクトみたいに可愛い娘なら多少大目に使っても惜しくないしね。

「それじゃ、行きましょうか。ウチの二番機——ゲイザーも呼べばすぐに来るしね」

そうしてゲイザーに「これからベルクトの身の回りのものを買に行くんだけど一緒に来る?」というと「行くっ!」と即答。それどころか「それじゃ車の用意しとくねー」と言っただけで電話を切ってしまった。

「あのミュベールさん? EF-117Gはなんと……?」

「即答で行くとききたわ。おまけに車の用意もしておくつて。あの娘も貴女の事を気にかけてたから一緒に出れるのが嬉しいんですよ」

あの娘はイーグルとは別ベクトルで人と触れ合うのが好きで、それはアニマ相手でも変わらない事が小松に来て判ったし。

「だからそんな不安に思わなくていいわ。話とかは多分あの娘の方がら振ってくるから」

「は、はい」

そうしてベルクトと話しながら基地の入口近くまで来ると私には聞き慣れた、けど自衛隊の車両とは明らかに異なるエンジン音が聞こえてくる。

「お待ちせー」

そう言っただけでゲイザーが乗ってきたのは基地にある車両ではなく黒

のスポーツタイプの車。どう見ても軍用に見えないソレは言うなればミュベールがオーストラリアから持ち込んだ“私物”である。

「ありがと、ゲイザー。ソレの調子はどうか？」

「問題なさそうかな。少し上まで回したけどキレイに回ったし」

そう言つて運転席から降りるゲイザー。基地の外だとゲイザーは運転出来ない（技術的には大丈夫だが国際免許がない）から必然的に運転するのは私になる。

「ベルクト、紹介するわ。この娘が昨日私と一緒に貴女をエスコートしたアクイラ隊の二番機。EF-117Gのアニマ、ゲイザーよ」

「初めまして、ベルクト。地上で会うのは初めてだね。わたしはEF-117G-ANM、ゲイザー。ミュベールが言った通りアクイラ隊の二番機で電子戦時々砲撃を主に担当してる。よろしくね！」

自分の行っている事を天気予報のように言うゲイザー。

……間違つてはいないんだけどその言い方はどうかと思うんだけど。

「えつと、アクイラ隊の三番機になりましたベルクトです。EF-117G、よろしくお願いします」

おずおずと自己紹介するベルクトに何か思うところがあつたのか、ゲイザーが顔をしかめる。

「……ゲイザー」

「え……？」

「EF-117Gじゃなくてゲイザーって呼んでほしいな。私は確かにEF-117Gのアニマだけど、それだとEF-117Gという機種全体を指して言われてるみたいだからここに『わたし』を呼ぶならゲイザーって呼んでほしいな」

わたしもゲイザー・ラツセルって名前をもらつてるからね。そう言うゲイザーの言葉は横で聞いていたミュベールにとつても意外過ぎるモノだった。

ゲイザーは自身が兵器だと自覚している一方で『ゲイザー・ラツセル』としての在り方を大事にしてくれている。矛盾してるとは思うけど私はそれでいいと思う。

少なくとも私はこの娘達に任務を果たすだけの機械的な存在にはなつてほしくないし。

「えっと……ではゲイザーさん、でいいですか……?」

「うん、いいよ。それじゃ改めてよろしくね、ベルクト!」

そう言つて手を差し出すゲイザー。一瞬頭に?マークを浮かべたベルクトだったけど握手を求められていると気付いてすぐにゲイザーの手を握つた。

(この分なら心配はいらなさそうね)

二人の微笑ましいやり取りを見てホツとする。どうなるか心配なところもあつたけどこの分なら二人とも大丈夫そうね。

「それじゃ二人とも乗つて。あ、ゲイザーは今日後ろね」

「はいはい」

そうして私達は出発し、目的だったベルクトの身の回り品を買い揃えられたけどそれはもう色々であつた。

……主にゲイザーがベルクトの服を買う時にこれでもか、という程の服を持つてきて着せ替え人形にしたり(私も少しそれに乗つたけど)、昼食にした時も調子に乗つてベルクトに食べさせてようとしてベルクトが真っ赤になつたりだ。

そして今は休憩を兼ねてカフェで一休みといったところ。始めは遠慮していたベルクトだけど少しずつ彼女のほうからも話しかけるようになってくれた。とはいっても記憶のない彼女が話せる事は決して多くない。

彼女にはロシアのどの基地から出発したのか、という記憶すらなかった。気付いた時には空の上で二機のS u | 3 5に追われていたらしい。

「それじゃあ貴女にとってはそこが始まりなのね?」

「はい。ただ……」

「ただ?」

「……一つだけ、覚えている命令があるんです」

「命令?」

記憶のないベルクトが唯一覚えているであろう命令。その言葉に

私とゲイザーの言葉が思わずハモる。

「逃げろって。全てを捨ててどこまでも飛び続けろと」

逃げろ、ね……。彼女の記憶がロックされているのはその命令と
にか関係があるのかしら？

「それでベルクトは日本に来たんだ。ヨーロッパ方面を避けたのはロ
シア軍の増援が上がるのを防ぐため？」

「そこは……わかりません。ただ命令した人はそれをわかっていたん
だと思います」

でしょうね。私も同じ立場ならそうするでしょうし。

「それじゃゲイザーのEF-117はともかく私のS-32を見た時
は焦ったんじゃない？ アレも一応ロシア機になるから」

とはいえ話が重くなりそう……というより基地の外であまりこう
いった話をするのはよろしくないから話題転換を兼ねて昨晚初めて
接触した時の話を振る。

「そうですね。最初は先回りされたのかと思いました」

「まあ確かに正面からロシア系の機体 cameたらそう思うよねー。でも
ミュベールのS-32って派手だからすぐ違うってわかったんじや
ない？ あんなカラーリングの機体はアグレッサーぐらいにしかい
ないし」

「ちよつと。あんなのとはなによ、あんなのとは」

……確かに少し派手かもしれないけどアニメ・ドーターの機体に比
べればだいぶ大人しいと思う。

——いや、そもそも、

「ベルクトならともかく私の機体より目立つ色のゲイザーには言われ
たくないわね」

「む、仕方ないじゃん。わたし達のはカラーリングじゃなくて肌の色
みたいなものなんだし」

お互いの機体カラーについて好き放題言い合う私とゲイザー。勿
論お互い本気で言ってるわけじゃないただの軽口だ。

———
—

「あ、あの！ 喧嘩はよくないと思いますー！」

——ベルクトにはそう見えなかったようで真剣になって止めようとしてきた。

「……つく」

「っ……」

……マズい。何がマズいってベルクトが真剣だから笑っちゃいけないんだけど、それが空回りだって事が判るから笑いがこみあげてくる……！

「っ……ダ、ダメ。わたし、これ以上無理……あは、あはははは！」

「ちよ……、ダメよ、ゲイザー。笑っちゃベルクトに悪いわ……つぶ」

私達の反応にきよとんとするベルクトだけど笑った理由に気付くと顔を真っ赤にして抗議してきた。

「お二人ともひどいです！ 私、お二人が喧嘩するかと思ったんですよ!？」

「ゴ、ゴメンね、ベルクト。笑うつもりはなかったんだけど私達からしたらいつもの軽口みたいなものだったから……つぶ」

弁解するミュベールが見るからに『不機嫌です!』というオーラを出すベルクト。……なのだがそんなベルクトを見て二人揃って「可愛い……」などと思っているあたり反省してなさそうである。

「あれ？ ミュベールさんとゲイザーじゃないですか」

声をかけられた方を向くとそこには小松で唯一民間人の知り合いの明華ちゃんがいた

「今日はお休みなんですか？」

「ええ。彼女の案内を兼ねてね。……ちようどいいわ。明華ちゃん、この娘はベルクト・クロードイア。ゲイザーと同じくE・F社の事務見習いで私の下で研修する事になったの。で、ベルクト。彼女は明華ちゃん。鳴谷君の……彼女？」

「ち、違いますっ?! わ、私と慧はそんなんじゃない……!」

一瞬で顔を真っ赤にし否定する明華だが残念ながらここにいるのはミュベールだけじゃないのである。

「ふーん？ 明華ちゃん、その割には顔が真っ赤だよ？」

「うう……」

慌てる明華へ楽しそうに追撃をかけるゲイザー。ゲイザーから顔を逸らすと、明華は心配そうに自分を見るベルクトに気付く。

そしてなにか感じるものがあつたのか二人は無言で手を取り合い自己紹介をする。

「えっと、あたしは宋 明華。明華でいいよ」

「ベルクト・クロードディアです。よろしくお願いします」

ついさつきミュベールとゲイザーに振り回された者同士のせいかわり合った手を通じてシンパシーを感じているようだった。

「あら、二人とも仲良くやれそうね」

嬉しそうに言うミュベールだが、二人からしてみればきつかけがきつかけなので素直に喜べなさそうだが。

「ところで明華ちゃんは買い物かなにか？」

「あ、はい。夕飯の支度をするのに買い物をしようと思って」

「なら、一緒に行かない？ 私達は車で来てるから荷物があつても困らないし、からかつたお詫びじゃないけど家まで送ってあげる」

「いいんですか？」

「ええ。二人も大丈夫よね？」

私の提案にゲイザーとベルクトも賛成し、4人で買い物をする。

明華ちゃんのものだけでなく、私やゲイザーの嗜好品とベルクトにもお詫びを兼ねて興味を持ったらしい小説を買ったりと本当に楽しい時間になった。とはいえ私達はともかく明華ちゃんは夕食の支度があるから夕方になる前に帰らないといけなかつたから私達もそれに合わせる事にした。

その帰りの車中、明華ちゃんは複雑そうな顔で切り出してきた。

「今日ありがとうございます。……でも本当によかつたんですか？ 私の買い物代金まで持つてもらつて」

「いいのよ。こういう仕事をしてると減るスピードより貯まる方が早いよ。だから気にしないで。これぐらいは減つた内に入らないから」

「でも……」

うーん。私としては本当にこれぐらいは大したことないんだけど……あ、そうだ。

「それなら私とデート一回、ってのはどう?」

「ええええっ!?!」

ミュベールのデート発言に思わず声を上げるゲイザー。なおベルクトと当の本人である明華はあまりの内容にフリーズしている。

「ちよ、ちよっとミュベール。それ本気?」

「本気よ。そもそも気に入ってない人をデートに誘う訳ないでしょうが」

ゲイザーの言葉に当然でしょ?と言外に言うミュベール。そこでフリーズしていた明華が再起動した。

「あ……ごめんなさい。その……こんな面と向かってデートに誘われた事ってなかったのよ」

ましてや同性から見ても美人と言えるミュベールである。明華の反応はそんなおかしなものではないだろう。

「ま、すぐに答えを出さなくてもいいわよ。私も無理強いする気はないし」

(とはいっても明華ちゃんは鳴谷君が好きみたいだからたぶん断るだろうでしょうね。それで時間が経てばうやむやに出来るでしょう。……少し惜しい気もするけど)

惜しいか思いながらも相手に考える時間を与えてうやむやにしようとするミュベール。

と、そこでようやくミュベールの言葉から立ち直ったベルクトがミュベールの趣味を知らなければ当然といえる疑問をぶつける。

「あの……ミュベールさん、明華さんは同じ女性ですよ……?」

「相手を好きになるのに性別なんて些細な事よ。確かに法の上では認められてない事が多いけど本当に大事なのは相手という幸せかどうかでしょ」

ベルクトの疑問に堂々と言い切るミュベール。

……言っている事は立派なのにそこはかたなく残念な気配をゲイザーだけ感じているが。

「……ミュベールさんはすごいですね。あたしもそんな風にはつきり言えたらって思うんですけど」

「明華ちゃん……」

羨むような言葉を漏らす明華。

ミュベールとゲイザーだけでなく明華が慧をどう思っているのか気が付いて（ベルクトは確信まではしてないが）いる。

だからこそ、明華の今の言葉にどれほどの想いが込められているのかも感じ取っていた。

「……その、もしミュベールさんがよければ相談に乗ってもらってもいいですか？ もちろんちゃんとお礼はしますし」

……お互い相手に言い出せない理由は違えど、二人揃って私に相談とかこういうところは似てるわね。

「ええ。私でよければいつでも」

そして私の答えも以前鳴谷君にしたのと変わらない。……流石に明華ちゃん相手に『その時まで生きていたら』なんて冗談はいわないけど。

「それじゃ明華ちゃん。私の連絡先教えとくわね」

「あ、それじゃあたしのも」

そうして連絡先を交換し合う私達を羨ましそうに見てくるゲイザーとベルクト。こういう時にベルクトはともかくゲイザーは黙っていないわけ——

「ズルル——。明華ちゃん、わたしとも交換しよ！」

「いいよ。ベルクトのも教えてもらっていい？」

ゲイザーの提案に即答し、同じ提案を明華ちゃんはベルクトにもしてくれた。

「え……いいんですか？ 私、すぐオーストラリアに行くかもしれないんですけど……」

……まあ確かに一度は彼女自身がオーストラリアに行く必要がある。だからベルクトの言う事は間違っていないんだけどそれを理由に遠慮しているのは見え見えだった。

「すぐ行くかもしれないからってもう会えないわけじゃないでしょ？

せつかく友達になれたんだからあたしは仲良くなりたんだけど」

「明華さん……」

明華ちゃんの言葉に私はちよつと感動した。ベルクトの事情を知らないとはいえ素直に『友達になりたい』と言ってくれた明華ちゃんに感謝する。

……私は隊長という立場だから『仲間』にはなれても『友達』になるのは難しい。——だから、明華ちゃんの言葉は私にとっても嬉しいものだった。

——だから、私に出来るのはベルクトの背中を押ししてあげる事だろう。

「ベルクト。——貴女の思うままにしていいわよ」

「——はい！ その、明華さん。私の方こそよろしくお願いします」

操作を教わりながら連絡先を交換するベルクトを見て、私は今日連れ出して本当によかったと思う。

明華ちゃんは私に今日のお礼を、と考えているみたいだけど私には目の前の光景で十分過ぎる、むしろ私の方からお礼をしたいぐらいだ。

いつの間に加わったのか、ゲイザーもちやつかりと二人の間に入って楽しそうに話している。

その光景を見て私はこっそりカメラを起動して、三人の写真を撮る。

（盗み撮りみたいになったから後で三人に送る時に話しておきましょう）

——ミューベールの撮った写真。そこに写っていたのはベルクトを中心に笑い合う目の前の三人。

人とアニマ。そんなものを感じさせない笑顔溢れる写真だった。

Order 13 Order Maid

《こちらAQUILA 01。間もなく目標空域エリアに到着。戦況は？

《こちらウルフィ。制空型が四機、スクランブルしたアクター、ピジョン両隊と交戦中。残念ながらこちらが劣勢だ。貴機は両隊の支援に入れ》

《ラジャー》

到着した空はミサイルと機体の排気煙、そして火線とチャフ・フレアが彩る乱戦模様になっていた。ウルフィAWACSはアクター、ピジョンは合わせて八機と言っていたけどレーダーに映る友軍機の輝点は六。

……間に合わなかった事に歯噛みするけど今私に出来るのは悔いる事じゃなくて戦う事。撃墜されたパイロットには無事ベイルアウト出来た事を祈るしかない。

《ACTOR、ならびにPIGEON隊へ。こちらAQUILA 01。加勢に入ります。私が二機やるので残りをそちらでお願いします。……やれますか？》

《こちらACTOR 01、了解した。三対一ならこっちでもなんとかしてみせる》

空自側のF-15Jの内、二機が三対一のドッグファイトに持ち込む。

……このやり方は私達E社が対ザイの戦術として使っている方法で、機数が同等だと使えないけど今回みたいに戦力比が2:1以上なら有効になる。

本来機動力で勝る相手に格闘戦は悪手。けど数で勝るならやりようはある。同時に仕掛けるんじゃないやなく一機目がくいつき、ついていけなくなったら次がそこからくいつく。パイロットの技量に左右される戦法だけどこの戦やり方の方がザイの撃墜率も、そして交戦した部隊の生還率も高い。ゲイザーのようにミサイルの推進系を直接操作するならともかく、通常のミサイルじゃEPCMに妨害されて命中率は著しく落ちる。ならいっそミサイルに頼らず技量がモノを言う格

闘戦に持ち込む。

幸い、空自のパイロットの練度は世界的に見ても高い。モノにするのにさほどの時間はかからなかった。

《AQUILA01、FOX1。——スプラッシュ・ワン》

ズイが接近してくるまでに足の長いセミアクティブ空対空ミサイル^Mで確実に数を減らす。この数日はスクランブルが頻出していて身体はもちろん、機体にも優しくないのも一つの戦闘にかける時間も短縮させておきたかった。

……別のスクランブルで上がり、その最中にこの空域の支援要請が飛び込んできたから残弾は元より燃料の心配もあったし。

本来私の隣にいるゲイザーも別のスクランブルで出撃させないといけない程で、どうやら向こうも私と同じような状況らしい。幸いゲイザーは相手が少数ならドッグファイトに持ち込んでも勝てるし、自機のミサイルが尽きてもミサイルベッドになる友軍機があれば撃墜出来るから連戦の負担は私よりも軽そうだった。

《AQUILA01、FOX2!》

受け持った最後のズイをロックオン、ミサイルをリリース。向こうもそれに気付いたのか鋭角的な急旋回で躲そうとするも至近距離でミサイルが炸裂し、機体の半分を喰いちぎる。

《AQUILA01、FOX3》

あれだけ損傷していれば放っておいても墜ちるだろうけど念には念を入れてトドメを刺す。

アクター、ピジョンの両隊も受け持ってくれたズイを墜としてレーダーからズイの反応は全て消えていた。

《……こちらAQUILA01。ごめんなさい。もう少し早く到着していれば——》

《PIGEON02からAQUILA01へ。貴官が謝ることはない。AWACSの話じゃこっちの支援要請を受けたのは別空域で交戦してる時だったんだろ？ むしろそんな状況で来てくれたんだ。感謝してる》

《それに落とされた奴らは無事にベイルアウトした。すぐには無理だろうがまた復帰してくるさ》

———そっか。ベイルアウト出来てたのね。

それを聞いて肩の力が抜ける。機体の損失は確かに痛いけどパイロットの替えはない。このエリアのザイを一掃して救助の為のへりも近づけるからベイルアウトしたパイロットも大丈夫でしょう。

《こちらウルフィ。空域のクリアを確認。帰投を許可する》

《AQUILA01、ラジャー。帰還^Rする^T》

小松に戻ると別のスクランブルに対応していたゲイザーも戻ったばかりなのか、「疲れた〜」なんて言ってる。タラップに座り込んでる。

そんな帰還直後の私達にベルクトがタオルを差し出してくれた。

「ミュベールさん、お疲れ様です。ゲイザーさんもどうぞ」

「ありがと、ベルクト」

「ありがとー！ あー、ひんやりして気持ちいい……」

ゲイザーの言う通り、ベルクトのくれたタオルは水で濡らしてあったのか気持ちがいい。それなりの汗をかいていたからベルクトのこういう心遣いは嬉しかった。

そうして機体の傍で身体を休めていると聞き慣れてしまったスクランブルアラートが聞こえてくる。

「……またスクランブル？ 続くわね」

滑走路に目を向けると山吹色サンライトイエローのF-15Jが滑走して飛び上がって行く。今回のインターセプターはイーグルみただけど……元気娘のイーグルも連日のスクランブルでイラついてるのか上がり方が荒っぽい。

……あんな垂直上昇に近い上がり方をしたら舟木さんに怒られるんじゃないかしら。

「はあ……。いい加減にしてほしいよ。ここんところずっとスクランブルで帰りにも別のエリアに行くとか疲れるし……」

「そうね。スクランブルが上がってその帰りに別のスクランブルに出るなんて本来は滅多にないもの」

出撃したスクランブルと撃墜数に応じて報酬は上がる。けどどうもスクランブルが続くと機体の整備は勿論身体への負担も小さくない。

……一応私達傭兵は違約金を払えば出撃拒否をする事は出来る。けどこうも多いと一度拒否してもすぐ別の出撃要請がくるから結局やる意味がないのよね。

「そんなに多くのザイが？」

「この一週間は毎日スクランブルね。一日一回は必ずあるし多い時はそれこそ何度も。今日だって私は二回、ゲイザーもよね？」

「だね。ミュベールとは別で上がってそのまま他の戦域にゴー、だったからね。稼げるのはいいけど少しは遠慮してほしいよ」

ゲイザーも始めはEMLを持って上がっていたけどあまりにスクランブルが多いから今は私達同様ミサイルを使ってる。元々EMLは使用後のメンテナンスが重要な装備だから必要な時に使えない、なんて事になったらシャレにならないからミサイルで済む出撃はそれ以上で上がってる。

「……ごめんなさい」

「ベルクト？ どうして貴女が謝るのよ」

「皆さんが戦っているのに、アニマの私は地上で待っているだけですから」

「それは仕方ないよ。ベルクトのドーターはメンテと装備の改修がまだ済んでないでしょ？」

ゲイザーの言う通りベルクトのドーターはメンテナンスはともかく、西側の装備をえるようにするための改修がまだ終わっていない。必要なパーツと増員された整備班の人達は三日前に到着したけど頻発するスクランブルのせいで基地全体で整備関係の人達が忙しく、ベルクトのドーターの改修になかなか人を回せないのだ。

——余談だが、この時小松に来た輸送部隊は輸送機がXB—70を改修したC—70（オーストラリア国防空軍所属機）が二機。護衛にSu—47とYF—23が一個小隊ずつ（こちらはE・F社所属部隊）とかなり独特だったため、撮影に来ていた航空マニアが狂喜乱舞していたりする。

「それだけじゃないんです。……私は稼働歴そのものが少ないですから」

そう、Su—47を実戦配備しているのはE・F社だけで、それも運用されて一番古い機体でも五年に満たない。F—15やSu—27のような運用実績がないからSu—47のアニメであるベルクトは経験そのものが少ない。

（…加えてこの娘は記憶がないからE・F社で運用された経験も引き出せるかが怪しい。……空いた時間があればシミュレータで訓練をするようにってはあるけど記録を見る限りまだ拙い。だから改修が済んでも出来れば実際に飛んでの訓練をしたいところなのよね）

ベルクトへの訓練プランを頭の中で組み立てるミュベール。彼女としてはベルクトの事を考えていたが、ベルクトは思案顔のミュベールを見て自分が無言で責められていると思ったのだろう。

「変……ですよね」

——だからだろうか。その声が自信を責めるようなものだったのは。

「ベルクト？」

「……私には過去の記憶がなくて、アミマなのに戦った記録すら見つからない。亡命を希望しておいてその理由も説明ができなくて……私があなた方の立場なら怒り出すと思います」

——その言葉は、ベルクトが抱えている負い目の発露だった。

俯きながら言ったベルクトの表情はミュベールからもゲイザーからも見えない。けれどその声色だけでベルクトが自身を責めている事に気付くには十分だった。

「……ベルクト。貴女を助ける時に戦力として加える打算がなかつ

た、なんて綺麗事は言わないわ」

事実、ミュベールはベルクトをE・F社の戦力にする事を考えていた。だからこそベルクトが亡命してすぐに報告を上げていたわけだが。

「でもね。アニマだからといって道具扱いする気も私にはないの」

「え……？」

……改めて言葉にするのは恥ずかしいけどベルクトにははつきり言った方がよさそうね。

ミュベールはベルクトの正面でしゃがんで少し見上げるカタチで言葉を紡ぐ。

「私はね。貴女達を“人のカタチをしているだけのモノ”と見る気はないわ。理屈として——いえ、実際そうなんだけど私はそんな風に割り切れないのよ」

それは以前ミュベールが慧に問われた時の答えに近い。違いがあるとするとあの時『言える筋合いがない』と意図的に黙っていた事を言おうとしている事だろう。

「私にとって貴女もゲイザーも大事な仲間で妹分よ。そんな貴女達を道具として見れるわけがないでしょう。——だからそんな泣きそうな顔をしないで」

ベルクトの頬に手を当てて己の本心を告げるミュベール。

傍で聞いているゲイザーは『相変わらず甘いなあ』と思っていたりするが、嬉しそうに顔が緩んでいるので満更ではなさそうである。

「それに、記憶がないならこれから積み上げていけばいいわ。思い出せない記憶はもしかしたら取り戻せないかもしれない。——

——けど、『これから先』の思い出は作っていく事が出来るんだから」

「……………っ！」

その言葉が引き金となつたのか、ベルクトはミュベールに抱きつく。ベルクトを抱きとめたミュベールはその身体が小さく震えている事に気付く。

「私は……………ここにいていいんですか？ 皆さんに迷惑しかかけてないのに……………」

——否。身体だけではなく、その言葉も震えていた。

ベルクトは亡命しておきながら何も出来ない自分を責めている。受け入れた私達に返せるものがないから、と。

「勿論よ。さつきも言ったでしょ。記憶がないならこれから積み上げていけばいいって。これから学んで、未来あとで返せばいいのよ。——

——貴女はここに生きてるんだから」

そんなベルクトの問いをミュベールは肯定する。それがミュベールの答えだった。

「それじゃあわたしからもいいかな」

「ゲイザー?」

空気を読んでこれまで二人のやり取りを傍観していたゲイザーだったが、彼女もベルクトに思うところがあるらしい。

「ベルクトは記憶がないことを気にしてるけどわたしはそのことを悲観的に考えなくていいと思うよ? どちらかというところある意味チャンスみたいなもんだし」

「……それは、どういう意味ですか?」

ベルクトの表情が硬くなる。それに気付かないゲイザーではないのだが、気付かないフリをして言葉を進めていく。

「ロシア軍アニメマの『ベルクト』としてじゃなくてE・F社の『ベルクト・クロードイア』……一人の個人として生きるのもアリなんじゃないかと思うよ?」

ベルクトにとってその言葉はあまりに予想外だったのか。大きく見開いた目をゲイザーに向けている。

……当の本人は『えっ、なにその反応?』と困惑気味だが。

「上の人達はいい顔じゃないと思うけどさ。わたしはそういうのもアリだと思う。ミュベールだってベルクトが選んだんなら上がなんと言おうと応援するでしょ?」

「まあね」

自分をアニメマとしてではなく個人として見てくれる二人。——

——そんな二人にベルクトは既視感を感じ、一瞬だけ視界が白く染まる。

「……？ ベルクト、どうかした？」

「あ、その……一瞬意識にノイズのようなものを感じて……」

「大丈夫？ 調子が悪いなら検査を受けた方がいいんじゃない？」

「大丈夫ですよ。もうなんともありませんから」

そう言うベルクトは確かに本当にになにもなさそうで、これ以上言う
と逆効果になりそうだった。

「それじゃあ二人とも。そろそろシャワーを浴びて着替えに行きま
しょうか。ちよつと長話になったから次の仕事まであまり時間がな
いわよ」

そう、ここはまだハンガーの中。——もつと言えばミュ
ベールとゲイザーは着替えすらしてないから汗をかいたままだ。

そして彼女達が言う次の仕事は汗をかいたまま出るのはよろしく
ない内容なので急ぐ必要があった。

「うわ、ホントだ。ちよつとヤバいかも」

「ベルクト、悪いんだけど先に行って準備をお願いしていい？ 私と
ゲイザーはシャワーで汗を流してくるから」

「……はい！ しっかりやっておきますね！」

そう朗らかに言うベルクトを見て、ミュベールとゲイザーは改めて
自分達に出来る事はしてあげようと心の中で誓うのだった。

——昼飯を食べるなら一二時前に行ってみろ。面白い
ものが見れるかもしれないぞ。

グリペンの検査が終わって食堂に行こうとした俺達に八代通さん
がそんなことを言ってきた。

「グリペン、今日食堂でなにかあるのか？」

隣りを歩くグリペンに訊くも首を横に振った。特になにかあるわ
けじゃないらしい。

(まあ行けばわかるよな)

そして件の食堂に着いて何の気なしに入ると――

「あ、いらっしやいませ」

アルビノのアニマが給仕をしていた。――メイド服で。

「べ、ベルクト。どうしたんだ？ その格好……」

「えつと……変ですか？」

「いや変っていうか……」

自衛隊基地の食堂にメイドがいたら誰だつてこうなると思う。

「あれ？ どうしたの、慧君。注文もせずに突っ立って。……あ、もしかしてベルクトに見惚れてた？」

「いや、そうじゃ――」

なくて、と続けようとして固まる。

「……ゲイザー。お前もなんでそんな恰好してんだ……？」

振り向いた先にいる赤髪のアニマもベルクト同様にメイド服を着て給仕をしている。

……いやほんとなんなんだ？

「私とベルクトだけじゃないよ？ ほら、あそこ――」

ゲイザーが指をさした方を見るとそこにいたのは三人目のメイド――ミュベールさんだった。

あ、頭がいてえ。いつからここはメイド喫茶になったんだ。

ちなみにゲイザーとベルクトがミニスカートなのに対してミュベールはロングスカートでどこことなくデザインも二人のものとは違い、眼鏡までかけている。

二人がメイドならミュベールさんはその上のメイド長のような雰囲気をつくりになっている。

「そもそもなんで食堂でメイドをしてるんだよ……」

「あ、それは「ベルクトーツ！ 来たよーっ！」……ごめんださい。また後で」

ゲイザーに呼ばれたベルクトはぱたぱたと軽い音を立てて配膳台の方へ行き、手際よくトレイの準備をしていく。

呼んだゲイザーの方を見ると食堂に入ってくる私服の人達が見え

た。

「な、なんだ？」

「見学ツアー」

次から次に起きる予想外の出来事に啞然としていると隣にいたグリペンが呟いた。

「広報班がやってるPR活動。一般の人達を受け入れて基地の仕事を説明する。午前の部が十時から十一時でそのあと体験喫食」

「体験喫食？」

「食堂で自衛隊のご飯を食べてもらう」

ああ、なるほど。

要はアキラ隊の人達がツアーの人達の相手をしてるってことか。だから十二時前に食堂に行行って言ったのか。三人がツアーのスケジュールに合わせて働いてるから。

———って

「いや、なに考えてんだあの人達っ!？」

傭兵と亡命したアニマが民間人の相手……しかもメイド服でとかやるのが予想外すぎる。現にツアーに来た人達はメイド服の三人を見て目を白黒させている。

「驚いた？」

あまりの光景に驚いていると集団から離れたミュベールさんがこつちにやって来た。

「驚いたなんてもんじゃありませんよ。そもそもなんでそんなにメイド服があるんですか？ ……まさか、ここの備品じゃないですよね？」

メイド服が備品の基地とかいくらなんでも嫌すぎる。

「流石にそれはないわよ」

うん、そうだよな。メイド服が備品なんて———

「全部ゲイザーの私物だしね」

「……は？」

待て。今ミュベールさんはなんて言ったんだ？

「あのミュベールさん。もう一度言ってもらっていいですか？」

「だから全部ゲイザーの私物だ、って言ったのよ。ああ、私が今してる

伊達眼鏡は自前だけど私達が着てるメイド服は全部ゲイザーの私物よ?。」

全部ゲイザーの私物?。」

え、ゲイザーってこういう服が好きなのかつ!?

「あ、グリペンも着る? 予備はまだあるからすぐ着替えれるよ?。」

「私は別に……。」

「似合うと思うんだけど……あ、そうだ。グリペン、ちよつと耳貸して。——」

「着る」

「そう言ってくれると思ったわ。……ゲイザー! グリペンに予備の服お願いい!。」

「はいはい!。」

メイド服を薦められて一度は断るグリペンだが、ミュベールさんが耳元でなにか言うのとグリペンは一転して乗り気になった。(読者の皆様ならグリペンが何を吹き込まれたか想像はつくと思う)

そうしてゲイザーに連れられて奥に行ったグリペンだったがものの二、三分で着替えてきた。

——ヤベえ、すごく似合ってる。

「慧、どう?。」

そう言いながら、くるつと回るグリペン。ミニスカートタイプのメイド服だからそれに合わせて裾がふわりと舞い、スカートの中がちらりと見える。

思わず目を逸らすけどミュベールさんとゲイザーには見られてたのかこつちを見て微笑んで……訂正、ミュベールさんはともかくゲイザーの奴はニヤニヤ笑っていやがった。

「ダメだよ、グリペン。そんなにスカートを翻したら見えちゃうでしょ」

俺の方を見てニヤニヤしながらもグリペンを窘めるゲイザー。

助かった。さすがに俺から言うのは恥ずかし過ぎる。なんだかんだで注意してくれるなら安心——

「そういうのは見せるんじゃないなくて『見えそうで見えない』ようにした

方が慧くんも喜んでくれるよ、きつと」

——できるわけがねえ。

「おいゲイザー！ 一体なに言ってるんだよ?!」

核爆弾並みにトンデモナイことを言うゲイザーに思わず突っ込む。

「え？ 男の子ってしつかり見えるより見えなかった方が想像力が掻き立てられるから好きなんじゃないの？」

「お前誰からそんなこと聞いたんだよ?!」

「ネットとE^ッ F^チ社の先輩方。好きな人に見せるチラリズムについて色々熱弁してくれる人、多かつたよ?」

……頭が痛くなる。なんてことを学んで教わるんだろうか。

そして話のインパクトが強くて忘れられているがここは食堂。それもお昼時という事に加えて見学に来ている一般の人達もいる。

結果、どうなるかというところリズムがなんなのか親に訊く子がいたり俺達から目を逸らす人多数。

……一部『なるほど』と感心してる女の人達がいるけどそこは見なかったことにしたい。

(余談だが、後日ゲイザーに教えたのは女性社員が中心だと知った慧はE。 F社の人間に若干の苦手意識を持つようになったとか)

「ミュベールさんいいんですか?! なんかつんでもないこと覚えてるんですけど?!」

グリペンのイチコロ以上にアレなことを覚えてるゲイザーに助けを求める慧だが残念な事に求めた相手が悪かった。

「いいんじゃない? そうしてこの娘達が個性豊かになるんだし。アレは学ぶな、コレも学ぶなじや何も学べないし」

いや、言ってる事は正しいんですけどこれはその内容がマズすぎるでしょう!?

内心で抗議する慧。しかし残念ながらミュベールは妹分に大甘で叱るべき時はちゃんと叱るのだが基本的には自由にさせているのだった。

「それに似合ってるでしょ?」

「……はい」

ミユベールさんの言う通りメイド服を着たグリペンはいつもと違った雰囲気でも可愛らしかった——」

「人の内心を勝手にモノローグにして言わないでくださいっ!？」

「あ、気に障った? いつもゲイザーとファントムに揶揄われてるからたまには違う人からされるのも新鮮味があっついいいんじゃないかと思っただけけど」

「勘弁してください……」

むしろされない方が助かります。というよりあの二人を止めてほしいです。

……色々と教えてもらってるから言えないけど。

「とういかなんでメイド服を着てるんです?」

「ああ、それはゲイザーの提案なのよ。私服にエプロンをしただけだとつまらないし、どうせなら可愛くて親しみが湧く格好の方がいいってからって。実際好評みたいだしね」

「色々染まりすぎだろ……」

親しみやすいの方向性が完全に明後日を向いてるだろ、ゲイザーのやつ。

メイドのいる自衛隊基地って噂が立ったらどうするんだろうか。

「もーっ! ついてこないでよ! イーグルは一人で食べるんだから!」

そんなわりとしようもないことを考えていると廊下の方からけたましい声が響いてくる。

「あらあら。あなたについてきたわけじゃありませんよ。私も昼食にしようとしたらあなたが先に向かっていただけですから。ああ、折角なので一緒に食べませんか? 先ほどの模擬戦の振り返りもしておきたいですし」

「ゼーっつたいイヤ!」

「そう仰らず、通算24敗1分けの原因をきちんと分析してみませんか。……と、分析できるだけの容量がないから勝てなかったのですね、失礼しました」

「きいいいいっ!」

どうやらフアントムに負けたイーグルが同じタイミングに食堂に来てからかわれてる。ある意味いつも通りの光景だった。

「フアントム？ 今日はお客さんが来てるんだからそれぐらいにしておきなさい。貴女だつて見世物になるのはゴメンでしょう？」

ミュベールさんの言う通り軍事基地とはあまりにかけ離れた光景にツアーの人達は驚きで固まってる。

……メイド服を着たミュベールさん達を見てフアントムとイーグルも固まってるけど。

「ミュベールさん？ どうしたんですか、その格好は」

「ただのメイド服よ。それよりフアントム、あまりイーグルをからかうのはやめなさい。やるなどは言わないけどやり過ぎはよくないわ」
やり過ぎなければいいのかと内心突っ込む。もしかしてミュベールさんも人をからかうのが好きなんだろうか。

「分かりました。私もすこしやり過ぎていたようです。お詫びに今日のお昼は私がおごりますよ」

マジか。言われたからとはいえフアントムが素直に聞くなんて驚きだ。イーグルも同じなのか目を見開いて驚きを露わにしている。

「ほんとに？」

「ええ、本当です。今買われた食券はいくらですか？」

「380円」

「分かりました。では……と、すみません。細かい持ち合わせがないので5000円札を出しますからおつりをいただけますか？」

「う、うん」

両手で計算しておつり分の4620円を取り出すイーグル。フアントムが先に千円札を受け取り、残りの620円を受け取りポーチにいれようとして「あ」と声をあげた。

「ごめんさい千円札がありました。申し訳ないのですが両替してもらえますか？ 無理ならいいんですか」

「……そのくらい別にいいよ。ご馳走してくれたんだし」

……ん？ フアントムでも自分の手持ちを間違えることがあるのか。意外だな。

「五千円札と千円札、それに貴方が持っている4000円で一万円札に交換して貰えますか」

「えーっと……5+1+4で10だから……10000円だね。はい」

五千円札と千円札が一万円札に交換される。お金を受け取ったフロントムが微笑んで。手を差し出す。

「清算終了です。これで仲直りということでしょうか?」

「うん! フアントムイイ人だね! ちよつと見直した!」

差し出された手を無邪気な笑顔で握り返すイーグル。仲直りしたみたいでよかつたんだがさっきのやり取りに違和感があるのは気のせいなんだろうか?

「……はあ。期待した私が馬鹿だったわ」

呆れたようにミュベールさんは言う。ミュベールさんはなにが起こつたのかわかつたのか?

どういふのか訊こうとしたらすぐ横を白い風が通り抜けた。

「あ、あの! 失礼ですが財布に元々いくらぐらい入っていたんですか?」

「え? 財布ってイーグルの?」

「はい」

「15000円だよ? ……あれ? なんで10000円しか入っていないの? お昼ご飯奢って貰ったのにどうして?」

ちつ、という舌打ちの音が聞こえる。音のした方を見るとフロントムが不愉快そうに顔を歪めていた。

……どういふことなんだ?

「いい、イーグル。最初の4620円はフロントムの出した5000円に対してのお釣りなんだから、それを含めて両替しちゃ駄目よ。フロントムが10000円を出した時はもう620円を受け取った後なんだから」

なるほどな。釣銭と両替を二重計上されたのか。もちろん意図的に金の流れを分かりにくくするために。

ミュベールさんの説明を聞いたイーグルは最初ポカーンとしてい

たが段々と顔が赤くなつていく。

「もしかしてイーグル、また騙されたっ!？」

「学習しないあなたが悪いんです。もう少しで笑い話のネタが増えたんですけどね。たかが四桁の計算もできないポンコツ演算機現るつて」

「むかーっ!」

掴みかかろうとするイーグルをミュベールさんが抑え、イーグルとフロントムの間にはベルクトが割って入る。

「あなたは……確か例の亡命機ですね。なんですか？ 見ず知らずのアニメでも不正を許せないと？ ご立派な正義感ですが少々立場をわきまえられてはいかがでしょう。半端な理解で仲裁に入ると身を滅ぼしますよ?」

そう言つて冷ややかな視線を送るフロントムだがそれに怯まずベルクトは踏み出す。お互い人形のように整った端正な顔を見据え、相手に対峙している。

時間にしてほんの数秒。だが息が詰まるようなこの空気の中は一秒がとても長く感じる。

そしてその均衡を崩すべくベルクトは息を吸い込み――

「お金がないなら私が出しますから!」

「……は?」

――その予想外の言葉にフロントムだけでなく見ていた全員が固まった。

「ご、5000円くらい差し上げますから。そんな事で自分を汚さないで下さい。どれだけ貧しくても心だけは豊かに保っているべきなんです!」

「ま、貧しい!? 私がつ!？」

「いくら必要なんですか？ 10000円ですか？ それとも20000円ですか？ なんだったら、私から八代通さんに頼んでも――

――
「く、くくく……」

ベルクトが最後まで言い切る前に聞こえてきた笑いを噛み殺す声

に思わず声の出所を見る。そこにはイーグルを抑えながら笑いを我慢している（声が漏れてるから隠しきれてないけど）ミュベールさんがいた。

今のミュベールさんはメイド服を着てるからぶつちやけ仕える令嬢を笑うメイドにしか見えないところがアレだが。

「……ミュベールさん、失礼じゃありませんか？」

「ご、ごめんなさい。その、抑える気はあったんだけど面白いモノは面白くて」

恨めし気に言うファントムとは逆に、ベルクトはきよとんとした顔でミュベールさんが笑ってる理由がわかってなさそうだった。

「ま、ふざけるのも度が過ぎると自分が惨めになるいい教訓になったんじゃない？」

「言つて下さい！」

不機嫌そうにイーグルの手になにかを置くとファントムはそのまま食堂から出て行った。

「あれ？ 五千円だ。なんで？」

「返すって事でしょ。さ、一段落ついたから食べてらっしゃい」「うんー！」

笑顔で領いてそのままランチを取りに行くイーグル。さっきのこととはもうどうでもよさそうだった。

ミュベールさんというやれやれ、と言わんばかりに肩をすくめる。

「ミュベールさん、お疲れ様です。」

「頑張ったのはベルクトだけだね。……ところで鳴谷君。私達が気になるのは判るけどそろそろグリペンのお腹が限界だと思っただけ」

「あ」

そう言われてグリペンの方を見ると、着替えに加えて俺を待つてるのか未だに頼んだAセットのランチに手を付けずにい机に突っ伏していた。

「わ、悪い！ 待たせたっ！」

「大丈夫。もう少し遅かったら限界を超えて大変なことになるところ

だったけど」

よし、これからはあまり長い時間お預けになることがないよう注意しよう。空腹で意識失調にさせたらなんて言われるかわかったもんじやない。

「そういえばお前、その恰好で食べるのか？」

恰好というのはもちろん今グリペンが着ているメイド服のことだ。近くで見ると結構高そうに見えるから着替えた方がいいと思うんだが。

「着替える時に元々そういう服なんだから汚れても問題ないって言われた」

ああ、俺らから見るとコスプレ衣装だけどゲイザー達からすれば仕事着（趣味も混じってるだろうが）でもあるのか。

確かにツアーの人達への対応を見てもミュベールさん達は仕事をしっかりこなす、つて雰囲気が出てる。コスプレみたいな感じで着ているわけじゃなさそうだった。

実際小さい子にはしゃがんで目線を合わせて話しかけたり、多少マニアック（基地の詳しい仕事内容とか）な質問にも淀みなく答える。そうして俺達が食べ終わる頃にはツアーの人達も移動を始め、ミュベールさん達から引き継いだ自衛官が次へと案内していく。

………なんというか、昼を食べに来ただけなのにもすごい濃い時間だった………。

おまけと言う名の幕間

「ただいまー」

「おかえり、慧」

あのあとグリペンの休養日ということもあってスルランブルに駆り出されることもなかったので久しぶりに早い時間に帰る事ができ

た。

「あれ？ 慧、その紙袋なんなの？」

明華が言ってきたのは帰る前に明華への土産にとミュベールさんから渡されたものだ。大きさの割には軽く、持って帰るのにもあまり苦労はしなかった。

「ミュベールさんから明華にお土産だって」

「ミュベールさんから？」

そう言つて明華は紙袋から中のものを取り出し、折りたたまれていたものを広げる。中に入っていたのは――メイド服だった。

「……………」

あまりの衝撃に俺も明華も言葉が出ない。

……なんつーものを持たせるんだ、あの人っ!?

「ね、ねえ、慧？ これつて着てほしいってことなの？」

顔を赤くしながら訊いてくる明華の言葉に思わず冷や汗が流れる。

やばい！ 変なことを言ったらなに言われるかわからねえ!?

「い、いやあ今日ゲイザーがそれを着てさ！ 明華にも似合うかな、つて言つてたからそれでミュベールさんが持たせてくれたんじゃないかなっ!？」

よし、なんとかそれっぽい理由になった！

「と、とりあえずあたし、この服部屋に片付けてくるね！」

「あ、ああ」

赤く火照った顔を冷やす意味でも部屋に入った明華だったが、部屋にある姿見の鏡を見て少しだけ気が変わった。

「……………今まで避けてたけど……………やっぱ興味はあったのよね、こういう服……………」

少しだけ、と自分に言い聞かせてメイド服に袖を通す。実際に着てみると結構しつかりしたつくりで雑貨店で売られている安物とは全然違つていた。

「……………やっぱ、あまり似合わない、かな……………」

ここにミュベール達がいれば間違いなく褒めるのだが生憎ここにはいない。客観的に見れば間違いなく似合っているのだが、明華自身

そういう服をあまり着ないこともあつてそう感じていた。

「……やっぱりやめよ。ミュベールさんには悪いけど箆笥の中に――」

「明華ー、やけに遅いけどどうしたんだ？」

「け、慧っ!?!」

……一応言っておくが慧とてノックせず明華の部屋に入る事は基本的でない。が、たまに「うっかり」忘れてしまう事もある。幼い頃から一緒にいる身近さからくる失敗であり、今回のうっかりもソレだった。

「み、明華？ その服……」

見られた明華は俯いて身体を震わせている。

そして付き合ひの長い慧はそれが何を意味するのかよく知っていた。

「け……」

「あー、その、明華？」

「慧のばかーっ!!」

ミュベールがこの場にいれば感心するほどの踏み込みで慧に近づいた明華はその勢いのまま右手をフルスイング。その強烈な右が慧の身体ごと意識を飛ばす。

――意外と、似合ってたな。

薄れゆく意識の中、そんな感想を浮かべて慧は意識を手放した。

Order 14 トレーニング×スクランブル

メイドツアーから三日後、私はこれまでシミュレーターでの訓練オンリーだったベルクトの実践訓練の準備をしていた。

ベルクトのメンテナンスと改修がようやく終り、実際に飛ばしての訓練を行えるようになったからこれからテスト飛行を行うからだ。

「ベルクト、確認しておくけど訓練プログラムの内容は把握してるわね？」

「はい。始めに機体の機動チェックをして、その次に訓練目標への実弾訓練でしたよね？」

「正解。ま、今回は訓練といっても貴女の技量を実力を図るだけだからそう気負わなくていいわよ？ 本格的なのは貴女がどれくらい飛べるか知ってからだしね」

内容としてはシンプルで私と追いかけてっこを交互にしてもらおうというモノ。追う側と追われる側、双方の技術が私達には必要だからまずはソレを私との追いかけてっこで実感してもらおうというモノ。

実弾訓練の方はそれに比べれば簡単で使い捨ての無人機^{UAV}を撃墜するという内容だ。標的のUAVはただ飛んでいるだけのモノだから戦闘用のように変態的な機動をしてくる事はない。改修して装備出来るようになった西側の兵装が問題なく扱えるかのチェックなので当然といえれば当然なんだけど。

「それじゃ行きましょうか。あまりのんびりしているとスクランブル機や民間機と滑走路の取り合いになるしね」

——日本海上空、高度25000フィート。

《AQUILA01から03へ。訓練空域に到着よ。これより訓練を始めるわ。——準備はいい？》

《——いけます》

若干の間と少し震えた声音での返事。

……まったく、気負うなって言っただけどベルクトの性格じゃやっぱり難しかったかしら？

《……ベルクト。今回のコレは遊びみたいなものだから力を抜いて？ 手を抜け、なんて事は言わないけど力み過ぎるのもよくないわよ？》

コールサインやTACネーム以外で呼ぶのはあまりよろしくないけど今開いてるのは部隊内のみの回線。外に聞かれなければ言っていないも同然だし問題はないし。

《あ、その、ごめんなさい……》

《別に怒ってるわけじゃないから謝らなくていいわ。というかベルクトは私はこの程度で怒ると思ってるのかしら？》

《そ、そんなことはないですっ！》

からかい混じりにそう言うと言と想像通りに力強く否定してくれるベルクト。エメラルドグリーンの腹黒お嬢様とは大違いね。

《ふふ、少しはリラックス出来たみたいね》

《あ……。その……ありがとうございます》

《いいのよ。それじゃ始めましょうか》

《——はい！》

力強い肯定。——うん、これなら問題なさそうね。

《それじゃ始めるわ。最初は私が逃げるから————しっかりついてきなさい！》

通信を切ると同時に機体を左へロールさせ、更にそこからインメルマントーンで機体を反転させつつ高度を上げると一拍遅れてベルクトがついてくる。

訓練を兼ねた同系列機による鬼ごっこが始まったのだった。

《さて、ここまでにしておきましょうか。お疲れ様》
《は、はい……。ありがとうございます……。》

ほとんど息を乱していないミュベールと対照的に大きく息を乱しているベルクト。その呼吸の様子が訓練の結果を如実に物語っていた。

結果はミュベールの圧勝だった。が、それはベルクトの技量が低かったという訳ではない。

そもそもベルクトは実戦らしいモノをロシアから亡命する際のみか経験していない。それに対してミュベールは小松に来る前から対ザイの戦場で飛んでいたし、ザイが現れる前も傭兵として飛んでいる。文字通り潜り抜けてきた修羅場の数が違う。

だというのにクルビット系の機動マニユークの中でも難度の高いスレイマニ・クラークンやエンジンを意図的に片方カットしてのスピンターン等、フアントムですら呆れる機動を行ったので大人げないと言えなくもない。

とはいえベルクトもミュベールが見せた動きを少しずつだがモノにしていき、勝つ事こそ出来なかったが技量を着実に上げてみせた。

(機体の基本性能もあるんでしようけど悪くないわね)

実際ミュベールはベルクトがこんなに早く見せた機動をモノにするとは思っていなかった。ベルクトには悪いがマトモな空戦が出来るようになるにはもう少しかかると思っていたからだ。

(とは言ってもまだ機動がモノになったというだけ。実戦で使えるかはまた別なんだけど)

難度の高い機動が出来るようになったとはいえまだそれは出来るようになっただけ。有用に使えるければフアントムが言うところの曲芸サーカスで終わる。ここから先は訓練や実戦を何度も経験して状況に応じた飛び方を身体が反応出来るようにならないといけないんだけど。

《こちらコマツ・コントロール、八代通だ。AQUILA01、03。聞こえるか》

ベルクトのこれからの訓練に考えを巡らしていると小松基地から

の通信が入る。

……こういう時の通信っていいモノだった覚えがないんだけど。

《こちらAQUILA01。どうしました?》

《訓練中悪いがスクランブルに出てもらう。バービー全機とAQUILA02は既に別のスクランブルに上がって間に合わん。中尉達には悪いがそのまま迎撃に向かってもらう》

——予感的中。こうならないようゲイザー達に待機をお願いしてたのにまさか全員出払うような状況になるとわね。

《……状況は?》

《ゲイが四方面から時間差で侵攻してきている。各方面の編隊規模は三、四機といったところだ。纏まって来てくれたら待機していた面子だけで対処出来たんだがな。こう分散されると各方面に戦力を振り分けるしかない。その上、一か所敵編隊の規模が見えんところがある。そこにグリペンとゲイザーは向かわせたから残り一か所には中尉達に向かってもらわなきゃならん》

確かにそれならゲイザーをグリペンの補佐に付けるのは正しい。対ザイの電子妨害と支援が出来るゲイザーなら相手の規模が見えなくてもある程度ならなんとか出来る。

けどそれは——

《室長、私達が向かうという事はベルクトを連れて行くという事です。——それを承知の上のオーダーですか?》

——今ここで、ベルクトを実戦に参加させるという事に他ならない。

《ああ、わかっている。どのみちベルクトにもいずれは実戦を経験させるつもりだっただろう。今回がいい機会だ》

……八代通室長の言い分は正しい。私もいずれさせるつもりでいたから実戦を経験させる事に関しては私は文句はない。

文句があるなら、それは——

(ベルクトの経験がなさ過ぎる、って事なのよね)

初の訓練飛行がそのまま実戦の洗礼。E・F社でもたまにあった事ではあるけど出来る事なら避けたかった事象。それがミュベール

の懸念だった。

けど状況的にそれを盾に取る事が出来ないのも事実。データ・リンクを通じて送られた情報は私達以外は間に合わない事を示していた。

《判りました。AQUILA01、03と共に迎撃に向かいます》
《任せたぞ》

そう言つて八代通室長は通信を切り、私は意識を実戦へと切り替える。

《ベルクト、聞いてたわね？ 悪いけど予定変更。目標を訓練用の標的からザイへ変更よ。……大丈夫？》

《……やります。やらせてください》

微かに震える声でベルクトは返事をする。明らかな強がりだし三、四機程度ならミュベール一人でもなんとか出来る。が、彼女の決意を蔑ろにするような事をミュベールはしたくなかった。

《……判ったわ。ただし無理はしない事、いいわね？》

《はい》

この時の判断が正しかったのか。——それとも間違つていたのか私には判らない。

ただ一つ、確実に言える事は引き金となったのは間違いなくこの日だった。

訓練空域を離れて数分。徐々に大きくなっていくEPCM反応を目標に、ロシア出身の二つの翼が空を駆ける。EPCM特有のノイズがインカムに入り始めた頃、ミュベールはその発信源を補足した。

《敵編隊を補足しました。方位2―8―0》

現れたザイは4機。こちらに気付いてないのか横一列になってまっすぐ飛んでいる。

《AQUILA01から03へ。ボギー四機の内三機は私がやる

わ。貴女は残り一機にいきなさい》

少し過保護な気もするけど改修した兵装システムが作動不良でも起こしたらシャレにもならない。一対一ならすぐ墜とされるような事はないでしょう。

《わかりました。……チャンスをごさつてありがとうございます》

《言っておくけど、私から見てマズいと判断したら介入するわ。チャンスを生かしたいならしつかりね。——AQUILA 01、エンゲージ》

ロールしながら高度を上げ、バレルロールからのループに繋げて悠々と飛んでいるザイを上から強襲する。

《AQUILA 01、FOX 2》
放たれたミサイルは違う事なくロックしたザイに向かい、ガラス細工の機体を四散させる。攻撃した事でようやくこちらに気付いたのか、鋭角的な航跡を描き、上を取っている私からブレイクして逃れようとする。

——好都合ね。

《AQUILA 03、貴女は分断したのをやりなさい》

《りようか……ラジャー。AQUILA 01》

単騎になったザイにベルクトを向かわせ、合流出来ないよう2:1に分断する。

あとは私が受け持った二機を速攻で片付ければベルクトのフォローに向かえるようになる——！

《FOX 2！》

ロックしたザイに向け時間差で二発のミサイルをリリース。ミサイルに狙われたザイは速度を上げながらのHiMATという人間では不可能な機動を以って逃れようとする。が、それで躲けたのは初弾のみ。時間差で放たれた二発目は惑う事なく喰らいつき、籠められた炸薬によって爆散する。

レーダーに目を落とせばベルクトも撃墜し、残る輝点は一つだけになっていた。

(これで残り一機——えっ!?)

残った一機をシーカーに捉える直前、五感が揺らぐような強烈なEPC Mが機体の電子機器を乱す。それはAZCCに施されている高レベルの電子防御を突破するほどのモノであり、捉えようとしたザイは急停止して無理やり機体を反転させてこちらに向かつて来る。

——ザイといえど物体である以上、物理的な法則は働く。音速レベルの飛行でいきなり速度をゼロにして反転すれば間違いなく大きな負荷がかかる。それは自壊しかねない動きだった。

(ツ！ ロックして撃つんじゃない！)

反射的に機関砲のトリガーに指をかけ30mm弾を火器管制のサポートなし——目視による直接照準で撃ち、ザイの一部を砕くも撃墜には至らない。

その間にもザイは損傷を無視し、なお速度を上げ向かって来る。

(まさかF₀X₄アメリカ空軍発祥の非公式なブラックジョーク。

航空機そのものがミサイルのように何かに激突する可能性がある状況の意味する。これは通常、ニアミスもしくはベイルアウトを意味するが、稀に特別攻撃(体当たり)を意味する事もある。

今回は後者を意味するをする気っ!?)

だが向かってきたザイはミューベルのS—32の無視し、あろうことか一直線にベルクトの方へ向かっていく。そして狙われたベルクトはザイの異変に気付いていない。

——それを見て背筋が凍った気が、した。

《ツ！ ベルクトっ！ 逃げなさい!!》

機体を反転させ、アフターバーナーを焚いて最大戦速で追いますが、が、反転して追うミューベルと機体の一部を損壊させながらも始めから全力で加速していたザイでは数秒分の開きがある。音速の域で戦う空戦で数秒の差は大きい。——どうやっても、ミューベルが追い付くよりザイが肉薄する方が早かった。

ベルクトも私の指示でザイに気付いたのか加速しながら旋回し、回避しようとする。

《FOX2!》

残り一発、最後となったミサイル発射後。ロックオンで撃つ。セオリーからは外れる通常、帰還する際は追撃に備えミサイルを一基は残しておくし間に合うかも微妙だけどそれに拘ってベルクトを失う訳にはいかない——っ！

(間に合ってっ！)

鋼の猟犬は空を疾る。ミサイルの着弾とザイの激突。どちらが早いかは際どい。速度では圧倒的にミサイルが上だが距離の問題がある。

少しでも時間を稼ぐためにベルクトはパワーダイブで高度と引き換えに速度をあげる。それで稼ぐ時間はほんの数秒。しかしミサイルがザイに追いつくには充分過ぎる数秒。

避けきれないのか——それとも避ける気がないのか。いづれにしろ鋼の猟犬はザイに追いつき、轟音という咆哮とともにその中身を炸裂させた——

《……EPCMもレーダーも反応なし。お疲れ様、ベルクト。よく生き残ったわね》

《は、はい。……その、私はお役に立てたでしょうか……?》

ザイにやられかけた事を気にしてるのか、ベルクトはおずおずと訊いてくる。

《ええ。目標だったザイを単騎で墜として予想外の事態になっても生き残った。初陣としては上々よ。ただ一言注意しておくけど戦場にいる間は絶対に気を緩めちゃダメよ》

《……はい》

私が何を言いたいのか悟ったのか、ベルクトの声のトーンが一気に沈む。……こうなるとは判ってはいたけど言わないとベルクトの為にならない。

——— けど、

《ベルクト、その沈んだ気持ちはさっさと忘れなさい。それは何の役にも立たないから》

《……え?》

ミスを引きずって墜ちた同僚は何度も見てきた。ミスを引きずれば身体は固くなって判断力も落ちる。失敗を悔やむのは確かに大事だけど本当に大事な事は悔やむ事じゃない。

《忘れちゃいけないのはその経験よ。生き残れたならその失敗を経験として活かさない。——— 貴女にはまだ次はあるんだから》

《次って……失敗した私にまだチャンスをくれるんですか……?》

》

《当然よ。一度の失敗で外すなんて事はしないわ。それに、失敗は誰にでもあるものよ》

その失敗から生き残れるかどうかはまた別問題なんだけど……これを言うとベルクトは間違いなく気にするでしょうね。

……うん、言うのはやめておきましょう。

《さ、小松に帰りましょう。初陣を勝利で飾れたお祝いに美味しいものを食べに行きましょうか》

《え……でも、その……いいんですか……?》

《ええ。ささやかだけどそれぐらいのお祝いはしてあげる》

この後小松に戻ったミュベールは外出する旨を八代通に伝えるのだが、たまたまそこに居合わせたイーグルが羨ましそうにしていたからついでという事でアニマ全員に奢る事になる。

この時ミュベールは初めてグリペンの健啖っぷりを知るのだが、動じる事無く(食べ放題じゃない普通のメニューで)好きなだけ食べていいと驚きの発言。食べ終えて支払額を見たフロントムが二重の意味で呆れていたが、当の本人達は全く気にしていなさそうだったとか。

その日の夜、私は今日交戦したザイの行動に関して社長に報告していた。

「脅威である筈のお前を無視してまでカミカゼをやろうとしたザイか。……興味深いな」

「私もザイと戦ってきてあんな行動を取るザイを見たのは初めてです」

あのザイの行動はあまりに異常だった。ミサイルも機関砲も使わず、ただひたすらに相手を目指す。アレはこれまで何度もザイと戦ってきたE^私F社も初めて見る行動だった。

「ザイ自体も変わった個体、というわけでもなかったんだな？」

「ええ。割とよく見る制空型です」

「……となるとザイ自体、というより外的な要因があったのかもしれないな。その時なにか変わった事はあったか？」

変わった事ね。特になかった……いえ、あったわね。

「関係があるか判りませんがその直前、強烈なEPCMがありました。

——AZCCの電子防衛を突破してくるレベルのモノです」

「AZCCの電子防衛を突破する程のEPCMか。原因があるとしたらソレが一番高そうだな。……よし、その時のデータをコピーしてこっちに送ってくれ」

「判りました」

「ああ、それとハンガーに言つてその時のEPCMが以前にも検知されてないか照会しておけ。……照合するのは十日分がいい」

「……っ！」

……社長の言う十日。それが何を意味するのか私には判つてしまつた。

「社長、それは……」

「お前には悪いがな。——そもそも気付いていないお前ではないと思うが」

「それは……」

社長の言っている事は正しい。

……私はとつくにその可能性を考えていたのだから。

「……一つ私の方からも要請が」

「なんだ、こちらで対応出来る事か？」

「ええ、実は——」

社長は私の要請を聞くと快くOKを出してくれた。これで懸念は一つ消えるとまではいかなくてもだいぶ楽になる。

「ではこれで——ッ!？」

唐突なノイズと共に視界——否、意識そのものが揺らされる。カタチを持ったモノがそうでなくなり、カタチのない影が質量を帯びるような錯覚。物音でもなければ人の声とも違うナニカが耳元でざわめき、視えないモノが肌に纏わりつくように粘つく空気。

……この感覚は覚えてる。AZCCが配備される前、ザイと戦《や》りあつた時に幾度となく味わされた不快な感覚。

「……べ……ル？ おいミュベール！ なにがあつたっ!？」

社長の呼びかけで意識がクリアになる。それでも五感を蹂躪したあの感覚の余韻は消えず、思わず近くの壁に身体を預けた。

「……信じ、られないんですが……EPCM、です……」

「なに？」

「ですから、EPCM、です。それも体感で判るほどの」

EPCMの効力は発信源から離れるほど落ちる。ここまですごい体感となると発信源はそう遠くない。

「……ミュベール。さっきのデータの事だが早急に送れ。お前だけでなくアクイラ隊全機のだ」

「わかり、ました……」

社長からの命令を了承して通話を切る。

正直仲間を疑うようで気は乗らない。けどあの娘になんらかの手がかりがあるのも確か。

「……どつちに転ぶか判らないけど動かない事には始まらない、か」

そう呟いた言葉は誰にも聞かれる事なく消える。

——見上げた夜空はまるでミュベールの心境とこれから
先を表すような暗天だった。

Order 15 姉妹達の出撃なしな一日

「E・F社からの増援か」

「ええ。今の出撃ペースではパイロットへの負担が大き過ぎます。少しでも緩和する為に私が個人的に要請しました」

私が昨日社長に要請したのは増援の要請。一向に収まる気配のないザイの襲撃にパイロットと整備士の人達は倒れる人が出てもおかしくないこの状況。特に自衛隊側は損耗もあつて機体の手配もある。だから私達としては防衛ラインが崩れる前に手を打っておく必要があつた。

「ああ、日本側への負担はありません。今回の増援は私が個人的にお願いしたもので増援で来る隊の雇い主は私になります。ただし彼らに対して自衛隊には制約がかかりますが」

「……どんな制約だ」

「指揮権の問題です。私達と違って今回来る彼らは日本が雇つたわけじゃありません。つまり彼らへの指揮権は自衛隊側がない。――

――簡単に言つて自衛隊の命令じゃ彼らは動かないという事ですね」

暗に口を出したいなら金も出せ、という事を伝えると案の定八代通室長は顔をしかめた。

まあ彼等の腕を見れば間違いなく自衛隊側で雇うでしょう。

「……わかつた。ここに来るのはどんな連中だ？」

「Su-47とYF-23が4機の二個小隊と整備関係のスタッフですね。以前ベルクトの改修に必要な装備を運ぶのに輸送機が来たでしょう？ その時に護衛についていた隊です。その時に話をしている人もいたので割と早く馴染むと思いますよ？……こつちには三日後に着くという事です」

両隊ともザイと何度も戦ってきた部隊だから練度は高い。整備の人達もF-15S/MTDでF-15系の整備は慣れてるハズだから即戦力になってくれるでしょう。

「そういうわけなので彼らが使うハンガーを用意してもらえませんか

？ 出来れば部屋も」

最悪部屋が確保出来なくてもハンガーは空けてほしい。特にステルス機のYF-23には必須だから少なくともその分だけでも必要になる。

「それぐらいならいいぞ。こっちで調整してやる。それぐらいの苦勞で増援、それも腕が確かな連中が来るなら大助かりだ」

「ではお願いします。あ、それと私達アキラの面子はこれから出てくるのでなにかあつたら私に電話してください」

「この状況でか？」

「どのみち今日一日は私達は機体の整備や調整で上がりませんしから。飛べないのに基地にいる必要はないでしょう？」

早い話が今日一日アキラの面子は暇。そしてスクランブルが今のペースのままならこの先揃って休日を取れる機会オッフはもうないかもしれないし。

それにゲイザーはともかく、外との接触が少なかったであろうベルクトに色々なモノを見せてあげたいと常々思っていたし丁度いいわ。「なるほどな。確かにそれなら問題はないな」

「では」

「ああ、三人とも外出許可を出してやる。今日は好きに使っていいぞ」
—— 彼女は知る由もないが、結果的にミュベールの予感は当たる事になる。

彼女達が純粹に休みを楽しめるのは、この日が最後となってしまう事をミュベールはまだ知らなかった。

私服に着替えて小松の街に出てきた私達は駐車場に車を置いて歩いているんだけど……もの凄く見られているのが判る。

薄々予想してた事ではあるんだけど。

「……やっぱり目立つよね、私達」

「あははは……」

改めて再認識したように言うゲイザーと困ったように笑うベルクト。

そう、この三人はかなり目立つ。アニマの二人は誰が見ても美少女といえるし、ミュベールに至っては同性から見ても見惚れる程の美人。この組み合わせで目立たないという方が無理があるだろう。

「まあナンパとかされないのはミュベールのおかげかな。ミュベールがいなかったらたぶんちよつかいを出す人はいるだろうし」

「……？ ゲイザーさん。なんでミュベールさんがいると声をかけられないで済むんですか？ ミュベールさんだつてすごい美人だと思うんですけど」

「ベルクト、それ逆」

「逆、ですか？」

「そ、ミュベールぐらい突き抜けてると大抵の男って声をかけるのに尻込みするみたいなのよ」

……実際そうだしそれで助かってる面もあるけど改めて口にされるとなんか釈然としない。

いやさげたい訳でもないんだけど。

「一応言っておくけどゼロになるってわけじゃないわよ？ してくる人はしてくるし」

この場合問題なのはそういう連中は大抵ロクなのじゃないって事なのよね。いかにも下心があります、つてのが丸判りなのが殆どだし。

……ま、その手の連中には最悪力ずくでお引き取りしてもらおうんだけど。

「ま、寄ってくる連中の話はここまでにしときましょ。そろそろお昼だしどこに行くか食べながら決めない？」

「さんせーい」

「あ、はい。いいですよ」

——で、ミュベールが選んだ店というのが

「お好み焼き、ですか」

「なかなかポリウムがあるね」

「それも広島風のお好み焼きと中々のチョイス。いや実際よく見つけたものである。」

「この前明華ちゃんから教えてもらったのよ。最初はちよつと驚いたけどアタリの店だったのよね」

「いつの間に……」

「それでどうする？　……、店お人に焼いてもらう事も出来るし自分で焼く事も出来るけど」

「私としてはせつかくだから二人には自分の手で作るのを体験してみてほしいけど。」

「やってみたいけどどんなふうにするのか見てからでいい？　さすがにぶつつけ本番でやるのはちよつと……」

「私もです……」

「じゃ、それでいきましょうか。……すいませーん！」

店員の人に注文を伝えるとすぐにお好み焼きの生地と具が運ばれ、生地を掬ったミュベールは鉄板の上でクレープのように薄く円形に広げていく。

手際よく鉄板の上で調理していくミュベールの手際にベルクトは驚く。

「すごい。上手ですね、ミュベールさん」

「ある程度なら料理は出来るのよ。基地にいとあまり作る機会はありませんけど」

派遣先によつては自分で食事をなんとかしないとイケない時もあるから自然と上手くなるのよね。どうせ食べるなら美味しい方がモチベーションを保てるし。

「ゲイザーさんも料理をするんですか？」

「あー。わたしは調理ならできるけど料理は自信ない」

「……？　料理と調理って違うんですか？」

「ホントの意味がどうなのかは知らなげどさ。調理はとりあえず食べられるようにするで、料理は美味しく食べられるようにするモノって思ふんだ。いやホントになんとなくそう思ってるだけなんだけど」

余談だがE・F社の傭兵でこの手の考えをしている人間はそれなりに多い。食べれるモノを作れるのと美味しいモノを作れるのは別で、当然人気があるのは後者である。

「……と、そろそろ出来るわよ。もう一回ひっくり返すんだけどやってみる？ 思い切りよくやれば上手くいくけど」

「あ、ならわたしやってみようかな。ベルクトはどうする？」

「私は……やめておきます。上手くできる自信がないので……」

「それじゃゲイザー、はい」

ミュベールからヘラを受け取り、言われた通り思い切りよくひっくり返すゲイザー。……が、思い切りよくやり過ぎたのか、大惨事まではいかないがソレに近いレベルの失敗……早い話がひっくり返すのに失敗して散らばったのだ。

ある意味期待を裏切らなかつたとも言えるが。

「……はあ。いけると思ってたんだけど」

そう言うゲイザーだが言葉の割にはあまり落ち込んではいない。むしろ次は上手くいけるかも、というチャレンジ精神に溢れた顔である。

（ちなみに散らばった具はミュベールが手早く集め、今は失敗の跡は残っていない）

そうして焼きあがったお好み焼きをミュベールが取り分け、熱さに怯みながらも三人は口に運んでいく。

「んく、おいしいー」

「はいー。ちよつと熱いですけどおいしいです」

大きめの一口でパクつくゲイザーと熱さに苦戦しながら少しずつ口に運ぶベルクト。二人とも初めて食べるお好み焼きだけどお気に召したようで何よりだ。

「二人ともソースが口の周りについてるわよ」

ほら、と言って鉄板越しに二人の口元を拭うミュベール。鉄板から

は熱気が昇っているのにソレを気に留めず世話を焼く姿はどこからどう見ても姉のソレである。

ゲイザーはされ慣れてるのか平気そうだが、ベルクトの方はというと恥ずかしいさからか顔が赤くなっている。

「あ、ゴメンねベルクト。ゲイザーはこういう事をしても気にしないからそのまま貴女にもやっちゃたわ」

「い、いえー！ 大丈夫です！ その、少し驚いただけでむしろうれしかったですし！」

「あら」

自分が何を口走ったのか理解して顔を真っ赤にするベルクト。

そんなベルクトを見てミュベールは少し意外そうに、そしてゲイザーはというと――

「ふ・た・り・と・も？ わたしを放ったままにしないでほしいんだけど？」

面白いモノを見たと言わんばかりにベルクトの反応を楽しんでいた。

ミュベールはゲイザーのこういうところは慣れてるので聞き流しているが、ベルクトはそうではなく今は耳まで真っ赤にしている。

「ゲイザー。そこまでにしてあげなさい？ 純粋な娘をイジめるのはそこまでにしておきなさい」

「はい」

ミュベールとしてももう少し見ていたいと思わなくもないがこのままだとベルクトが恥ずかしさで倒れかねないので助け舟を出す。

……そうでなかったらやるという事でもあるが。

「それでこの後はどこに行くの？ 前みたい在购买物？」

「折角だから少し遠出しましょ。アシはあるしなにより歩きだと人目を集めるし」

三人とも機体が動かさえないから呼び戻される事はまずない。そもそも車で出たのも思い切って普段行けない市外まで足を伸ばすのがミュベールの算段だった。

「いいね、それ。私も市外には行ったことないし」

「でしよう？　ベルクトはどう？」

「そ、その……私も見てみたい、です……」

遠慮がちに言うベルクトだけど私にとってはそれで充分。

問題があるとすれば行った先を気に入ってくれるか、って事なんだけどこればかりは出たとこ勝負でいくしかないか。

さて、二人とも気に入ってくれるかしら……？

小松から車で移動する事30分。車の中から見える景色を興味津々に見る二人と一緒に話しながら、目的にしていた動物園に到着する。

……我ながら柄じゃないところを選んだなとは思う。現にベルクトはともかくゲイザーは意外なモノを見たような目を向けてるし。

「なんていうか……意外なチョイスだね。それなりに長い付き合いだと思つてたけどミュベールに動物を可愛がる趣味なんてあつたんだ」
着いて早々失礼な感想を言ってくれるわね。私自身そう思つてるから否定しないけど。

「私だつて柄じゃないつてのは判つてるわよ。でもどうせ行くなら変わったところの方がいいでしょ？」

買い物とかは市内でも出来るからわざわざ市外まで出てする必要はないのよね。勿論市内にない店だつてあるけど似たり寄つたりというところだし。

他じゃ出来ない経験つて事ならアリなんじゃないかなつて思つただけだ。

「二人は見てみたい動物とかはある？」

「あ、折角だから鳥を見てみたいな。わたしは違うけどわたし達の機体つて鳥の名前がつけられてるのが多いでしょ？　だからちよつと見てみたいなあーつて」

「私も見てみたいです」

なら丁度いいわね。ここにはうつつけの鳥がいるもの。

「それじゃ決まりね。割と近くに丁度いいのがあるからまずそこに行きましよう」

正面ゲートをくぐって歩く事数分。そこにいたのは私達——
——特にベルクトにとても所縁のある鳥だった。

「この子達が……本物のイヌワシなんですネ」

「この鳥がE^ッ・F^チ社の主力機のペットネームの由来なんだ」

初めて見るイヌワシに目を輝かせるベルクト。ゲイザーもSu-47はE・F社でよく見るから興味津々みたいね。

「すごい……イヌワシってこんなに大きいんですね」

「あ、でもこの解説には日本のイヌワシは小柄ってあるよ。海外のはもつと大きいんじゃないかな」

Su-47は戦闘機の中でも大柄な部類。名付けた開発チームも小鳥の名前を付ける気は起きなかつたでしょうね。

「もつと大きいんですね……。一度見てみたいですね」

「いつか見れるわ。貴女もE・F社の社員になったんだからこの先世界の色々なところを見に行けるわ、きつと」

……我ながらどの口で言うのかと思う。

私は今回の頻発するスクランブルがベルクトに起因していると疑ってるクセに。

「……？ ミュベールさん、どうしたんですか？」

考えていたことが顔に出ていたのか、ベルクトが心配そうに訊いてきた。

……いけない。今は彼女達を楽しませる為に来たんだからその手の事は基地に戻ってからにしないと。

「なんでもないわ。休みなのに少し仕事の事を考えてただけだから気にしないで」

「そう、ですか……」

とてもじゃないけど今考えていた事はベルクトに言える内容じゃないからはぐらかす。

……それが嘘なのはベルクトも気付いてるかもしれないけど。

「もー、せっかく遊びに来たんだからこういう時ぐらいは仕事を忘れ

ようよー」

私とベルクトの間に流れる空気を察したのか、ゲイザーが軽い口調で咎めてくる。こういう気を利かせてくれるから助かるわ。私一人だとなかなか難しいし。

「……そうね、悪かったわ。ベルクトもごめんね?」

「い、いえ! 大丈夫です!」

「それじゃあ次はここに行こうよ」

ゲイザーが近くにあった案内板で興味があるところを見つけたのか、指をさして走っていく。

「二人ともー! はやくはやくー!」

「あ、ちよつと待ちなさい! ああ、もう!! 行くわよベルクト」

「……はい!」

走り出したゲイザーを追うため、私が差し出した手をベルクトはしっかりと握り返してくれた。

「……はあ、はあ。」

「ゴメンねベルクト。……大丈夫?」

私としては控えめに走ったつもりだったけどベルクトにとってはそうじゃなかったらしい。ゲイザーに追いついた時には息を切らしていた。

「あー、ミュベールに連れられて走ったらそうなるよねえ」

ご愁傷様、なんてアレな事をのたまうゲイザー。

……ベルクトの名誉のために言っておくと彼女の身体能力は決して低くはなく、イーグルについていけるぐらいはある。今回は連れて走った相手比較対象が悪かっただけである。

「……大丈夫です。すぐ落ち着きますから」

そう言ったベルクトは深呼吸をして呼吸を整える。元の体力がそれなりにあったからか、ベルクトはすぐに落ち着いた。

「あ、ちよつと動かないでね?」

「?」

呼吸は落ち着いたけどその顔にはまだ汗が滴っているからハンドバッグから出したタオルで拭いてあげる。

「これでよし……ってベルクト、どうしたの？」

「あうう……」

拭いてあげたベルクトは何故か顔を真っ赤にしてるけど……もしかして私またやつちやた？

「……はぁ」

……と、これ見よがしにに大きなため息をつくゲイザー。なにか凄く失礼な事を考えられたような気がするんだけど。

「ゲイザー。なにか言いたいなの？」

「べつにー？ ベルクトも顔を赤くしてないで入ろうよ。ここ、動物に直接さわれるんだよ」

そう、ゲイザーが突っ走った先にあつたのは兎をはじめとした小動物とふれあえる体験コーナーだった。平日という事もあつて他人がいないから私達の独占状態だ。

「いろんなのがいるね」

「私も少し驚きだわ」

動物園でしかもふれあえるコーナーにいるせいか、ここにいるのは人懐っこい子ばかりで抱き上げてても暴れたりという事はない。

というか柔らかい上にモフモフしてるから抱いててすごい気持ちいい。これはちよつとクセになるかも。

そしてこのコーナーを一番満喫というか歓迎されているのが――

「ベルクト……すごいなつかれてるね」

そう。私とゲイザーのところにも来てくれるけどベルクトはその比じゃない。中には自分から頭を擦り付けている子もいる。

この差はなんなのかと思わなくもないけど――

「ふわぁ……い！」

うん、兎を幸せそうに抱いてるベルクトが可愛いから些細な問題ね。

「取り敢えず、と……」

スマホのカメラを起動してベルクトの写真を撮る。勿論シャッター音はならないよう設定済み。だからベルクトが抱いてたり傍にいる動物には気付かれないハズ。

ゲイザーも同じ事を考えていたのか、同じようにスマホのレンズをベルクトに向けている。

「ベルクト、写真撮るからこっちを向いてくれる？」

「あ、はいー」

兎を抱きながら笑顔を向けてくれたベルクトにシャッターを切る。向けられた自然な笑顔を見るとここを選んでよかつたと思う。

ベルクトだけじゃなくゲイザーも楽しんでくれてるし。

「そろそろ別のエリアに行ってみる？ まだここで遊ぶのもアリだけど」

「んー、わたしはどっちでもいいよ。ベルクトは？」

「え？ そうですね……」

名残惜しいのか真剣に悩むベルクト。が、それでも他の動物への興味が勝ったのか他の動物も見て回ると言い、私達は再び園内を回る事にした。

——この後私達は色々な動物を見て回った。虎をはじめとした猛獣にベルクトは少し竦んでいた（というかエリア名と自身のギャップが凄い）けど、それ以外——特にオーストラリアの動物がいるエリアで目を輝かせていた。

そうして園内を一周して見終えた時には夕方になり、二人ともはしやぎ疲れたのか後席で肩を寄せ合って眠っている。

「zzzz……」

「……ん、……すう」

ミラー越しに二人の寝顔を見ているとある事を思いつく。

ちやうど信号で止まったからバッグからスマホを出して止まつてるうちに二人の写真を撮る。

「……コレは私だけの秘密（楽しみ）にしておきましょう」

基地に戻る車の中で呟いたミュベールの言葉は、誰にも聞かれる事無く消えていった。

——その日の夜、一緒に寝ていたゲイザーを起こさないようこっそり出た私は、ランオフエリアに寝っ転がって月見ならぬ星見をしていた。

少し雲が出ているけどそれでも星空を見ていると落ち着いてくる。少し雲が出てるのが残念だけど明るい月の光を覆ってくれてるからむしろちょうどいい。

そうして星を見上げる事数分、意外な人がやって来た。

「ミュベールさん」

「……ベルクト？ どうしたの、こんな時間と場所で」

「ミュベールさんが見えたのでそれで……来てしまいました。ミュベールさんはどうしてここに？」

「私は月見ならぬ星見というところよ。ゲイザーもだけど私もこうして星を見に出てくる時があるのよ」

ゲイザーは純粹に星空を見るのが好きなんだけど私は違う理由もある。私は一人で考え事をしたい時や落ち着きたい時にもよく星空を見る。

昔からそうしていたせいかコレが一番落ち着くし考えを纏めやすいのよね。

「あの、となり……いいですか？」

「ええ、いいわよ」

私の許可を取ったベルクトは私の隣に座って同じように空を見上げる。——その姿を見てふと思う。ベルクトはここに来る前はどんな扱いをされていたのかと。

日中遊びに行った時もだけど今も興味深そうに星を見る姿を見ると、ロシアにいた頃はそんな自由もなかったんじゃないかと考えてしまう。

私が考え過ぎてるだけならいい。だけどどうしても私はその可能性を捨てられなかった。

「ミュベールさんはベルクトがロシア語で何を意味するのか知ってい

ますよね？」

そんな事を考えていると私の隣に座り込んだベルクトがぼつりと、そんな事を訊いてきた。

「勿論知ってるわ。イヌワシよね？」

E・F社の人間ならSuw47のペットネーム、ベルクトがイヌワシを意味するのはよく知っている。なにせ社で正式配備されている機だ。知らない方がおかしい。

「ええ。ではロシアにはイヌワシに関する古い民話がありますがそちらは知っていますか？」

「いいえ。どんな話なの？」

身体を起こしてベルクトに向き合う。

イヌワシに関する民話というのにも興味があるというのもあるけど、なんとなくベルクトから真剣な雰囲気を感じたからだ。

「出世を夢見て都会に出たイヌワシはそこで鷹匠の採りとして働き始めます。しかしある日、故郷の仲間を狩ってしまい悲嘆にくれたイヌワシは鷹匠の元を離れて、故郷に戻りました。けどそこに仲間の姿は無く、あるのは人間の狩りによって荒らしつくされた地だけでした」

本人は気付いていないのか、話をしているベルクトの髪や肌が淡く光を帯びている。ベルクトはそんな自分の状態に気付かず話を続けていく。

「そこで初めて彼は気づくんです。『自分がほしかったのは富でも地位でも名誉でもなく、家族や友人との平穏な日々だったのだ』と。残りの生涯を失ってしまった家族友人達の捜索に当たったイヌワシがやがて衰弱して最後には飛ぶ力すら失ってしまいました。けどそれを哀れに思った神様が彼に光の翼を与えるんです。神から光の翼を与えられたイヌワシは罪や業から解放されて空を駆け上がり、やがて天上の空から対地をを照らす星になったと。———そんなお話です」

それは大切なモノを失ってから気付く悲しい話であり、それに気付かなかつた罪に対する贖罪を求めるような話だと私は思った。

「うまく言えないけど……悲しい話ね」

「そうですか？ 私は少し懂れます」

「懂れるって……どうして？」

「過ちを犯しても最終的には許される。空を昇り続けてみんなを照らす光になれるのなら素敵な話だと思いませんか？」

そう言つて微笑むベルクトだけど私にはその微笑みがとても痛ましく見えた。

だからだろうか、

「……それは違うわ」

「ミュベールさん？」

「確かに犯した罪は許されるのかもしれない。けど消える事はないわ」

———こんな事を言おうとしているのは。

「たとえ周りが許しても———その事実が消えない以上ソレは心の中に残り続けるわ」

私は傭兵であり、極論相手を殺す事を生業としている。基本戦うのは戦地だから法としての罪には問われない。

———だからといって『殺人』という罪を犯していないわけじゃない。たとえ法としての罪に問われなくても、私達は自身への呵責でそれが罪である事を自覚するのだから。

「だから完全な許しはないのよ。———ソレはずっと背負つていかないといけないモノだから」

どんなに取り繕つても自分が罪を犯したという事実は消えない———消えてくれない。それはずっと背負つていかないといけない十字架だから。

「それなら……過ちを犯したら救われれないということですか……？」

「貴女のいう救いが犯した罪から解放される、という意味ならね」

震えるようなベルクトの問いにミュベールは言外にないと言言する。ベルクトもそう言われる事を覚悟はしていたのか、ミュベールの言葉に身体を震わせはするが声をあげたりはしなかった。

「もちろんその事を仕方がなかったと割り切つて正当化したり忘れてしまえば解放されるかもしれないわね。……けどベルクト、貴女はそ

んな割り切りは出来ないでしょ？」

「……はい。できないですし……しちやいけないと思います」

しちやいけない、か。私達なんかよりこの娘の方がずっと人間らしいじゃない。

……こういう事を私傭兵なんかが言える事じゃないんだけど。

「……貴方が何を抱えているのか私は判らない。けど貴女の十字架を背負う事は出来ないけど貴女自身を支える事は出来るわ」

「……え？」

ベルクトの瞳に困惑の色が浮かぶけど仕方ないわね。遠回しな言い方をしてる自覚はあるし。

「勘違いしないで。他人にはどうあってもその人が背負った十字架を担う事はできないわ。これは絶対よ。……でもね、倒れそうになる相手を支えたり手を差し出す事は出来るわ」

他人に出来るのは背負う事を代わるんじゃないかと背負っている相手を支え、時に手を差し出してあげる事だと私は思う。

背負ったモノの重さを誰かに理解する事は出来ない。……人によって受け止める重さが違うからだ。

「だから……苦しくなったらいつでも頼りなさい」

「……迷惑じゃ、ないんですか？」

「貴女一人を支えるぐらいどうって事ないわ」

「でも私……私に返せるものなんて——」

ない、と続けようとしたベルクトの言葉を遮るように、私はベルクトを抱きしめてた。

「……え？」

ベルクトの困惑した声が聞こえるけど私は構わず抱く力を籠める。

「いいのよ、そんな事は。私は見返りがほしいから言ってるんじゃないよ、私に返さなくて私がそうしたいからなんだから。——だからいつでも来なさい」

これから先の事を考えると私のやろうとしている事は命令違反——

——それとも背信行為にとられるかもしれない。

けどまあ……仕方ないじゃない。自分が背負っているかもしれない

いッナニカ”に怯えてる娘を見捨てるなんて私には出来ないし。

「ミュベール、さん……」

抱きしめたベルクトが腕の中で小さく震える。その声も涙ぐんでいて、いつしか嗚咽に変わっていく。

そんな彼女を私は落ち着くまでずっと抱きしめ、その涙を受け止め続けた。

おまけ　　くその後の二人く

「落ち着いた？」

「はい……その、ありがとうございました」

「ならそろそろ戻りましょうか。明日からはまたスクランブル待機だからね」

そう言つて立ち上がるミュベールの袖を遠慮がちにベルクトが掴んでいた。

「? どうしたの？」

「その、よろしければなんですけど……一緒に寝てもいい、ですか？」

意外といえは意外なベルクトの “お願い” に驚くミュベールだったが笑顔でそれを快諾する。

「いいわよ。ただ先客がいるからそこは了承してね？」

「ひよつとしてゲイザーさんですか？」

「ええ。一応あの娘にも部屋はあるんだけど寝る時は私と一緒にがほとんどね」

余談だがミュベールの部屋にはゲイザーの着替えも置いてあるので実質二人部屋状態になっている。

そしてミュベールが星見に出た以上残されたゲイザーがベッドを占領しているのは当然といえは当然だった。

ベルクトを連れて部屋に戻ったミュベールはゲイザーを起こさな

いようそつとずらし、ベッドに入って空いたスペースにベルクトを誘う。

「それじゃいらっしやい」

「し、失礼します……」

顔を赤らめながらベッドに入るベルクト。と、同時に目が覚めなくてもミュベールの気配を感じたのかベルクトの反対側にいたゲイザーがミュベールに抱きつく。

……本当に寝たままなのか怪しい行動である。

「あの、ミュベールさん。私も、その……」

後半は囁くような声だったがベルクトがなにを言いたいのかミュベールはすぐに察した。

「いいわよ、ベルクト。好きなようにして」

「……！」

それを聞いたベルクトは遠慮がちではあるがゲイザーと同じようにミュベールに抱きついた。

「ミュベールさんの身体……暖かいです」

「ふふ、貴女も十分暖かいわよ」

当然ベルクトの言う『暖かいは』体温の事だけではない。ミュベールも判つてて同じ意味で返している。

「それじゃお休み、ベルクト」

「はい……おやすみなさい……」

——翌朝、目覚めたベルクトは自分とゲイザーによって服をだけさせ、半裸に近い状態のミュベールを見て顔を真っ赤にするのだが——まあ完全な余談である。

Order 16 シャンデリア

ベルクト達と遊びに出てから数日、寝る時にベルクトと一緒にとせがむようになった。元々ゲイザーも一緒に寝る事が多かったからベッドが手狭になった事自体は別にいいんだけど……

「……抱き枕にするのはいいいけど着てる服を脱がしてくるのは直せないの、二人とも?」

「その……ごめんなさい……」

「わたしもベルクトも脱がせようと思ってやってるわけじゃないんだよ? その、ミュベールの身体でも特に胸を枕にすると柔らかくて気持ちいいからそれを求めてやっちゃうんだよ。……アレ? そう考えるとミュベールの胸が気持ちいいのがいけないんじゃない?」

「ゲイザー?」

お仕置きの意味も込めてゲイザーの頬を引っ張る。手加減はするけど痛くしないとお仕置きにならないから適度に力は込める。

「い、いひやいいひやい! ふおへん、ひゆへーる。ふおれはいふあふあらひゆるひへー!」

「あら? よく聞き取れないわね?」

頬を引っ張られて上手く喋れないゲイザーに『聞き取れない』と言って続けるミュベール。笑顔なのに怒りのオーラが見えるのは決して気のせいじゃないだろう。実に恐ろしい所業である。

「あの、ミュベールさん。そこまでにしてあげた方がいいんじゃない?」

「……そうね、これぐらいにしておきましょう」

そうして解放されたゲイザーの頬は紅い。半分涙目になっているがここで反論するとまたされると判っているので文句を言ったりはしない。

「……いたかった」

「自業自得よ。ちゃんと加減したわよ、一応」

「むー」

恨みがましい目を向けてくるゲイザー。そんな妹分に少しだけ少しだけ嗜虐心を刺激される。

「……反対側も引つ張つてバランスを揃えた方が——」

「ゴメンナサイ。モウイイマセン」

私が冗談を言い終える前に謝るゲイザー。……まあバランスを取るといふ理由で引つ張られるのは嫌よね。

「……………いいなあ」

そんな私達を羨ましそうに見るベルクト。私達との距離が近くなったせいか、こうしていると自分の望みを口に出すようになってくれたのは嬉しい。

……呟いた内容は私達の関係性にであつてそういう趣味じゃない事を祈りたいけど。

「そういえばE・F社から来た人達の伝言には驚きましたね」

「ええ。是非とも実現してほしいわ」

増援として来てくれた隊の人達から預かつていた伝言。それは日本政府が受け入れればE^ウ・F^チ社の航空隊、更にオーストラリア^{正規軍}国防空軍も各地の基地に派遣されるという事だ。

実現すれば現場の負担がかなり楽になるから社の上層部^えとオーストラリアの外交官の方達には頑張つてほしいところだ。

「でもニュースとかで見ると日本って未だにザイを甘く見てるっていうか外交でなんとか、って言ってる人がいるでしょ？ 難航しそうだよね」

「その辺りは交渉する人達を信じるしかないわね」

私とゲイザーが揃つたため息をつき、ベルクトが困つたように苦笑したその時、私の端末に八代通室長からの着信が入った。

「はい、もしもし。……はい。はい、判りました。……仕事よ。説明をするからブリーフィングルームへ来い、だそうよ」

「うん（わかりました）」

電話を切つてブリーフィングルームへ急ぐ。本来オフだった鳴谷君にも召集をかけたそうだからいつものスクランブルじゃないのは確かだった。

「早速だが状況を説明する。朝鮮半島から新型のザイが向かってきている。やつこさんの今の速度は時速にして100kmほどで現在位置は江陵カンソンと安東アンドン。ゆつくりだが、着実に日本を目指してきてる」

ブリーフィングルームには私達アキラ、そして鳴谷君を含め独飛のメンバー全員が集まってる。モニタには朝鮮半島の広域マップが表示され、いくつかの？印とそれらを結んだ二本の矢印が表示されている。

「質問があります。時速100km程度の速度なら小松に到着するまで相当かかります。領空に侵入されたならともかく、今のタイミングなら通常の戦力でも対処出来るはずです。なのに私達全員に招集をかける必要があるのですか？」

ファントムの疑問ももつともだけど足が遅いみたいからといって楽な相手とは限らない。……むしろそんな遅いのに「脅威」として捉えられてるという事はそれだけ厄介な能力を持つてると見るべきね。

「ああ。まず、こいつを見てもらう」

そう言つて八代通室長は画面を切り替え、別の映像を表示する。おそらく問題のザイの写真なんだろうけど……ずいぶん変わったフォルムのザイだった。

パツと見た印象は。支柱を起点にして三本のアームが放射状に伸びていて先端には巨大なファンがある。映像を見る限り他に推進機関は見当たらないからザイ版のヘリといった感じだ。

「これが……ザイ？」

「見ての通り、制空型や爆撃型でもない。当然誘導兵器や爆弾の射出能力もないから物理的には無害な存在だ」

物理的には、ね。その言い方だとやはり他になにかあるみたいね、このザイは。

「が、こいつは通常の数十倍という出力でEPCMをまき散らしてる。

ここまで強烈だと電磁パルスと言っているから効果範囲に入った都市は長時間電気や通信といったライフラインが軒並みブラックアウト状態になった」

電子戦型か……マズいわね。そんなのが大都市や発電施設……特に原子力発電所や病院に近づいたら大事故やパニックが起きかねない。私達全員が招集されたのも納得だわ。

「お父様、韓国空軍はスクランブルに上がらなかつたのですか？ それだけ低速なら地对空ミサイルでも墜とせそうなのですが」

「もちろん上がったさ。第10戦闘航空団^Fと第19戦闘航空団^Wが迎撃に上がった。だが強力なEPCMの影響と思わぬ反撃をくらって、今は静観状態だ」

「なんです、反撃って？」

「……こいつを見ればわかる」

鳴谷君の疑問に八代通室長が画面を切り替える。するとガンカメラの映像とおぼしき動画が再生される。韓国軍の戦闘機から発射された十発近いミサイルが例の新型ザイに向け集中する。

すると次の瞬間、アームについている突起部分が動いたと思ったら接近したミサイルが突如爆発していく。火線等は見えないから視えない。ナニカ”によって守られているように見える。

「もしかしてコレ……レーザーCIWS？」

「レーザー……なんだ？」

「レーザーCIWS。半導体レーザーを使った近接防衛用の兵器だよ。映像を見る限り威力と射程はあまりなさそうだけどミサイルを撃ち落とすのは問題なさそうだね」

「加えて普段より強力なEPCMのジャミング下です。通常の兵器では相手にならないでしょう」

レーザーCIWS……。また面倒なモノを装備してるわね。

……前から思ってたけどザイの技術ツリーってどうなってるのかしら？ 自然発生というには科学よりだし人間の技術よりも進んでる。実は宇宙から来た”ナニカ”だったりしないでしょうね……？

「そして面倒な事に連中は二手に分かれた。進路をほぼ真つすぐ小松

に向かつて来る方を α 、南東に向かっているものを β と呼称する。今回お前達への任務はこの新型が侵入する前に叩き落とすことだ」

八代通室長の声で頭の中での考察を打ち切る。

「連中が途中で進路を変えんとも限らん。そこで α 方面にバービー、 β 方面の敵はアクイラに向かってもらう。方法としてはEPCM対策をしたミサイルを四発以上同時に撃ち込んでもらう。確認されているレーザーCIWSは三基だから四発目以降は撃ち漏らすはずだ」

四発以上の同時攻撃って……私達アクイラはゲイザーの管制能力があるしEMLもあるから問題はない。けど――

「お父様。私達は三機しかいません。那覇のバイパーゼロが来るなら話は別ですが――」

「残念ながらバイパーゼロはスクランブル済みだ。台湾沖で別のザイと交戦中らしい」

そう。問題は α 方面担当のバービー隊。バイパーゼロが来れないなら頭数が足りない事になる。

「では α 方面は私達三機でやれと？　せめてミュベールさんかベルクトのどちらかをこちらに加えてほしいのですが」

「却下だ。ミュベールを抜くわけにはいかんし、増援が出てこんとも限らん。 α 方面はお前たちの内誰かが一発目のミサイルの点火タイミングをズラし、二発目と同時に着弾するよう調整してもらう」

「――つまり、ただでさえ難易度の高い同時協調攻撃で内一名はミサイルの点火タイミングも調整しろと？」

「出来ないのか？」

挑発的にフロントムに訊き返す八代通室長に思わず引く。

この作戦はアクイラ隊私達に比べてバービー隊の難易度が高過ぎる。もつと言うなら現地でのフロントムの負担が大きい。

――流石にリスク過ぎる。

「八代通室長。意見具申、よろしいですか？」

「いいぞ。なにかいい案があるのか？」

「今回の作戦、 α 方面でタイミング等を計るのは能力的にフロントムですね？」

「そうだ」

「……ファントムを中継する事でゲイザーの管制能力を届かせられませんか？ ゲイザーの管制能力ならミサイルを個別にコントロール出来ますから同調攻撃を容易に出来ると思います」

今回の作戦で一番のネックになっているのは作戦可能機の数がない事。けどゲイザーの管制能力を届かせられるなら話は変わってくる。ゲイザーなら複数のミサイルを同時に着弾させる事は出来るはずだから。

「……ふむ。中尉はこう言ってるが、どうだ二人とも」

正直私の案は試してみないと判らないところがある。可能なら作戦の難易度がだいぶ下がるんだけど……。

「実際に試してみないとわからないけど……ファントムの演算能力ならいけると思います」

出来る、というゲイザーの言葉に一同の注目を集める。ただし当の本人は気乗りしないように見える。

「ただ……それをするにはファントムの中枢……コアにわたしがアクセスしてリンクしないといけないし、わたしの中継をしている間ファントムにはかなりの不快感があると思う。それでも「————いいでしょう」……え？」

ゲイザーの予想に一瞬思索したファントムだけどそれを即断で受け入れた。むしろあまりの即断にゲイザーの方が驚いてる。

「それで成功率を高められるなら私に文句はありません。……一応言っておきますが私の^機身体を貸す以上は成功させてもらいますので」「わかってる。借りる以上は成功させるよ」

二人の間での話は決まった。

「全力出撃だ。十分以内に出撃準備を整えろ。あの不細工なシャンデリアを海に叩き落としてこい」

小松を出発した私達はアフターバーナーを焚き、デルタ編隊を組んで隊としての最大戦速（ベース機の関係上ゲイザーが一番遅い）で目標ターゲットに向かっていた。

《AQUILA01から02ならびに03へ。攻撃はまず02がEMLによる狙撃を行い、ソレが失敗したらミサイルによる同調攻撃を行う。いいわね?》

《わたしは問題なし》

《わかりました》

さて、時間的にそろそろバービー隊が接敵する頃だけど……

《BARBIE03からAQUILA02へ。こちらの目標を確認しました。始めてください》

《AQUILA02、了解。AQUILA02から01、03へ。BARBIE03に接続している間無防備になるから警戒よろしく》

《OK。AQUILA03、私は右翼につくから左翼側の警戒を任せるわ》

《わかりました》

ファントムとの接続に集中するためか、ゲイザーの速度が一気に落ちる。私とベルクトもゲイザーに合わせて減速し、周囲を警戒する。

《AQUILA02からBARBIE03。接続するよ》

《ええ、どうぞ》

《それじゃ……接続開始!》

ゲイザーの機体の輝きが増し、直接視ていなくてもその発光が感じ取れる。雲にもゲイザーの固有色である赤褐色が映り、そこだけ見れば昼とは思えない色合いの空になっていた。

《……っ……んあ》

時折通信でファントムの声が聞こえてくる。……色々と変な想像をさせる艶っぽい声をあげるのは抑えれないのかしら、彼女。

ファントムの声を聞いてそんな事を思うミュベールだがそれは難しいだろう。ゲイザーはファントムの身体を内側、それも彼女自身の

感覚を無視して動かしているようなもの。神経の内側から他者の感覚が這いまわれれば声が出てしまうのは仕方ないだろう。

《……ッ！ ん……あ……！》

これ以上ファントムの声を聞いてみると別の意味でマズい事になりそうだから、向こうの状況把握をゲイザーに任せてファントムとの通信をカット。周囲の警戒に専念する。

——やがてゲイザーからの発光が徐々に収まり、ゲイザーが機体の速度を上げる。

《ふう……。こちらAQUILA02。β方面の敵は撃墜したよ。後はジャミングで隠れてた護衛を片付けて終わりだつて》

《AQUILA01、了解。それじゃこつちも向かいましょう》
再びデルタ編隊を組み速度を上げる。

《AQUILA02から01、ならびに03へ。攻撃プランの変更を願っていたんだけどいい？》

《……どういう事？》

ゲイザーがこういう事を言うてくるのは珍しい。逆に言うところしなければいけない程の問題が出たという事でもある。

……向こうでなにかあったようね。

《α方面の相手を攻撃した時んだけど相手はジェット気流の中にいたの。ミサイルはわたしが誘導^{コントロール}してたから問題なかったけどEMLだともろに影響を受ける。だから攻撃を私のEMLによる狙撃からミサイルの同調攻撃に切り替えた方がいいと思う》

ゲイザーの提案はもつともだ。ジェット気流はひどい時は秒速百メートル近くになる。砲撃であるEMLが影響を受けるのは必至だった。

《ジャミングで護衛が隠れてる事を考慮すると何度も撃てないわよ？》

《外れてもジェット気流のデータが取れるからそうなら最初の予定通りわたしがEMLでやる。……どう？》

当たればそれでよし。外れてもゲイザーの照準を補正出来るデータが入る。……なら、問題はないわね。

《AQUILA01から02、ならびに03へ。AQUILA02
の案でいくわ。ターゲットを確認したらAQUILA02は待機。
01と03で攻撃を仕掛ける。いいわね?》

《おーけー!》

《わ、わかりました》

ゲイザーの案を聞いている間に隊の速度は最大戦速に達し、主翼の
翼端から白い尾を引きながら私達は攻撃ポイントを目指す。

戦術マップを見ると問題のザイは朝鮮半島を抜け、日本海の横断に
かかっていた。距離が近くなってきたからか、レーダーにノイズが入
り始める。

《……思ってたより強烈なジャミングね》

まだだいたい距離が離れているのもうジャミングの影響が出始めて
る。ここまでのモノだとミサイルの発射位置まで近づいたらレー
ダーは役に立たないでしょうね。

《……ミュベール。こつちにも護衛いると思う?》

《たぶんね。向こうにいてこつちにいない、なんて都合のいい事は
ないでしょ》

《だよね……》

目の前にいたらがつくりと肩を落とす様子が目に浮かぶ。

……ふと、出発してから最低限の応答しかしてないベルクトの事が
気になった。

《ベルクト。上がってから口数が少ないけど……緊張してる?》

《は、はい。……その……正直、緊張しています》

やっぱり。原因は……前回の出撃でザイにやられかけたから、で
しょうね。

今回の作戦で目標への攻撃自体はそんなに不安要素はない。問題
なのはその後に出てくるであろう護衛機との戦闘だ。その意味では
ベルクトは実力よりもメンタルの方に不安がある。訓練で払拭出来
ればと思っただけど、やはり彼女の不安を取り除くには実戦で結果を出
さない駄目ね。

《……ベルクト。今回の作戦、ターゲットへの攻撃はゲイザーがす

るからソレ自体はそう気負わなくていいわ。正直私だって今回はゲイザーに丸投げしてるようなもんだし」

《ミューベール……隊長としてその発言はどうかと思うんだけど》

《実際そうでしょ、今回は》

ゲイザーから呆れたような声が入ってくるけど、この作戦はゲイザー任せなのは事実。だから最初から隠れているであろう護衛機に集中しておいた方がいい。

《だからベルクト、今回私の後方^{背中}を貴女に任せるわ》

《……え？ あの、それは一体……？》

《護衛が出てきたら私が突っ込むから、貴女には私の後ろを取ろうとするのを墜してもらおうわ》

勿論そのためにはベルクトがサポートしやすく、かつ囲まれないように突撃しないといけない。……うん、いつもと大して変わらないわね。

《そういうわけだから背中、しっかり護ってね。頼りにしてるから》

《……はい！》

シンプルだが信頼を籠めたその一言は確かにベルクトの胸に届き、不安から来る緊張を解きほぐした。

《……二人とも仲がいいのは結構だけどそろそろ準備してよ？

——目標を見つけたから。方位、3—1—0 高度10500

《OK。AQUILA01から03へ。行くわよ、攻撃準備！》

《はい！》

ベルクトと先行してターゲットの元へ向かう。こっちのレーダーにも輝点が現れ、近づくにつれてディスプレイやインカムに混ざるノイズが強くなる。ディスプレイの方はともかく、インカムから聞こえるザーザーという音が耳障りで仕方ない。

《AQUILA01から03。だいぶノイズが強くなってきたけどそっちは？》

《こっ……も出始……てます。……ちらからのつ……信もノ……ズが混……つ

ています」

アニメとAZCCの電子防御でも防ぎきれないEPCMに思わず舌打ちする。

……加えて少しだけだけど視界がぼやける。久しぶりに感覚に干渉される不快感を抑え込む。

《AQUILA02から01ならびに03へ。そこからでも狙えます》

《ありがと。——AQUILA01から03へ。3カウントで撃つわよ》

《AQUILA03、了解しました》

私とベルクトは機体を並べ、ウエポンベイ兵装庫を開放。攻撃態勢に入る。

《いくわよ。——3、2、1。《FOX2》》

二発ずつ放たれたミサイルがゲイザーの誘導の元、散開しながら足並みをコンマ単位で揃えて飛翔する。もう少しで当たるというところでザイが反応する。各アームの突起が白く発光したと思ったら数秒後、ミサイルの内三発が迎撃される。けどこれは予想通り。残りの一発は迎撃される事なく見事に着弾し、残骸を撒きながら墜ちていく。

《やったの？》

《うん、バラバラ。けどやつぱり出てきたね》

クリアになったレーダーに複数の輝点が現れる。……ここからが本番ね。

《AQUILA03、いくわよ。しっかりとついてきなさい！》

《はい！》

ベルクトの前に出て速度を上げる。ヘッドトウヘッド真正面で突っ込む私達にこうも進路を変えずに向かって来る。——先頭にいるザイ

をロック。ミサイルをリリース。

《FOX2！》

こちらのミサイルに散開し、独特の鋭角的な機動を見せるザイ。私が撃ったミサイルは外れたけどそれは問題なし。

《AQUILA03、FOX2！》

——回避し、動きが緩慢になったところにベルクトの撃ったミサイルがあるからだ。

そして、残り三機になったうちの二機を後方から飛来した閃光が貫く。

《AQUILA02、スラッシュ！》

《いいわよ二人とも。その調子！》

二人を褒めつつ、次のターゲットに機首を向ける。縦横無尽に逃れようとするザイだけが見逃すつもりはない。ロックすべくシーカーが稼働、ロック・オン。

(殺ったっ！)

——しかし、ミサイルを発射しようと指を動かしたその瞬間、その異常は現れた。

さつきまでとは比べ物にならない、機体と私の視覚と聴覚を揺さぶるノイズ。

(EPCMツ!? アレは墜ちたのにつ!?)

そして、異変を受けたのは私だけじゃない。目のザイが突如反転し、こちらに向かって来る。

それは以前にも見たザイの不可解な動きであり、脳裏にその時にザイが採った行動が浮かぶ。

(マズい! あの時と同じならベルクトが危ない!)

前にいたザイはもう目の前まで迫ってる。ミサイルは間に合わないっ!

《FOX3!》

反射的に機銃の引き金トリガーを引き、迫ってくるザイに向け30mm弾を叩き込みザイがグラついたところで機体を反転、ベルクトへ機首を向ける。

——そうして向いた先、後ろにいたハズのベルクトは高度を上げてザイから逃れるために必死にもがいていた。

《ベルクト! 今助けるからもう少し頑張って!》

《ミュベール! そっちはわたしがやる!》

I L A O 2、スラッシュ!》

——AQU

再び空に閃光が疾^はり、ベルクトに向かっていたザイは大穴をあけられて大破。その場で爆散して破片となって砕け散る。

《間に合ってよかった。ベルクト、大丈夫?》

《はい。その、ありがとうございます》

《いいっていいって》

《それじゃ、作戦終了ね。帰りましょう》

小松基地に帰還する事を伝え、再びデルタ編隊を組んで帰路に就く。

作戦は成功したけど私の心中には重くのしかかるモノがあった。

(……あのEPCM、発信源はザイじゃなかった)

そう。記録^{ログ}を確認してみたら戦闘中に発生したあの強烈なEPCMの発信源はターゲットだったザイでもなく、護衛に就いていた連中でもないかった。

発信源は――

(ベルクト、だったのよね)

ミュベールは以前二人で出撃した時からベルクトに、彼女個人としてはともかくアニマ・ドーターとしては疑念を抱いていた。

そして今回の一件はミュベールの『ベルクトにはザイを誘引する能力があるのではないか』という疑念を確信に近づけた。

(……実際にどうなのかは戻ってEPCMのパターンを詳しく分析してもらってからだけど……おそらくブラックでしょうね)

軍関係者にもあまり知られていないが実はEPCMには個体差というべきモノがある。例えば同じ制空型でも細かく分析していけば若干パターンが異なるのが見えてくる。とはいってもそれは本当に細かい差で、1cmに見えるものがきちんと測ったら1.1cmだったり0.9cmだったというレベル。しかし、確実に異なる差でもある。

だから戦闘時に全く同じEPCMが検出される事は基本的に有り得ない。有り得るとすれば過去に遭遇した相手と再びまみえた時か、

――そのパターンの持ち主が味方にいた時だ。

(……気が重いわ。事が事だけに流石にこれは黙っている訳にはいかないし、たとえば私が黙っていても分析に協力してもらってたヘンガー

主任が気付く。知られるのは避けられない、か)

——そして、ミュベールの危惧は現実のものとなる。

ベルクトから発せられたE P C Mは前回観測されたものと全く同じパターンを示し、ベルクトにザイを誘引するナニカがあるのは確定的だった。

ミュベールの報告を受けたE・F社は社の義務として雇い主である防衛省にこの事を通達。その結果、元々ベルクトに疑念を持っていた防衛省はベルクトの廃棄を命じる。

——彼女達に残された時間は刻一刻とリミットが迫っていた。

Order 17 Diver 霧の記憶

「ミュベールさん。ベルクトを破棄するって本当ですかっ!？」

「……鳴谷君、どこからソレを聞いたの？」

文字通り飛び込んで私の元に来た鳴谷君の言葉に思わず声が硬くなる。この一件はまだ公になっていないハズなのに……？

「申し訳ありません、私です」

鳴谷君の後ろからフアントムが静かに答える。

……耳がいいのも考え物ね。特にこういう時は。

「こつちに来て。八代通室長を交えて人がいないところで話しましょう」

八代通室長に連絡して二人に知られた事を伝えると指定された会議室に来るように言われ、二人を連れてそこに向かう。

中に入ると八代通室長はもう来ていて剣呑極まりない表情で待ち構えていた。

「中尉、一応聞いていくが彼に喋ったのは君か？」

「まさか。私が報告したとはいえ誰彼構わず喋ったりはしません」

「ならフアントム。お前か？」

八代通室長の問いに静かに頷くフアントム。それを見た八代通室長はますます不機嫌そうに顔を歪める。

「盗み見はよせと何度も言っただろう。ただでさえ中央から厳しい目で見られてるのにベルクトと一緒に前まで処分対象になったらどうするつもりだ」

「ご心配なく。足がつくような真似はしていません」

なんでもないかのように言うフアントム。けど、彼女を追求したせいでベルクトの破棄が決定的なのが鳴谷君に知られたわね。

「それじゃベルクトを処分するのは本当なんですか」

「今すぐというわけじゃないがな。今ベルクトの所属は自衛隊じゃなくてオーストラリアのE・F社だ。向こうの了承なしに勝手に処分する事はできん」

そう。今の彼女はあくまでE^ウ・F^チ社の所属。雇い主であつても勝

手に解雇（アニマの場合は処分になりそうだけど）は出来ない。言い換えれば本社、そしてオーストラリア政府が承諾しない限りベルクトは破棄される事はない。

……時間稼ぎでしかないんだけど。

「とはいえ元々ベルクトの受け入れは俺の独断だ。それにE・F社が乗ったから上も国内に置いておくことを許可したんだ。それが今みたいなのわけの分からん状況になったらそういう訳にもいかん」

「ここ最近のスクランブルの多さですか」

「ああ。ベルクトが来て以来小松方面のスクランブルの多さは異常だ。確率の偏りでごまかすのはもう無理なレベルだ。ベルクトがこの以上の原因の一因なのは間違いないだろう」

……自分が報告した事とはいえ聞いていて気持ちのいいモノじゃないわね。最悪、自衛隊がE・F社の承諾を得ずに処分する可能性だってある。

オーストラリアに逃がす事も考えてはいるけどそれをするには沖縄……そこにいる米軍がどう出るか、という不安がある。研究材料として米軍に捕らえられる可能性がある以上下手に逃がせない。

「原因はまだわからないんですか」

「俺達だけじゃなくヘンガー主任達も調べているがまだ掴めん。俺としても分らんまま終わらせるのは不本意だがそのためにここにいる全員を命を危険にはさらせん」

「それは……」

八代通室長に噛みつく鳴谷君だけどその気持ちはよく判る。私も立場を抜きにした個人的な考えはベルクトの処分に反対だからだ。

「……せめてあの娘の記憶が戻ればね」

「記憶が戻ればベルクトは助かるんですか」

「あの娘の記憶が戻ればどうしてザイを引き寄せるかが判る。原因が判れば対処法も判るはずよ」

「中尉の言うことはもつともだがな。どうやってそれをする。色々と試したがベルクトの記憶は言うなれば鍵穴が壊れた扉だ。使える時間も金も限られている以上いづれ取捨選択をしなきゃならん」

そう。結局はあの娘の記憶が戻らないと本当の意味でベルクトを救えない。門外漢だから仕方ないのかもしれないけど、――
私じゃベルクトを救う事が出来ない。

「ハルカ」

私が無力感に打ちひしがれているとグリペンが部屋の入口に立っていた。

「なんだグリペン。今手が離せないから用ならあとで――」

「慧を探してて話を聞いてた。ベルクトの記憶を回復させる手段なら存在する」

「二二」――「は？」

グリペンの突拍子もない言葉にこの場の空気が固まり、フロントムですら呆然としている。

「……聞き違いかしら？　グリペン、今ベルクトの記憶を回復させる手段があるって聞こえたけど」

「ある。精神的に距離が近いミュベールとEGGのパターンをある程度変動させられるゲイザーなら可能」

あつさりと言うグリペンにようやく頭の処理が追い付いてくる。

――私達が鍵、ですって……？

「具体的にはどうする」

「一時的でいいからミュベールとベルクトをEGG同期で繋いで同一個体と認識するようにする。ゲイザーは少しでも二人の同調率を高めるために二人の波形をコントロールする。それ以外は私と慧の同期と同じ。アニマのプロテクトは外からのアクセスに対して働くから、意識の内側からならプロテクトは働かない」

「八代通室長、やりましょう」

たとえ勝ち目が低くても今までは可能性すら見えなかった。けど少しでも可能性があるなら賭ける価値はある。

「本気か中尉。成功する確率が不明なのにやる気か？」

「たとえ成功率が一割以下でもその一割を掴めばいいだけの事です。それに――これ以外に方法はないでしょう？」

『怖気づくなら勝手にやりますが』と小声で、けど聞こえるように言

うと腹を括ったのか八代通室長は不敵に笑ってE G G調整の手配をする。

「挑発に乗ってやろうじゃないか。ただし、俺達が開けるのはパンドラの箱だ。何が出てきても後悔するなよ」

「しませんよ。何もせずあの娘を見捨てる方が後悔しますから」

可能性があつてそれを試せるなら私はそれを試す。

——手を伸ばせば届くかもしれないのに伸ばさないと誰かを失うのはゴメンだから。

検査施設の部屋はいつもとは少し様子が変わっていた。急ごしらえでモニターや床を這うコードやケーブルが増設され、普段は離れて置いてあるベッドもぴつたりとつけてある。

そんな中でゲイザーとベルクトは待っていた。

「ミュベールさん」

私達が入って来るなり笑顔で迎えてくれるベルクトだけどその笑顔は儚げで何かを悟ったようなモノだった。

「……もう時間がないんですね?」

「……そうね。もう聞いているようだから隠したりはしない。これからやる事が失敗すれば貴女は最良でも日本から追放。最悪アニマとしての機能を停止させられるわ」

アニマとしての機能停止。それが何を意味するか判らないベルクトじゃない。現に必死に抑えているけど握りしめた彼女の拳は震えている。

……隣で聞いているゲイザーから小動物ぐらいなら殺せそうな眼で睨まれるけど、逆を言えばそれだけゲイザーはベルクトの事を気にかけてるといふ事でもある。それが私には嬉しかった。

「けどね、ベルクト。私は貴女をそんな目に遭わす気はないの」

「……え？」

私の言葉が意外だったのか、目を見開いて私を見つめるベルクト。
……まったく。それなりの付き合いにはなるけどまだ私のこういうところは判ってなかったみたいね。

「知り合ってまだそんなに長くないけど私は貴女をゲイザー同様大事な妹だと思ってる。——ええ、大事な妹分を勝手に処分なんてさせるものですか」

「ベルクト、ミュベールはこういう人だよ。身内、それも女の子相手にはすつごく甘い。けど最後まで手を伸ばしてくれるから好きなんだよ」

嬉しい事いつてくれるじゃない。

……前半に引つ掛かる言い方をしてくれた事に関しては時間が惜しいから流すんだけど。

「ま、そういう事よ。だから打てる手があるなら打つわ。その為に貴女の中に入れてほしいの。……いい？」

「……はい。私も自分の正体を知りたいと思っていました。どんな結果になったとしても私はそれを受け入れます。後悔は……きつとしないと思います」

一瞬の沈黙。けどその一瞬でベルクトは私が自身の中に入り、記憶と向き合う事を受け入れてくれた。

……強いわね。人間でも自分の過去を直視出来る人は多くない。その過去に疑問を持つてゐるなら尚更でしょうに。

「ただ……」

「ただ？」

「もし、ですよ？ 私が人間の敵だったらどうしますか？ E・F社や自衛隊からの意見じゃなくてミュベールさんの考えを聞かせてください」

私個人の考え、ね。そんなのはもう決まってる。

「貴女が敵になるとは思えないけど、もしそうなったら他ならない私の手で終わらせる。——ええ。この役目を誰かに譲るなんて事はしない。八代通室長や鳴谷君にもこの役目は譲らないわ」

ベルクトが敵になるというなら私が責任を持って彼女を終わらせる。それが一時でも姉貴分になった務め。彼女の幕を引く役目を誰か譲るなんて絶対にしてない。

「そろそろ始めるぞ。ノイズを極力抑えるために覚醒レベルを限界まで落とす。外の刺激を遮断して鎮静剤も投与するから意識もかなり朦朧とする。目的を指して動けるかは分からん。本当にこのやり方でいけるんだな、グリペン？」

「大丈夫、多分」

多分なんて曖昧な事を言ってる割にグリペンの言葉に迷いはない。

……なにかしら。見過ごしてはならない違和感のようなものを感じるんだけど。

「あのミュベールさん。一つお願いをしてもいいですか」

グリペンの言葉に違和感を感じつつも今はベルクトの事が優先。上着を脱いで頭や胸にモニターの為のセンサーや電極を付けて横になろうとすると、隣で既にベッドに身体を預けていたベルクトから断れなさそうな目でお願ひされた。

「いいわよ。なに？」

「手を、握ってもらえませんか」

「ええ」

ベルクトの左手をそつと握り、目を瞑る。

顔にアイマスクとヘッドホンがつけられて視覚と聴覚が遮断される。今私を感じるののは右手に繋いだベルクトの手の温かさだけ。けどそれすらも段々判らなくなっていく。

——同調、開始。

すぐ近くにいるハズのゲイザーの声が遠く聞こえ、私の意識は深海に堕ちるように沈んでいった。

——目が覚めた時、そこは霧の中だった。

先がまったく見通せない白い闇。頭がぼんやりして自分がどうしてこんな場所にいるのか思い出せない。

(まずは状況を整理しましょう。ここがどこなのか、どうしてここにいるのかは不明。手がかりは右手から感じる気配だけ、か)

周りを見てみてもうつすらと見えるメリーゴーランドに煉瓦塀の建物や鉄格子の門扉と見覚えのない景色ばかり。手がかりになりそうなモノは見当たらない。

——けど、微かながら胸の奥から訴えてくるモノがある。私は、右手から感じる大切なナニカの為にここに来たのだと。

(意識が戻る前、私は誰かと手を繋いでいた……？ ゲイザー？ いえ、違う。あの娘じゃない。私は確かベルクト、と……)

そうして思考がベルクトにたどり着いた瞬間、私は全て思い出した。

——そうだ。私はベルクトの記憶を回復させる為にここに来た。あの娘がザイを引き寄せてしまう理由を探る為に彼女と同調した)

その事を自覚すると心なしか、霧が少しだけ薄くなる。先が見通せないのは変わらないが、足元と近くになにかがあるか判る程度にはなつてくれた。

(それにしてもここはどこなのかしら？ ベルクトの意識の中ならここはあの娘にとって縁のある場所だと思っただけ)

手がかりを探して霧の中を歩き続ける。

キリル文字——ロシア語で書かれた案内版に辿り着き、そこにはこう書かれていた。

「マクシム・ゴーリキー記念文化と休息の中央公園？ ここがベルクトにとって縁のある場所なのかしら？」

そう考えてはみるけどアニメであるベルクトと、この公園になんの接点があるのか私には判らない。ちらほらと見える店の類もシャッターが下ろされていて調べるのは難しそう——「驚いた。ここに外

からお客さんが来るとはね」——ツ!?

「誰?!」

咄嗟に腰のホルスターからM^サ—9^ム2^ラFC^イ/S^{エツ}・E某シリーズでお馴染みのM92FSのカスタムモデルを抜き、声をかけた人物に銃口を向ける。

……声をかけてきたのはトレンチコートを着た白人の男性で、銃を向けられているのに柔らかな笑みを浮かべている。

「……貴方は誰ですか?　ここ——」ベルクトの中にいるならあの娘に縁があるとは思うのですが」

目の前にいる男性にそう問うと彼は微かにその笑みを崩し、合わせようとしてなかった目を合わせてきた。

「君こそ何者だい?　確かにここは君の言う通り『彼女』の中——
——正確には願いの産物だ。外からは入れないし、見つけられないはずなんだが」

願いの産物……。ならこの風景も、目の前にいる彼もベルクトの願い、という事かしら?」

「……私はベルクトの記憶を回復させる為、ゲイザ——他
のアニマに協力してもらい、ベルクトのEGGと同調してここに来ました」

素性の判らない人間に話すのは危険かもしれない。けどここがベルクトの願った世界なら——ここにいる彼はベルクトにとって必要な人間のハズ。

どのみちこのままじや手がかりは得られない。——ならここは踏み込むべきだ。

「……記憶の回復か。残念だけどそれはできない」

「それは、何故?」

銃を握る手に、引き金^{トリガー}に添えた指に思わず力が入る。

「僕はかつて彼女と一緒にいた人間の残滓に過ぎない。外からの働きかけで変わる事はないし、そもそも彼女の記憶を回復させるという事は彼女の持つ『能力』も回復させるということだ。だからできない」

「……封印措置が不完全で、そのせいでベルクトに時間が残っていないと言つても?」

「!?!」

——途端、彼の顔から笑みが完全に消えて驚愕を露わにする。

「詳しく、教えてくれないか」

「ええ。実は——」

私はベルクトと出会ってから頻発するようになったザイの襲撃。ベルクトしか見ていないようなザイの異常な行動。そして——

——日本側がベルクトを処分しようとしている事。その全てを話した。

すべての話を聞いた彼は愕然と『馬鹿な』と空を仰いでいた。

「そんな、そんなはずは——」

「残念ですけど事実です。仮にあの娘を国外に脱出させても事態の原因が判らない限りあの娘はずっと苦しみ続けます」

あの娘は自分が何者だったのか、そして何故自分がザイを引き寄せたのか口にはしないけど疑問に思つてる。それが判らないとあの娘を本当の意味で救う事が出来ない。

「……私は貴方と一緒にいた時のベルクトは知りません。けど、貴方が知らない今のベルクトは知っています。今あの娘はかつての自分を知り、受け入れようとしています。今あの娘と共にいる私達を、そして今のあの娘を信じてくれませんか」

「……………」

私と彼が話し始めて初めての静寂が訪れる。

彼が激しい葛藤に苛まされているのは明らかだけど、私は彼が答えを出すまで待つ。

——彼は言った。今の自分がかつての“自分の残滓”だと。だからこのまま銃を向けて強制させても力にはなつてくれないと思う。“今”ここに居る彼が自ら意志で手を取つてくれないといけない気がする。

「……一つ教えてくれ。なぜベルクトにそこまで肩入れする。君達に

とつてあの娘は他国のアニメで命を懸けてまで助ける義理はないはずだ」

長い沈黙を経て、彼が私に問うたのは当然と言えば当然の疑問。そしてその問いに対する私の答えは決まっている。

「私はあの子の事をSu-47のアニメ、ベルクトとしてではなく一人の人間……ベルクト・クロードディアとして生きてほしいと思つています。これで答えにはなりませんか？」

私の答えに彼は一歩ずつ歩み寄ってくる。その表情は一つの決心をした者の真剣さだ。

「ベルクト・クロードディア……。彼女に人としての名前を贈ったのか。——もう一つ問おう。君達はベルクトに“人”としての居場所を作り、これからも守っていきけるのかい？」

「その為に私はここに来たんです。——これからもあの娘を護るために」

彼の真剣さに私も応える。

……私と彼では共に過ごしたあの娘は違うかもしれない。けどあの娘を救いたいという気持ちでは同じ方向を向いているハズなのだ。「彼女は人類の敵じゃないし、災厄でもない。ただ、与えられてしまった役割が異常だったただけだ。僕はそれをなんとか変えようとした。待ち受ける破滅に抗おうとした。だけど僕は失敗してしまった。彼女を救う事ができなかった。もし君達が彼女に救いを、まだ見ぬ世界を示してあげられるのなら——」

そこから先を言おうとして、自身の言葉に驚いたように彼は苦笑する。

「おかしいな。記憶の残滓でしかない存在がオリジナルの方針を覆すなんて。映画の登場人物が予定外の台詞を喋り出すようなものだ」「……少なくとも、私にとって貴方はベルクトの事を真剣に想つてくれている“人間”です。決して残滓なんかじゃありません」

私の言葉に彼は虚を突かれたのか目を点にするけど再び柔らかな笑みを浮かべる。

そしてその笑みはあつた時のようにどこか作つた印象を受けるも

のじゃなく、自然な柔らかさを感じる笑みだ。

「ベルクトが出会ったのが君のような人間でよかった。おかげで安心してここを去れるよ」

彼がそう言うのと、霧と共に周りの景色が消えていく。

——意識の覚醒が近い。そう感じた私は彼に問わなければならぬ事があった。

「最後に教えてください。ベルクトの意識の中でずっと彼女の傍にいてくれた貴方は誰なんですか？」

もしかするとこれは意味のない問いなのかもしれない。けど私は今までずっとベルクトの心の傍にいてくれた彼を、名を知らぬ誰かとして送りたくなかった。

「——ヤラスラフ・ギンツブルグ。彼女はヤリツクと呼んでいてくれたけどね」

「私——私はミュベール・スタークスです。Mr.ギンツブルグ。貴方の意志は私が——」

継ぎます、と。私がいふよりも早く彼の姿が見えなくなる。

覚醒の為に浮上しようとする意識の中で、私は確かに彼の声を聞いた。

「彼女」に伝えてくれ。僕は君といれた事に後悔はなかった。君といた時間は星の光のように輝いていたと。だから自分を責めずに、これからは自分の進みたい道を歩んで欲しいと。そう伝えてくれ」

あちら側で待っているから、という声を最後に彼の声が聞こえなくなる。

覚醒しようとする意識を留め、『当分行かせません』とだけ答えると柔らかな光が頷くように瞬いた気が、した。

——霧の公園から戻った私の目に飛び込んできたのは、照

明の人工的な光だった。あの公園から戻ったせいか、同じ色なのに随分と違うモノに感じる。

「検査施設……。戻ってきたのね」

そうして今まで何があつたかを思い出す。

ベルクトに同調してあの娘の深層意識に潜り、そこで誰と出会い、何を話したかを。

「目が覚めたか」

「……八代通室長。ベルクトは？」

「目が覚めて一番に訊く事がそれか。……安心しろ。あいつの記憶は回復した。そのことについては問題ない」

よかつた。無事記憶が戻った————つて待った。今引っ掛かる言い方をされなかつたかしら？

「八代通室長、『そのことについて』とはどういう意味です？」

「お前が起きる前にベルクトは目覚めて一足先にあいつの事情を聞いた。……まったく、一難去つてまた一難とはこのことだ」

嘲笑うような言葉からはとてもじゃないけど事態が好転したようには思えない。むしろ厄介事がプラスされたような言い方だ。

「……ベルクトの抱えている事が判つたんですよね」

「ああ、とんでもない話だぞ。ロシア人共は頭がイカれてるとしか思えん」

「……色々とアレな兵器を実用化するロシアですから多少頭のネジが飛んでいるのは判りますが」

「その中でもあいつはとびきりだ。これから中尉にも聞いてもらおう自分で聞いた方がいいだろうからな」

————覚悟しておけ。

そう忠告された私達はまだ知らなかつた。アニメを人のカタチをしただけのモノとしか見ない無機質さと、唯一の例外だったMr・ギンツブルグの想い。

ロシアという国で相反する感情を向けられた事を、この時の私達は想像すら出来なかつた————。

Order 18 引かれた手、差し出される手

私の名はベルクト。Su-47のアニマです。

ロシアには私の他に二機のアニマが居ますが私は彼女達――

――いえ、そもそも私の出自はゲイザーさんをはじめとした他のアニマと比べてあまりに異なっています。

どういふことかなのか説明しますね。

私は護衛戦闘や侵攻戦はおろか、迎撃戦も行わないドーターとして生まれたんです。

意味がわかりませんよね？ 少し順序立てて説明します。

ザイ戦が始まってから数ヶ月後、ロシアの科学者達はあるシミュレーションを行いました。実戦の撃墜対被撃墜比率をベースに、一体どれだけの戦力を用意すればザイを駆逐してこの戦争に勝利できるかというものです。

――そうして出された結論は冗談じみたものでした。

ザイの戦力を最低限に見積もって……そうですね、仮に自衛隊と同数の三百機としてもその全滅には三十機以上のアニマ・ドーターか百機以上の対ザイ戦闘対応機とそれに搭乗するエース級のパイロット。あるいはどちらにも満たない通常戦闘機とパイロットでは一万近い数が必要という結果が出たんです。

ロシアはこれに対して、通常戦闘機が千、私を除いたアニマが二機。AZCCは四十程度でエース級のパイロットは一桁しかないと言えどそれだけ無理がある数字なのか分っていただけだと思います。

つまりロシアは単純な戦力差だけで見れば、始めから勝ち目はないのです。この結果を重く受け止めた軍部や政府は直接戦闘ではなく別の方法で戦争勝利への道を模索したのです。

……オーストラリアがゲイザーさん――ザイとの戦力比をザイ一機に対し戦闘機ではなくミサイル一基という既存とは異なるアプローチをしたように、既存の空戦以外の方法でザイに対抗する方法を求めたのです。

——そうして彼らはその方法を見つけました。

彼らは旧ソ連時代に受け継いだ膨大な核戦力に目をつけました。政治的にはもちろん、倫理的にも使用できなくなったこの兵器を対ザイ戦に使えないかと。

彼らは大量破壊兵器で空域ごと吹き飛ばしてしまえば、ザイの高機動性能もEPCMも関係無しに殲滅できると考えたのです。ザイのジャミングは電子装備や人間の目を妨害出来ても物理現象——爆風や焰を防ぐことはできませんから。

ですが、この方法には大きな問題があります。

静止目標ならともかく、ザイは高速で動いています。戦果を出すにはできるだけ多くのザイを危害半径に収めなければいけません。研究の目的はどうやってザイを危害範囲に留めるかという点に移りました。

——ミュベールさん達は気づかれたみたいですね。

ええ。私はザイを爆心地に引き寄せるためのモノとして生まれたんです。

ロシアの科学者達はこの計画を〈誘蛾灯〉計画と呼んでいました。ザイのEPCMを分析した結果、EPCMには複数の役割がありました。皆さんもご存知の電子・感覚の妨害。そしてもう一つはザイ同士で行う信号です。

詳細まではわかりませんが、ある特定のパターンでザイは編隊を組んだり散開したり、協調的な行動を取ることが分かりました。

ここまで言えばこの計画の内容は分つてもらえたと思います。ザイのコアを使用したアニマとドーターならEPCMを発生させる事ができる。通常は抑制されているEPCMを高出力で、それも意図した形で発生させれば——。

研究は想定よりもスムーズに進み、私は良好な成果を出し続けました。

しかし私に関して研究の内容はおろか、軍の装備リストからも抹消され、存在そのものが秘密にされました。

なぜならこの〈誘蛾灯〉は使い方を変えれば、ザイに他国を襲わせ

る攻性兵器にもなるからです。ザイによる災害を人事的に起こせるようになる。そんなことが表沙汰になれば国際社会からどれだけの非難を浴びせられるか考えるまでもありません。

だから私は存在そのものが秘匿されました。その時が来るまで決して外部に存在が露見しないように。万が一他国に私のことが漏れれば、同じ機能を持ったアニメにザイを仕向けられる可能性があったからです。

そうして私は研究施設の地下深くに封印され、その時が来たらザイ諸共核の炎に飲み込まれる。誰にも知られることなくその運命を待つはずでした。

——ええ、そのはずだったんです。ヤリックに出会うまでは。

彼は研究チームの中では若手でしたが、研究の中心メンバーだったと思います。

彼は私が物心つく頃には隣に居て、歴史などの座学だけでなく音楽や映画など色々な事を教えてくれました。

『君は希望なんだ』

ある日、ヤリックは私にこう言いました。

『君から得られた技術を発展させれば、いつか僕達はザイと対話できるかもしれない。そうすればこんな〈誘蛾灯〉なんていう野蛮な計画は必要無くなる。彼らと僕達が共存していく上での折り合いのつくところを探ればいいんだからね。』

そんな明るい未来を語りながら、何度か彼は私を外に連れ出してくれました。ごく稀に、本当に短い時間だけでしたけど施設以外のところを歩かせてくれたんです。

そしてその時の私は彼の立場が悪くなっていることに気づけませんでした。今思えばヤリックは自分の立場が危うくなっていることに気づいていたんでしょう。だから私にあんな話をしたんだと思います。

計画の方針を変更しようとしたのか、テストの遅延を試みたのか、それとも上層部に異議を唱えたのか。もしかしたらその全て

だったのかもしれない。

そんな真偽の分らない噂が増えると同時に彼と会える日も減っていききました。ヤリツクがしてくれる予定だった検査が別の人になったり、施設の入口で追い返されるのを見たのも一度や二度じゃありませんでした。

——このまま別のプロジェクトに異動してもう会えないのかもしれない。そんな事を思っていたある夜、突然ヤリツクが私を訪れて来たんです。

驚く私にヤリツクはただ一言だけ『ついてくるんだ』と言ってドーターの格納庫まで連れ出されました。そして言われるままコクピットに乗り込んでダイレクタリンクを行った時に何かの処置を受けました。今ならあれがなんだったのか分かります。きつとあれが記憶の封印措置とE P C M——〈誘蛾灯〉の無効化措置だったんだと思います。

『——これで君はもう普通のアニマだ。〈誘蛾灯〉なんていう馬鹿な兵器はもう存在しない。S u — 4 7 — A N M ベルクトはただのアニマ・ドーターとして生きていくんだ。そして、願わくば、いつか君の力を使ってザイと会話して欲しい。彼らは何を望んでいるのか聞き出して欲しい。いいね』

施設全体で警報が鳴り響き、私達に向けてたぐさんの足音が近づいてくるとヤリツクは微笑みながらキャノピーを閉じてしまいました。

『さあ行け！——飛行ルートはドーターに入力してある。君は自由だ！』

その言葉が私が聞いたヤリツクの最後の言葉でした。私の機体は搬送用のエレベーターに運ばれながらプログラムに従いエンジンが点火、全ての動翼がはためてエンジン音が外の音をかき消しました。

そして離陸する瞬間に見えたのはネクタイをはためかせ、後ろからくる銃を構えた警備兵をきにくることなく満足そうな笑顔で私を送るヤリツクでした。

そして私は意識を失い、気がつくや雲海の上を月明かりに照らされて、ひたすら夜闇を排気炎で切り裂きながら飛んでいました。

この時はもう私に記憶は無く、亡命だけが私の唯一の目的になっていました。東に進み、ロシアの領空から逃れる事。

そうして追手を振り切る最中にミュベールさん達と出会い、その後独飛の皆さんと出会いました。

私の話——失っていた記憶は以上です。

ベルクトの話が終つても私を含め、集まった誰もが口を開こうとはしなかった。……いえ、なんて声をかければいいのか判らない、といった感じね。

そんな中で私はベルクトを保護した時に交戦したSu-35のパイロットが言っていた事を思い出した。

(あの時、あのパイロットが言っていた『後悔するぞ』ってこの事を指してたのね)

そして私以外の例外——先に話を聞いていた八代通室長が端末を操作して一人の青年が映った画像ファイルを表示する。

「……ヤリッククというのはこの人物か？」

表示されている人物を見てベルクトの息を？む音が聞こえる。そして私も彼の事をはっきりと覚えている。

「……はい(ええ、この人よ)」

ベルクトと声がハモってベルクトよりも私の方に視線が集まる。

……やらかしてしまったわね。

「……中尉。ベルクトはともかくなぜ中尉が彼を知っている？」

あー。八代通室長の疑問ももつともよね。今更訂正なんて出来ないから正直に話すしかないか。

「ベルクトの中に潜った時に会いました。……正確には彼本人ではなく記憶の残滓と言っていましたか」

「……ヤリックの意識が、私の中に……?」

「ええ。ずっと貴女を気にかけてたわ」

彼からベルクトに伝言を預かつてるけどアレは彼が彼女に宛てた言葉。後で彼女と二人になる時間を作ってその時に伝えましょう。

「話を戻すぞ。隠し事をする気はないから事実だけを言うが彼は死んだ。——君が亡命した日にな」

「そう……ですか」

八代通室長の無機質な眼差しと言葉をベルクトは弱々しい笑みで受け止める。

……きつとベルクトは半ば予想していたんでしようね。その笑みには痛々しさを感じるけど彼女が受け止めようとしているならその意志を尊重するべきなんでしょうね。

「——教えていただいております。ようやく——
——ようやくこれで自分の中で忘れていたなにかを思い出して気持ちの整理ができそうですから」

それはベルクトなりの決意表明だった。

……彼の伝言を伝えるべきか本気で迷ってきたんだけど。

「さて、ここいらで一旦状況を整理しておこう」

端末を胸ポケットに入れた八代通室長が話を先に進めるべく、身を乗り出す。

「今の話でベルクトの正体とロシア政府が沈黙している理由は分かった。残る問題は——」

「ベルクトがなぜまだザイを引き寄せているのか。ですね、お父様?」
フアントムの言葉を八代通室長は頷いて肯定する。

そう。ベルクトの話じや記憶と一緒に〈誘蛾灯〉としての機能は無効化され、EPCMの発信もされないはずだった。にもかかわらずベルクトは不定期にEPCMを発信している。唯一にして一番の問題だ。

「まあ大体の想像はつくがな。おそらく準備期間がもう少しあれば絶

対に起こらなかったミスだろうよ」

「……？ あの、準備期間があれば起こらなかったミスってなんですか？」

「記憶の封印措置だ。おそらくこいつが〈誘蛾灯〉を無効化するプログラムまで封印したんだろう。時間をかけて調整していればこんなヘマはしなかっただろう」

鳴谷君のもっともな疑問にあっさりとは答える八代通室長。

それでようやくこれまでの事に納得がいった。

「〈誘蛾灯〉を無効化するプログラムがうまく機能していなかったから不定期にE P C Mが発信されてたんだ。わたし達が一緒に飛んだ時も発信されたのが一瞬だったから、パターンの観測はできても発信源がどこなのかはわからなかったし」

話の通りなら彼がベルクトを護るために行った事が今回の一件を招いてしまったとも言える。もし彼に封印処置等を行う時間すらなく、ベルクトがなんの処置も受けずに来ていたらここまでの事にはならなかったかもしれない。

—— 本当、なんて皮肉。

「直せるんですか」

「理論上ならばな。はつきり言って最低でも一ヶ月はかかる」

鳴谷君も問いに慚然と答える八代通室長。

……最低でも一ヶ月。という事は他に何らかの処置がしてあったりトラブルがあったら更に延びる。実質的な不可能という答えだった。

そんな中、部屋の外から騒々しい足音を立てて技本のスタッフが駆け込んできた。その顔色は真っ青で、走ってきたからではなく悪い知らせが入ったというのを思わせるには充分だった。

「室長、すみません、緊急事態、です」

ぜえぜえと息を切りながら報告する彼を見て、八代通室長は『またか』と言いたげなうんざりしているような表情だ。入ってきたスタッフも私達がいるのを見て内容を言うのを躊躇っているみたいね。

「構わん、ザイ関連ならどうせ話す事になる。さっさと説明しろ。今

度は何が起きた」

「内調の衛星情報センターからです。市ヶ谷に送ったらしいんですがこちらにも送るよう指示されたようで」

そう言って彼は資料の束を渡し、八代通室長はそれを読み進めると数枚目でその表情が怒りに染まった。

「おい。なんで今頃こんな情報が出てくる。データは定期的にレポートされていたはずだったろうが」

「も、元々オーストラリアから来た情報でして。その、あまりに信じられない結果だったので衛星の不調だと思われていたようで……」

「馬鹿どもがっ!!」

八代通室長にしては珍しい、あまりにストレートな罵倒だった。いつもの皮肉を言えない程頭にキているらしい。

「……一体なにが？」

この場にいる全員が気になっているので代表して訊くと持っていた資料を『読んでみる』とあっさり渡された。

資料に印刷されていたのは中国大陸の俯瞰写真。雲の切れ目からは砂色の大地がちらほら見え、一部分だけが都市の明かりのように煌いて————って待った。

猛烈に嫌な予感がして次、そのまた次とめくると問題の明かりは撮影の日付が新しくなるにつれて沿岸に向けて移動している。

「……八代通室長。まさかとは思いますがこれって————」

「中尉の想像通り、ザイの群れだ。衛星写真の縮尺でこれだけの大きさなら敵さんの数は千単位だろう。今まで小松に来ていたのはこの中の気の早いごく一部だったわけだ」

「せ、千単位っ!?!」

————ああ、成程。だから衛星の不調なんてなんて言葉で片付けていたのね。確かにこんな数が来ているとなれば現実逃避したくなるわよね。

「お父様、今すぐベルクトを破棄しましょう。可能ならば小松——

——いえ、日本の領域外に動かして。このような事態になっている以上、早急に行うべきです」

俄かに騒がしくなった部屋をファントムの言葉が文字通り凍り付かせる。

彼女が本気なのはその剣呑極まりない表情が雄弁に語っていた。

「待って。ベルクトのEPCMは処置すれば止まるってハルカは――

――」

「それにどれだけの時間がかかると思っているんですかっ！」

慌てた様子で言うグリペンの言葉を一喝するファントム。その強烈な眼光と鬼気迫る表情にグリペンがすくみ上る。

私から資料をひったくったファントムの言葉はなおも続く。

「いいですか。この写真を見る限りこのザイの群れは二日を待たずに日本海に到達します。そうなればもう手遅れです。安易な博愛主義を振りかざしている場合じゃありません！」

「……………っ！」

グリペンと同じ事を言おうとしていたのか、なにか言おうとしていた鳴谷君もファントムの迫力に圧倒されて言葉が出ないようだった。

一方の私はファントムの言葉に“疑問”を感じている。そしてそれはゲイザーも同じだったようで私達は頷き合ってその疑問をファントムに問いかけた。

「――ファントム。貴女は本当にそれで解決すると思ってるの？」

私の静かな問いにファントムだけじゃなく全員の視線が集まる。

「ミュベールさん。いくらベルクトと親しいといっても貴女なら冷静な判断ができると思っていたのですが」

私に失望した、と言わんばかりの冷たい視線。が、その程度で私は怯むつもりはない。

「一応言っておくけど私はベルクトを破棄する事でEPCMを止めようとする貴女の考えを否定するつもりはないわ。私の疑問はその先にあるもの」

「……………どういふことですか」

やっぱりファントムは冷静じゃなかったみたいね。普段の貴女なら気付いていたでしょうに。

「つまりね、ミュベールが言いたいのはベルクトを破棄してもザイが止まるのか、つてこと。たとえ誘導しているEPCMが途絶えても向こうが小松を攻撃目標と定めていたら止まらないんじゃない？」

私に続いたゲイザーの言葉にフアントムは反論出来ずに視線を逸らす。

ザイの侵攻がここまで大規模だとザイの方でも既にここを「攻撃目標」と定めていたらベルクトを破棄してもなにも変わらない。むしろアニメ・ドーターをただ失うだけという結果になる可能性の方が高かった。

「そうなたら小松を破棄するだけです。いずれにしてもここで敵が現れるのを待つという選択はありません。一般人がパニックを起こす前に避難させないと」

「フアントムさん。その必要はありません」

静かに微笑みながらベルクトは言う。その微笑みはどこか諦めを含んだモノだった。

「ザイが私を目指しているなら私が移動すればいいだけです。ミュベールさんとゲイザーさんの言ってたように私が破棄されても侵攻は止まらないかもしれない。しかし私が誘導しながら飛ぶならザイの進行方向を変えることができます。————私はそのために作られたアニメですから」

「ベルクト、それじゃ————」

彼と出会った意味がないじゃない、と言おうとしてベルクトに遮られる。

「ミュベールさん、ゲイザーさん。かばってくれてありがとうございます。でもミュベールさんは言っていましたよね。私が人類の敵になったら他ならない自分の手で殺すと。……私は作られた意図からも離れ、制御できない災厄になってしまいました。だからこれ以上生きてるのは————」

パシンっ！

気が付けば、私の右手はその先を言おうとしたベルクトの頬に平手打ちをしていた。

ここにいて誰も信じられないものを見た、と言わんばかりの視線を私に向け、特に私にぶたれたベルクトは呆然としている。

「——ベルクト。貴女、彼の想いを無駄にする気？」

自分でも珍しく頭に血が昇っているのが判る。

確かに彼からの直接の伝言を言わなかったのは私の失敗だったかもしれない。けど——

「貴女は彼が命を懸けて自由になったのよ。それをそんなあっさりと捨てる気？」

「けど、もうこうするしかないんです。それにミュベールさんも——

——」

「ええ、確かに私は貴女が人類の敵になったら他でもない私の手で殺すと言ったわ。けど、それは貴女が自分から望んでなった事なの？」

「ち、違いますっ！ 私は、望んでなんか——」

「ならこんなところで諦めないで。彼は貴女を死なせるために命を懸けたわけじゃないでしょうっ!？」

「盛り上がっているところ悪いがな。中尉、一体どうするつもりだ。フアントムの言う通りベルクトへの処置は間に合わんぞ」

Mr. ギンツブルクがそうだったように、私達も時間が足りない。加えてザイの大群が押し寄せているというオマケ付き。

どうしたものかしら、と頭を悩ますも突如として天啓が降りる。

……私とした事がなんであそこに気が付かなかったのよ。

「……八代通室長。ベルクトがEPCMを発信しても影響がなく、かつザイが手出し出来ない場所に心当たりがあると云ったらどうします?？」

「——は?。」

『そんなところあるわけない』と皆口にはしないものの、そう考えている事がありありと判る。けどそれがあるのよねえ。

「おい中尉。まさか今からオーストラリアに連れて行く気か?」

「いいえ。それをするには沖繩の米軍がどう動くか、という不安要素があります。私のアテは近くて遠いところですよ」

「時間がないんだ。もったいつけずさっさと行ってくれ」

「大気圏外——宇宙空間です。宇宙空間ならベルクトがどんなにE P C Mを発信しても被害を受ける国はありませんし、オーストラリアにはサルベージ出来るだけの技術とモノがありますから」

ついでに本来の〈誘蛾灯〉計画の案も一部頂いてしましましょう、という八代通室長はにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「なるほどな。ザイの群れをベルクトが引き付け、成層圏ギリギリで吹き飛ばす。元々の〈誘蛾灯〉計画と違って帰還が難しいという点はあるがベルクトも生き残れる。——悪くないな」

高度が五万フィートを越えると大気の密度が一気に低くなるから通常の航空機での飛行は困難になる。いかにH i m a tで変態的な機動性を持っていても翼を持つている以上、ザイにもこの原則は無視出来ないハズ。そこにベルクトが生き延びる路がある。

「そうなるよベルクトを大気圏外に運ぶ為のブースターが必要ですね」

「それに関してはツテがある。今から運ばせればベルクトの熱対策を含めてもザイの侵攻には間に合うだろう」

「では私も社に報告して日本に派遣されているE・F社の部隊を動員してもらおうよう働きかけます」

方針が固まると八代通室長の思考と判断は早い。私以外の面子を置いてきぼりにして進めていく。

「希望が見えたわけだけどファントム、まだ反論はある？」

私の問いにファントムは数秒思索し、『ありませんね』と言うと鳴谷君とグリペン、そしてゲイザーの表情が明るくなる。ベルクトは未だ自分が生き残れる路が見えたことが信じられないのか、私と八代通室長を驚きの表情で見ている。

(……Mr. ギンツブルグ。少しの間この娘を一人にさせるけどそのまま見捨てる事は絶対にしない。必ず自由に飛べる空に連れて帰るわ)

——ザイの日本海到着まで、残り38時間。

Order 19 Tear Drop

「これはまたすごいモノを持ち出してきましたね」

一夜明けた翌日の午前。八代通室長が手配したという「ブースター」を見て思わず出た言葉がソレだった。

——100メートルはありそうな増槽を巨大化させ、翼とエンジンをくっつけたようなソレはイカを連想させる。轟音と共に降りてきたソレは、逆噴射リバーサーを使ってなお滑走路をギリギリに使って着陸。航空機としては異形ともいえるフォルムで注目を集めていた。

「……なんなんです、これ？」

一緒に見に来ていた鳴谷君から呆れと驚きの入り混じった声。

……鳴谷君の気持ちは判る。私もこんなものが出てくるなんて思わなかった。

「RELスカイロン。英国イギリスはリアクション・エンジンズ社が試作した宇宙往還機だ。エアブリーディング式のロケット・エンジンで大気圏の内外を段々飛行する真正正銘のスペースプレーンだ。元々グリペンのコアに適合する機体を探している時に調達したんだが、まさかこんな形で役に立つとはな」

さらつと説明する八代通室長。前半はともかく、後半の内容には正直私ですら呆れた。

「……コレにグリペンのコアを？ 仮に適合していたとしても空戦出来るんですか、コレ」

どう見てもこのスカイロンで空戦が出来るようには見えない。こんな機体でHi-MATをしたら機体が真つ二つに折れてもおかしくない。

「……相当迷走してたんですね」

「そう言ってくれるな。我々としても切羽詰まっていたんだ。で、E・F社の返事はどうなんだ？」

「了承はもらいました。作戦空域エリアがマリアナ沖なので日本に派遣された部隊は今夜から明日にかけて東南アジアの各国に移動してそこで作戦の準備を行うと。それとオーストラリア本国に残ってい

る連中と正規軍も参加してくれるそうです」

「……よく正規軍を動かさせたな」

正規軍がPMCの要請に応えた事に驚きを露わにする八代通室長
「……私達にとつて驚くような事じゃない。」

「私達はオーストラリア国防空軍と深い繋がりがありますから。加えて言うなら、せっかく新しく迎え入れたアニマ・ドーターを使い捨てる気はないというオーストラリアの意思表明でもありますね」

それにまだ確定じゃないけど航空隊とは別の援軍が来てくれる可能性もある。

……あくまで可能性だからアテになるかは微妙なのがネックなんだけど。

——スカイロンが到着する数時間。

《《本当ですか？》》

《《今現在は承認待ちだがな。承認がおりれば“レイシア”嬢が参加する。が、これに関しては怪しいところだから発表はするな》》

確かにレイシアが投入されるなら大きな助けになる。けどアレの投入は色々と承認がいるから間に合うかどうかは社長の言う通り微妙なところね。

《《判りました。レイシアの事はまだ伏せておきます》》

承認され、援軍としてレイシアが来てくれれば切り札になるけど間に合わなかったら落胆の幅も大きい。故に知らせるのはE・F社と正規軍の隊長格のみとなった。

「……で、このスカイロンでベルクトを打ち上げる気ですか。お父様？」

「おう。打ち上げた後の回収は心当たりがあるんだろう、中尉」

「ええ。すぐには難しいと思いますが必ず彼女をサルベージします」

そのアテがあるから私はベルクトを宇宙に打ち上げる、なんて案を出した。オーストラリアにはソレを可能にする技術と設備が揃っているから〈誘蛾灯〉の解析と無効化、この二つをどの国も影響を受け

ない宇宙空間で行えば後はサルベージするだけになる。

「指揮系統はどうなるんですか？自衛隊だけでなくE・F社、それにオーストラリアの正規軍も加わるならかなりの規模になりますか」
「それに関してだがファントム、今回の作戦の総指揮はお前に執ってもらおう」

「私ですか？」

もちろん、E・F社だけでなくオーストラリア空軍を含めた総指揮をファントムにしてもらうのには理由がある。

「これは中尉と話し合った結果だ。今回の作戦、迎撃に出てくるザイも相当だろう。AWACSも同行するとはいえかなりの混戦になる。ゲイザーは今回電子支援とザイへのジャミングに集中してもらおうかな。そうなるとAWACSに全体の動きを俯瞰させ、指揮は現場でお前が執るのが一番いいだろう」

今回指揮官機に要求されるのはAWACSから送られるデータを元に、戦域全体の指揮を執る能力。

小規模ならともかく大規模な空戦で指揮を執りながら戦う、なんて事は私には出来ない。ファントムならある程度戦いながら指揮を執れるだろうし、彼女は頭がキレるから不測の事態への対応力も高い。指揮官を任せるのには十分すぎる。

「二つ質問です。E・F社の傭兵とオーストラリア軍は私の指揮に従ってくれるのでしょうか？」

「その辺りは私達で根廻しをしておくわ。元々ゲイザーがAWACSの真似事をして動いてくれる人達だから貴女の指揮でも大丈夫だと思っただけ」

そもそも誰が指揮を執るかでいちいち揉めるようじゃ話にならない。私^{E・F社}たちからの推薦があれば問題はないでしょう。

「……わかりました。今回の作戦の総指揮をお受けしましょう。それとお父様。ザイを吹き飛ばすのに戦略核を使用するということでしたが米軍の許可は降りたのですか？」

当たり前だけど自衛隊のどこの部隊も核兵器は持っていない。必然的にアメリカから融通してもらおう事になっている。

「あまりいい顔はされなかったがな。作戦の不参加を条件に手配してもらった」

八代通室長の言う通り今回の作戦にアメリカ軍は参加しない。社長から聞いた事だけど彼らは近々ザイに対する大規模作戦を行う予定らしい。実際E・F社にもその話は来ていて、詳細はまだ知らされてないけど航空戦力を中心とした作戦というのは聞いている。

だからアメリカ軍としては今回の作戦で戦力を損耗させたくないのが本音だろう。

「起爆の方もこちらでやる。EPCM下でまともな通信が出来るのはアニメ・ドーターであるお前達と、ミュベールのようにAZCCに乗っている連中だけだからな」

「……つまり、起爆タイミングも私が？」

「わかっているじゃないか。そういう訳だからファントム、今回お前は最前線から一步引いた位置にいる。お前がやられたら作戦全体が狂う」

「そうね。アニメが一機減るのは痛手だけど直接戦闘を行うのは数でカバー出来る。けど戦域全体を指揮出来る貴女は替えが効かないもの」

オーストラリアはアニメこそゲイザーしかいないけど、代わりに開発元だけあって多数のAZCCが配備されてる。部隊の隊長格は当然だけど隊によっては全機AZCCへの改修が済んでいるところもある。

……おそらく最初の一撃はともかく、近接格闘戦になればオーストラリア機が戦闘の中心になるでしょうね。

「わかりました。作戦空域と参加する部隊の情報を確認しておきたいので私はこれで失礼します。……ああ、それともう一つ」

立ち去ろうとしたファントムは思い出したように足を止め、その顔を半分だけこっちに向けて――

「私達より彼女の側にいてあげてはどうです。今彼女に必要なのはあなただと思いませんか？」

そう言うファントムはひらひらと手を振ながら再び離れていく。

私としてもベルクトの側に行きたいけど、まだ手が離せないから行きたくても行けないのが実情。私としても「伝言」を預かつてるから出来ればベルクトのところに行きたいところだけど……

「行つてきていいぞ、中尉。後の手続きは俺の方でやっておく。向こうも作戦の要となるアニマのメンタルケアと言えば納得するだろう」「いいんですか?」

ハッキリ言つて八代通室長からこんな事を言われるのは思わなかつた。予想外の人から言われたからパツと言葉が出てこない。

そんな私の心情を無視し、八代通室長は面倒くさそうに言う。

「ベルクトの精神的なケアが出来るのはお前とゲイザーぐらいしかない。で、ゲイザーの奴は色々調整中だから今ベルクトのところに行けるのは中尉しかいない。……そういうわけだから、さつさと行け」

「……判りました。そうさせてもらいます」

フロントムと八代通室長に背中を押されるカタチで作業を切り上げ、ベルクトのいる部屋のドアをノックする。

「ベルクト? 私だけど入つていいかしら?」

「はい、大丈夫……え? あ、待つてくださいつ!」

入ろうとすると一瞬の間をおいてストップの声。

ついでに言うど部屋の中からバタバタとずいぶん慌ただしい物音も聞こえてくる。トラブル、つてわけじゃなさそうだけど……。

「ベルクト? なにかあつたの?」

「あ、ごめんなさいミュベールさん。入られても大丈夫です」

「それじゃお邪魔するけど……誰か来てたの?」

部屋に入るとテーブルの上には中身の入ったマグカップは二つ。それとお菓子が入つてそうなビニールのパッケージも傍にある。

「えつと……F-2Aが来ていたんです」

F-2A……バイパーゼロだったわね。姿が見えないけどようだけど……。

「ミュベールさんが来てその窓から出て行っただけです。……その、
恥ずかしいからと」

「恥ずかしい？」

「初めて会う人といきなり顔を合わせるのには恥ずかしい、と」
「……………」

「すごい。なんとというか物凄く純な娘だ。今まであまり周りにい
なかったタイプの娘だから新鮮にすら感じる。」

「そういえばバイパーゼロは元氣娘のイーグルとセットで那覇基地
にいたのよね。あの元氣娘と人見知りのアニマがセットで配置……。
すごいわね、那覇基地の人達。」

「ごめんなさい、ミュベールさん。私も止めたんですけどF-2Aは
あつという間に部屋から出てしまつて……………」

「私が那覇基地の人達に感心していると、バイパーゼロを止められな
かった事に責任を感じているのか申し訳なさそうにベルクトが小さ
くなつていた。」

「どうやら私がしようもない事を考えているのをベルクトは私がバ
イパーゼロに避けられてショックなんだとつたらしい。」

「気にしないでいいわよ。避けられたのはまあ……………確かに少しショッ
クだけどそれが理由で黙り込んだわけじゃないから」

「そう、なんですか？」

「ええ。イーグルとバイパーゼロの面倒を見てた那覇基地の人達はス
ゴいな、って感心してただけだから」

「そう言うのとベルクトは安心したのかホツとしたのか胸をなでおろ
す。」

「安心したベルクトを改めて見ると私に叩かれた頬が未だに少し赤
い。紅葉、とまではいつてないけどベルクトの肌が元々白いからかか
なり目立つ。」

「……………ベルクト、さっきはゴメンね。痛かつたでしょ？」

「あの時の私は感情のまま動いたから全く加減をしなかつた。私
はそれなりに鍛えているからたぶん……………いや、間違いなく痛かつたと
思う。」

「大丈夫です。それに、その、少し嬉しかったんです」
「え」

予想外の返事に思わず一步引く。まさかベルクトからそんな言葉が出てくるなんて……。

「ベルクト……。貴女そういう趣味に目覚めちやつたのね……」

「ち、違いますっ！？そういう意味じゃありません！ ミュベールさんは私がヤリツクの想いを無駄にしようとしたから怒ってくれたんですよね？ それ嬉しくて」

当然、ミュベールも本気で言ったわけではない。やらかしてしまつた手前、気まずいモノがあつたので少しでも空気を和ませようとしたミュベールなりの冗談である。

ま、ベルクトの純粋な言葉に目を背けざるをえないわけだが。

「ミュベールさんはどうしてここに？ 明日の準備をしていると聞いていましたけど……」

「ファントムと八代通室長から貴女の傍にいろ、つて言われたんだけど……もしかしてお邪魔だった？」

実際私が来るまでバイパーゼロと話していて、私が来た事で彼女は逃げちゃつたし。

「そんなことないですっ！ その……明日は出撃したら一緒に帰る事が出来ないので嬉しいです」

強がりだとすぐに判る笑顔で言うベルクト。

……彼女にそうさせるのは私で、そんな顔にさせているのも私。案を出した私にこんなことを思う資格なんてないのかもしれないけど、そんな哀しい笑顔^おをさせていると思うと罪悪感がこみ上げてくる。

「……ゴメンね、ベルクト。間違いなく私は貴女を一人にさせる。暗い宇宙でたった一人にね」

そう。私の案は帰還出来る見込みがあるだけで、やらせようとしている事は〈誘蛾灯〉計画を考案した連中と大差ない。提案した時は妙案に思っていたけど、こうして時間をおいて考えると一人孤独に待たせる私は彼等よりタチが悪いかもしれない。

「大丈夫です。待っている間私はスリープモードで眠っていますし、

その間に見れる夢もヤリツクだけじゃなく皆さんからたくさんもらいました」

だから大丈夫です。と微笑むベルクト。そう言うベルクトに私は何も言えなくなる。せめて時間がもう少しだけあればまた違ったかもしれない。

……もしもの事なんて考えても意味がないのかもしれない。それでもロシアでのベルクトの扱いを知ってしまった私はそう思わずにはいられなかった。

「それに……謝らないといけないのは私もなんです」

「どういう事かしら？」

謝るのは私の方でベルクトが謝らないといけない事なんて特にないと思うけど……。

「実は私……みなさんにお話しした時に一つだけお伝えしなかったことがあるんです。〈誘蛾灯〉のように能力面でのことじゃないんです。私は……ヤリツクがどうして私を助けたのか。どうして自分の命を賭けてまで試作品のアニメを助けたのかということ在意図的に話さなかったんです」

「……」

ベルクトの精神世界に入った時に私は彼と会ったけど、確かに彼がベルクトを助けた理由までは聞いていない。

……彼の口ぶりからなんとなくは察せられたけどソレは部外者である私が軽々しく「判る」と言っているものじゃない。

だから私は聞かせてもらってもいい？ とベルクトを促した。

「彼と私はお互いを特別な異性として見ていたんです」

……お互いを意識してる、とは思ってたけどまさかそこまでの関係だったとは思わなかったわね。それなら彼があそこまでベルクトの事を想っていたのにも納得出来る。

「……驚かれないんですね」

「私は貴女の中で彼に会ったからね。鳴谷君とグリペン同様「特別な関係なのは想像してたもの。……そこまでは思っていなかったけど。」

出来る事なら実際に会ってみたかった。私だけじゃなくE、F社の人達ともきつと彼は意気投合出来たでしょうから本当に残念だわ。……ベルクト、貴女宛の伝言を彼から預かっているわ」

彼の事が出たから彼から託された伝言を伝えるべく私は口を開く。予想外の内容だったのか、ベルクトの顔は驚きに満ちていた。

「ヤリックから、ですか……？」

「ええ、貴女の中に潜った時にね。貴女宛ての言葉だからあの場で言うのは憚られたの。言うわよ？」

—— 『僕は君といれた事に後悔はなかった。君といた時間は星の光のように輝いていた。だから自分を責めずに、これからは自分の進みたい道を歩んで欲しい』と」

その言葉を聞いたベルクトの紅い瞳から涙が溢れる。それはベルクトがずっと表に出さなかった感情の発露だった。

「……ばか、ですよ。言いたいことを言うだけ言って、自分はいなくなるなんて」

そう言ってベルクトは込み上げる感情を抑えつけるように瞼を固く閉じる。その姿は流れようとする涙すら自身のうちに留めるようだった。

「私は……」

ベルクトが言葉を紡ぐより早く、私の身体は動いていた。

「ミュベール、さん？」

「抑えなくていいわ。私程度の胸ならいくらでも貸してあげるから——

——好きなだけ使いなさい」

そう言ってミュベールはベルクトを優しく抱きしめる。それはベルクトが今まで抑えていた想いを受け止めるような抱擁だ。

抱きしめられたベルクトは最初こそ戸惑っていたものの、ゆくりと私の背中に手を回して顔を押し付けるように抱きついた。

「私……ヤリックのことが好きでした」

「ええ」

「私は…… 彼と、二人で生き残りたかった……」

私はベルクトを抱きしめる腕に力を入れる。胸に体温とは違う熱

さを感じるけど、私はソレを受け止めるようにベルクトを強く抱きしめる。

「ミュベールさん……私は……私達は……どうするのが最善だったんでしょか……？」

私にはその答えが出せない。正確には言えない。私は、ロシアに限り彼女達の想いが実らなかつた事に気付いてしまったからだ。

確かに彼は〈誘蛾灯〉計画の中心でプロジェクトを多少遅らせたりは出来た。けど言ってしまうえばそれが限界でもあった。ベルクトが始めから〈誘蛾灯〉の為に生み出されたアニマ。いづれ使われる事は確定で、その意にそぐわない動きをしたら間違はなくベルクトの傍から外される。……いえ、事実彼は外された。二人が揃ってお互いの想いを成就させるには彼がベルクトとともに国を脱出するしかなく、そしてそれは不可能だ。

純粋な科学者だったMr. ギンツブルグではアニマの戦闘機動に耐えられないし、ロシア側も〈誘蛾灯〉計画の中心人物が搭乗しているとすれば領内で撃墜すべく大規模な追撃部隊を動かしていたと思う。そうなれば待つているのは二人の死しかない。

……なんて皮肉。二人はロシアでなければ出会えず、ロシアでは決してその想いが実る事がない。本当、なんて皮肉な巡り合わせだったのかしら。

「……………」

果たしてコレを口にするべきなのか迷う。言えば間違いなくベルクトがショックを受けるのは目に見えてる。かといって嘘で誤魔化す気にはなれない。

悩んだ末に私は――

「ベルクト。私に言える貴女はショックを受けると思う。それでも聞く覚悟はある？」

抱きしめたベルクトから一步下がり、私は問う。

「……はい。聞かせて、ください」

微かに声を震わせ、それでもベルクトは聞く方を選んだ。故に私は偽りなく伝える事にした。

私の考えを聞いたベルクトはやはりと言うべきか、小さくないシヨックを受けていた。それでも最後まで聞いたのは自分から聞いたからか。——それとも、彼女自身薄々気付いていたのだろうか。

「ミュベールさん、その、ありがとうございます」

「……どうしてお礼なんか言うのよ。私は——」

「ミュベールさんなら誤魔化すことだって出来たのにはつきりと教えてくれました。ミュベールさんだって出来れば言いたくなかったんじゃないですか?」

「……私もそうするべきか悩んだわ。けどここで嘘を口にするのは貴女に不誠実な気がしたのよ」

受け入れる覚悟をした人に嘘を言うのはその人に対する侮辱ではないと私は思ってる。だから私はたとえどんなに残酷なことであろうとその覚悟をした人には嘘偽りなく伝える。それで敵を作る事もあったけど私は曲げるつもりはない。

「……ミュベールさん。ミュベールさんは……ゲイザーさんや私をどう思っているんですか? ……その、アニマとしてではなく私達個人をどう見ているんですか?」

私がどう思ってるか、ね。ベルクトも判っているんでしょうけど敢えて言葉にしてほしいんでしょね。

「そうね。私にとって貴女達は大事なことだと思ってるわ。ゲイザーは人のカタチをしているからといって人間として見るのは間違いだ、って言ってるけど私はそう思っていないわ」

ゲイザーのこの言葉は以前あの娘が鳴谷君に言った言葉であり、彼女自身だけじゃなくアニマに関わる関係者の多くの考えでもある。私や鳴谷君、そしてE、F社の現場組のように人間扱いする方が珍しい方になる。

けど——

「私にとって人間かアニマかは些細な問題なのよ。確かに貴女達の生まれは生物のソレとは違う。けどそんなのは大した問題じゃないわ」
……そう私にとってソレはとっくの昔に答えを出している事。

あの時鳴谷君には言わなかったけど私の言葉を切望してるベルクトには言うべきでしょうね。

「私は大事なものは、在り方だと思ってる。たとえば貴女やゲイザーが、自分では人じゃないと言っても受け入れる気はないわ。――

―だってそんな風に誰かの為に涙を流せる娘を人間ではない、なんて私は思えないもの」

そもそも人間の感情だって突き詰めれば脳内の電気信号によって現れるモノ。暴論になるけどソコに人間とアニマの差なんてないと思う。

「大事なのはどんな生まれだったか、じゃなくてどう生きるかなのよ。私も、小松の人……はちよつと微妙なところだけどE・F社の人達はみんな貴女を人として見てくれるわ。ゲイザーもみんなから娘や孫扱いされてるしね」

ちなみにゲイザーを特に可愛がっているのは孫扱いしている面々である。傭兵という職業柄、離婚していたりそもそも独身のままという人も多い。だから容姿が十代後半のゲイザーはその手の面々から可愛がられている。

「私も……ゲイザーさんのように受け入れてもらえるでしょうか？」

「大丈夫よ。貴女はいい娘だもの。必ず受け入れてくれるわ。それは私のお墨付きよ」

むしろベルクトがいじめる奴がいたらその時はいじめた事を後悔するぐらいの仕返しをソイツにしてやるつもりだ。

そう言うとベルクトは困ったような笑みになったけどさつきまでのみような泣き顔よりずっといい。

「あの、ミュベールさん。……一つだけお願いしてもいいですか？」

少しだけ浮かんだ笑みを引っ込め、恥ずかしがるように目を伏せるベルクト。

……なんとなくだけでも、少しだけいつものベルクトに戻ってくれた気がしてほっとする。

「いいわよ。なに？」

「その……もう一度抱きしめてもらっていいですか？」

私にとってはささやかだけどベルクトにとっては我儘になるのか、ベルクトは『断られませんか』と祈るように目を伏せるベルクトに少しでも溜息がでる。

……まったく、そんな願いを私が断るわけないでしょう。

「いいわよ。一度と言わず何度でも。それこそ今だけじゃなくこれから先いつでもしてあげる」

——これから先いつでも。当たり前のようにベルクトが戻ってくる事を言うミュベールにベルクトは身体を預け、その温かさを身体に覚えさせるように抱きつく。

抱きつかれたミュベールもベルクトの髪を梳くようにそつと撫でる。

暫しの別れを惜しむように、再び触れ合う事を祈るように——

Order 20 白い鳥

夜のうちに小松を出発した私達は硫黄島飛行場で一旦の休息を取り、そこから数度の空中給油を経て作戦空域になるマリアナ沖へ近づく。

日本とは違う空と海の色を見ると少しだけと帰ってきたと感じる。(どうせなら本当に『帰る』時にこの空と海を見たかったんだけど……仕方ないわね)

もう少ししたらこの空も戦場になる。そうなれば景色を見る余裕なんてないし、作戦が終わっても無粋な黒煙が立ち昇るから自然な状態で見るのは今だけになる。

(……と、見えてきたわね)

作戦空域に近づきオーストラリア空軍のF-15S/MTDやE、F社で多く配備されているSu-47やYF-23、そして直線的な黄色とSu-37や赤を基調としたTyphoonといった独自のカラーリングの機体が見えてくる。——否、戦闘機だけでなく現在は高速輸送機として使われているXC-70もいるので軍用機の博覧会状態だ。

《オーストラリアのXC-70がいるのは驚きましたが一番の注目やはり『彼女』のようですね》

《でしようね。なにしろ今のあの娘は目立つもの》

そうして注目を集めている機ヒギバツク——ベルクトに目を向ける。スカイロンを背負式ヒギバツクにで搭載されたベルクトはダイレクトリンクの影響か、スカイロンごと白く発光していて見ようによっては光の柱に見える。

なお、ベルクトのドーターは上昇する際の空力特性を向上させる為にその特徴的な主翼にも改装が行われている。具体的にはカナードが撤去され、特徴的だった前進翼はF-22のような形状に改造されてまるで巨大なエイのようになっている。

《AQUILA 03——ベルクトより各機へ。へエウリュアレ》の動作は安定。現在吸気モードで正常稼働中》

ギリシャ神話に登場する女神で「遠く飛ぶもの」を意味する名前をつけられたスカイロン。白く輝きながら空を征くその姿は確かに神話から名を取るに相応しい威容だ。

——余談だが命名したのはE・F社の整備スタッフで、名前の元はギリシャ神話に登場するゴルゴン三姉妹から取っている。名前の意味もそれぞれを表しているゴルゴン三姉妹で三姉妹の名前はステンノ「強い女」、エウリュアレ「遠く飛ぶもの」、メデューサ（支配する女）を意味するからいいだろうというのが理由である。神話に登場する姉妹から名前を取った事にゲイザーとベルクトを喜んでいたが、この姉妹の行く末神話においてゴルゴン三姉妹は魔獣へと変貌したメドゥーサが二人の姉すら自分の巣に住まう邪魔者としてしか認識出来なくなり、二人の姉を？み込んでしまうを知っていたミュベールは複雑そうな顔をしていた。

《こちらAWACSウルフイ。敵集団との接敵は約30分後。数は不明、というより換算不能のレベルだ。目撃した巡視船の船員は天の川が降りてきた、と言っていたそうだ。おそらく、ザイが発見されてから最大規模の侵攻だろう》

《了解》

今回の作戦は練度に優れたオーストラリアの部隊が前衛に出て、空自の部隊はAMLR—AAM先進型中距離空対空ミサイル。航空自衛隊で使われている短距離型（04式）の射程が35km程度なのに対しこのミサイル（99式）は射程距離が100km近いをはじめとした射程の長いミサイルでの後方支援という内容だ。

空自はAZCCの保有数が少なく、逆にオーストラリア側は開発元という事もあって今回の参加機の内約3割がAZCCとなっている。なのでオーストラリア機は格闘戦を重要視して装備は軽量な短距離型のAAMをメインにし、逆に空自の機体はミサイルベッドとして搭載重量ギリギリまでAMLR—AAMを積んでいる。

とはいっても今回のように千単位で来ているザイ相手にミサイルの数はあまり重要じゃない。本命は終着点^{ターミナルポイント}に展開した無人機^{UAV}に搭載された戦略核。

つまり今回の作戦はオーストラリア機が主な盾となつてザイを誘引するベルクトを護りつつ、ザイを出来る限りこの空域に集めるフェイズ1。フェイズ2でベルクトが垂直上昇でザイを誘引し、彼女が安全圏に達したら無人機に積んだ戦略核を起爆させてザイを殲滅するというもの。

なお、今回の作戦ではアニメの中でもゲイザーとファントムは直接戦闘はしない。ゲイザーはミサイルの誘導管制とザイへのジャミング、ファントムはAWACSのデータを基に全体の指揮を執るからだ。アニメ二機が戦力に入らないのは痛いけど、それよりも戦域全体の指揮を執れるのと全機が電子支援が受けられる方がメリットが大きい。

《AQUILA03から01へ。本当に私はこのままでいいんですか？ 少しぐらいなら私も——》

《却下よ、ベルクト。ここは私達を信じてちょうだい？

——大丈夫よ。生き残る事にかけて私達は世界最高なんだから》

自分が原因なのに私達だけ戦う事に忌避感を抱いてるベルクトの言葉を切り捨てる。

……正直こんな言い方をするのはあまり好きじゃないんだけど、言うべき時には上官として言わなくてはならない。この娘、意外と頑固なところがあるし。

《世界最高とはずいぶん買ってくれてるじゃないか、ミュベール》

《それにずいぶん可愛い声だ。このぶんだと本人も可愛いんだろうな》

《おいミュベール。お前一人で今までこんな可愛い娘を独り占めしてたとかズルいぞ》

私達の話聞き、囁し立てるE。F社の傭兵組。オーストラリアの正規軍はこのノリに慣れていいのか苦笑しながら聞いているが、空自のパイロットやBARBIE隊の慧やファントムは緊張感のない彼らのテンションに啞然としている。

《貴方達ねえ、ナンパするなら彼女が帰ってからにきなさいよ。一応日本の部隊もいるんだから》

《おい聞いたかお前ら。保護者から許可が出たぞ。必ず生き残って彼女の姿を拝むぞっ!》

《《《《うおおおおおっ!!!》》》》

無線越しに湧き上がる野太い歓声に流石にミュベールも苦笑する。あれで仕事はキツチリしてくれるから彼等を見ていると軍に規律が本当に必要なのか悩むところ。

……いや正規軍の人達があのノリになったら問題か、やっぱり。

《展開中の全AZCC機へ。こちらAQUILA02。これからみんなの機体を中継^{ハブ}にしてわたしがミサイルの誘導管制とザイへのジャミング、それに対EPCMC^{E P C M}手段^{C M}をするからAZCCに乗ってる人達はやられないようにね。やられたらベルクトに地上で会えなくなるし》

《そりやマズい。ミュベールが隊に入れたってことは可愛い娘なんだろ? 可愛い新入りを見るためにも気を入れないとな》

……なにか凄く気になる事を言ってくれたわね。どういう判断基準で私が引き取ったと思ってるのよ。

《ちよつと。ベルクトが可愛いのは認めるけど私が引き取ったなら可愛い娘だ、ってどういう意味よ》

《いやそのままの意味だが? お前そういう趣味だし》

《オープンチャンネルでそういう事言わないでくれないっ!? せめて私達だけの専用チャンネルに切り替えなさいよ!》

《おいおいミュベール。楽しい事はみんなで共有するべきだろう?》

《好き勝手言ってくれるわね貴方達……》

彼等の意図としては参加しているパイロットの緊張を適度にほぐすつもりだったんだらうけど、話題にされた側としては文句の一つや二つは言いたい。耳年増なところがあるフロントム辺りが気にしたら今後やりにくくなるじゃない。

(ちなみにさつきから可愛いと連呼されているベルクトは顔を真っ赤にして一連の会話を聞いている)

《……こちらウルフィ。来たぞ、実際に見るととんでもない光景だ

》

心底呆れたようなAWACSに促され、西の方を見ると太陽の光に照らされて星の海のように空が煌めいている。何も知らなければ神秘的にも見えるがアレの実態は千単位で現れたザイの大群。夜空に見える星のように情緒のあるものではなく、人類の敵たる破壊の煌めきだ。

《全機戦闘態勢！ これより作戦を開始します！》

《こちらValkyrie01。攻撃を開始する》

ファントムが戦いの始まりを告げ、XC-70で編成されたワルキューレ隊が先制攻撃を開始する。

オーストラリア軍とE・F社で高速輸送機として使われているXC-70だが、この機体は元々は爆撃機として設計された。だから今回のように大型のミサイルを大量に積み、発射出来るミサイルベッドとしての運用も出来る。

そして今回このXC-70で編成された部隊はLR-AM長距離空対空ミサイルだけでなく、ソレをベースにした新兵器を持ってきているらしい。二機のXC-70から次々とミサイルが投下、発射され計10発のミサイルがザイの群れへと向かっていく。

——そしてソレが炸裂したと同時に空に青白い光球が幾つも現れ、そこにいたザイが墜ちるところか蒸発してさえた。

《今のは？》

《オーストラリアで開発していた新型ミサイル——MP
BM開発コード、ハイパーシンと呼ばれる散弾ミサイル。ポリ窒素を採用して広大な加害範囲を持っており、ロックオンした目標周辺まで飛翔し分離した大量の子弹が連続して炸裂することで広い範囲を破壊するだ》

今回投入された新型兵器の威力に空自側だけでなく、私も含めたオーストラリア側の陣営も驚きの声を上げている。それだけ今のMPBMの威力は衝撃的だった。

……話は聞いていたけどトンデモない威力ね、アレ。

《もつとも、乱戦になれば友軍を巻き込みかねないから本来なら初

撃以外では扱いにくいのが難点だがな》

まあ確かに乱戦であんなのを使われたら絶対に巻き添えになる。

……ん？ 本来なら？

《《本来ならってどういうことだ？》》

《《今回みたいに敵が大挙して来てるなら前線より深い位置で起爆させればその心配はない。数秒ではあるが敵を分断することも出来るだろう》》

それは助かるわね。たとえ数秒でもザイを分断出来るのは大きいもの。

《《さあ、ここからは私達の出番よ。行きましょう！》》

私の言葉を皮切りにE・F社所属の部隊が一齐に動き出す。左翼側に展開した部隊はザイに正面から向き合うように、そして右翼側の部隊は大回りをしてザイの側面を突くように動き出す。

先程まで軽口を叩いていたとは思えないほど統率された動きだった。

《《さてアステル。今日はオレ達と組んでももらおうぞ》》

《《ええ、久しぶりね。サイファー、ピクシー》》

——サイファー、ピクシー。この二人はE・F社屈指のEース部隊ガルム隊のメンバーで、ガルム隊はこの二人で編成された小隊。部隊の規模としては最小だけど実力はE・F社と正規軍、双方の中でも最高レベル。機体は二人ともF-15を使っていて、サイファーが尾翼を含め両翼端を蒼く塗り、ピクシーの方は右主翼だけを朱く塗ったシンプルなものだ。

《《それにしても俺達三人が組むってのも滅多にないよな》》

《《それだけ重要なポジションってことだ。実際今回のオレ達の役目は他の奴等には荷が重いからな》》

最前衛にいる隊が交戦を開始。無駄弾を使えない私達はミサイルによる先制攻撃を空自側のAMLR-AMに任せ、私達は最初から格闘戦を挑むべく正面からの突入組に加わる。

《《さあ、花火の中に突っ込むぞっ！》》

ピクシーの言葉と共に私達三機は機体をロールさせ、パワーダイ

ブ。人とアニマが駆る戦闘機と無機質なザイが飛び交う空へと私達は斬り込んだ。

オーストラリア軍のF-15S/MTDがザイの放ったミサイルの直撃を喰らって火の玉と化す。敵討ちといわんばかりにE・F社所属のYF-23が機関砲を叩き込み、一気に加速して離脱。

軽く周囲を肉眼で見ると。見えるのはヒトによって生まれた鋼の鳥とザイというガラスの魔鳥ばかり。

《サイファー、ピクシー。3時方向にザイに追われてる友軍機！》
《よし。行くぞ、二人とも！》

ガラムの二人と共にザイに追われているTyphoon三機を追い回している五機に狙いを定め後ろを取る。こっちに気付いたのか執念深く追撃せずに散開して私達から逃れようとするけどそれではない。目的を果たした私達は散会したザイを追わず、再びザイに狙われている隊や機の支援に入る。

——— 両軍入り混じっての格闘戦。本来なら数と機動性で人類側の戦闘機を上回るザイだが人類側はソレを戦術と連携でカバーする。

今回人類側の勝利条件は個別にザイを墜とす事ではない。出来る限りザイを引きつけ、ベルクトの成層圏脱出後の核爆発で殲滅する事にある。だから今回はザイを墜とすよりも生き残る事が重要になる。

その中でミュベールはガラム隊と共にザイに狙われた隊や機を救出する遊撃隊として動いていた。

ザイの方が数で勝るこの戦場。一機やられるだけで戦力比は大きく傾く。それを防ぐためにミュベールとガラムの二機は戦場を縦横無尽に駆け、ザイに狙われている友軍機を救出する。

《こちらBARBIE03。AQUILA01、GALM01、02。貴方達に敵編隊が近づいています。方位2—8—0、高度6000》

私達は編隊を解き、ブレイク。

上空から急降下してきた敵編隊の攻撃を回避すべく、私達はそれぞれ異なる方向へブレイク。私達を狙ってきたザイが猛烈な勢いで降りてくるけど機体をループさせてザイの突撃を躲し、後ろを取る。自分たちの失敗を悟ったのか、ザイは機首を上げて再加速。ヘッドトウヘッドで突っ込んでくる。身体に猛烈な重みが押し掛かるのを承知で機体を操り、大きく左へ振りながらバレルロール。270°回したところで急ロール、反対方向へと機体を向ける。

あまりの機動に身体の骨と機体の軋む音が聞こえてくるような錯覚がするけどまだ大丈夫。私の身体も、そして機体の限界点はここじゃない。

戦闘機とミサイル、機銃の火箭やザイが飛び交う中、ザイが私の後ろを取る前にロック、ミサイルを発射する。

《FOX2!》

ゲイザーからの誘導を受けたミサイルは、ミサイル自身に目があるかのような正確さでザイを追う。そしてミサイルは逃げるザイが他のザイと接近したタイミングで起爆。直撃はしなかったものの二機を巻き込んだ爆発は互いの翼を砕き、高度を落としていく。

(流石ね。わざと追い回して一発のミサイルで二機墜とすタイミングを狙うなんて)

途端、コクピット内に警告音。私を追ってきたザイの片割れが仕返しとばかりに後方にへばり付く。

(今度はこっちの番、というわけねっ!)

舌打ちしつつ、スロットルを押し込んで加速をしながら急旋回。このぐらいで振り切れるとは到底思えないから今度はスロットルを緩めないままのスプリットSからシザーズへ繋げるも、多少距離が開いた程度で変わらず喰いついている。

(しつこいわね! 少しリスクがあるけどここで――!)

《アステル、お前の後ろにいるのを片付ける。3カウントでダイブしろ。――3、2、1!》

クラークを仕掛ける為にタイミングを計ろうとしたところで、サ

イファアからの通信でマイナスGをかけて急降下。視界が赤く染まるけどそれに耐えてサイファアのF-15を見つけ、一つ間違えれば正面衝突するようなギリギリのタイミングで彼のF-15の真下を潜り抜ける。一方のサイファアは、真正面から後方の敵機にガンアタック。回避するには距離も時間も稼げなかつた敵機が、機関砲弾のシャワーを浴びて蜂の巣と化す。

《よくあんな機動に耐えられるな、アステル。お前実はアニマだったりしないよな?》

《ピクシー、無駄口叩いてる暇があるなら仕事して頂戴?》

《案外余裕あるな、お前ら》

乱戦の中をぐり抜けて再び編隊を組み直す。サイファアが私とピクシーの軽口に呆れたように言うけど、私としてはこうして軽口でも叩かないとやってられないというのがある。

……予想はしていたけどやはりザイの数が多過ぎる。

《クソツ! ケツにつかれた! 助けてくれっ!!》

《今行くっ!》

圧倒的ともいえるザイの大群相手に善戦する私達だけど徐々に綻びが生じ、少しずつではあるが苦戦する隊や被弾した機が増えてきた。作戦前に出された計算ではこちらの戦力が7割を切ったらザイを抑えられなくなる。——こちらの現戦力は既に8割。かなりマズい状況だった。

《これ以上やられるとマズいぞっ!》

《だがどうするっ!? 連中の数が多過ぎる!》

ワルキューレ隊も隙を見てMPBMで攻撃してくれているがソレで減らせるのは敵の後方。今苦戦している友軍は助けられない。

《こちらGALMO1。ピクシー、アステル。散開して個別に支援するぞ》

《……正気か? 相棒。》

《いたってな。俺達が個別に動けば支援出来る範囲も広がる。今の状況だと少しでも多くの味方を助けるのが重要だ。……それとも、自信がないのか、相棒?》

挑発的なサイファアの言葉だけど現状に対する有効打はソレしかない。

《AQUILA01からGALM01へ。私は乗るわ。確かに私たちのリスクは高いけど……それはいつもの事でしよう?》

《違うない》

私達はブレイクして個別に救助にあたる。個別に動く事で支援範囲自体は広がったけど代わりにザイに追われた時に振り切るのに必要な時間も延びた。

なんとか戦線を維持できてるけどそれでも戦力の空白域が少しずつ、けど確実に広がってそこにザイが浸透して空白地を埋めにかかってくる。

激しい空戦^A機動^Cの連続で身体の疲労だけでなく思考力も落ちてきているのは私だけじゃないだろう。

(せめて「ヘレイシア」が来てくれれば……!)

——希望が見えたのはそんな時だった。

《……どこか上位のコマンドがオーバーライドしてきた。『ASA T照準データリンク』……? なんだ、この表示は?》

ウルファイからの通信で私は「ヘレイシア」が間に合った事を確信した。

《AQUILA01からウルファイ。そのデータリンクは友軍のモノです。レーダーに青い線が表示されているハズなのでそれを全機のレーダーに表示してください。その線は支援攻撃の攻撃範囲です》

《……後で説明してもらおうぞ、AQUILA01。全機に告ぐ。レーダー上に表示した青の線上にいる機は回避しろ。……9、8、7》

ウルファイからの忠告で一斉に友軍機が動き出し、射線から外れる。本当なら後退したいところだけどそんな隙を見せたらあつという間にザイが群がってくるだろう。

今はレイシアの照準精度を信じるしかない。

《……4、3、2、1》

カウントゼロと同時に光の斬撃ともいえるモノが空を焼き、レ

ダーに表示された射線から全くズレる事なくザイの群れを薙ぎ払った。

《空が光ったっ!?!》

《光が上から落ちてきたぞ!》

《なんだっ! なにが起こったんだっ!?!》

困惑するのは主に空自の人達とE・F社の一部のパイロット。彼等の困惑を他所に再び空を光が切り裂きザイを薙ぎ払っていく。

《レイシア嬢の到着だ!》

《見たかよ今のっ!?! 綺麗に味方がいるところを避けて攻撃したぞ!》

困惑する自衛隊側とは裏腹に事情を知るオーストラリア組は盛り上がる。

アークバードが薙ぎ払ったのはザイという目に見える敵だけではない。皆が抱えていた不安や恐れという見えない敵もその光で切り裂いた。

《今のはアークバードによる軌道上からの支援攻撃です》

《軌道上……宇宙空間からかっ!?!》

——アークバード。

元々はオーストラリアが宇宙開発に使用していた機体で、現在はオーストラリア軍の国防用の衛星兵器となっている。宇宙空間から高精度で狙撃出来るを装備していて、その照準精度は飛行中のミサイルを捕捉出来る高さだ。

戦略レーザ^Sはミサイルやレールガンのような点の攻撃じゃなく線の攻撃だから一度の攻撃で多数の相手を攻撃出来る。今みたいな状況ではかなり頼りになる支援だ。

《アークバードの軌道変更にはアメリカをはじめとした各国の合意が必要のほすですが》

フアントムの言う通り軌道上からの狙撃、正確にはアークバードが軌道を変更するにはオーストラリア政府だけでなく米国をはじめとした各国の合意がいる。

そのアークバードがここにいる答えは一つしかない。

《その承認が降りたって事よ。》

《…：AQUILA01、その口振りだと貴官は知っていたな？
なぜ黙っていた？》

《私が聞いた時も承認が降りるかはまだ不明でした。…：下手に
伝えていざ来ないとなれば士気に影響が出ると判断しました》

来ると信じていた援軍が来ない時のショックというのはかなり大
きい。だから未確定だったアークバードの事を私達は伏せていた。

けどアークバードによるピンポイントでの支援攻撃が可能になっ
た今、劣勢の機や隊をアークバードが即援護出来るようになったから
戦況はだいぶ良くなるハズ——。

《ツ！ LR—AAMが来ますっ！ みなさん逃げて！》

ベルクトの悲鳴が混じった警告に考えるよりも先に身体が反応し、
高度を上げながらブレイク。その数秒後に通常のモノよりだいぶ大
柄なミサイルが後方に飛んでいき、炸裂した地点から距離があるハズ
なのにその爆圧に機体が揺さぶられる。前衛にいたオーストラリア
陣営は被害が少ないけど後衛の空自の部隊は直撃されたらしく、黒い
尾を引きながら何機も墜ちていつている。

…：どうやら向こうのLR—AAMもこっちのMPBMと同じよ
うなタイプみたいね。

《な、なんだ？ あれ》

《どうやら彼らはこちらの数をまとめて減らす方法に出たよう
ですね。おそらく次は味方もろとも前衛を狙ってくるでしょう》

そしてファントムの予想はおそらく正解であり、同時に私達が一番
恐れていた攻撃だった。あんな威力の兵器で範囲攻撃をされたら逃
げようがない。ザイは味方もろとも攻撃しても大した痛みじゃない
でしょうけど私達は数を減らされるわけにはいかない。

今の攻撃で後衛とはいえ纏めて墜とされたからこれ以上の損失は
作戦遂行の可否に関わる。取れる手段は——

《アレに対処するには炸裂する前に撃ち落とすしかないわ。…：
AQUILA01からレイシアへ。先程のミサイルをそちらのレー
ザーで撃ち落とせますか？》

《こちらレイシア。可能だがザイの数が多くて識別が難しい。こちらで識別してくれば可能だ》

《こちらAQUILA02。さっきのでミサイルのパターンを掴んだから大丈夫。次弾が来たらわたしの方で識別します》

流石ゲイザー。先の攻撃でしつかりとデータを収集してくれたみたいね。

《……っ！ 今のミサイルの第二波、来ます！》

《AQUILA02からレイシアへ。敵ミサイル、識別完了》

《こちらレイシア。ロックオン！ データリンク！ ——
——照射っ！》

こつちに向かっていたであろうLR—AAMを青白い斬撃が周りにいたザイごと薙ぎ払う。ザイを墜としたのとは違う巨大な爆発がザイの群れの中からいくつも現れ、アークバードが迎撃に成功したがここからでも判る。

《ミサイル、全弾撃墜！ やったぞ！》

《ウルファイから全部隊へ。もう敵のLR—AAMの心配はいらん！ ここが正念場だ、踏ん張れっ！》

アークバードが参戦する事でザイに傾きつつあった流れが変わり始める。《誘蛾灯》の有効範囲にこの戦域のザイが入るまであと二、三分。

終わりが見えてきた事で各機の動きに鋭さが戻る。

《レイシアへ。こちらAQUILA02。先の攻撃でミサイルの発射点を特定。座標を送るから発射点を潰してっ！》

《こちらレイシア座標を確認。——照射！》

群れの後方にアークバードの光が落とされ、一瞬遅れてMPBMの炸裂を遥かに上回る爆発が起き、周囲の大气が揺さぶられる。

《アークバードが発射母機を撃墜！》

《もうあと少しだ！ 陣形を組み直すぞっ！》

MPBMとアークバードの支援が噛み合い、こちらの被害が目に見えて少なくなる。既にミサイル、機銃共に撃ち尽くしたけどけど私も含めそういった面子はワザとザイの前を飛んで機動だけでザイを引

き付ける。

———そうして、とうとう待望の時間が来た。

《こちらAQUILA03。これよりフェイズ2に入ります。———エウリユアレ、エンジン出力上昇。EPCM、最大出力で発信》

ベルクトを背負ったスカイロンが大気を切り裂きながら高度を上げ、さつきまで私達と交戦していたザイもベルクトに引き寄せられて一つの柱となって後を追っていく。

《BARBIE03から全機へ。———退避開始。最寄りの空軍基地まで全力で退いてください》

フアントムの声をきっかけに一部を除いて全ての作戦参加機が戦域から離脱する。

残留した一部はバービー隊と私達アキラ。小松でベルクトと関わってきたメンバーだ。

《現在高度二万メートル……クローズドサイクルに移行。インテーク閉鎖、液体酸素注入開始》

ベルクトの声が淡々とスカイロンの状況を伝え、別れの時が着実に近づいてくる。

《……ベルクト》

だから、彼女に言葉をかける事が出来るのは今だけだった。

《私は貴女を話してくれた民話のようにはさせない。必ず貴女を星から降ろす》

それはいつか彼女が話してくれた星になったイヌワシの話。たった数日前なのに今はそれが遠い日のように感じる。

《だから待ってて。私自身が行けなくても、必ず迎えに行くから》
あの時彼女は星になったイヌワシに憧れると言っていた。あの時はお互いソレが現実になるなんて思ってもいなかった。

だけど私の答えは変わらない。私はベルクトに星にならず、ここにいてほしいと思ってる。

《……はい。……待って、います》

少しだけ涙を含んだベルクトの返事に私は微かに息を?む。

《ならミュベール。かける言葉はさよなら、じゃないよね?》

ゲイザーの言う通り、この別れは一時のもので永遠のものじゃない。

——だから、別れの挨拶はこう言うべきだろう。

《《Увидимся Беркут》》

《Да! Покаясь скоро!》

エウリュアレのメインブースターを点火したベルクトは更に速度を上げて戦闘機では追従出来ない速度になり、後を追っていたザイも大気密度の低下で速度を失って木が枝を伸ばすように先頭が広がっていく。

《…: AQUILA01からBARBIE03へ。最後の仕事よ》

《判っています。…: 起爆システムを起動しました。私達も安全圏まで退きましょう》

ディスプレイに起爆タイマーのカウントダウンが表示され、私達も安全圏まで離脱する。

カウントダウンが始まって30秒。UAVに搭載された核弾頭が一斉に起爆し、機体を揺らす衝撃波と共にザイを構成していた水晶体が太陽の光に照らされ雨のように降り注ぐ。

——レーダーに映るザイの反応は皆無だった。

《こちらBARBIE03。敵戦力の殲滅を確認。RTB》

小松に戻った私はいつものように滑走路脇のに寝っ転がって星空を見上げていた。

「ミュベール、今日も天体観測?」

「半分正解ね。コレを探してるのよ」

そうやって私はスマートフォンでの観測アプリを見せる。そこに記されていたのは特定の星や星座ではなくある座標だった。

「…: 探してるのはベルクト?」

「ええ。軌道上とはいっても低軌道だし時間帯と方角があっていれば見えるハズなのよ」

一応観測アプリによれば両方の条件を満たしているから見えるハズなんだけど、満天の星の中から見つけるのは戦闘機乗りの眼でも難しい。

「わたしも手伝うよ」

そう言ったゲイザーは私の隣に座ってもう見慣れた小松の星空を見上げる。普段一緒に星を見る時はお互いの声が見えなくても、今日この時だけはお互いに静かに星を見上げる。

「……ねえミュベール。ベルクトは必ず帰ってくるよね？」

「ええ。必ず帰ってくるわ」

いつ戻ってくるかはまだ判らないけど必ずあの娘は戻ってくる。

あの娘の位置はアークバードが見ていてくれるから見失う事もない。

「……また三人、ううん、明華ちゃんも合わせて四人で出かけようね」
「そうね。ただその前に明華ちゃんに上手く言っておかないといけないけどね」

「そっかあ。……そうだね」

当然の事だけど今回の一件は一般人である明華ちゃんには言っていない。暫くは社の都合で急遽帰国したと誤魔化せるけど、もしかすると真実を話す必要も場合によってはあるのかもしれない。

「……ゲイザー。確か軌道上に上がった後はエネルギーの消費を抑える為にスリープモードになってるのよね？」

「たぶんね。外界からの強い刺激があればそれで目を覚ますと思うけど、基本的には眠ったままだと思う」

「なら……いい夢を見ているといいわね」

「そうだね」

再びお互い静かになる。話す事がないんじゃないお互い地上から見える彼女を探しに戻ったからだ。

そうしてお互い夜空を見上げ続け、ようやく探していた彼女を見つけた。

「ゲイザー見つけたわよ。多分アレだと思う」

「うそっ!?! どこどこっ!!」

興奮するゲイザーに目印になるモノを教え改めて星の海に浮かぶ彼女を見上げる。

（あの時ベルクトは私の迎えに行くという言葉に待っているって言うてくれた。——なら、その約束は守らないと）

ベルクトがどんな気持ちでそう言うてくれたのか私には判らない。確実なのは彼女は憧れだった星になる事よりも私達という事を選んでくれた。

——私にはそれだけで十分だった。

（それまでの間、ゆっくり休んでなさい）

戦いではなく人の『想い』に触れてきたイヌワシは星の海で眠る。

——その胸に、自身を想ってくれた彼と彼女達との思い出を抱いて。

Order 21 秘密の話、していた話

ベルクトが軌道に行ってから数日後、私は一部の整備スタッフと共にオーストラリアのヴィクトリア基地E。F社がグレート・ヴィクトリア砂漠に持つ空軍基地。実際のオーストラリアには存在しないに戻っていた。というのも機体のC整備をする時期が来ていたのと、次の作戦で私は艦載機のF/A-15S/MTDに乗るからその慣熟訓練の為だ。

F/A-15S/MTD自体あまり使った事がない上に、今回の作戦は減多にしない空母への着艦もあるから訓練は必須だった。

(機体の方はクセがなくて扱い易くはあるけど……物足りないとかやつぱりS-32と比べてキレがないわね)

正式採用機であるF-15S/MTDシリーズにそう評価を下すミュベールだがある意味それは仕方がない。正式採用機である以上、ある程度の扱い易さは必須。S-32のようにその気にならなくてもパイロットを殺しかねない機動性を持たせれば事故多発機になり、とてもじゃないがマトモな運用は出来ない。

ミュベールもそれは判ってはいるのだがどうしても愛機と比べてしまう。

(とはいえ着艦訓練自体は何とかあったわね。アグレッサになる時の訓練でしたのを身体が覚えててよかったわ)

それに目の前に目標があるとソレに集中出来る。

……実を言うと私はまだベルクトの事が完全に吹っ切れたわけじゃない。現在位置を国防宇宙軍が把握してるから戦闘^M中行方不明^A扱いにはなってる。とはいえ今ベルクトがいる場所はそう簡単に戻れる場所じゃないし、そもそも起こす事も出来ない。彼女が帰還出来るのは〈誘蛾灯〉を無力化出来る算段が立ってからになっている。

あの娘がいなくなった悲しみや寂しさは勿論ある。いるべき人がいない物足りなさともいえるのかもしれない。とはいえそれで仕事がなくなるわけじゃないし、なによりソレが原因で墜とされたりしたらベルクトが戻った時に悲しむ。だから今は目の前にあるタスクを

こなしていく。

「ご苦労だったな、スタークス」

「社長」

「少しは気分転換になったか？」

「……やっぱり社長には私が何を考えてるかお見通しだったらしい。」

「ええ、少なくとも戻った時よりはだいぶよくなりました」

「そうか。……それと急で悪いんだが小松に戻ってほしい、と言ったらどのぐらいで出れる？」

「今からですか？ 出ようと思えば燃料の補給と武装の装備が終わり次第出れますけど……なにかあったんですか？」

一応訊くけど何かあったのは明らかだ。明日まで滞在予定だったのがいきなり今から戻れるか、なんだから。

「ヘンガーから電話があつてな。実は——」

ヘンガー主任が言うにはアメリカ軍のアニマ・ドーターの研究から呼び出され、鳴谷君とグリペンの二人と一緒にゲイザーが神奈川の厚木基地に連れて行かれたらしい。いきなり呼ばれたのは向こうが予定を曖昧にしていたのに今朝になって突然決めたかららしい。本当なら私とも言われていたみたいだが、肝心の私がオーストリアにいたから鳴谷君とグリペン、そしてゲイザーで向かったという事だった。

……その説明を聞いた私は頭が痛くなった。非公式にしても予定ぐらいは立ててほしい。

「……わざわざアメリカが呼び出したという事は用件は次の任務で
すか」

「間違いなくな。わざわざ厚木までお前達を呼び出す理由は分からんが。ただそういう訳で小松に戻り作戦の準備に備えてほしい」

「……いよいよなんですな」

——次の作戦。それは受け身中心だったこれまでの作戦と違い、人類側から攻勢に出る。

その内容は上海奪還作戦。大陸への橋頭堡を築く為、上海をザイから取り戻す。ベルクトの時は航空戦力を総動員したけど今回は空母機動部隊を中心とした国防海軍も作戦に参加する。とはいえアメリカ

カ海軍は第七艦隊が潰走してから纏まった戦力を動かすのを渋っている。そこで新鋭の空母を持つオーストラリア国防海軍が名乗りを上げた。

政府としてはこの機会にアドバンテージを取る狙いもあるんだろうけど現場の人間からしたらその辺りの事はどうでもいい。上海を取り戻せば航空戦力だけじゃなく地上部隊も動員出来るようになる。簡易的であっても基地が作られれば今後の作戦で大きな助けになるでしょうね。

「判りました。それでは機体と私自身の準備が整い次第小松に戻ります」

「ああ。埋め合わせに今度ゲイザーと一緒に戻ってきた時に何か奢ろう」

「ではそちらも楽しみにしています」

社長と別れた私は宿舎に置いていた荷物を手早くまとめ、再びハンガーに戻ると機体の方は最終チェックに入っておりもうすぐ出発出来そうだった。

「スタークス中尉、台湾空軍に話を通っていて空中給油機が手配されているそうなので給油はそれで行うようにとのことです」

「最終チェック完了しました！ いつでも出せます！」

「ありがとう」

チェックの済んだ機体に取り込み管制塔に指示の元、離陸準備に入る。

《ヴィクトリア・コントロールからアステル。現在ランウェイ29にワルキューレ隊がアプローチ中。上がるならランウェイ03から出てください》

《了解、ヴィクトリア・コントロール。ランウェイ03から上がる》

傭兵基地というのもあって管制塔とのやり取りも正規軍の基地や民間空港と比べてかなりフランクに出来る。勿論外部の機が相手だときちんとやるから身内故の緩さではあるけど。

《アステルからヴィクトリア・コントロールへ。出発します》

《了解、アステル。しつかり稼いできてくださいね?》

—— さて、出るとしますか。

オーストラリア謹製の荒鷲と共に、私は小松を目指して出発した。

台湾領空で空中給油をし、なんとか日が落ちる前に小松に戻れた私はヘンガー主任にF/A-15S/MTDのメンテナンスをお願いして荷物を置きに宿舎に戻っていた。

(ゲイザーからの連絡はまだないし何があつたかは戻ってから聞くとしましょう)

そして何気なくアクイラ、バービー両隊のスケジュールを見て思わず固まってしまった。

—— 鳴谷君は今日オフになっていたからだ。

「……確か厚木には急に連れて行かれたのよね、彼」

嫌な予感がする。傭兵としてじゃなくて女としての勘だけどここの手の予感は外れてくれた試しがない。

—— 急いでヘンガー主任に電話をかけた結果が

《彼には悪いがたぶん強引に連れて行かれただろう。本当に急だったからな》

—— 予感的中。休みだったなら家にいただろうし、もしかすると明華ちゃんと遊びに出てたかもしれない。

……念の為明華ちゃんの様子を見に行きましょう。急ぎだったなら碌に説明してないかもしれないし。

《……少し基地の外に出てきます。緊急の用事が起きたら連絡を》

《ああ、気をつけてな》

急いで駐車場にある車を出し、以前鳴谷君から教えてもらった彼と明華ちゃんが住んでいる家に向かう。

家の前車をつけインターホンを鳴らすと中から走っているような足音が聞こえてくる。

「慧っ?」

勢い良く戸が開いて明華ちゃんが文字通り飛び出してきたけど、いるのが私だと判るとあからさまに落胆した顔になった。

「あ……」

「こんばんわ、明華ちゃん。」

出来るだけ笑顔を浮かべて明華ちゃんに挨拶をするけど私とは対照的に明華ちゃんの表情は暗い。

……これは間違いなくなにかあったわね。

「ミュベール、さん。……どうしたんですか？」

明華ちゃんの声は硬い。というより警戒心や不信感が滲み出てる。コレだけでなにがあったのか大体の予想がついてしまった。

「明華ちゃん良かったら少し付き合ってください？ 実は私……会社の用でオーストラリアに行つてて日本にはついさつき戻ったところなの。だから何があったか教えてほしいのよ」

何があったのか想像はつくけど実際は何があったのか詳しく知っておきたい。ゲイザーがいたのにフォローしないって事は本当にする暇さえなかったんでしょね。

「ただ……詳しい話をする上で人に聞かれたくないんだけど……今は明華ちゃん一人なら上がっていいかしら？」

「……はい。どうぞ」

「お邪魔するわね」

鳴谷君の家に上がった私は明華ちゃんに案内されて彼女の部屋に入る。

彼女の部屋はシンプルであまりものが置かれていない。だからといって殺風景というわけじゃなくさり気なく小物が置いてあるからそこから部屋の主の趣味が垣間見える。

「ここにどうぞ」

「失礼するわね」

明華ちゃんに促されてベッドに腰掛け、隣に明華ちゃんが座る。

「それで明華ちゃん。何があったのか話してもらえます？」

「……」

訊いてはみたものの、明華ちゃんは黙ったまま。……話す気がない

というより本当に話していいのか迷っているように見えるし、それは仕方ないと思う。私達大人の都合で振り回したんだから。

そうして時計の長針が二週ほどして明華ちゃんはついに教えてくれた。

「今日は……慧と一緒に遊びに行く予定だったんです」

ぽつり、ぽつりと明華ちゃんは少しずつ言葉を紡ぐ。

「昨日、慧から誘ってくれて……バイトも休みで呼び出しも絶対入らないからって言ってたから楽しみにしてたんです」

紡がれる言葉から感じ取れるのは鳴谷君と過ごす時間を取られた怒り。そして予定を守らない私達に対する落胆だ。

「なのに……これから出ようって時になって、いきなり連れて行かれたんです。……久しぶりに二人で遊びに行けると思っただのに……」

明華ちゃんの言葉は嗚咽混じりで途切れ途切れになり、最後の言葉を紡ぐ頃には膝を抱え、そこに顔をうずめて顔も私からは見えなくなってしまう。

(けどこれは誰だって怒るわね。折角鳴谷君が誘ってくれたのに大人の都合で潰しちゃったんだもの)

しかも出る直前という最悪のタイミング。どう考えても悪いのはこちら側だった。

「……ゴメンね、明華ちゃん。同じ関係者として私は謝る事しか出来ない」

ベッドからいったん立ち、彼女の手を握りながら小さくなった身体を正面から包み込む。

私が頭を下げたところで明華ちゃんが台無しにされた時間が戻るわけじゃない。けど顔は見えないけどきつと泣いているであろう彼女を見て、何もせずにいるなんて私には出来なかった。

「……明華ちゃん。貴女は気付いてるんでしょ？ 鳴谷君の基地でのバイトが普通のものじゃないって」

これから私がする事はれっきとした契約違反。バレたら何らかのペナルティーがあるのは間違いない。

……けど、それは無関係の娘が悲しむのを黙って見ていい理由

にはならない。

「それは……」

返事はないけどその表情がどう思っているかを如実に物語ってる。
なら……話すべきだろう。

空自に雇われている人間としては仕方ないと割り切るべきなんだろうけど、目の前で必死に泣くのを堪えている彼女を見てそんな事を言えるほど私は人間が出来ていない。

それに——これ以上黙っていると明華ちゃんと鳴谷君の間に決定的な亀裂が出来る気がしてならない。

「……ずっと疑問には思ってたんです。いくらなんでもあんな急に呼び出されたり、連れて行かれたりするなんて普通のバイトじゃないと思いますから」

……まあそうよね。PX程度のバイトで急に呼び出されたりっていうのはちよつと有り得ない。明華ちゃんが疑うのも当然といえば当然か。

「明華ちゃん。これから私が話す事は決して誰にも話さないって約束出来る？」

明華ちゃんから一歩離れ、ベッドに座ったままの彼女を正面から見下ろすカタチで意思を問う。

「……教えてくれるんですか？ 慧がなにをしてるのか」
「全部は教えられないし、これからの事を考えると知らない方がよかったと思うかもしれない。それでもいい？」

明華ちゃんの返事は判り切ってるけどそれでも一応訊く。明華ちゃんは聡い娘だから私がこうして訊く理由も判っているでしょう。

——答えてしまえば後戻りが出来なくなるという事が。

「知らない方がよかった、ってどういうことですか……？」

「言葉通りの意味よ。付け加えるならコレは知り合いとしてじゃなく軍属としての忠告でもあるわ」

ミューベールのその言葉に明華は迷っていた。慧が何をしているかはもちろん知りたい。——しかし同時にそこまで踏み込んでいいのかという躊躇いもある。

慧が自分に言わなかったのは言えば自分が心配すると思ってるんだろうし、口止めされてもいるからだというのはミュベールの言い方で気付いていた。それを理性では納得出来る程度には明華は聡く、感情では受けとめられる程大人ではなかった。

時間になれば数秒、しかし明華にとつては大いに悩んだ結果――

――明華は小さく、しかし確かに首を縦に振った。

「……それじゃあ話すわね。鳴谷君が基地のPX……購買でバイトをしている、っていうのは基地に来る名目よ。……本当はザイに対抗する為の協力をしてもらってるの」

「協力って……」

「私達が使っている戦闘機は普通のモノじゃないの。だから扱えるパイロットも限られるんだけど……そのうちの一人が不安定でね。飛ぶどころか倒れたりする事も結構あったのよ。けど何故か鳴谷君と一緒にいると安定してたの。だから鳴谷君には基地では出来るだけ彼女の傍にいてもらう必要があったし、どうして彼と一緒にだと安定するのか細かくデータを取る必要があったの」

「そうだったんですか……」

……ここで止めておけばまだ鳴谷君を明華ちゃんの中でただの「民間協力者」というレベルで済ませておける。――けど、そんな嘘ではないが真実も言っていないという事で彼女の先ほど、そしてこれまでの苦悩を流すのは踏み込む決めた彼女に失礼だろう。

（……ゴメン、鳴谷君。貴方の努力を無駄にするように悪いけど……

私はこれ以上彼女が傷付くのに黙ってられないわ）

そうしてミュベールは慧がずっと隠していた真実を口にする。

「――もう一つ。鳴谷君もザイと実際に戦っているわ」

「!？」

――明華にとつて決定的ともいえるその事実を。

「どういう……どういうことですか?!? 慧が戦ってるって!？」

「……言葉通りの意味よ。さっき不安定といった彼女が戦うには鳴谷君が近くにいないといけない。だから――」

「だからって! どうして……どうして慧じゃないといけないんです

「かっ!?!」

立ち上がった私に詰め寄る明華ちゃんの瞳は怒りとなぜという疑問に満ちている。

「……けど私じゃ明華ちゃんの求めている答えは出せない。鳴谷君とグリペンがあそこまで相性がいい理由を私も知らないからだ。」

「……研究してる人の話では鳴谷君という事で彼女の脳波が安定するからだそうよ」

「でも…… どうしてそれで慧が戦わないといけないんですかっ!?!」

「……」

私の胸元を掴んだ明華ちゃんから向けられる怒りは、傭兵とはいえ軍属である身なら遺族から向けられる—— 決して慣れてはいけないものとよく似ている。

その感情に私は沈黙で返すしかない。私達が自分達の都合で鳴谷君を戦場に立たせている事は覆しようのない事実。そこから向けられる怒りは私達が背負うべきものでもあるが故に。

「……どうして。どうしてなにも……言わないんですか……。 どうして今まで……教えてくれなかつたんですか……」

私の胸元で泣きながら感情をぶつける明華ちゃんの頭に手を回そうとして……その手を止め、その手を降ろす。

(……今の私にそんな事をしていい権利はないわね)

泣きながら掴んだ服を握りしめる明華ちゃんに私は何もすることが出来ない。今の私に出来るのは明華ちゃんの感情をこのまま受け止める事だけ。

「……あたしだって、わかってるんです。ミュベールさんに当たつても意味ないって。でも……慧が戦ってるって聞いて、そんなの……っ!」

「……明華は自分のしている事が八つ当たりだと判っている。判っていてなお、目の前にいるミュベールに自分の中から湧き上がってくる憤りをぶつけずにはいられなかった。」

そして、ミュベールもそれは判っている。判っているから……ミュベールは明華のされるがままでいた。—— それを受け止め

る事が贖いだともいうように。

「……もう、誰かがいなくなるのは嫌なんです。あたしは、一緒に、いてくれるだけでいいのに、なんで……!」

——それが明華の本心。明華の心の奥底には常にその事への恐れがあった。明るく、そして気丈に振舞っていても明華は慧もいなくなってしまう事が怖かった。

だからこそ、八つ当たりだと判っていても明華はミュベールに当たるしかなかった。

(……本当、自分が嫌になるわね)

胸の中で泣き続ける明華を見て、ミュベールは降ろしていた手を挙げてそんな事をする権利はないと自身を見下しながらも胸の中で泣きじゃくる明華の頭を撫でる。

「ミュベール、さん……?」

「明華ちゃん……貴方の怒りも恐れも、全部私が受け止める。だから

全てぶつけていいわというミュベールの言葉に、明華の瞳から堰を切ったように涙が溢れ、声にならない憤りをミュベールにぶつける。

その間、ミュベールは自身の言葉を違える事無くずっと明華の涙と憤りを受け止め続け、彼女が落ち着くまでずっとそうしていた——

——あたしはずっと不安だった。

慧と一緒に上海を出てから……ううん、慧のお母さんがザイに殺されてからずっと……あたしは身近な人がいなくなるのが怖かった。

日本に来て少し安心できたけど、慧が自衛隊に入るって言いだしてそれはまた出てきた。最初に聞いたときは思わず怒鳴っちゃったけど、内心では慧まで死んじゃったらどうしようっていうのでいっぱいだった。

そして、慧が自衛隊の基地に行つてバイトをするようになってから慧は変わった。いきなり呼び出されたり、急に身体を鍛えたりし始め

たり……変な怪我をして帰ってくるようになった。——だ
から、購買のバイトっていうのは嘘で別のことをしてるのはすぐにわ
かった。

けど……慧は教えてくれそうになかった。話せないのか心配かけ
たくないのかはわからないけど必死になって隠そうとした。……
だからあたしも気づいてないフリをした。不安を押し殺して、絶対
に泣いたりしないように、なんでもないように返事をした。

——そして、ミュベールさんに慧のしてる事を教えられ
て、ずっと抑えてきたものが一気にあふれ出した。止めようと思つて
も止められなかった。ずっと怖かったこととか、なんで慧が戦つてる
のとか、いろんなのがごちゃ混ぜになったものをあたしは全部ミュ
ベールさんにぶつけてた。それでもミュベールさんは最後まであた
しを受け止め続けてくれた。——それがどうしてか……す
ごく嬉しかった。

(……そっか。あたし……ずっと誰かに聞いてほしかったんだ)

——そうして自分のすべてをぶつけ、我に返った明華は今
まで自分がしていた事を思い返して顔が真っ赤になった。

(……どうしよう。勢いに任せてあたし、とんでもないことしちゃつ
たんじゃ……！)

密着した状態から少しだけ顔を話すと、自分の顔があったであろう
位置には涙の跡がしっかりと残っている。

そして頭を撫でていたミュベールが、明華が動いた事に気付かない
わけがなかった。

「……落ち着いた？ 明華ちゃん」

そう言ってくれるミュベールさんの声は変わらず穏やかで、私を気
遣ってくれてるのがわかる。

……それに、すごく温かい。

「……^{ジエツエ}姉姐」

だから、なのかな。思わずこんなふうに呼んじやったのは。

「……明華ちゃん？ 今のは……？」

「あ、その、ですね。あたし一人っ子なんですけど、お姉ちゃんがいたらミュベールさんみたいなのかなって思って、それで……」

恥ずかしさで言葉が最後まで続かない。あんなだけ泣きわめいておいてアレだけど恥ずかしいものは恥ずかしい。

(呆れられてたかどうか……)

そう思っていたけどそれはいらぬ心配だった。

だってミュベールさんは――

「私でよければいくらでも姉代わりになってあげるわ。私も明華ちゃんみたいな娘が妹なのは大歓迎よ?」

あたしの不安を柔らかい笑顔で受け入れてくれたのだから。

「落ち着いた? 明華ちゃん」

「は、はい。ほんと色々ごめんなさい……」

落ち着いた明華ちゃんの隣に座り直したけど明華ちゃんはさつきまで自分の行動を思い出して顔を真っ赤にして俯いてる。

……まああんなに泣きながら自分の心情を言うのは確かに恥ずかしかったでしょうね。私だって明華ちゃんぐらいの時に同じような事をしたら恥ずかしさで相手と目を合わせられないし。

「気にしないで。私も明華ちゃんの助けになれたなら嬉しいから」

私が明華ちゃんの助けになれたかは彼女にしか判らないけど、あの涙を受け止めた事に意味があったと私は信じた。

「それと私から言った事は鳴谷君には内緒にね? 鳴谷君も貴女に黙っている事をずっと悩んでるから」

「慧も……?」

鳴谷君も明華ちゃんに黙ってる事を悩んでるし、その事がプレッシャーにもなってる。トレーニングや訓練に付き合っている時に、彼は明華ちゃんに心配をかけてないか不安だと言っていたし。

「そっか……。慧も悩んでたんだ……」

「ええ。だから明華ちゃん、この件で鳴谷君を責めないであげてね? そもそもこの件で鳴谷君は口外するな、って言われてるから好きで

明華ちゃんに黙ってたわけじゃないの」

そもそも組織として見た場合、口外せずにいる鳴谷君の方が正しく
てこうして明華ちゃんに話した私の方が間違ってる。だから明華
ちゃんにはその事を誤解してほしくない。

「……ミュベールさんはどうしてここまでしてくれるんですか？」

ミュベールさんが教えてくれたことって話すのマズいことなんですよ
よね?」

「そうね。いい悪いで言えば悪いわ。思いっきり守秘義務に反する
し」

そう言うのと明華ちゃんの瞳が不安に揺れる。

たとえ明華ちゃんが誰かに話したりしなくても、私のした事が機密
事項の漏洩には違いない。話した相手がどうこうではなく話した事
自体が問題なのだ。

「けどね明華ちゃん。私はね、女の子が泣いているのを見るのは嫌な
の。……明華ちゃんを泣かせた私にこんな事を言う資格はなのかも
しれないけどね」

「そんなこと……」

けどそれは傭兵……というより軍属の人間としての正しさ。その
為に誰かを泣かせるのは受け入れられない。

たとえそれが原因で社を追われたとしても私は私の信じた道を行
きたい。

「だから私は今回話したの。結果として明華ちゃんを泣かせちゃった
けど、貴女が鳴谷君と仲が悪くなるよりはずっといいわ。……憤りで
流す涙と誰かと仲が悪くなつて流す涙は違うもの」

どちらが重いというわけじゃない。けど前者と違って後者は流
さなくても済むかもしれない。なら私は自分に矛先を向けられても
後者を止められる方を取る。

……それが巻き込んでしまった側の責でもあると思うから。

「ミュベールさん……ありがとうございます」

「いいのよ。お姉さんみたい、なんて思ってくれたならそう思ってく
れる妹を助けるのは当然なもの」

実際には明華がそう思うよりも前に行動していたミュベールだが、それに突っ込むのはまあ野暮というものだろう。

「あの……これってバレちゃいけないんですよね？」

「ええ。これは鳴谷君にも秘密だから共犯者ね、私達」

小さく笑みを浮かべ、唇に人差し指を当ててそう言うとうまく明華ちゃんの瞳から不安の色が消えて笑ってくれた。笑顔といっても少し困ったような笑顔ではあるけど、それでもさっきまでの泣き顔よりずっといい。

明華ちゃんが見せてくれた笑顔に私はようやくここにきてよかったと実感出来たんだから。

「明華ちゃんは英語は得意？ あ、この場合の得意っていうのは成績がいいとかじゃなくて会話みたいに実用的な事なだけだ」

「えっと……得意というわけじゃないですけど、できないってほどでもないです」

あれから私達は少しの世間話になって、そこから明華ちゃんの進路の話になった。学生の明華ちゃんにとって進路をどうするかは人生の大きな分岐点になる。その上で英語が出来るか否かで選択肢がだいぶ変わるし、もう一つ気になる事もある。

「これは私の勤なんだけど……おそらく鳴谷君はザイとの戦いが終わっても空から離れる事はないわ。今みたいに軍に近い位置にいるか民間の航空機会社に行くかは判らないけどね」

私の気になる点というのはコレだ。鳴谷君は間違いなくこの戦いが終わってからも空にいる事を選ぶ。明華ちゃんが鳴谷君の傍にいる事を選ぶなら、その準備は早い方がいい。

「どうしてそんなことがわかるんですか？」

「判るわよ。彼と同じような目をした人はたくさん見てきたもの。私も彼も『ソラ』に魅せられた人間だから同族なのは判るのよ。その辺りの理由は私より明華ちゃんの方が知ってるんじゃない？」

「それは……そうですね。けどそれと私の英語ができることとなに

か関係があるんですか？」

まあ確かに。これだけだと話は繋がらない。

けど――

「これは私からの提案なんだけど……明華ちゃん、貴女航空関係のスタッフを目指してみない？」

彼女が私の提案を進路に考えるなら話は変わってくる。

「……はい？」

「だから航空関係を目指す気はない？ 航空関係って聞くとパロットをはじめとした乗務員が浮かぶと思うけど空港自体に務めるグラントスタッフも立派な航空関係者よ」

「えっ？ それって……」

「明華ちゃんの考えている通りよ。鳴谷君が航空関係に進むなら実際に支える立場を目指すのも悪くないと思うのよ、私は」

「!!」

私としては悪くない進路だと思う。グラントスタッフは乗務員に比べてなる為の門が狭いわけじゃない。勿論グラントスタッフの中でも管制官を目指すなら必然的に競争は激しいけどそれに見合ったやりがいもある。

……まあ問題がないわけじゃないんだけど。

「とはいっても今はザイの事があって航空関係の仕事は落ち込んでる。そこは今戦ってる私達を信じてもらうしかないんだけど」

特に国際線は世界的に見ても縮小傾向にある。ザイの制空権下にある中国大陸は飛行禁止区域に設定されているからだ。だから私が明華ちゃんに進めた道は人類側がザイに勝たないと安泰とは言えない。

――その一方で有望そうな学生を押さえておきたいというのもある。

「それに……これは当分先になるけど、中国をザイから奪還したら沿岸部はともかく内陸部は復興の為に幾つも空港が出来る。だから今のうちにスタッフとして有望そうな人を押さえておこうと思って」

ザイとの戦後、中国大陸に空港が再建されれば間違いなくそこで働

いてもらう人が必要になる。けど人は一日二日では育たない。管制関係のように専門知識がいるとなると猶更だ。

「だから英語ができるか聞いたんですか？」

「ええ。空港……特に国際空港のスタッフで英語は必須といえるスキルよ。だから見込みがありそうな子を今から育てておこうかなって」「そうなんですか……」

スタッフ間でする話とはかく、業務中でやり取りは一部の例外を除いて英語で行われる。だから英語が元々出来るのと出来ないのじゃ下地がだいぶ違ってくる。

特に明華ちゃんのように元々中国語が出来るとなると、中国で空港関係が再建されたら必ず必要な人材になる。

「ま、この事は鳴谷君が話せるようになってからでもいいと思うわ。私としてもこういう道もある、って提示した程度だし」

勿論、ミュベールは明華がその道に進むなら協力する気である。航空関係ならミュベールも知識面も多少は教えられるし、E・F社になら推薦状を出す事も出来る。……その場合はオーストラリア行きが確定するので要相談にはなるのだが。

それでも明華にとってミュベールがした提案は進路を考える上で一つの大きな指標になった。

「あの、ミュベールさん……色々ありがとうございます！」

「お礼なんていいわよ。私がしたくてしたんだから」

「でも……」

本当に気にしなくていいのに。けどそれじゃ明華ちゃんは納得しないわよねえ……。

あ、そうだ。

「なら明華ちゃん。今度貴女の料理をご馳走してくれない？」

「えっ？ でもそんなのじゃお礼にならないち思うんですけど……」

「そうでもないわよ。私もそれなりにはする方だけ……やっぱり気にかけてる娘が作ってくれる料理は食べたいもの」

「なっ!?!」

さらっとそんな事を言うミュベールに思わず顔が赤くなる明華。

……こういう事を自然体で言うから同性からモテる（なお、本人はある程度自覚した上で言っている）のである。

「前に鳴谷君から明華ちゃんのご飯が美味しいって聞いてね。羨ましいなーって思ったのよ」

美味しい料理が作れる明華ちゃんにもだけど、ソレを当たり前のように食べてる鳴谷君の方が私は羨ましい。誰かの為に作られた料理がどれだけいいものなのか鳴谷君は気付いてるのかしら？

「なら……今度お礼をかねてご馳走します。腕によりをかけて作りますから楽しみにしてください！」

「ええ。あ、その時は鳴谷君には内緒にね？ それと今回の事はオーストラリアから戻った私から聞いたって鳴谷君には言っておいて。内容としては荷物が崩れて怪我人が出たって聞いた、とでも言っておけば大丈夫でしょう」

後で鳴谷君にもこの内容で説明したとメッセージを送っておけば彼も帰ってから説明がしやすい。怪我人が出た、となれば急ぎで呼ばれた事の説明もしやすいでしょうし。

「そろそろ私は戻るわ。正式な許可を取って出たわけじゃないから遅くなるかとマズいから」

「あ、はい。すいません色々」と

明華ちゃんの部屋を出た私達はそのまま家の外に出る。

……玄関まででいい、と言ったのにわざわざ外まで見送りに出てくれるあたり明華ちゃんの性格が出てるわね。

「それじゃあね、明華ちゃん。今日は私達の都合で振り回して悪かったわ」

「い、いえ。確かに慧が連れて行かれた時はその……嫌でしたけど代わりにミュベールさんとお話出来ましたから。……その、約束の日を決めたらまた連絡しますね？」

「ええ。楽しみにしてるわ」

そうして車に乗り込んだ私は軽く手を振り、それに明華ちゃんがぺこりとお辞儀をしたのを見て車を出す。

ヘンガー主任からの連絡は特に何もなく、私と明華ちゃんが話して

いる間トラブル等がなかった事に安堵する。

(さて……ゲイザー達が戻ってきたら色々話を聞かないとね)

なお、この時ミューベルはゲイザー達が帰ってくるのはまだ先だと考えていた。が、基地に戻って割とすぐ一行が戻ったので、何の為に呼び出されたのかと頭を抱える事になるとはこの時点では思いもしなかったのだが。

Order 22 思惑

「ブラウラー……無人機^{UAV}専門的には無人戦闘航空機はUCAVと称されるが当作ではUAVで統一ねえ。それがアメリカの出した答えってわけね」

ゲイザー達が厚木基地から戻り、私とゲイザーは早速お互い何があったかすり合わせをしていた。

予想していた通り厚木での話は上海奪還作戦の概要と、アメリカ軍がアニメ以外でザイに対抗する為に用意した新兵器の話が中心だったらしい。

ちなみに鳴谷君には『明華ちゃんに怪我人が出たから急遽連れて行かれたと説明してある』と伝えたからそれに沿った話をするでしょう。

当然、明華ちゃんに色々と話した事は鳴谷君を含めて誰にも話していない。あの話は私と明華ちゃんだけの秘密だから誰にも話すつもりはない。

「なんか不満そうだけど……ミューベルも八代通室長とおんなじでUAVを使うのは気に入らないの？」

「アプローチ自体は否定しないわよ。出来ないものに見切りをつけて出来るものでカバーするってのは間違いじゃないし。いかにもアメリカ的な発想ね」

とはいえ否定しない事と不満がない事は決してイコールじゃない。戦力的にどうなのか、という疑問もあるけど私の懸念はそれ以前のところにある。

「私はUAV……というより私は人工^A知能^Iの進化にはあまり賛成じゃないからね。より正確に言うなら自己学習で人の手に負えなくなるA・Iが、なんだけど」

私がUAVの投入に否定的なのはそこだ。独立稼働するだけなら私はそこまで気にはしない。問題なのはそのA・Iが自己学習で進化するかどうか。制限のない『学習』をプログラムされたA・Iはいずれか人の手に余ると私は考えているからだ。

そしてもう一つ。仮に戦いの主軸が人から機械に変われば確かに戦場で死ぬ兵士の数は減る。けどそれは同時に戦争がゲームになる時でもある。

……人が戦争を忌避するのはそこに犠牲が出るからだ。なら、その犠牲がなくなりゲームと化した戦争を人は嫌悪しきれるだろうか？ そうなれば利益だけを追求し、相手を踏み潰そうとする国が現れる可能性はゼロじゃない。

「でもそれ言うならわたし達アニマも似たようなもんでしょ？ わたし達だって自分で学習していくんだし」

「それは違うわ。確かに貴方達は人間じゃないかもしれないけど……プログラムに則ってのみ動くA。Iとも違うでしょ？」

「まあね。そのあたりはいいことも悪いことも教えてくれたミュベールやみんなの賜物かな？」

私がアニマが機械……プログラムで動くモノと思えない最大の理由がここだ。機械はプログラム通りに動き、そこから外れる事はない。けどアニマの思考は人間ヒトと変わらない。子供と同じで、アニマは自身に接する人間とその環境で自己を形成すると言ってもいい。だからプログラムのコードだけで動くA。Iとは絶対に違う。

「ゲイザーにとっては色んな人が先生だものね」

「うん。だからわたしは人が好き。そりやあ嫌いな人もいるけどだからって人間そのものが嫌いになれるわけじゃないし」

ベルクトもそうだったけど人から純粋な想いを向けられたアニマは使命や義務感じゃなく純粋に人を好いているような気がする。ソレを証明してるのが私を知る限りゲイザーとベルクトしかいないから正しいのかは判らないけど。

「……話が逸れちゃったわね。アメリカが作ったUAVに話を戻しましょうか。実際に見た貴女から見てどう？ 使い物になりそう？」

「はつきり言って無理。動きもだけど反応が鈍いから困ぐらいにしかならないかな。戦力って意味ならAZCCじゃなくてもオーストラリアオーストラリアの航空兵航空兵の方がよっぽど強いし」

「そりや私達と比べたらそうでしょうね」

なんせオーストラリア軍はE・F社という世界で一番ザイとの戦闘経験が豊富なPMCと提携してる。正規軍はその性格上国外に出る事は難しいあくまで公式には。正規軍と傭兵の混成師団である第六航空師団に配属すればデータ上はE・F社の社員として参加する事が可能。けど傭兵である私達は別。ザイと交戦した私達がデータを持ち帰り、ソレを訓練にフィードバックさせれば正規軍も相応の訓練が積める。AZCCの配備もあって現在オーストラリアは対ザイの戦力が最も整っている国となっていて、純粋な航空技術だけでもアメリカを抜いて今や世界でもトップだろう。

「ただブロウラーの強みは人的損失がないってところかな。やられても『命』の犠牲なく戦えるのはやっぱり大きいと思う」

「……そうね。ソレは有人機にはない大きなメリットね」

UAVの最大のメリットはいくらやられても人的被害がゼロで抑えられる、という点に尽きる。

言い方は乱暴だけどパイロットは戦闘機が戦闘機として機能する上で最も高価で替えの効かない部品でもある。パイロット一人が育つのに生まれた時から数えれば十年単位の時間と相応の教育、そしてその教育を受けさせる為の費用がかかる。

けどUAVなら純粋に機体を製造する為のコストだけで済む。絶対にパイロットを失わないUAVはコスト面からみれば何物にも代え難い。

「だよね。だから予想だけだとぶん囲として使うんじゃないかな？」

向こうの話じゃ二個飛行隊分——24機投入するって言うってたから囲として使うは十分な数じゃない？」

「……武装は？」

「一機につきAIM-9が6発と機銃だって。一応ミサイルを使いきった最後の手段としてFOX4も視野に入れてるみたいだけど」

「いや当たらないでしょ、ソレ」

無人機の究極的な運用だけど動的目標……それも自己より速い相手に仕掛けても当たるわけがない。それなら味方の盾になつてもらう方がまだいい。

……アメリカがそれをしてくれるか怪しいところだけど。

「やつぱミュージュールから見てもそう思うよねー」

「なんとかして対ザイでの主導権を握りたいんでしょ、向こうは」

アメリカはアニメ・ドーターの開発で出遅れ、更に第七艦隊の失敗もあつてザイへの対抗という意味ではオーストラリア・ロシア・日本の三国に遅れを取っている。

今回の作戦もアメリカは航空戦力の他に第七艦隊の生き残りと第三艦隊が参加するけど指揮権はオーストラリアにある。ザイとの戦いで実績を出しているのはオーストラリアの方だから作戦の主導はオーストラリア軍が握る事になっている。

世界の警察を謳っていたアメリカとしてはブラウラーでこれまでの失態を帳消しにしたいんだろう。……正直、戦場に政治のパワーゲームなんて持ち込まないでほしい。大抵そういう時はロクな事にならないんだから。

「あ。それとアメリカのアニメにも会ったよ。機種はF/A-18Eで名前はライノ」

「どんな娘だった？」

アニメに関わってる身としてはアメリカのアニメがどんな娘なのか興味がある。

……独飛のアニメみたいにクセが強くなければいいんだけど。

「んー、一言で言うなら社交的でニコニコしてた。あ、それとミュージュールが好きそうな話をしてたよ？」

「私が？」

私が好きそうな話、と言われても思い当たるモノが割と多いからどんな話なのかパツとは思いつかない。一体どんな話をしてたのかしら？

「うん。アメリカのアニメ・ドーター開発が進まないのはカワイイの文化がないからかなって」

「それがどうして私が好きそうな話なのよ」

もしかして私は可愛ければなんでもいいなんて思ってるのかしら、この妹分は。

「道具への思い入れがないと魂は宿らないんじゃないかって。そういう話、ミュベールは好きでしょ？」

「物凄く惹かれるわね」

確かに私はその手の話は好きなジャンルだ。

長く使い続けたモノや強い想いに晒された道具。それらは時に道具そのものに宿るモノがあるとされている。

……まあ戦闘機に宿った想念がアニマだ、なんて言われると神秘学を少しでもかじった人間が見れば首を傾げざるを得ないだろうけど。

「話が合いそうね、彼女とは」

「でしょ？ アメリカの思惑も喋ってくれたしねー」

「……は？」

待った。そんな重要な事まで話してたの？ この娘達。

「アメリカは今まで絶対を誇ってた軍がザイ相手に負け続きでしょ？」

今オーストラリアか日本のどっちかと開戦してもアメリカは不利だから、ブロウラーで巻き返したいんだって」

「……なんて莫迦な」

ザイという脅威が目の前にあるのにオーストラリアと日本のどちらかとの戦争を警戒？ 考えている事のバカバカしさに呆れを通り越して溜息がでる。

勿論E・F社やオーストラリアの軍上層部もアニマ保有国との交戦という可能性は考えてる。けどそれはあくまで『仮想』に過ぎないし、現場の人間が口にして余計な疑念や警戒を抱かせていい内容じゃない。

『『最悪』の状況に備えるのは軍の基本だけど、他国の人間に喋っていない内容じゃないでしょうに……』

機密に関わるその娘が知っていただけなのか、それとも現場レベルにまでその意識が浸透しているのか判らないけど後者なら最悪だ。アメリカはベルクトの時も戦力を出す事を渋っていたから真実味がある。

「それとライノの言動っていうか……ライノ自身も少し気になったかな？」

「なにかあったの?」

「そういうわけじゃないんだけど……なんかちよつと違うなつて」
「……?」

ゲイザーの言葉は要領を得ない。ゲイザーは思っている事を割とストレートに言う方だから言い淀んでいるんじゃないかと純粋にどう表現するか悩んでいるんだろう。

「社交的で明るかったけど……同じ笑顔でもイーグルやベルクトとは違う気がしたんだよね。……どう言えばいいんだろう?」

うーんと頭を捻るゲイザー。

私としてはイーグルやベルクトのような打算のない笑顔とは違う、というところである人達の顔が浮かんでいた。

「……まさかとは思うけど社長達の対外用の笑顔?」

「あ、そうそれ。政府とか他の会社のお偉いさんと話してる社長とか重役会の人達の笑顔が近いんだ。こうパツと見は笑ってるけど内心は違う、みたいなの?」

「……」

言っておいてなんだけど本当にそうだとは思わなかった。そういう笑顔を勉強として間近で見てきた見させてきたゲイザーの感性は莫迦に出来ない。

……けどどうにも気になるところもある。

(どういう事かしら? なにか隠してるのだとしても、それだとわざわざアメリカの思惑を喋ったのが腑に落ちない。今回の作戦でまだ他になにかあるのかしら?)

取り合えずこの事は社長を通してオーストラリア政府にも伝えてもらった方がいいでしょうね。アメリカの思惑に気付いてない事はないと思うけど流石に捨て置いていい内容じゃないし。

……ライノという娘の真意については考える材料がない以上、今は置いておくしかない。

「……ゲイザー。その事は誰かに話した?」

「ううん。ミューベルだけだよ」

「ならこの事は他言無用よ。余計な軋轢を作りたくないからね。ただ

し社長には報告する事。政府筋にもこの事を伝えてもらうようにね」「わかった」

先行きに不安がある作戦ではあるけど好機なものも事実。アメリカ軍がここまで纏まった戦力を出す機会はそうそうない。アメリカがこの作戦を利用しようとしているなら——こつちが似たような事をして問題ないわよねえ？

夜、基地内でファントムの姿が見えない事が気になった私は星見を兼ねて基地内を探していた。

あまり時間をかけずに見つけはしたのだが、その恰好はジャージに深く被った帽子と明らかに無断で基地を抜け出していた格好だった。問いただしてみると『自衛のために慧さんを外そうとしましたが失敗しました』なんて澄まし顔でトンデモない事をしでかしていた事を暴露し、出た答えの走つてる車に突き出したという悪びれもしない答えに私は頭を抱えなくなった。

……どうしてこども小松は問題を起こしてくれる娘が多いのかしら？

「……詳しく説明してもらおうよ？」

「もちろんです。そのために話したのですから」

ファントムがそんな事をしたのは鳴谷君を作戦から外す事で、成功の目がない作戦に参加させないようにするためだった。ファントムから見てもアメリカは今回の作戦が失敗するという前提で立てている。組織や国がアテにならない以上自衛しなければならぬ。その為には彼女が採った行動が鳴谷君を車に突き飛ばすというものだった。

「もう少し穏便にする方法もあつたでしょう？」

「ちなみにミューベルさんならどうします？」

「私？ 私なら出発前に一服盛るなり腹に一発強烈なのを見舞って意識を無くしている間に出発するわね」

やるなら私は他人を巻き込みたくないし、私はその事への責任を全

て負う。フアントムのやり方だと人身事故になるからその車のドライバーが関わってしまう。警察沙汰になって鳴谷君と空自の関係が露見したりすると面倒な事になるのは目に見えてるし。

……私のやり方にフアントムは思いつきり引いてるけど。

「……さすがは歴戦の傭兵。取る手段も荒っぽく品がないですね」

「喧嘩を売ってるの？」

そうなら買うわよ、底値で。そもそも実際に車に突き出したフアントムにだけは言われたくない。

……ま、それはともかく。

「フアントム、貴女の懸念は私……というよりオーストラリア側も似たような事を考えてるわ。だから私達は今回の作戦に乗ってるの」

彼女には私達オーストラリアの思惑を知っておいてもらおう。変に動かれて余計な事をされると困るし、そうされると作戦の成功が遠のく。

「……それはどういう意味でしょうか？」

「アメリカにどんな思惑があれ、オーストラリアとしても今回の作戦を成功させれば対ザイで大きな主導権を握れる。そうすればこれから先アメリカに変な横槍を入れられる事はないわ」

……個人的には鳴谷君を参加させないよう動いたフアントムを咎めたくはないけど、アメリカから余計な干渉をさせない為には私達が主導権を握らないといけない。その為にはどうしても今回の作戦を成功させる必要があった。

「どの国も考える事は同じということですか」

「否定はしないわ。それで割りを食うのはどこの国も現場なものね。違うのはアメリカは失敗してもいいと考えてるけど、オーストラリアは成功させる為にこの作戦に参加する事ね」

最悪アメリカ本土に引き上げればいいアメリカと、ザイの直接的な脅威に晒されているアジアでは危機感に温度差がある。オーストラリアも本土への襲来こそないがそれは東南アジアで食い止めているからであり、ソコが陥ればオーストラリア本土へザイが襲来してくる可能性は十分ある。オーストラリアにとってザイの襲来は対岸の

火事ではないのである。

「それに私達は貴女達を捨て駒になんかしないし、させない。それについては賭けてもいいわ」

たとえ作戦が失敗する事になっても後の事を考えるとアニマを失うわけにはいかない。そうなった時に彼女達を守るのは私達オーストラリアだ。撤退する時にアメリカはアテに出来ないだろうし。

アニマを失って人類の反攻戦力を失ったら人類はザイに王チエックメイト手をかけられる。アメリカはそのあたりを判っているのかしら？

「……いいでしょう。ミューベルさんがそこまで言うなら貴女達を信じます。しかし裏切るようなら容赦はしませんよ？」

「ええ。その時は私を好きにしていいいわ。中国本土への強行偵察でもなんでもしてやろうじゃない」

私は自殺志願者じゃないから本来ならそんな任務、どんなに報酬を積まれても普通なら請けたりはしない。

が、私達の方から契約を違えた場合は別。そうなったらどんな命令でも私達に拒否権はない。これは契約書にも記載されている。

「……そこまで言いますか」

「ええ。私達は味方である内は裏切らない。私達は金の亡者じゃないから、金を積まれて雇い主を変えたりはしない。雇い主が変わるのは結んだ契約を果たしてからよ」

私達E・F社が高い報酬を取っていても重宝されているのはその信用があるから。まだ傭兵が金次第で陣営を変えらると思われていた頃から、先人達はその信用を築いてきた。その信用があるから今ではオーストラリア空軍の教導隊アグレッションを任されるまでになっている。

傭兵である私達にも譲れないモノはあるのだ。

「そんな訳だから失敗しそうになったら貴女達は躊躇なく退きなさい。その時の足止めは私達がするから。……だから、今回みたいに鳴谷君に直接手を出すのはやめなさい。私達と違って彼が怪我をする^{と悲しむ人がいるから}」

言うまでもなく明華ちゃんの事だ。私にも心配してくれる人がいないわけじゃないけど、傭兵の私と民間協力者の鳴谷君じゃ基準が異

なると言えばいいのかしら。

私達傭兵は周りの人達も納得して（勿論例外の人もいるけど）くれる。けど鳴谷君はそうじゃない。明華ちゃんに私がバラしたとは言ってもあの娘もまだ折り合いを付けられてるわけじゃない。私達と違って鳴谷君はまだ「こつち側」に来るべきじゃない。

「わかりました。これからは今回のような事を慧さんにはしないようにしましょう。……しかし、からかう程度ならば問題ありませんね？」

「勿論、そつちは止めるつもりはないわ。私もゲイザーもそういうのは見るのも好きよ？」

当人である慧が聞いたら文句を言いそうな事を言っているが、残念な事にこの場に彼はいない。慧にとつては残念な事に、慧をからかうお墨付きをファントムは手にしてしまったのである。

「ではこれからも慧さんと遊ぶのを楽しむとしましょう。……そういえばもう一つ訊いておきたいのですが」

「まだ何かあるの？」

「——今回の作戦、成功率は決して高くはありません。それでもあなたが戦う理由はなんですか？ 政府や社の思惑ではなくミューベルさん自身の理由を聞かせてください」

一転して真剣な瞳を向けてくるファントムに私は意外なモノを感じた。ファントムがこの手の事に興味を持つてくるとは思わなかったからだ。

「……どうい風風の吹き回し？ 私が戦う理由を気にするなんて」

「少し興味が沸いただけですよ。私にとって勝負とは自分の勝ちやすい環境を整えて行うものです。しかし今回の作戦はそれがほとんど出来ません。ルールも舞台も固定され、成功率そのものも低い。まともな人間なら避けるであろう勝負に乗ろうとしているわけですから興味も沸くというものです」

まあ確かに。

いくら三国の合同作戦とはいえ、絶対的な戦力で言えばザイの方が圧倒的に多い。練度でカバーするにも限度がある。ファントムの疑

問も当然と言えば当然か。

「……私はね、フアントム。人の存亡は人の手で決めるべきだと考えてるの。こう言っちゃなんだけど、私は『人間』という種が絶滅するとしたら環境への不適合ではなく自滅だと思うのよ」

「それは私達が戦う理由の否定ではありませんか？」

私の暴論とも言える言葉にフアントムが異論を返してくるけど、私はそうは思わない。

「違うわ。人間という種の絶滅が自滅であつてもソレは人間という種の行き着く先。……少なくとも、ザイという『外敵』によって滅ぼされるものじゃない。貴女だって人類が永遠に存続するのは無理がある事ぐらいわかるでしょ？」

「それは……そうですね」

フアントムの価値観……最優先事項は人類の救済だから理屈では判っていても納得は出来ない、というところかしら？

「そう難しく考える必要はないわよ。要約すれば人間の行く末は人間で決めるべき、つてだけだから」

沖繩の時もだが時折傭兵ではなく学者のような事を言うミュベール。なんと言うか……人類の存亡に対して俯瞰的な考えである。

「ま、私がザイと戦ってるのは案外嫉妬かもしれないけどね？」

「嫉妬……？ あなたがザイに……ですか？」

先程までとはあまりに違う理由に、珍しくフアントムが困惑するというのもザイに対して嫉妬する、という感性が理解出来ないのだから。

「そ。私達パイロットより巧く空を飛ぶ事に対する、ね」

そう言いながらミュベールを見て、実はこっちが本心なのでは？

とフアントムは思わざるを得ない。

……少なくとも、先程の自滅云々よりは余程納得出来る理由である。

「いずれにしても私達が勝たないといけない事に変わりはないわ。――

――上海を奪還し、生きて帰る。作戦の規模が少しばかり大きいだけでやる事はいつもと変わらないでしょう？」

私達がどんなに考えを巡らせても、ソレが政治的なモノなら私達に出来る事は直属の上司に進言する事まで。そこからは政治家の仕事であり、私達の手が届くところじゃない。

「そうですね。確かにその通りです。……これだけの規模の作戦を指して『少しばかり大きい』というのには賛成しかねますが」

「ふふ、いいじゃない。貴女達は今回それぐらいの意識でいいのよ。」
——血を流すのは私達大人の役目だから——

遠回しに“子ども”扱いされた事があまりに予想外だったのか、珍しくファントムがきよとんとした表情で見上げてくる。すぐに再起動して子ども扱いした事に抗議してきたけど、それを軽く受け流して早朝の出発に備えて休みなさいと言うと渋々ではあるけど退いてくれた。

ファントムと別れても私は宿舎に戻らず、曇が出ていつもより星の見えにくい空を見上げながら各国の思惑が絡み合う今回の作戦に一人思いを馳せる。

(……何も問題が起きなければいいんだけど)

——そう願うミュベールはまだ知らない。

この作戦で初めて人類はアニメを失い、更に各国のアニメ研究に大きな影響が出る“事件”が起きる事を。

——もともと、彼女自身ソレを知るのは事件が終わってからになるのだが。

Order 23 三軍集結

早朝、小松を出発した私達は今回の作戦活動の拠点になるオーストラリアの空母、ハーリングに乗艦するため横須賀に向かっている。

私以外の面子は空母への着艦装備がないから最寄りの基地まで飛び、そこからは陸路で向かう（ドーターもトレーラーでの陸送）事になっている。

そして私はというと、今回の作戦の為に艦載機であるF/A-15S/MTDでオーストラリアから戻っていたから先行してハーリングに降りる事になっている。

《ハロー、ハーリング。こちらE・F社所属AQUILA01、アステル。着艦許可を求めます》

——空母ハーリング。オーストラリアのハーリング級一番艦で、アメリカのニミッツ級やフォード級を上回る世界最大級の船体を持つ空母。この空母最大の特徴はカタパルトで、蒸気式ではなくレーザの原理を利用した電磁加速式を採用してるから機体重量に合わせた発艦が出来る。そしてソレは発艦時にかかる機体への負荷が最小限で済むという事でもある。

他にもあらゆるシステムに最新のものが使われてるからケストレルは文字通り世界最新の空母。

今回の作戦ではオーストラリア海軍の機動艦隊に第七艦隊の生き残りが合流する。そのため洋上戦力はこの空母ハーリングを中心としたオーストラリア艦隊が中心になる。

《こちらハーリング。AQUILA01、着艦を許可する》

……一応オーストラリアで訓練をし直してきたけどやっぱり着艦は緊張する。陸から見た空母は確かに大きいけど、空から『滑走路』として見た場合やっぱり小さい……というか短いというのが率直な感想。海軍航空隊の人達はよくあんなところで毎日離着艦出来るわね。（アレスティングワイヤーは……あそこね）

空母への着艦は艦尾にあるアレスティングワイヤーを目視で確認し、着艦誘導装置正式には改良型フレネルレンズ光学着艦装置の指示

に従って機体を着艦コースに乗せる。

ハーリングは空母の中でも最大級。それでも着艦フックをアレステイングワイヤーにかけられなかったら止まれない。

……ただこっちの腕前を示す意味でも一発で、それも本職並みの着艦が出来る事を示さないといけない。

(確かN02のワイヤーハーリングのアレステイングワイヤーは4本あり、艦尾からN01、N02と数えるにかけるのがベストって聞いているから目標はソレね)

一度空母の上をフライパスし、甲板に異常がない事を確認。旋回して再び空母の後方に機体をつけ、着艦体制に入る。

——高度1000フィート。

降下角度をIFLOSと進入角グランド・スロープ示電波に従い、機体を適正位置をつける。

幸い天候は良好で挙動を乱すような横風はないからこのまま誘導に従えばコースの方は問題ない。

——300フィート。

機体の姿勢を整え、ギアが接地すると同時にすぐにエンジン出力を上げるボルター(フックがかからずやり直し)になった際、リトライするのに空に戻るためためにスロットルレバーを握る手に力を籠める。

(コース、並びに速度と姿勢は問題なし。あとはアレステイングワイヤーにフックをかけられるかどうかね)

着艦の際はランディングギアがワイヤーを踏まず、かつフックがかかる位置に降りれるよう機体をコントロールする必要がある。もしワイヤーを踏んでしまうとギアにダメージが入り最悪、破損する事もある。

(シミュレータと実機でさんざんしてきた訓練の成果を発揮する時がきたわね)

——20フィート。

姿勢を維持したまま甲板に進入し、ワイヤーにフックがかかるように一気に高度をゼロにする。ランディングギアが接地したドン、という

衝撃と共にスロットルを全開。が、フックにかかったワイヤーが機体を後ろから引っ張りハーネスが身体が食い込む。

(……無事、ワイヤーにかかったみたいね)

無事降りれた事に安堵してエンジンをカットし、機体のキャノピーを上げると、ケストレルの甲板員がタラップをかけて出迎えてくれる。

「ハーリングへようこそ、スタークス中尉。いい着艦でした。E・F社を辞めて海軍航空隊に入りませんか？ あなたほどの腕利きなら問題なく試験をパス出来ると思います」

「お断りします。日常的に着艦をするのは遠慮したいので」

正直、日常的に着艦をしてる海軍航空隊の人達は頭のネジが何本かなくなっているんじゃないかと思う。

今日は天気が良かったからまだいいけど、悪天候の中で着艦するのは機体の挙動が乱れたりアレステイングワイヤーが見えづらそうだから全力で遠慮したい。

「でしょうね。空軍の方は大抵そう言いますから。帰還するたびに神経使うのはゴメンだと。——と、失礼しました。私はハーリ

ングの発艦士官のアミティエ・フロリアン少尉です。中尉が使う部屋に案内するよう言われていますがすぐ行きますか？」

「そうね……。アメリカのアニメが先に来てるって聞いてるけど彼女は？」

彼女も艦載機だから私達同様、直接空母ここに来ると聞いている。現に甲板には離陸待ちのF/A-15S/MTDの中に翼を畳んだF/A-18Eホーネットが混じってる。たぶんだけど流石に全機は格納庫ハンガーには入りきらないから甲板なんでしょうね。

「アメリカのお嬢様ならあそこですよ」

そう言っただけで彼が親指で自身の後ろを指すと、空母に不釣り合いな青髪にショートヘアの娘が歩いてくる。

……彼女がライノね。

「すいませんが彼女と話をしても？」

「ええ、どうぞ。私は向こうにるので話が済んだら呼んでくれれば」

余計な事を聞くつもりはないのか、それだけ言うと彼女はライノとは逆に私から離れていく。

「初めまして。私はE。F社所属、ミュベール・スタークス。貴女がライノ？」

私が名前を知っていた事が意外だったのか、ライノの方はキョトンとした表情を浮かべている。

「うん、そうだよ。あたしのことを知ってるの？」

「ええ、ゲイザーから聞いていたわ。厚木で貴女と会ったでしょ？」

髪が赤褐色の方の娘よ」

「……ああ、あのっ！ うん、あの娘から聞いてるよ。自分の姉貴分は空戦でアニマ相手でも引けを取らないどころかアニマより強い、つて」

否定する気はないけど、そこまで持ち上げられてるとなんとも言えない気分。

確かに私はザイの撃墜^{スコア}数はトップだけどソレはイコール〃E。F社最高のパイロット〃というわけじゃない。純粹な空戦技能なら私より上だと言える腕利きはそれなりにいる。その腕利き組は全員ミュベールより年上であり、いずれは追い越されると確信している彼等は普段戦技教導隊^{アグレッション}として国内にいるから対ザイの前線に出てくる事は少ない。それでも全く出てこない、というわけでもなくてベルクトの時みたいに必要ななら来てくれる。

……わざわざ言う事でもないから口にはしないし、ついでだからその言葉に乗りましょうか。

「そうね。あの娘の言う通りザイやアニマが相手でも勝てるわ。それぐらいは出来ないとおーストラリアでエースは名乗れないもの」

事実、E。F社だけじゃなく正規軍の人達でもアグレッションレベルの人達ならイーグルやグリペンが相手でも勝てそうな人は何人かいる。

……流石にファントムレベル相手だと（私を含めて）一握りだけど。

「今度の作戦はよろしくねー」

「ええ、よろしく」

私とライノが握手するとハーリングの甲板員から注目されている事に気付く。

ハーリングは他国の空母と比べたら女性士官がいるほうだけど、それでも比率的に多いというわけじゃない。加えてライノの容姿はハイティーンぐらいだから余計に目立つ。注目されるのは当然と言えば当然ね。

(それにしても……ゲイザーから聞いていたから、つてのもあるけど……やっぱり私も彼女からなにか違和感を感じるわね)

ニコニコと笑顔で話してくるライノだけど私もゲイザーと同じ——その笑顔に違和感を感じる。なんというか……薄い、というのが私の感じた印象。私自身どうしてそんな風感じたのかは判らないけど無視していいものじゃないと感じている。この手の勘は大抵無視するとロクな事にならないからだ。

「どうかした?」

「なんでもないわ。……ああ、そういうえば私が今いる基地にいる残りの面子もそろそろ到着する頃ね。よかつたら顔合わせをする? 荷物を置いた後でよければだけど」

「あ、ならついて行っていい? 空母の中を探し回るのは大変だし」

「私は構わないけど……貴女は荷物とかいいの?」

甲板にいたなら彼女もここに着いたのはそんなに前じゃないハズ。

彼女も荷物ぐらいはあると思うのだけど……?

「それなら大丈夫。あたしが着いたのは少し前で甲板にいたのは部屋にいても暇だったからだし」

「ならいいわ。行きましょ」

待つてくれていたハーリングの乗員に声を掛けてライノと一緒に割り当てられている部屋に案内してもらおう。

途中すれ違った艦員の中には顔見知りも何人かいて、その時は軽く声も掛け合ったりもした。それなりの知り合いがいる事にライノは意外そうにしてたけど。

「意外だねー。傭兵って海軍にも知り合いがいるの?」

「航空隊ならね。彼等だつて陸で訓練する事だつてあるわ」

海軍航空隊といえど年から年中空母にいるわけじゃない。彼等は私達戦技教導隊アグレッションとの訓練で本土に来る事もあり、顔見知りはその時指導した隊の人達だ。パイロットの世界は意外と狭く、オーストラリアの海軍航空隊はこのハーリングにしかないから殊更狭い。だから私に限らず教導隊の人間は意外と顔が広い。

……と、話しながら艦内の歩いているとすれ違う乗員が女性中心……というか女性だけなのに気付く。男の乗員は少し前から全く見ない。

「すれ違う人が女性ばかりですね。男性の方は？」

「ここは女性専用の居住区なのでいません。ハーリングの居住区は男女で分かれていますから」

女性の比率がそれなりだところなるんですよ、と苦笑しながら彼女は案内をしてくれる。聞けば、ハーリング乗員の男女比率は7:3で他国の軍と比べると多い。だから乗員の居住区は余計なトラブルが起きないよう男女で分かれているとの事だ。

「着きました。ここがスタークス中尉の部屋です。後で合流するあなたのパートナーと同室になります。隣は今はまだ空いていますですが夜には本国の方が入ります」

「案内ありがとう、助かったわ。隣は誰が来るのか判る？」

「ええ。ラーズグリーズ隊のナガセ大尉です」

「彼等も来るのっ!？」

さらつと言われたビッグネームに驚きを隠せない。ラーズグリーズ隊は国防軍の中でもトップの実力で、E・F社のガラムと並んでオーストラリア航空戦力の最優となる双翼の片割れだ。ガラムの二人がE・F社で最高のパイロットなら、彼等ラーズグリーズは国防軍側での最高。国防軍も出し惜しみはしない気のようなね。

「ここが中尉の部屋です。後から到着するあなたのパートナーと一緒にですが大丈夫でしたか？」

「ええ。大丈夫よ。荷物を置いたらもう少し案内を頼みたいんだけどいいかしらっ?」

「ええ、構いませんよ。どちらまで?」

小松組が乗艦する予定の搬入口まで、と言うと彼女は喜んで、と快諾してくれた。

「どうしてイーグル達がバスで、ミュベール一人だけ直接行ってるのっ！」

「ミュベールさんだけ行っているのは彼女の機体しか着艦用の装備が付いていないからです。出発前にお父様も言っていたでしょう。まあ着艦という繊細な作業が大雑把な貴女に出来るかは疑問ですが」「できるもんっ!!」

基地まで行きそこからドーター共々陸路での移動中、退屈になったイーグルがフロントムに返り討ちにされていた。(いつもの事とも言えるが)

「なあグリペン。フロントムはああ言ってるけど着艦ってどれぐらい難しいんだ?」

映画とかで見えることはあるけど、実際はどうなんだろうか?

「わからない。シュミレーターでもしたことがない」

清々しいくらいの即答だった。

まあ、日本には空母がないから訓練する必要もないんだろう。

「あら慧さん。着艦の難しさに興味があるのですか?」

イーグルの相手をするのが面倒になったのか、イーグルの相手をゲイザーに任せたフロントムがこっちの話に入ってくる。

……適当にあしらわれてむくれているイーグルを、ゲイザーが宥めているのは見なかったことにする。

「あ、ああ。お前が繊細って言うからにはかなり難しいんだなと思っけど」

空戦だけでなく純粋な技量でもフロントムは俺達やイーグルより上。そのフロントムが繊細っていうからには相当なんだろう。

「まず着艦というのは空母に向けて降下する時点からパイロットの腕が試されます」

「……? 降下するだけなんだろう。なのに腕がいるのか?」

「空母が停まっていればいいですね。が、空母は動いています。多少の違いはありますが空母の着艦甲板アングルド・デッキの向きは艦首に対して約10°ほどズレています。なので機体側の方でも進行方向を絶えず空母の進行方向に合わせて修正し続ける必要があります」

なるほど。着艦に使う甲板の向きと船の進む方向が違うから船の進む方向に合わせて降りないとコースから外れるのか。

……それなら着艦する時は船を停めればいいんじゃないのか？

「着艦の時も停めないのか？」

「当然でしょう。着艦のために停めていては話になりませんよ。訓練の時ならまだしも戦闘中に着艦のために止められると思いませんか？」
言われてみればそうだ。戦闘中、着艦のために止めたら格好の的になるか。

「話を戻します。いよいよ着艦する時は機体下部にある着艦フックを艦尾にあるアレステイニングワイヤーにをかけなければなりません」

「そのアレステイニングワイヤーだっけ？ そのワイヤーに着艦フックをかけるのってカメラかなにかを見て合わせるのか？」

「そんなものはありませんよ。誘導こそありますが着艦フックをワイヤーにかけられるかはパイロットの感覚と腕次第です」

「は？」

ってことは空母に着艦する人達は自分達の感覚だけでフックをそのワイヤーにかけてるのかっ!?

「失敗したらどうするんだ？」

「その場合は上昇してやり直しリトライです」

……ん？ 今のファントムの説明、なにか矛盾してるような気がする。

「……なあファントム。着艦する時は止まるためにエンジン出力を落とすんだよな。なのにやり直す時に上昇するなら出力が足りなくならないか？」

それともそんな短時間で上昇できるようなエンジンを艦載機は積んでるんだらうか？

「おや、意外なところに気がつきますね。お気づきのように着艦する際はリトライする可能性に備える必要があります。なのでギアが接地した瞬間、出力を全開にするんです」

「出力を全開って……」

機体につけられたフックでワイヤーにかけて止めるよう機体をコントロールし、一方でリトライに備えて甲板に降りた瞬間エンジンを全開にする。

……八代通さんが俺達に着艦をさせず、陸路で行かせた理由がわかった気がする。

「……お前が繊細って言った意味がわかったよ」

「ご理解いただけただけなようなんです。着艦は制御された墜落と言われるほど繊細な技術ですから。……まあ、A V | 8 B や F | 3 5 B のように垂直着陸できるなら話は別ですが」

確かに垂直に降りれるならある程度はマシだろう。それでも波の影響で動いてる空母に降りるのは相応の技術がいるだろう。

そして、今までの話を聞いて余計に気になることが一つ。

「それならミュベールさんは大丈夫なのか？」

「ミュベールさんならなら大丈夫でしょう。そもそも着艦の腕に不安があるようなら私達と一緒に行かされているでしょう」

「あの人なんでもできるんだな」

というかあの人にできないことってあるのか？ 戦闘機関係である人にできないことを見た覚えがないんだけど。

そんな話をしていると陽の光が遮られて日陰に入る。そしてそれとほぼ同時にバスが停まった。

「着いたぞ。今回の作戦で世話になる空母ハーリングだ」

「デカイ……」

本物の空母を前にして思わず出たのはそんなありふれた感想。こうして間近で見ると船というより山のようで、開放された舷側搬入口から見える格納庫からは忙しく動いている人達が見える。

「空母ハーリング。米軍のニミッツやエンタープライズ級を上回るオーストラリアの空母ですね」

「オーストラリアも空母を持ってたのか？」

空母を持つている国と言われるとパツと出てくるのはアメリカ、ロシア、イギリス。そして中国ぐらいだ。

「ハーリングは文字通り世界最新の空母ですよ。確か完成したのが二年前だったはずですよ」

「よく知ってるわね、フアントム」

声のした方を向くと、一足先に着いていたミュベールさんが開かれた格納庫から歩いてくる。

その隣には青髪の少女……ライノも一緒だ。

「ようこそ、空母ハーリングへ」

正規の乗員じゃない私が言う事じゃないけどね、とミュベールさん苦笑しながら迎えてくれた。

「ようこそ、空母ハーリングへ」

案内をしてもらったフローリアン少尉と別れた私とライノは搬入口に来ていたゲイザー達と合流し、まだ顔を会わせていないフアントムとイーグルにライノを紹介する。

「彼女はアメリカのアニマ、ライノよ。厚木に行ったゲイザー達とも会ってるけど」

「君達がこの前いなかった日本のアニマだよ。よろしくー」

フアントムとイーグル、そしてライノの顔合わせを鳴谷君とグリペンに任せて私は皆と一緒に陸路で来たゲイザーの方に行く。

「最寄りの基地からここまで陸路だったけど……どうだった？」

「出来ればもう遠慮したい。……言っとくけど運転してたフナさんの腕が悪かったわけじゃないよ？ ミュベールもだけど会社みんなの車ってスポーツ系で足回りが固めにしてるでしょ。だから軟らかいバスとかだとふわふわして酔うかと思っただけ」

「酔う？ アニマの貴女が？」

冗談めかして言うとアニマだって酔ったりするんだよー、とむくれ

るゲイザー。

……そういえば本社であつたパーティーに出た時、間違えて飲んだお酒で目を回してたわね。

「……それでどうだった？ ミュベール」

「貴女と同じ。私も彼女からは違和感を感じたわ」

ゲイザーの主語を抜いた問いかけ。けど何を訊かれているのかはすぐに判つた。

……ライノの事だ。

「それじゃあわたしの気のせい、つてわけじゃなかったんだね」

「残念ながらね。——二人揃つて違和感を感じるのにソレを気のせいで片付けるのは私達には無理でしょ」

……そう。ここで重要なのはどんな印象だったか、じやなく二人揃つて違和感を感じたという事。極論になるけど、同じモノを感じたとしても表現する言葉で全くの別モノに伝わってしまう事は珍しくない。だから大事なのは私とゲイザー、二人とも違和感を抱いた事なのだ。

「ブラウラーといいライノの事といい、どーしてこんな大事な作戦で不安要素が増えるかなあ……」

「大事な作戦だからでしょ。アメリカはブラウラーに自信を持つてるから手持ちで投入できる最大数を出して手柄が欲しいんでしょ」

アメリカからすればブラウラーが活躍してオーストラリアと日本に自分達の力を見せつけられれば良し。仮に失敗だったとしてもデータを採れるからどつちに転んでも損はしない。

アメリカのやり方に思うところがないわけじゃないけど、今回は軍も本気だ。なにせ正規軍の切り札といえる彼等がいるのだから。

「幸い、今回はガルムの二人以外にもラーズグリーズ隊も来るようだから何かあつてもそう簡単に崩れる事はないと思うわ」

「ちよ、ちよつと待つてっ!!? ラーズグリーズの人達も来るのっ!!?」

あの人達つて政府の直轄部隊だからそう簡単には動かせないんじゃない……?」

「それだけ本気つて事でしょ」

ラーズグリーズ隊は所属こそ国防軍だけど、軍の指揮系統からは独立している。彼等は必要なら議会の承認を得ずとも政府の指示で直接動ける即応部隊。その彼らが此処に来るといふ事は出撃命令が出たという事でもある。

「ガラムの二人に加えてラーズグリーズのメンバーもいるから戦力的には問題ない。あるとしたら——」

「——不確定要素。私達がライノに感じた事がどう出るか。だね?」

「それとブロウラーの事もよ。実戦で本当に役に立つのか怪しいんだから」

「あー。そうだったね」

つまるところ、今回の作戦の肝はザイを相手取る事じゃない。ライノとブロウラーという不確定要素を飲み込めるかどうかだと私は考えている。

……そしてもう一つ。ミュベールには懸念している事がある。

(私達オーストラリアや日本と違って、アメリカ軍はザイと直接戦った経験が少ない上に勝った事がない。モチベーションも不安だわ)

アメリカは本土が太平洋を挟んだ反対側で、ザイとの交戦経験があるのは沖縄を中心としたアジア方面の駐留軍のみ。しかも彼等の主力だった第七艦隊はザイによって空母を含めたその中枢戦力を失っている。日本もザイに対して快勝、とまではいかないがアニマやミュベールをはじめとした傭兵の奮戦もあり未だ負けてはいない。

ミュベールがアメリカ軍の士気に不安を感じるのは当然といえば当然だった。

「ま、アメリカ軍の人達には最後まで戦闘機乗りの意地を見せてもらいたいものだわ。尻拭いをするのは間違いなくオーストラリア側だし」

「あー。そうなるよね、やっぱり」

アメリカ側の人が聞いたら激怒しそうな事を話す二人。第七艦隊が敗走してからアジア方面のアメリカ軍はザイと戦う事に及び腰で、その代わりにE・F社の傭兵組が奔走しているから二人がアメリカ

軍に対して辛辣なのはある意味当然といえる。

組む相手でも容赦なく毒を吐く二人に、二人の話を横で聞いていたハーリングの乗員は思わず苦笑いしながらも内心では『よく言った』と親指を立てていた。

Order 24 海の上の間奏曲

「では明日の作戦のブリーフィングを行う」

ハーリングのブリーフィングルームに乗艦していたパイロットが集まる。集まったパイロットは基本的に所属別に分かれているけど例外もいる。私とゲイザーみたいな本所属がE・F社だけど今は独飛に雇われているから小松のみんなどという、というようにE・F社で見覚えのある顔ぶれが散らばって座っている。

ちなみに今ここにいるアメリカ軍の人達はライノ以外は全員海軍航空隊。空軍の人達は自衛隊から参加する人達同様、オンラインで参加している。

そんな風に参加する面子を見回していると、横にいる鳴谷君が気まずそうに話しかけてきた。

「あの、ミュベールさん。俺……少しならわかりますけど完全に英語だけだと内容がわからないんですけど……」

あー、ソレは考えてなかったわ。

私は元々英語圏で日本語も大丈夫だから忘れてたわ。

「私が訳してあげるから疑問点があれば教えて。言葉の意味ならその場で。作戦への質問なら後でその為の時間があるから代わりにしてあげる」

「……ありがとうございます」

小松に帰ったら英語の勉強も見ようかしら。日本の学校のいわゆる『テストの為の勉強』じゃ使う為の英語は身に付きにくい、って学生の頃日本の留学生から聞いた事があるし。

※以後の会話で『』内の言葉は英語だと思ってくお読みください。

『今回の作戦の指揮を執るオーストラリア国防海軍、空母ハーリング艦長のカミナガだ。今回の作戦目標は大陸内部への反抗拠点となる上海の奪還。なので今回の作戦はオーストラリア、日本、アメリカの三軍での合同作戦となる』

上海奪還という言葉に集められたパイロット……特に傭兵組がザワつく。耳を澄ますと『いよいよか』とか『腕がなる』といった言葉

が聞こえてくる。

と、聞き耳を立てていると鳴谷君から疑問が飛んできた。

「ハーリングの艦長って日本人なんですか？」

「いいえ。カミナガ艦長は日系ではあるけどれっきとしたオーストラリア人よ」

そこに驚くのか？　と思っただけでもしかしたら私達が慣れているだけで鳴谷君の反応の方がむしろ普通なのかもしれない。

『静かに。これより作戦の説明を行う。ブルーム作戦と名付けられた当作戦は三段階に分けて進行する。まず航空戦力を中心に制空権を確保するジュピター作戦。次に艦砲、ならびに巡航ミサイルによる地上攻撃を行うマーキュリー作戦。その後の上陸戦となるマーズ作戦に分かれている。貴官達の出番は言うまでもなく、制空戦となるジュピター作戦だ』

艦載機組で希望者がいれば爆装してマーキュリー作戦にも参加してもいいぞ、という冗談が続きあちこちから苦笑混じりの笑いが起きる。

……何人かの傭兵から稼ぎ時だのやるか等と割と本気なのがいるけどそこは個人の自由という事でスルー。

『さて、貴官達に参加してもらおうジュピター作戦だが、今回の作戦はまずフェイズ1でオーストラリアのXC-70と当艦隊から発射したMPBMで先制攻撃する。この攻撃は敵の数を減らすためでもあるが、同時にザイを散らばらせて密度を下げる目的もある』

XC-70だけでなく、艦隊側にもMPBMを積んでいる艦がある事に少し驚きだわ。勿論同じなのは弾頭だけでベースはSM-6でしょうけど。

「今回もMPBMを使うんですか？」

「みたいね。ベルクトの時の件で密集して出てくるザイに有効なのが証明されたから使わない手はないでしょ？」

数の多いザイは戦闘になれば散開するけどそれまでは固まっている事が多い。範囲攻撃が出来るMPBMは先制攻撃としてうってつけ。マリアナ沖での戦闘でそれが証明されたから大規模な戦闘では

これからも使われるでしょうね。

『続くフェイズ2は貴官らパイロットやアニマの出番だ。このフェイズ2は編成を大きく三つに分ける。足の長い長距離空対空ミサイルを積み、撃つたらずぐ帰還・補給し再攻撃を繰り返すα隊。軽く、数を持てる短AAMをメインに積みドッグファイトを行う近接部隊であるβ隊。そしてアニマ、ブラウラーで編成し戦域の“穴”を塞ぐθ隊の三隊に分ける』

編成を分けていけばCICからの指示も個別じやなく纏めて出来るから、指揮のしやすさという点から見ても当然といえる編成。

加えてコレなら練度の低いパイロットでも戦力になる。……つまり、α隊に編成される隊はザイ相手にドッグファイトをするのが難しいと告げられる事でもある。

『編成の内容だが一番の激戦区となる近接戦闘隊のβ隊にはE・F社とオーストラリアからの選抜隊を中心に編成し、ロングレンジ攻撃が主体となるα隊にはアメリカの海軍航空隊と日本な航空自衛隊を中心に編成する。なお、航空自衛隊に派遣されているアキラ隊の二人には現場での指揮と電子支援をもらうためβ隊と共に出撃してもらうが……構わんな？』

『大丈夫です。いけます』

これは予め聞いていた事。空中管制機がいるとはいえ現場で指示を出せる人間は一人でも多い方がいいし、そもそも負担の大きいβ隊に私達傭兵組が入られるのも当然だ。

『空母への着艦能力を持たない機は武装を使い果たした時点で離脱してもらう。本作戦では補給基地として台湾が全面協力してくれているからそこで補給し、可能ならそこから再出撃してもらう』

だから燃料の心配は不用だと言外に加えられる。空戦は燃料消費が激しいから帰りの燃料を心配しなくていいのは大きい。

台湾も直接戦闘には参加しなくても後方支援という形で支援してくれる。空母に降りれない通常の機体も武装を使い切った後に再出撃出来るのはありがたい。

『それと今回は戦域が広いため電子戦機E-767が二機サポートに

来る。このE-767はAQUILA02の指揮下に入る。――

――ゲイザー。この二機を中継ハブにする事で広域を支援出来るし、目も広くなる筈だ。好きに使え』

『イエッサー』

E-767が二機も来てくれるのは心強いわ。ハーリングの艦載機も合わせると、今回の作戦にはAZCCだけでも40機近くいるから戦域のほぼ全てで電子支援が受けられる。余程変な位置から撃たない限り当たるでしょうね。

『なお、本作戦にはアークバードも参加する。とはいえ彼等の主な役目はザイがこちらのMPBMのようなミサイルを使って来た時の迎撃や大型の連中が現れた時のカウンターだ。今作戦は敵味方入り乱れての乱戦になる可能性が高いため不利な隊への直接支援は難しい。その事を忘れるな』

直接的な支援がないとはいえ、アークバードも来る事にどよめきが広がる。直接支援は期待するな、と言っていただけどミサイルを正確に撃ち抜くあの照準精度なら要請次第で向こうも応えてくれるでしょう。

『――以上が今回の作戦の内容だ。なにか質問がある者はいるか?』

質疑応答になり、私達より前の方で聞いていたオーストラリアの海軍航空隊のメンバーから手が挙がる。

『純粋な疑問ですが、いくら電子支援を受けて武装を無駄なく使っても迎撃に出てくるザイは相当な数が出てきます。そうすると数で押されると思いますがその対策は?』

この疑問は私も含めて作戦に参加する多くのパイロットが気になっていと思う。私自身は空戦機動でザイに遅れをとるつもりはないけどザイの『数』という優位はそれだけで脅威だし、そもそも並程度のパイロットはザイの動きに対応出来ない。

ゲイザーは元々その『数』の不利を埋める為に生まれたアニメだけど、それでもミサイルの数には限界がある。私としてもこの答えはきになるところ。

『それに関してはこちらのシャンケル博士から説明してもらおう。……博士、お願いします』

艦長に促され、白衣を着たいかにも研究者然とした白人の男性が出てくる。

……あの人がシャンケル博士。グロウラーを開発した人、か。

『き、君達の疑問はもつともだ。確かにザイの数は厄介な要素だが、連中はそれを完全に使っていない』

シャンケル博士の言葉にざわめきが広がる。私としても今の言葉の真意はとても気になる。

『こ、このグラフを見てほしい。このグラフは過去の戦闘で連中が撤退したタイミングを解析したもので、横軸が時間、縦軸がザイの被撃墜数だ。け、結論から言えば連中は単位時間で戦力の2／3割を失った際に撤退する。言ったん戦域から退いて被害の拡大を抑えに入る、というわけだ。連中は決して全滅するまで戦ったりはしない』

「……そういえば海鳥島の時もザイは不利になったら退いていきましたね」

「私もザイが全滅するまでやったのは少ないわ」

その数少ない例外は向こうの数が少なく、撤退する前に速攻で墜としたケースだけ。

確かに博士の言う通り、連中はある程度纏まった数で仕掛けてきても必ず全滅する前に撤退する。とても興味深い話だわ。

『な、なので今回は連中のこの行動を利用する』

『利用って事はこっちの被害が大きくなる前に連中が退くまで墜としまくるってことか？』

『そ、その通りだ。今回は敵の数も多いだろうから2／3割減らすだけでもかなりの数を叩かなくてはならない。それに長引けばそれだけ連中が撤退する可能性が小さくなるから、作戦が始まってすぐに片をつける必要もある。だ、だから合同での作戦だ。』

シャンケル博士の説明に勝てるかもしれないという空気が広がっていく。それだけ博士の説は衝撃的なもので、特にアメリカ軍の人達の反応が顕著だ。

(第七艦隊の事もあってアメリカ主導の作戦は今のところ失敗が目立つものね)

だからアメリカの上層部上の連中の思惑はともかく、現場の人達は名誉挽回のチャンスを求めていた。今回の作戦でザイへの対策は自国の人間が中心になっているとなれば士気も上がるでしょうね。

『他に訊きたい事があるものは?』

私達の近くにいたフアントムが挙手する。

あの娘、変な事言わないでしょうね……?』

『日本の航空自衛隊、独立飛行実験隊のフアントムです。この作戦ではβ隊の負担が一番大きいと思われませんが、β隊の損耗率はどのくらいを見積もっているのですか?』

予感の中。やっぱりというか、特大の爆弾を落としたりわね。

フアントムの質問にどう答えるのか、カミナガ艦長に視線が集中する。——そして艦長は重苦しく口を開く。ある意味、作戦に参加するパイロット達への死刑宣告となるその数字を。

『……はつきり言っておこう。β隊の損耗率は少なくとも見積もっても40%以上と言わざるを得ない』

——損耗率40%以上。その数字にパイロット達の間にも動揺が走る。しかも少なく見積もつてという事はそれより大きくなるという事でもあるし、ザイ相手だと間違いなく40%のラインを超える。

……出撃すれば二人に一人は戻って来れないかもしれない数字だから動揺するのが出るのは当然、か。

『では、今回の作戦はそれを踏まえたものである、と?』

『そうだ。これだけの損耗率が出る事を承知で軍、ならびに各国政府の上層部はこの作戦を立て、許可を出した』

確かにザイが跋扈する大陸本土に仕掛けるなら犠牲が出る事は避けられない。加えてザイにどこまで人間の「常識」が通じるか判らないし、私達がアークバードを使ったようにザイにもなんらかの「隠し玉」がある可能性だってある。

『最後にオレ個人から貴官達に言っておく。こんな作戦を認めたオレ

が言えることではないが————できる限り生き残れ。緊急脱出するの**ベイルアウト**は恥ではない。機と運命を共にする事こそが恥と思え。機体は金で買えるが君達パイロットはそうではないからな』

————生き残れ。ソレはシンプルながらもパイロット達共通の**ル**交戦規定**ル**。

カミナガ艦長は元々航空隊の際出身だからパイロットの事をよく知ってる。……その艦長からみれば多くのパイロットに犠牲を強いる今回の作戦は出来れば許可しなくなかったでしょうね。

『お前達はこれからも国の未来を背負う者だ。もう十年経てば君達の中からも国の舵を取る者だって現れるだろう。その時まで生き残って————我々老いぼれの年金を払ってくれ』

冗談めかした艦長の言葉にブリーフィングルームに笑いが起き、緊迫した空気が適度に緩む。隣の鳴谷君も今の言葉でいい意味で緊張がほぐれたみたいだし。

「……なんか意外ですね。オーストラリア軍の人達って偉い人達でもあんな冗談を言ったりするんですか？」

「朱に交われれば赤くなる、ってね。演習や訓練で私達E・F社の傭兵と関わっていたら無駄な硬さは抜けてくるわ」

軍としても初めは渋い顔だったそうだが、その方が却って連携が取れて結果が良くなったそうだ。規律等に関して厳しいイメージのある軍だが、より良い結果を出せるソレを認めない程柔軟性がないわけじゃない。

『これでブリーフィングを終わる。————ああ、それと差し障りのない範囲でならどう過ごしても構わん。ハメを外し過ぎないようにな』

艦長自ら堂々と黙認宣言をする、というのはオーストラリア以外の軍ではあまりないでしょうね。オーストラリア軍はE・F社というPMCと共同で訓練や任務をする機会が多いからか、割とそういう事には寛容だ。

それに今回はオーストラリア、日本、アメリカの三軍（オーストラリアはE・F社と正規軍だから正確には四軍だけど）による合同作

戦。少しでも打ち解ける機会をとという艦長なりの配慮なんでしょうね。

「みんなはどうする？ 私は知り合いがいるかもしれないから参加するけど」

答えが判りきつてる娘が二人ほどいるけど、その二人以外は判らないから一応訊いておく。

「イーグルも行くーっ！」

「わたしも行くっかな。海軍式のこういう会がどんなのか興味あるし」

答えの判っていた二人——イーグルとゲイザーは迷わず即答。むしろこの二人の場合、騒ぎ過ぎの方に注意しないと。

「鳴谷君達は？ 勿論出ずに休んでいるのもアリだけどたぶん結構美味しいものが——」

「慧。行こう」

「……決まりみたいね」

最後まで言うのを待たず『美味しいもの』に反応するグリペン。

……美味しいものに興味があるのが悪いとは言わないけど、ソレをエサに攫われそうで少し不安を感じなくもない。この辺りも鳴谷君には頑張ってもらわないと。

「ファントムは？ 無理強いはしないし、しなくてもいいけど」

正直ファントムはそういう場に喜んで参加するタイプには見えな
い。だから誘いはしたものの断られると思っていただけ——
——。

「そうですね。せっかくだので私も行きましょう」

「……意外ね。誘っておいてアレだけど断られると思ってたから」

本当に意外。ファントムの事だから馴れ合いは不要です、って断るかと思ってたけど。

「逆に訊きますがグリペンやイーグルから目を離して安心できますか？」

「うん、無理ね」

グリペンは料理があれば大人しくしてるだろうけどイーグルを一

人にしておくのは不安。……なんというか、イーグルのノリとこういう場で騒ぐ連中は『ウマが合いますぎる』のだ。

残念ながらゲイザーもこういうのは楽しむ方だからブレーキになつてくれるかはちよつと怪しいところがあるし。

「ええ。ですので大変遺憾ですが私は二人のお目付け役として行くつもりです」

ブリーフィングルームのドアに目を向けると、食堂までの案内人とおぼしきハーリングの乗員が何人かスタンバっている。

ブリーフィングルームを出た私達は彼等に食堂までの案内をお願いしつつ、無理のない範囲でハーリングの説明もしてもらうのだつた。

案内されて着いたハーリングの食堂は戦場にだった。訂正、戦場のような騒がしさだった。なんというか……まさに飲めるや食えやの大騒ぎ、が一番しつくりくる。

「……ここ、空母の中でしたよね。場末の居酒屋などではなく」

心底頭が痛い、というのが態度に出ているファントム。隣にいる鳴谷君も啞然としてる。

そしてそんな二人を気にしてないのがここに二人。

「ね、ミュベール。もう入っていいんだよねっ!」

「ええ、楽しんでらっしゃい」

「慧、行こう」

「ちよ、ちよつと待てよっ!」

意気揚々と参加していくイーグルと、料理に惹かれたグリペンに引つ張られて騒ぎの中に入っていく小松組。そんな三人を見ながら呆れたようにファントムが溜息をつく。

「まったくあの二人は……」

「あはは……。ミュベール、あの三人はわたしとファントムに任せて。知り合いも来てるんでしょ?」

さらつとファントムを巻き込んだ^{我が妹分}ゲイザー。いや確かにファント

ム自身もグリペンとイーグルから目を離すつもりはないって言うだけだ。

「さーっとファントムを連れてく気も満々だけど……いいの？　ファントム」

「私とて知り合いに会う邪魔をするほど野暮ではありません。……非常に不本意ではありますが」

「思いつきり嫌そうじゃない」

「まあまあファントム。少しは楽しもうよ。そんなふうには眉間にしわを寄せてたら可愛い顔が台無しだよ。ほら行こ？」

口説くような口上でファントムの手を引くゲイザー。少しだけ振り向き、ウィンクしていくあたり本当、誰に似たのかしら？　どの口が言うか

……けど、あの二人がいるならイーグル達の手綱は任せて大丈夫そうね。余程の莫迦がない限りあからさまな未成年に酒を出すのはいないでしょうし。

私は私の相手を探すとしますか。

「さて、どこにいるかしらっと」

こういった場では暗黙の了解と言うべきか、騒ぎたい人はテーブル席の方に集まり、逆にカウンター席にはその騒ぎをみて楽しんだり騒ぎから少しだけ離れたい人が集まっている。

だから彼女がいるならカウンター席にいるハズなんだけど……っと、いたわね。

「ナガセっ！」

「……スタークス？　久しぶりね。いつ以来かしら？」

「第六航空団内での以来じゃない？」

彼女はケイ・ナガセ。私同様アークバードの元クルーで所属も私と同じ第六航空団。違うのは私は傭兵だけど彼女は国防空軍の所属という事ぐらい。アークバードのクルー時代も彼女とは同期だったから付き合いとしては一番長かったりする。

「それにしても貴女達ラーズグリーズまで参加してるとは思わなかったわ。そっちの他の面子は？」

そう訊くとナガセは苦笑しながらテーブル席の方を指す。指の向いた方向を見るとナガセ以外の他の面子はテーブル席で盛り上がり上がっていて、そこにすごく見慣れた金髪娘が一緒になって騒いでいた。……よし、今のは見なかった事にしましょう。隊の隊長がヘッドロツクをかけられているなんてのはきつと私の見間違いだ。

「相変わらず元気そうね、貴方達」

「……気を変に気を遣わなくていい」

ラーズグリーズ隊は国防空軍の中でも珍しく、隊の中での上下関係はあまり厳しくない。と、いうのも彼等は数あるオーストラリア国防軍の中でも唯一訓練生時代から同期で固められた隊だ。加えて私達傭兵ともウマの合うとても陽気な

「それにしてもビックリしたわ。基本的に国外に出る事のない貴女達が参戦するなんて」

「……私達が来たのは勿論上海奪還のためだけでもう一つだけ理由があるの」

「それって私が聞いていい話なの？」

私も彼女も所属は同じ第六航空団。けど傭兵の私と正規軍のナガセじゃ当然扱える情報のレベルが異なる。

「聞いちやいけない類の話だった場合、『理由がある』と教えてくれただけでもかなりのサービスになる。」

「大丈夫。むしろ用件はあなたよ、スタークス」
「私？」

ラーズグリーズが来た理由の半分は私にあると言われても心当たりはない。強いて言うならベルクトの件で無理を言った事ぐらいだけ。あの件にラーズグリーズ隊は関わってないからザッパリだ。

けどナガセの持ってきた話は確かに彼女の言う通り私ととても縁のあるモノだった。

「ミューベルはアークバードの二番艦がどうなってるの知ってるわね？」

「ええ。計画は凍結されたけど、機体の大部分は完成してたから今は航空博物館で展示されてるんですよ」

「その凍結した計画を復活させる案が国防宇宙軍で挙がってるの」

「……本当に？」

今更アークバード計画が復活？ 予算だのなんだので中止になった計画が今になって？

「ザイとの戦いでアークバードの有用性が証明されたから計画を再開させる案が出たの。……都合のいい事に、二番艦の機体は完成していて、後は中身を入れるだけだから」

確かに一から造るよりある程度完成してるモノを使う方がコストは抑えられる。

そしてここまで言われれば私への用事も想像がつく。

「……私に国防宇宙軍に戻ってというの？」

私の言葉にナガセは静かに頷く。

確かにそれなら私向き of 用件だ。元アークバードのクルーの中でも空軍に残ったのは実はあまり多くない。私みたいに再訓練が最小限で済み、かつ軍の内情にも詳しいとなるとそれこそ片手で数えられる程しかいない。だからこそ声がかかったんだろう。

「一つ確認したいんだけど……それは、命令？」

「違うわ。アークバードのクルーは今のところ志願と推薦。強制じゃない」

……そう。なら答えは決まってる。

私は――

「……正直、とても嬉しい申し出だわ。私が一人でやってたら受けてたわね」

「残念ね。やっぱり断る？」

やっぱり、って事はナガセは私が受けないって判ってたみたいね。言葉とは裏腹に全然残念そうじゃなさそうだし。

「悪いけどね。今の私には大事な妹分がいるの。たとえば天秤の反対側に乗っているのが昔の夢だったとしても、今の私はある娘達の姉貴分である事を取るわ」

そう言いながら私は視線をゲイザーに向け……る途中でフロントムが瓶に直接口をつけて酒を飲み干してる姿が目に入る。

いや、なにやっつてるのあの娘っ!? いつも冷静さはどこに行つたのよっ!? ゲイザーはゲイザーで周りと一緒にになって嘸し立ててるし!

そんなあの娘達の方を見て唾然としてる私を見てナガセは小さく、けど楽しそうに笑ってる。

「E・F社の社長が言っていた通りね。あの人言つてたわよ。ミュベールは多分断るだろうって」

やっぱりというか社長にも話はしていたらしい。今の私はE・F社に籍があるから当然といえ当然なだけだ。

「社長はなんて?」

『個人的には断りたいところだが、ミュベール本人が望むならその意志を尊重する』と聞いてるわ」

……コレだから社長には頭が上がらない。社の利益としてはマイナスになると判つても、私達の意味を優先してくれるから私達もよほどの事じゃない限りE・F社を辞めようとは思わないのよね。

「社長には私の考えなんてお見通し、つてわけね」

「いい上司じゃない。それにミュベールの気持ちは私もわかる。私も子供の頃からの夢だったアークバードに乗り続けることより彼の隣で飛び続けることを選んだから」

そう言うナガセの視線は私……じゃなく私の後ろ。取り敢えずはまだじゃれ合いの範疇でヘッドロックをかけられているラーズグリーズ隊の隊長であるに向けられてる。

「似た者同士ね、私達」

「……そうね」

私達は昔からの夢よりも今自分の隣にいる相手を選んだ。

昔の私が今の私を見たらどう思うのかしら。夢を捨てた事を蔑むか……夢よりも大事なものが出来た事を喜んでくれるのかしら?

「またこうして一緒に楽しみたいわね」

「その時はザイに勝った時の祝勝会か、宇宙が再び平和利用される事を願つてやりましょう」

「悪くないわね」

軍事の評論家辺りが聞いたらなにをバカな、と一笑するかもしれない。けど私達は宇宙軍時代の教官からこう教わった。

『本当に叶えたい願いは疑問形ではいけない。必ず出来ると自分の中で確信として持て』と。だから私達は再びグラスを交える日が来る事を疑わない。――必ずその日は来る。そしてお互いその時も生きていると信じているから。

「それじゃ今夜は今回の作戦の成功を祈って」

「それと人類の勝利を願って」

乾杯、と二人がグラスを合わせる。キン、とグラスが喧騒の中静かに響いていた。

『……それは確かなのか?』

一方その頃、ミュベール達が小松基地では基地に残っているヘンガーが自身の纏めたファイルを手元に電話をしていた。

いい機会だからと他のE・F社スタッフは臨時の休みにし、自身はE・F社本部でS-32のC整備をしている顔馴染みの達と今後のアップデートを視野に入れた打ち合わせをするつもりでいた。

『ああ、残念ながらな。お前も気付いてはいたんじゃないか?』

『……まあ、な』

『それでどうする。ミュベールには悪いがS-32この機体はもって一年というところだ。それ以上は耐えられんぞ?』

自分の外れててほしかった予想が当たってしまい、ヘンガーは思わず近くの壁を力任せに叩く。

元々S-32という機体が実験機だったため、性能面はともかく機体の耐久性という点では不安があったからだ。

『……ミュベールからは今回の作戦後にこっちで説明しておく。そっちでも出来るだけの対策を頼む』

『ああ、それは任せておけ。彼女に死なれたら困る』

そんな事になったら本社の女性陣に刺されかねん、と笑いながら言ってくれるがミュベールの本社での人気を考えると本気でそうな

りかねん。『お姉さま』と慕われているのは伊達じやないのである。『それともう一つ。今E^ッ、F社^チで手配出来る機体をリストにしといてくれ。……勿論、ミュベールの技量に比べられるのをな』

『それは構わんが調達コストがかなり高くつくぞ？ ミュベールレベルの技量に比べられる機体は限られるからな』

『その辺りも要相談だな。それじゃ頼むぞ』

『ああ、任された』

電話を切ったヘンガーは煙草を取り出し、一服する。

普段はミュベール達の機体があるのでヘンガーで煙草を吸うのはご法度だが、今はヘンガーに機体はなくならんとしているから遠慮することなく吸える。

『……避けられないとはいえ、何度訪れても嫌になるな。パイロットに機体の耐用限界が迫っているのを伝えるのは』

それもミュベールのように愛着を持つてるパイロットなら猶更だ。ロシアとE・F社双方で墜落事故を起こし、欠陥機の烙印を押されようとしていたS-32はまさしく出会うべきパイロットに出会えた稀有な機体だ。それを整備し続けたヘンガーも当然愛着はある。

「……不味いな」

好きな銘柄のハズなのに今夜の煙草の味はひどく不味く、不安を吐き出すための慰めにもならなかった。